

---

# 仮面ライダーディケイド エヴァンゲリオンの世界

キラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド エヴァンゲリオンの世界

### 【Nコード】

N1243J

### 【作者名】

キラ

### 【あらすじ】

これまでの、仮面ライダーディケイドは

「これからも、世界を写してください」

「ああ……俺の世界を、な」

門矢士の旅は続く。様々な世界を巡る中で、彼らはある世界にたどり着く。そこは、わずか十四歳の子供達が戦う、「エヴァンゲリオンの世界」だった。悩み、苦しむ子供達を、士は導くことができるのか？世界の破壊者、ディケイド。エヴァの世界をめぐり、その瞳は何を見る。

全てを破壊し、全てを繋げ！

（基本は人物の心情などを中心に描いていくつもりですので、バトルはあまり多くないです。その代わりに、シンジたちの成長や、ポイントとなる戦闘はきちんと書いていくつもりです）

## 第壹話 其の壹 破壊者、襲来

第三新東京市、ネルフ本部。

謎の巨大生物「使徒」から人類を守ることを目的としているが、詳しい部分については一般人は知らない。

その巨大な建物の中で、真夜中にもかかわらず大声を上げる者がいた。

「だあくもう！イライラする！！」

使途との戦闘において指揮を振るう、葛城ミサトである。

眠い中、始末書を書かされている彼女の機嫌は最悪だった。

「ちょっと、静かにしてくれないかしら」

そう注意したのはミサトの親友であり、ネルフの技術部分を支える赤木リツコだ。

手伝いで、彼女も始末書を書いており、左手にはコーヒーが握られている。

「夜中でイライラしてるのはあなただけじゃないのよ。こっちは善意でやってあげてるんだから、これ 以上騒いだら帰るわよ」

「ああ〜ん、それはやめてよ。私も色々考え事してたら興奮しちゃって」

「考えてたつて、何を？」

リツコが興味ありげな表情で尋ねる。

「使徒をここまで十二体倒してきたけど、ほら、今回は特別だったじゃない？」

「初号機を飲みこんだんだものね」

「ゼーレの連中も言っただけど、こちらとコンタクトを取ろうとしてたのかしらって、気になって　　ね。…それに、これからどんな使徒が来るかもわかんないし。後……」

「まだあるの？」

彼女にしては悩みの種が多いと思ったりリツコが思わず口に出す。

「何よー、そっちが聞いてきたんじゃない。もうひとつはね、アスカのことよ」

「アスカのこと？」

「加持のことで、私を嫌ってるのよ」

「まあ、あの子にとっては恋敵に先を越されたってことになるでしょうからね」

そう、少し前にミサトは一度は分かれた男・加持リョウジと、いわばよりを戻したような形になったのだ。

彼に憧れていたセカンドチルドレン・アスカは、そのことでどうやらショックを受けているようだ。

ちなみに、やつあたりなどを受けて一番実害を被っているのは、ミサトではなくサードチルドレン・碓シンジなのだ。

「本当、どうしようかしら……」

そう言って、ミサトはため息をついた。

その頃、この世界を通りすがった者たちがいた。

世界の融合は止まった。

しかし、様々な世界を巡ることこそが自分の世界であり物語だと気づいた門矢士・仮面ライダーディケイドは、引き続き仲間とともに旅を続けていた。

自分の世界をカメラに写しながら……

そして、士たちは次の世界に到着した。

様々な陰謀が交差する、「エヴァンゲリオンの世界」へ。

その世界で、彼の瞳は何を見るのか。

## 第巻話 其の巻 破壊者、襲来（後書き）

とりあえず書いてみたけど、そもそもこの二つの作品敵の大きさからして違いすぎるだろ…と思いつつ、デイケイドなら何とかしてくれる！と考えています。本編を読めばわかると思いますが、エヴァは第十二使徒戦終了後、そろそろシンジやらアスカやらがおかしくなる時期です。デイケイドの方は冬の劇場版以降の話となってますので、多分海東はいい奴です。こんな感じで書いて行こうと思うので、よろしくお願いします。



第巻話 其の式 The new world

「…どうやら、新しい世界に着いたようだな」

写真館の大きな壁紙が変わったのを見て、門矢士はそう言った。

「今度はどんな世界なんでしょうか」

「なんだろうこの絵。葉っぱとかロボットとかいっぱいあって分かりづらいな」

続いて光夏海、小野寺ユウスケが言葉を発する。

ユウスケの言ったように、新しい絵は色々なものがごちゃごちゃ書かれていて非常に見にくい物だった。

そして、少し前から旅の仲間となった海東大樹も、壁紙の絵を見て首をかしげる。

しばらく全員でよく分からない絵を眺めていたが、やがて海東が立ち上がり、

「それじゃあ、僕はこの世界について色々調べてみるよ」

と言い、写真館から出ようとする。

「おい海東。今、夜だぞ」

「分かっているとも。夜のほうがしやすいこともある」

士の言葉に答えると、海東は出て行ってしまった。

「大丈夫でしょうか、海東さん。まだここがどんな世界か分からないのに……」

「放っておけ。俺は寝る」

「まあ、あいつなら心配いらなと思うよ」

心配する夏海にユウスケが声をかけ、その間に士は眠りにいつてしまった。

「……ロボット、か」

写真館を出た海東は、とりあえずここがどんな世界なのか見て回っていた。

気づいたことは、この世界の技術が発展しているということだ。

道の両側に立っている建物は、ライダー達の世界や、彼がもど居た世界のそれよりも全体的に高く、近未来的なイメージを感じさせる。

そこで海東は、先程見た絵の中にあつたあるものを思い出していた。ひよつとすると、巨大なロボットがわんさかある世界なのかも知れない。

「ふふっ、面白そうだな」

この世界にはどんな「お宝」があるのだろう。そう考えながら、海東は夜の雑踏の中に消えていった。

翌朝。

「…うーん、朝か」

葛城家の朝は、碇シンジという少年の目覚めによって始まる。

目覚ましを止めると、中学校の制服に着替え、キッチンに向かう。

この家で料理ができるのが彼しかいないため、必然的に三食全て担当しているのはシンジである。

まあ、当の本人はこれを少しは楽しんでる節もあるのだが。

「ふんふんふーん」

軽く鼻歌を歌いながら朝食、および弁当を作ると、この家に住む少女を起こしに行く。

この家の主であるミサトは、どうやら本部から帰って来なかったようだ。

「アスカ、朝だよ」

部屋に入るわけにはいかないので、外から多少大きめの声を出す。

「〜〜、わかった、今起きる〜」

しばらくすると、向こうから返事が返ってきた。

それを聞くと、シンジはダイニングに戻る。

そして朝食の時間。テーブルに向かい合って二人が座っている。

「ミサトさん、まだ帰ってないみたいだよ」

「そ、よかったわ。朝から顔を見ずにすんで」

少し前から、アスカはミサトを毛嫌いし始めた。理由は加持リョウジにあるということとは、この手の話題が苦手なシンジにも分かっていた。

（まったく。それで何で僕がとばかりを……）

どうすればいいのかわからなかったが、そのせいでアスカのイライラを受けているのは他ならぬ自分なので、さっさと仲直りしてほしいとシンジは感じていたのだった。

「「」ちそうさま」

そう言うと、アスカは洗面所に向かっていった。

「本当、どうしたもんかなあ」

シンジはむなしくつぶやいた。

朝、ホームルーム前の教室はがやがやと騒がしかった。

シンジも、友達の鈴原トウジ、相田ケンスケととりとめのない話をしている。

そのとき、ふと窓際のある席に目が行く。

(綾波、今日は休みかな…)

「おい碓、話聞いてるか？」

「え？あ、いや、ごめんケンスケ、何の話？」

「だから、担任の大村先生が昨日交通事故に遭ったって話だよ」

「なんだそんなこと……ってええええ！！」

「昨日の夕方、車にはねられたらしい。命の危険はないらしいで。クラスの連中はまだ知らんみたいやけどな」

ケンスケによってもたらされた思わぬビッグニュースに、トウジが補足を加える。

シンジはまさかの事態にとても驚いていたが、あることに気づき、二人に尋ねる。

「じゃあ、臨時の担任は誰が来るのかな？」

「さあ？そこまではわからない。けど、もうすぐ来るんじゃないか？」

ケンスケがそう答えたとき、チャイムが鳴り、教室のドアを開けて教頭先生が入ってきた。

生徒達は、何事だ？というような表情をしている。

「えー、非常に悲しいことなのですが、このクラスを受け持っていた大村先生が、昨日交通事故に遭いました」

生徒達から驚きの声飛び出し、再び騒がしくなる。

「静かに！大村先生は命に別状はありませんが、しばらくの間入院することになりました。それで、その間臨時にこのクラスを受け持ってもらおう先生を紹介します。今朝この学校に来たばかりなのですが、ほかの先生方も忙しいので、頼むことにしました、どうぞ」

その言葉とともに、新任の教師らしき人物が入ってきた。

「それでは、後はお願いします」

そう言つて教頭は退出した。クラス中の視線が、教卓の前にいる人物に注がれる。

その人物は、チヨークを取ると、黒板に文字　　おそらく自分の名前だろう　　を書き始める。

………なんて読むんだろう。も…やし？

「今日からこのクラスを臨時に受け持つことになった、門矢士だ。科目は数学を担当する」

あ、全然違った、とシンジは感じたがそれだけで、ここまでは、普通だった。

「…それにしても、注目されるといふのは気持ちがいいもんだな。いいからお前ら、この俺が教え導いてやるんだ、ありがたく思うんだな」

………

教室の空気が思わず奇妙なことになる。

なんだこいつは。

そう、クラス全員が感じていた。

(なんだか、おかしいことになっちゃいそうだな………)

そう、シンジは思っていた。



第巻話 其の弐 The new world (後書き)

という事で、第二話です。個人的に、シンジとアスカ、そして土はよく似たところがあると思うんです。最終的に世界とどう向き合ったのか、それが彼らの異なるところだったんだと思います。

## 第弐話 其の壱 新人教師、門矢士

4時限目、数学の授業。朝に強烈なインパクトを与えながら登場した新任教師の初授業だったが、碓シンジにとってはそんなことはどうでもよく、いつものように適当に数式などを聞き流していた。

「はあ」

ふとため息がもれる。次の使徒はいつ来るんだろうか。もう、この前みたいに飲み込まれるのなんてごめんだ。今までも大概ひどい目にあつてきたが、さすがにあそこまで死ぬということを感じさせられたのは初めてだった。

(なのにどうして、また僕はエヴァに乗ろうとするのだろうか。どんなことになるのかわからないのに、 どうして)

そんな風に自分の世界に入り込んでいた時、彼を引き戻すかのよう  
に授業終了、昼休みの開始を告げるチャイムが鳴った。

「よし。じゃあ今日の授業はここまでだ。質問などがあればいつでも来い。俺が直々に教えてやる」

新任教師・門矢士は相変わらずの高飛車ぶりだった。…相変わらず  
といつても、今日初めて会ったのだが。

(…というか、教師が質問に答えるのは当然なはずなのに、どうしてあんなに偉そうなんだろう)

「起立」

委員長の洞木ヒカリが号令をかける。

「れ…」

「ああ、ちょっと待った。碓シンジと鈴原トウジ、あいさつが終わったらちよつと来い」

「え？」

まったく予期していなかった呼び出しだったので、シンジは面食らった。しかも友人のトウジも一緒とは、一体どうということなのか。

あいさつが終わり、シンジは門矢士の元へ向かう。トウジも来たところ、士が口を開いた。

「さて、お前達。なぜ呼び出されたか、わかってるか」

シンジとトウジは顔を見合わせる。お互いまったく身に覚えがないようだ。

「まったく、小さいときに習わなかったか？人の話はちゃんと聞きましよう、ってな。それをお前達…」

「よりもよってこの俺の授業を聞かないとは何事だ？」

士は不機嫌そうにそう言った。どうやら授業態度が悪かったことが原因だったらしい。今まで注意されることはあれ、そんなことで呼び出されたことはなかったので少し驚いたが、それならトウジが一緒に呼ばれたのも説明がつくとシンジは思った。

「そんなことでわざわざ呼び出さんでも……」

トウジが不本意そうにつぶやく。それについてはシンジも同意見だったが、士は、

「それくらいお前らの授業態度がひどかったってことだ。勉強が嫌いでも、とりあえず話を聞くふりくらいはしてもいいと思うんだがな」

とぼつさり斬り捨てた。………確かに、その通りかもしれない。

「というわけで、お前ら2人には特別課題をたっぷり出してやる。

ちゃんとやっつけていよ」

………前言撤回。やはり納得いかない。

「そ、そんな……いくらなんでもそこまでしなくても」

「そつやそつや」

シンジが抵抗すると、トウジもそれに同調する。

「駄目だな。これくらいしておかないと、また同じ事をしそつだ。それとも、なにか授業に集中できな かった理由でもあるのか？」

「…あります！」

？とシンジは思った。士の態度を見るに、てきとつな理由では許してもらえなさそつだ。

「ほう、何だ」

「ワシやないけど、こつちの碇シンジはエヴァンゲリオンのパイロットです。世界を守るために戦つて

疲れてるんですから、こらえてやるわけには」

なんとトウジは自分ではなくシンジを課題から逃れさせようとしていたようである。

(トウジつて、本当にいいやつだなあ)

などと改めて親友の友達思いな面に感動していると、そこでトウジの言葉を聞いた士の表情がおかしいのに気づいた。何かを真剣に考え込んでいるようだ。

「……おい。エヴァンゲリオンつて、何だ」

士の口から出た言葉はそんなものだった。

「え？先生、知らんのですか？」

トウジが驚いたように言う。

「ああ、ここには来たばかりだからな」

士がぶつきらぼうに答える。よく考えれば、ネルフは極力エヴァの情報隠そうとしていたのだから、遠くから来た人間の中には知らない人がいても不思議じゃないのかもしれない、そうシンジは思った。

「あの、エヴァンゲリオンつていうのはね……」

「その疑問！この相田ケンスケがお答えしましょう！！」

シンジが答えようとした瞬間、いきなりケンスケが飛び出してきた。「ケンスケ！お前、どこから出てきたんや！」

「お前らを待つててやってたんだろ。それより先生！エヴァンゲリオンのことならせひ、この僕にお聞きください！ということですから、昼休みをつぶしても詳しい話をしましょう！」

どうやらケンスケは、自分の持っている知識を見せびらかしてやりたいらしい。エヴァとか軍艦とか、彼はそういったものが大好きなのである。

「……そうだな、悪くない。よし、碇、鈴原」

「は、はい」

「今回は見逃してやる。次からは気をつける。相田…だったな。俺について来い」

シンジとトウジは驚いたように再び顔を見合わせた。よくわからないが、どうやら自分達は助かったらしいということだけは確かかなうだ。

そうこうしているうちに、土とケンスケは教室を出て行ってしまった。

「ほんと……変わったひとだなあ」

シンジの口からは思わずそんな言葉が飛び出していた。

「まったく、なんやあいつ、むかつくなあ！いちいちそんなことで課題を出そうするなんて信じられんわ！」

トウジが怒りながら席に戻る。

「でも、なんで急に許してくれたんだろ」

「さあ？せやけどそもそも許すのが当たり前や。ほんと、とんでもない奴が担任になってしもうたな」

「何言ってんの鈴原。原因作っただのはあんたでしょう」

トウジが文句を言っていると、ヒカリが声をかけてきた。その後ろからアスカが出てきて、

「こらバカシンジ！あんたが説教くらってたせいで今までお昼が食べられなかったじゃない！ほら、早くお弁当渡しなさい」と、いきなり不機嫌そうにまくし立てた。

「あ、ああ、ごめん。今出すから」

「まったく…アタシのお弁当つくるのは、アンタの数少ない存在理由なんだから、ちゃんとしなさいよね」

「そんなあ……」

あまりの扱いの悪さにシンジは少しへこむ。まあ、今に始まったことではないが。

「惣流、そりゃちょっと言い過ぎやろ。それに悪いのはあの門矢っちゅう教師のせいや」

「だから悪いのはあんた達ふたりでしょ！それに門矢先生、口はあただけど教える力はあると思うわ　よ」

トウジの言葉にヒカリがつっこむ。

「委員長、それ本当？」

授業をまるで聞いていなかったのになにもわからないシンジは疑問に思う。

「うん。いつも数学はちょっとわかりにくいのに、門矢先生の説明聞いてたらすうつと頭に入ったんだ　もの」

「ま、確かに前と比べれば腕はあるわね。アンタ馬鹿なんだから、ここで取り返しておいたほうがいい　かもね。……………それにしても、あの高飛車な態度、どうにかならないのかしら」

(…アスカが言うなよ)

心の中で、シンジはそうつつこんでおいた。

5時限目の途中。この時間どのクラスも担当していない土は、自身用に用意されていたパソコンを使っていた。

(…やはり調べても何も出ないか。『特務機関』らしいからな) 口ではそう言いながらも、土の口元は笑っていた。

(いきなり電話がかかってきて教師の仕事を振られた時は驚いたが……) おかげでこの世界のおおまかな事情はだいたいわかってきたぜ)

『使徒』と呼ばれる謎の巨大生物。それと戦う人類の兵器、人造人間エヴァンゲリオン。そしてそのパイロット3人は、すべて自分が担当するクラスにいる。

(さあ…これからどうするかな)

土やシンジ達がいる学校を、遠くから見ると男がいた。

「おのれディケイド……今度こそ、お前の旅を終わらせてやる……！」

第貳話 其の壱 新人教師、門矢士（後書き）

更新が遅れてしまい、本当に申し訳ありません。とりあえず一話書いてみました。これから試験なので、また少し間隔があくと思います。それでも構わないという方は、これからも見守って下さるとありがたいです。



第弐話 其の弐 S t r a n g e t e a c h e r

「よし、じゃあ今日はここまでだ。用のない者はあまり教室に長居しないようにしろよ」

士の言葉が終わり、全員が挨拶をする。それが終われば、教室は解放感とともに喧騒に包まれるのだ。

「あの、門矢先生。先生はどこから来たんですか？」

何人かの女子は、士を囲ってそんな質問をしていた。いろんな意味でインパクトを与えたのもあるだろうし、さらに彼の顔立ちは整っているので、なおさらだろう。

「そうだな……ここから、ずっと離れたところだ。それ以上は教えん」

「ええ、じゃあ、趣味とかは？」

「趣味？そうだな……折角だ、今からやるか」

そう言うとしは、おもむろに服で隠れていたカメラを構え始める。

「写真撮影、ですか？」

女子の一人が尋ねると、士は小さく頷く。

「ああ。これは俺の愛用のカメラだ。こいつで俺は、今まで様々なものを写してきた。そしてこれから も写し続ける。……世界をなそう、今まで本当にいくつもの世界をめぐってきたが、どの世界でも士は欠かさず写真を撮ってきた。

相変わらず写真のぶれは直らないが、それでもいいと思っていた。確かに世界に拒絶されているのかもしれない。それでも、自分は旅を続けたい、そう強く感じるようになったからだ。

「なんかいいですね。それじゃ先生、早速撮ってください！」

女子達が士に楽しそうな声で言う。士も「ああ」と答えると、真剣

な顔つきで、この世界で初めての写真を撮り始めた。

「門矢先生って……なんか変わってるね。どうしてカメラなんか持ってるんだろう」

士が取り囲んでいた女子達に続き、教室に残っているほかの生徒達の姿も次々撮り始めたのを見て、ヒカリはそうつぶやく。

「さあ？写真オタクなんじゃないの」

となりにいたアスカは、どうでもいいというようにそう答えた。

「今日の晩御飯は…残り物で適当に済まそうかな」

午後六時。シンジは毎日やっている通り、夕食の準備にとりかかる。この家で、まともな料理ができるのは彼しかないからだ。しかし、なぜか食事だけでなく、掃除洗濯など家事全般は全てシンジが担当していた。以前作られた当番表は、もはや意味をなしていない。

「ま、あの二人に家事をさせたら、ろくなことにならないような気がするから、別にいいんだけど」

あきらめたように言いながら、シンジは夕食を作っていく。ミサトもアスカも自分の部屋にいることは確認しているので、聞こえる心配はない。料理は手馴れているので、たいして集中していなくても問題はない。

「……変わった先生だよなあ」  
料理の片手間、今日からクラス担任になった教師のことを思い出す。来て早々、強烈なナルシストぶりを発揮。放課後には教室で生徒の写真を撮りまくっていた。そんな感じにもかかわらず、授業の質は高いらしい。不本意ではあるが、ヒカリの言うとおり、不真面目な生徒を注意するのも正しいことだろう。

とにかく、門矢士という教師はかなり個性的だ、そうシンジは考えていた。

「そういえば、どうして急に罰を取りやめてピンポン。」

インターフォンが鳴った。こんな時間に誰だろう、と思いながら、シンジは玄関に行き、扉を開けた。そこには。

「よお」

さっきまで思い返していた当人・門矢士がいた。

「か、門矢先生！？どうしてここに……？」

「そんなに身構えるな。家が近いから来てみただけだ。お前の実質保護者：葛城ミサトさんはいるか？」

驚くシンジに、士は少しも表情を変えずにそう答えた。とりあえず、シンジはミサトを呼ぶ。

「ミサトさーん！あの、担任の門矢先生が来てるんですけど！」  
とりあえずこれで聞こえるだろうというくらいの大きさの声で呼びかけると、ドタバタと言う音とともにしばらくしてミサトが玄関にやってきた。少し髪が乱れているのを見ると、どうやら急いで人に見せられるくらいの格好を取り繕ってきたようだ。

「すみません、時間かかっちゃって。シンジくんの同居者の、葛城ミサトです」

「いえ、こちらこそ。急にお訪ねしてしまって申し訳ありません」二人の会話を聞きながら、大人つてすごいなあと思つていた。二人とも、自分を完全に隠している。

「それで、どうしておいでに？」

ミサトが、シンジが聞きたかったことを尋ねる。

「このマンションの二、三軒隣が私の家なんです。写真館をやっているんですが……用が無くても来れば、コーヒーくらいは出せますので、よかつたら一度覗いてみてください」

写真館？と思つたとき、そういえば今日学校に行く途中に見慣れない建物があつたなとシンジは思った。おそらくあれのことだろう。

(写真を撮っていたのはそれが理由かな。いや、それでも学校で持ち歩いているのはおかしいよう　な……………)

そんなことを考えている間に、二人は会話を二言三言交わしていたようで、

「それでは、今日はこれで失礼します。いつまでかはわかりませんが、これからよろしく願ひします」

土が帰りの挨拶をしていた。

「いえ、こちらこそ。わざわざ来ていただいてありがとうございます」

ミサトが礼を言う。それを聞いた土は、

「いやいや、これからお世話になりますので……………色々」と言つて帰つていった。

「色々って…どういうことなんですかね、ミサトさ」

ミサトの方を向いたとき、シンジは驚いた。さっきまで笑顔だったその表情が、真剣なものになっている。何かを考えているような……

「ミサトさん、どうかしたんですか？」

「シンちゃん…あの人、どこから来たかとか言ってた？」

「え？いや、特には……遠いところから、とは言ってたような気はするけど、詳しくは何も」

ミサトの質問に、土が朝の自己紹介で言っていたことを思い出しながら答える。

その答えを聞くと、ミサトはますます考え込む顔つきになり、

「シンちゃん、あの人、気をつけたほうがいいかもしれないわね」と言った。

「え？どうして？」

突然のセリフにシンジはわけがわからなくなる。土になにか警戒すべきところがあったのだろうか？

「最後の言葉と鋭い目つき……なんとなく気になってね」  
シンジの問いに、ミサトはそう答えた。

第貳話 其の貳 S t r a n g e t e a c h e r (後書き)

遅くなりました、第四話です。土がミサトに対して敬語なのは、さすがの土も教師の立場で生徒の保護者にあの横柄な口の利きかたはないだろうと思ったからです。

今回は両作品の「青」を代表する二人が接触します。

第貳話 其の参 二人の青 / Like a robot

「あ、土君。おかえりなさい」

「ああ」

土が光写真館に帰ってきたのを、夏海が出迎える。

時刻は七時十分前だ。

なかなか戻ってこないのを心配していたのだろうか、夏海の顔には安堵の表情が浮かんでいる。

「やっと帰ってきたか。それで土、なにかこの世界についてわかったのか？」

スクリーンのある部屋に入ると、そこにいたユウスケが土に尋ねる。テレビを見ていたらしく、画面にはアニメのワンシーンだろうか、制服姿の男女が部室らしきところで話している姿が映っていた。

「ああ、今から話す」

「ああ、いいなあ、渚ちゃん萌え〜」

人に話を振っておきながら、再びアニメに視線を戻しひとりつぶやくユウスケ。

その姿を見て、夏海と土はあきれた顔をして話しあう。

「ユウスケ、大丈夫でしょうか。なんか最近、どんどん変な人にな  
ってる気がするんですけど……」

「……まあ、結構いろんな世界をめぐるってきたからな。どっかで感化  
されちまったんだろ。そつち系に」

「確か、四つ前の世界からだと思いますけど」

「……片鱗はカブトの世界で見せてたけどな。大方、あの借金執事  
のご主人様とか亡霊とかに知識を刷り込まれたってところか」

「……」

「……」

願わくば、彼が最後の一線は越えないように。

それが、士と夏海の願いだった。

「士君、コーヒー、お待ち遠さま」

写真館の主、光栄次郎がコーヒーを淹れ、士に渡す。

それをすすりながら、士は口を開く。



「さて、アニメも終わったようだから、そろそろこの世界の話をしてもいいか？ユウスケ」

なんかだんごが大家族な感じのエンディングも終わったようで、こちらが頃合だろうと判断したのである。

「ん？…ああ、ごめんごめん。そういえばそういう話だったな」

こいつ、完全に忘れてやがったな。

ぶん殴りたい衝動に駆られたが、ユウスケも真面目な顔になっているので、大目に見ることにした。

「まずお前らからだ。なにか気づいたことはあったか」

コーヒーを飲んでしまおうと思い、とりあえず夏海たちの話を聞くとする。

夏海とユウスケは顔を見合わせ、

「「特になにも」」

見事にセリフを重ね合わせた。

「外を適当に歩いてみましたけど、少し街が発展しているみたいってことしかわかりませんでした」

「後は、冬なのにやたら暑いってことくらいかな。でもこれも、ここじゃ二月や三月が気温が高いつてだけかもしれないし」

どうやらこの二人はなにもつかめなかったようだ。まあ、普通に過ごしている分には平和な世界と変わらないので当然のことだが。

「それで、土君はなにかわかったんですか？いきなり先生になって出かけちゃいましたけど」

自分達の話は終わったので、今度は土の話の聞こえとする夏海。

それを土は余裕たっぷりの偉そうにも見える表情で見る。

ちょうどコーヒーもなくなった。

「俺の人徳のおかげで手に入った情報だ。耳の穴かっぽじって聞けよ」

微妙に出来事に捏造を加えながら、土はケンスケから聞いたことなどを話し始めた。

「本当に巨大ロボットがいる世界だったんですか……」

「しかもパイロットは中学生三人？なんでそんなことに……」

土からこの世界についての話を聞き、二人は驚き、しばしスクリーンを見つめていた。

「へえ〜、なかなかおもしろそうじゃない」

「キバーラ、お前いつからここに…」

沈黙を破っていきなり声を発したのは、キバの世界からなんだかんだで旅を続けている、キバットバット族のキバーラだ。

さっきまで栄次郎と一緒にしゃべっていたと思ったのだが。

「興味をひかれる話は自然と耳に入るようになってるのよ。それで？そのパイロットはどんな子なの？」

ユウスケたちもキバーラの言ったことが気になったらしい。

「それ俺も知りたい」

「私もです」

士は一呼吸置いて今日見たチルドレンたちの印象を整理すると、こう答えた。

「一人は冴えないうじうじした男、碇シンジ。一人は偉そうで高慢な女、惣流・アスカ・ラングレーって奴だ」

「…なんか、ひどい言い方だな……」

「ユウスケ、真に受けちゃだめですよ。士君はいつもこうなんだから」

「ああ、わかってるよ。だいぶ水増ししないとね」

士の評価は散々なものだが、夏海たちは彼の物言いを知っているの

で、特には気にしない。素直じゃないので、どうしても人を悪く言うってしまうのだ。

「お前ら勝手なこと…」

「まあまあ、落ち着いてよ土。それで？あとのひとは？」

勝手に自分の言葉の意味を変えられて言い返そうする土を、キバールが制する。

「チッ。……あとのひとは綾波レイってやつだが、今日は休みだ。どうやらたまに理由も無く欠席するらしい」

「へえ、どんな子なんだろうね」

「さあな。明日かそこらにはわかるだろ」

ユウスケの疑問に、土は適当にそんな言葉を返した。

ネルフ本部には、一般職員は入ってはならない場所がいくつかある。そのうちのひとつ　碇ゲンドウの研究室から出てきた影がひとつ。

青色の髪に、紅い瞳。肌はアルビノのように白い。

ファーストチルドレン・綾波レイだ。

時刻は日付が変わり、すでに午前一時を回っている。

さらに先程まで実験のため液体の中にいたので、体は疲れていた。

(でも、碇指令の命令だから)

そう。それだけで、少々過酷な実験をする理由には十分だった。彼女にとっては、碇ゲンドウの命令は絶対だ。なによりも優先されなければならぬ。

と、そこで綾波は、自分の前に人が立っていることに気づいた。

二十歳に届いているかどうかの青年で、ネルフの制服を着ていない。

「誰？」

目の前の男に尋ねる。もしかすると、「不審者」と呼ばれるものかもしれない。

男は綾波の顔を見つめると、いたって平然とした表情で、

「通りすがりの仮面ライダーってとこかな」

と、聞きなれない単語を口にした。

「かめん、らいだー？」

「そう。そういう君は、うわさのファーストチルドレンかな？こんな真夜中に何をしているんだい？」

やはりネルフの人間ではないと判断した綾波は、男の顔を見たまま言葉を発しない。

「……だんまりか。どうして何も話さない？」

その質問に対する答えはひとつだった。

「碇指令に言われたから」

「碇指令？ああ、ネルフの最高権力者のことかな。そんなに警戒しなくても、僕は君に」

ウーン、ウーン。

男の言葉を遮るように、いきなりサイレンが鳴り響く。

「…なるほど。ずいぶん大げさな防犯ブザーだね」

男はその原因がわかったらしい。

そう、男を不審者とみなした綾波が、あらかじめ持っていた非常ベルを作動させたのだった。

「いきなりひどいことをしてくれるねえ」

「碇指令に言われたから」

「別に僕は、君に危害を加えようってわけじゃないんだ」

「碇指令に言われたから」

「……………まったく、君はまるでロボットみたいだな。もっと自由に融通の利くようになってほしいね」

男があきれたように言う。

ロボット？

セカンドチルドレンにも、人形のようにだと言われたことがある。

この二つは、同じ意味なんだろうか。

そして、一体どういう意味なんだろうか。

「ま、いいか。なかなか警備が厳しくて、これ以上見て回るのは無理だと思ってたところだし」

ひょうひょうと言う男の表情からは、焦りは見えず、余裕だけが感じられた。

絶対に逃げられるという自信があるのだろうか。

「それじゃあね。多分、また会うんじゃないかな」

そう言って、男は駆け出していった。

サイレンを聞いて駆けつけた警備員達は、結局その男を見つけれなかった。

人の気配は感じたのだが、そこを確認する直前、電子音が聞こえただけで、誰もいなかったそうだ。

次回、仮面ライダーディケイド エヴァンゲリオンの世界

「門矢先生が怪しい？」

「もしかして君達、士の生徒？」

「うわ…ひどい写真だ」

「ディケイドオオオ……」

「な、なんなのよこれ……」

「ここは、本職に任せておけ」



全てを破壊し、全てを繋げ！

ユウスケの設定については……まあなんとなくこうなる可能性もあるかな、と思ったんで書いてみました。別に、ユウスケのかっこいいシーンがこの話に一切無いわけではありません。ちなみに彼が見ていたアニメは「CLANNAD」というもので、四つ前の世界とは、「ハヤテのごとく!」という漫画の世界のことです。どっちも非常におもしろいです。

ちなみに僕は杏とヒナギク派です。わかる人だけわかってください。海東と綾波については、個人的に似ているところがあるなーと思っただけからませてみました。つーか綾波がなんか違う気がする……

さて、先日、このサイトで連載されている、一条ツカサ様作「仮面ライダーキバ / BLAZING BLOOD」という、仮面ライダーキバと灼眼のシャナのクロスオーバーの作品を読みました。

それで、感想。

「もう駄目だ、おしまいだあ……」  
ブロリーを見たときのベジータの気持ちがありました。簡単に言くと、桁違いだということです、もちろん向こうが。文章力、構成力、発想力、どれをとっても敵いません。

まあでも、もともと自分に文才がないのはわかってるし、クロスさせるものも違うので、自分は自分なりにやろうと思います。

…まあ、ちゃっかり影響受けてタイトルとかに凝り始めちゃいまし

たけど。

とにかく、次回もお楽しみにしないでできれば待っててくれるとうれしいなあ…

## 第参話 其の巻 異世界のモノ

士の教師生活の二日目の朝。

ホームルーム前の朝の時間、おのおのが友達と話している中、シンジもまた、昨日の出来事をトウジとケンスケに話していた。

「門矢先生が怪しい？ミサトさんがそう言ったのか？」

「うん。気をつけたほうがいいかもしれないって」

ケンスケが不思議そうに言うのを、シンジはうなずいて返す。

「……怪しい、かあ。気に食わんやつなんは間違いないんやが、そんな危ないようには見えんなあ。センセはどう思う？」

トウジも、さすがに気をつけるというのには違和感があるようだ。

「僕も、正直そんなに気にしなくてもいいと思う」

「僕も同感だな……ミサトさんが言ったた、てのは気になるけど、シンジもケンスケも、トウジと同意見だった。門矢士という人間は、警戒するには値しない、と。」

「っと、そろそろホームルームか。よし、仕掛けるとするか」

「？何を」

急にトウジが立ち上がったので、ケンスケが疑問の声を出す。

「ワイはやられたらやり返す主義や。あの門矢士には一泡吹かせてやらんと気がすまん」

どうやらトウジは昨日のことを根に持っているようで、なにか仕返しをしようと考えているらしい。

黒板の前に向かうと、そこにあつた黒板消しを手に取り、

「教室のドアにはさむ。これであいつはチョークの粉まみれや!どや、われながらナイスアイデアやろ」

「……いや、普通に使い古された手……」

「ま、シンプルイズベストかもしれないけど」

得意顔のトウジに、シンジ、ケンスケはそれぞれそうつつぶやいた。

「よし、これではあいつが来るのを待つだけ」

「ちよつと鈴原!何やってるのよ!」

とここで、トウジのいたずらに気づいたヒカリが止めに入る。真面目な性格なので、こういうことは我慢できないのだろう。

「止めるな委員長、これが男の生きる道や」

「どじがよ!めちゃくちゃ器が小さいわよ!」

「なんやとー!」

ガヤガヤ。

「まーた始まった。ほんと、あの二人は飽きないねえ」

痴話喧嘩に見える二人の口論に、ケンスケがあきれたように言う。  
少しづらやましさが含まれていたが。

「はは……………」

シンジも乾いた笑いで返す。

……………しかし、考えてみれば、トウジの作戦　黒板消し落としは、  
よくあるが割りと普通に引っかけたかかってしまつのではないだろうか。

そう、シンジが感じていたとき。

キンコーン、カーンコーン。

チャイムが鳴り、少し経ってから、土がドアを開ける。

その瞬間、黒板消しが彼の頭めがけて落ちてくる。

トウジの顔が勝利の喜びで満ちた時、

「よっ！っ」と

士が黒板消しの、消すほうでない部分を足に当てて蹴り上げた。クラス中の視線がそこに向けられる。

士はその中のひとりを見ると、

「そらっ！」

再び黒板消しを蹴る。

今度は、サッカーのシュートのように。

「へぶっ！！」

そして撃ちだされた弾丸は、まっすぐトウジの顔面にヒットした。

そのまま倒れるトウジを見て、士が一言。

「この程度の罫で、天才である俺をはめられるとでも思ってたのか？ 鈴原」

す、すげ〜。

そんな声がどこからともなく出てくる。今のはどう見ても中学教師のできる動きじゃない。

「な、なんでワイやとわかったんや……………」

起き上がったトウジの顔は、シュートの威力で真っ赤になった上に、チョークの粉で真っ白になっていた。

それを見て、クラス中が笑いに包まれる。

「な、なんや！センセやケンスケまで、笑うことないやろ！」

「い、ごめんトウジ……………ふふっ」

結局シンジも笑いを止められなかった。

「…まったく。お前だけ表情が飛びぬけてまぬけだったからわかったんだ」

「な、なんやと！」

士の挑発めいた言葉に、トウジが反応する。

「ま、その反骨精神は買ってやらなくもないが、やるからにはもっと徹底的にやるんだな。そのほうが俺も倒しがいがある」

余裕たっぷりの表情で士が言う。

どうやら、彼もトウジのいたずらを楽しんでいたようだ。

「よ、よっしゃ！その言葉忘れたらあかんで！絶対ギャフンと言わせるたる！…！」



「ふん、まあ、せいぜいがんばるんだな。……ちなみに言っておくが、俺の波動球は108式まであるぞ」

「それがどうした!」

「さらに、俺はまだ変身を二回残している……」

「そんなん関係あらへん!」

士のセリフに食って掛かるトウジ。

「ちょっとトウジ。うのみにしてない?」

シンジがそんなトウジに突っ込みを入れる。

「心配せんでも、うそとほんとの区別くらいいついとする。波動球はともかく、変身なんてできるわけない」

いやいや、波動球もムリだと思うけど、という突っ込みは心にしまっておくシンジであった。

さっきの動きを思い返すと、ひょっとしたら本当にできてしまつかもしれない、波導球。

「で、ほんとうに行くの？門矢先生の家」

その日の放課後。シンジ、トウジ、ケンスケの三人は、偵察の意味も込めて土の家に向かうことになった。先程の問いはシンジのものだ。

「そうや！もしかしたらミサトさんの言うとおり、なんか危険なやつなんかもしれんし、その辺はつきりさせんとあかん」

「ま、今朝のアレを見ちゃ、少し疑うべきかもしれない。今は先生、家に帰っていないしな。それに、うまくいったらミサトさんにほめられるかもしれないし」

トウジとケンスケは行く気になっているので、それならとシンジも行くことにしたのである。

「とりあえず、僕の家あたりまで行ってみよう」

「光写真館。たぶんここだと思っけど……」

今日の行きに確認したので、それらしき家はすぐ見つかった。

「ま、とりあえず入ってみようよ」

ケンスケの言葉とともに、扉を開ける。

「あ、いらっしやい」

出迎えたのは、二十代前半くらいの青年だった。写真館の店員だろうか。

「あの、僕達 中学校の生徒なんですけど……」

ケンスケがそう言うと、青年は驚いて、

「えっ！じゃあ、君達、土の生徒？」

「あ、はい。門矢先生はうちのクラスの担任です」

「そっかそっかー。あいつ本当に先生やってるんだな」

「ユウスケ、どうかしたんですか？」

青年がうんうんとひとり納得していると、奥からひとりの女性が現れた。こちらも青年と同じくらいの年だろうか。

「うわ、美人……」

となりでケンスケがつぶやいている。

シンジも、この女性は美しいの部類に入ると感じていた。

「あ、夏海ちゃん。この子たち、土の生徒だって」

「そうなんですか？」

女性がこちらを見つめる。

「はい。僕は、相田ケンスケと申します！」

「鈴原トウジです」

「…碓シンジです」

とりあえず、三人は自己紹介をしておいた。

すると向こうも、名前を覚えてくれた。

「俺は小野寺ユウスケ。この家の居候だよ」

「私は光夏海です。この店の店長の孫です」

そしてお互いに礼をする。

「ところで、碓シンジってことは……君が、土の言ってたチルドレンってやつなの？」

「えっ！？は、はい、そうですけど……」

いきなりエヴァの話が振られて、少々戸惑うシンジ。そう言えば昨日、ケンスケがエヴァについて土に説明することになっていた気がする。そのとき自分の名前も出たのだから、シンジはそう考えた。

とそこで、また奥から、今度は老人がこちらにやってきた。

「ふう〜、土君の写真、現像できたよ」

「あ、おじいちゃん」

夏海がその老人に声をかける。

おじいちゃんということとは、この写真館の店長ということになる。

「…ははっ、相変わらずだな、土の写真は」

「そうですね」

写真を見たユウスケと夏海は、楽しそうな表情で微笑んでいる。

いったいどんな写真なのだろうか、気になった。

「君達も、見る？」

こちらの様子に気づいたのか、店長がそう尋ねる。

「あ、はい」

シンジが返事をする。

「見るんですか？はい、どうぞ」

そう言って夏海が写真を手渡した。

三人でそれを見る。

感想は、見事に一致していた。

「」「うわ、ひどい写真……」「」

シンジたちが光写真館に入ってから三十分後。

今日は仕事が休みなので一日中家でごろごろしてようと思っていたミサトだったが、冷蔵庫の中のビールがなくなっているのに気づいたため、急遽近くのコンビニまで買いに行くことにした。

彼女にとってビールは生涯の相棒である。

「ああ、だるい……。やっぱりシンちゃんに頼んだほうが……いやいや、さすがにそこまでさせるわけにはいかないか」

ただでさえ家事のほとんどを頼り切っているのに、それはまずいだろう。

そう考えながら、やる気のない足を動かしているとき、

目の前に、ソレは現れた。

「!?!? な、なに……オーロラ?」

それは銀色の、オーロラのような壁。

周囲の人々も、突然の怪現象に驚いている。

しかし、それはただ驚きでしかなかった。

それが恐怖に変わったのは、そのオーロラから出てきたモノを見たときだった。

「デイケイドオオオ……」

それは、象をモチーフとしているような、灰色の化け物だった。

化け物は、周囲の人を叩き飛ばしながら、うめき声を上げる。

それを見て、人々は叫び声を上げながら必死に逃げ出す。

ミサトは、目の前の光景にどう対処すべきか迷っていた。

こんなときも、一応拳銃は携帯している。

だが、相手が何者であるかわからない以上、うかつに攻撃するのは

「キャー！ー！ー！ー！」

だがミサトはそこで、化け物が逃げ遅れた小さな女の子に近づいて  
いるのを見た。

「デイケイドオオオ……」

「くっ！」

放っておくわけにはいかない。

ミサトは迷いを振り切り、拳銃を発砲した。訓練しただけあり、銃  
弾は化け物の頭に命中した。

「早く逃げて！ー！」

ミサトが叫ぶと、女の子ははっと我に返ると、こちらを少し見てか  
ら走って逃げていった。

「グルルルウウ……」

化け物の動きが止まったのはほんの少しの間で、怒り狂ったように  
こちらに向かってくる。

ミサトはそれに、撃てるだけの弾丸を撃ち込む。



一発当たることに化け物はよろめくが、しかし。

「ガアアアッ！！」

倒れるようなことはなく、さらに大きな叫び声を上げてまっすぐミサトに向かって走り、彼女の体を吹き飛ばした。

「があっ……！！……う、うそ……全然、効いてない………？」

拳銃がまったく効かない上に、それなりに、いや相当鍛えた自分が一撃でかなりのダメージを受けてしまったことに、ミサトは驚愕の声を上げた。

「な、なんなのよこれ………」

「当たり前だ。そいつは、お前達の世界の生き物じゃない　オ  
ルフエノク、だからな」

そのとき突然、化け物の背後から声が聞こえた。

見ると、化け物に向かって立っている男がひとり。

「…門矢先生？」

それは、昨夜会ったシンジたちの新しい担任の、門矢士だった。

「ガールル………」

化け物も、士のほうに体を向け、今にも襲いかかろうとする。

「……そうあせるなよ。心配しなくても、相手してやる」

対する士の表情に、焦りは見られない。

「なにを……」

「ここは、本職に任せておけ」

ミサトの言葉を、士が遮る。

そして、ブーンという音とともに、一枚のカードを取り出す。

『KAMEN RIDE』

それを、腰に巻いてあったベルトに差し込む。

「変身」

『DECADE』

「……」

ミサトが信じられないといった表情になる。

それもそのはずだ。

ベルトから発せられた電子音とともに、いくつもの黒い影が動き回

り、土の体とひとつになる。

その上に、赤い線のようなものが入り込み、そして。

「さて、始めるか」

眼は緑、体はマゼンタと黒の、戦士が現れる。

その光景をミサトは目の当たりにしたのだから。

次回、仮面ライダーディケイド エヴァンゲリオンの世界

「馬鹿力め。ならこいつだ」

「あ、あなた一体……」

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「土君も、なかなかいい写真を撮るんだよ」

「……なら、交換でどうだ」

全てを破壊し、全てを繋げ！

第参話 其の壱 異世界のモノ（後書き）

あれ、おかしいな…なんでこんなに文章が長くなって…  
というわけで第参話、其の壱です。ようやく変身。次回は最大の難  
関、バトルシーン。うまくかけるか……？

前半部分の士の発言、作者的には事実ということにしておきます。  
士なら波動球くらい撃てるでしょうし、変身だって、

士 デイケイド コンプリ

ね？二回残してるでしょ？

そろそろエヴァの本編見直す必要が出てきたところで、今回はここ  
までです。

では、また次回。

## 生存報告みたいなもの（前書き）

現在期末試験が迫ってきているため、次の話を投稿できない状況にあります。そこで、少しこの作品の方針とプラス について書こうと思います。先の展開が少しわかってしまうかもしれないので、それが嫌な人はスルーしてください。

## 生存報告みたいなもの

とりあえずこの物語のコンセプトは「ディケイドによるエヴァの世界の破壊」です。

旧劇場版の終わり方は、バッドエンドではないにしろ、ハッピーエンドとは言いがたいものでした（あくまで主観ですが）。

結局サイドインパクトは発生してしまい、このあと戻る可能性もあります。人類はLCLのスープになってしまいました。

それが人類にとって正しいのか、そうでないのかはわかりません。

けれどエヴァを視聴中、あそこでこうなっていればこうならずにするだのに、と感ずることが結構ありました。作者が暗い話が好きじゃないのかもしれませんが。

そして、仮面ライダーディケイドがシンケンジャーの世界に行ったとき、ディケイドが様々な作品の世界を訪れる話を考えました。

その中で一番書けそうだな、と感じたのが、エヴァンゲリオンとのクロスだったのです。

もともと変えられる余地がある作品で、少し環境の変化があれば大きく変わることは新劇場版で証明されたと思います。

というわけでこの作品の執筆を思い至ったのですが、正直このペー  
スだと次の使徒がくるまで何話かわかるかわかったもんじゃありません。  
ん。

でもできるだけ早めに両作品のメンバーがある程度親しくなっていないと駄目だし……

まあ、とりあえず決まっていることは、ハッピーエンドにするという事です。

特にチルドレン三人についてはそれなりに丁寧に書いていきたいと思っています。

全体の流れとしては、大きな変化はありません。普通に使徒は順番通りに来ます。

だけど、所々の小さな変化が、最終的に結末を変える、という風にしたいです。

ここから話は変わります。今、「とある魔術の禁書目録」という作品の二次創作を連載していて、そろそろ終わるんですが、そうしたらその禁書目録がデイケイドか、どちらかを書こうと思っています。で、デイケイドを書く場合、何かとクロスさせようと思っているんですが、ここで問題が生じています。

今、クロスさせたいと思っている作品は、「舞－乙HIME」というものなんですが、皆さんこの作品ご存知ですか？

正直、あまりに知名度が低いと、書いてもわかってもらえない予感



……

なので、少し皆さんの意見をお聞きしたいです。よろしければ、感想の方へ意見を述べてくださればこれ幸い。

他の作品とのクロスがいい！という方もご意見ください。考えるかもしれません。

………そもそも、こんな作者に意見くれる人いるかどうかかわからない状態ですが。

まあとにかく、ディケイド×エヴァンゲリオンはがんばって書こう  
と  
思  
っ  
て  
い  
る  
の  
で  
、  
よ  
ろ  
し  
く  
お  
願  
い  
し  
ま  
す  
!!

## 第参話 其の貳 Decade

「デイケイドオオオオ!!!」

目の前に標的が現れたことにより、象のオルフェノクはさらに荒々しく叫ぶ。

「やれやれ、それしか言うことがないのか？よっぽど熱心な俺のフアンなんだな」

対する士　デイケイドは、リラックスした構えでそんなことをうそぶく。

「グワアアア！」

そう叫びながら、オルフェノクが突っ込んでくる。

まるで理性を失っているように、ただ真っ直ぐに。

「っと！悪いが、こっちも正面からぶつかるとはしらないぜ」

その突進をかわし、その瞬間に横から蹴りを叩き込む。

ほとんど何でもできる士だが、こと戦闘におけるセンスは抜きん出ているのだ。

ただの直進攻撃なら、たやすく対応できる。

「ほらほらどうした！隙だらけだぞ」

突進の後にできる大きな隙を見逃さず、ディケイドはカードをベルトに差し込む。

『ATTACKRIDE BLAST』

そして、ライドブッカーをガンモードに切り替え、強化されたエネルギーの弾丸を連射する。

「ガ、ガ、グワアアア！！」

それをもろに食らい、オルフェノクは後ろに倒れる。

「じゃあ、そろそろ決めるか」

そう言ってディケイドはさらにもう一枚カードを取り出す。

が。

「ディケイドオ……ディケイドオオオオ！！！」

今までよりさらに大きな叫びをあげながら、オルフェノクは立ち上がり、その肉体を変えていく。

体は一回り大きくなり、筋肉も隆起していく。

そして、ディケイドに向かって突っ込んできた。

「！ちっ、速い！」

なんとか紙一重でかわすディケイドだが、先程と違い、オルフェノクはすぐに止まり、再び方向を変えて走り出してくる。

「があっ……」

二撃目を避けることができなかったディケイドは、踏ん張れずに吹き飛ばされてしまった。

「ディケイドオオオ！」

「く……激情態ってやつか」

しかし、吹き飛ばされたことで距離が開いた。

カードを使う間を取るには十分。

「馬鹿力め。ならこいつだ」

『FORMRIDE KIVA DOGGA』

カードを差し込むと、今度はディケイドの姿が変わる。

こうもりを模した姿に、瞳と胸は紫色、手にはハンマー。

仮面ライダーキバ・ドッグフォームだ。

「さあ、来い」

右手を前に出し、指をこちら側に曲げる、挑発のポーズ。

「グオオオオオー!!」

オルフェノクはそれに呼応するように、再び真っ直ぐ突っ込んでくる。

(そう、それでいい。ここまで来て、余計な動きをされちゃ困る)

今度の狙いは、正面からのぶつかり合い。

必要なのは、力のみ。

「ふんっ!!」

オルフェノクの突進と、ディケイドキバのハンマーがぶつかる。

先程までなら、これでこちらは吹っ飛んでいただろう。

だがしかし、このドッグフォームは他を切り捨て、パワーだけに特化した姿。

故に、力の衝突では負けはしない。

「ガアアアッ!？」

吹き飛ばされたのは、オルフェノクのほうだ。

強烈な数メートルも飛び、地面に叩きつけられる。

まさかパワー勝負で負けるとは思っていなかったのだろう。

受身も取れず、信じられないといった様子だ。

「今度こそ終わりだ」

『FINAL ATTACK RIDE KI、KI、KI、KIV  
A』

ドッガハンマーから魔皇力が噴き出し、オルフェノクの動きを止める。

そのまま走って、

「らあっ!!--」

必殺技、ドッガ・サンダースラップが炸裂する。

「ガ、ガアアアア……」

直後、オルフェノクから青白い炎が燃え上がり、灰となって崩れ落ちた。

葛城ミサトは、自分の目にしたものが、にわかには信じられなかった。

突如灰色の怪物が現れ、その後登場したシンジ達の担任教師が謎の機械で姿を変えた。

壮絶な戦いの最中、門矢士はさらに姿を変え、結局怪人を倒してしまった。

その門矢士が、こちらを振り向く。

意図せず、思ったことがそのまま口を突いて出た。

「あ、あなた一体……………」

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「それで、トウジは見事返り討ちにされちゃったってわけなんですよ」

士がオルフェノクと戦っていたとき。

お互いのことをそこそこ話し合ったシンジ達の話のネタは、ここにいない人間、門矢士のことに移っていった。

そして今、今朝の士対トウジというイベントについてケンスケが話し終えたところである。

「ははは、やっぱり何をやっても士は士か」

「……まったく土君は。いつもやりすぎなんです」

「まあまあ。若いうちはやりすぎるくらいがちょうどいいんだよ」

上から、ユウスケ、夏海、栄次郎と、三者三様の反応。



全員、もう慣れてしまっているのには変わりないが。

「あいつ…あ、いや、門矢先生は、普段もそんな感じなんですか？」  
思わずいつものように呼んでしまいそうだったが、何とか修正してトウジが訊ねる。

「ああ、そうだよ。いつつも上から目線で、けどなんでもちゃんとなしちゃうんだよな。そのくせ、一番熱心な写真を撮ることはなかなかどうして、あんな感じなんだよね」

ユウスケの答えはそんな感じだった。

「……でも、どうしてあんなにぶれちゃうんですか？普通に撮ってるように見えたんですけど」

写真を見たときから感じていた疑問を、シンジが口にする。

小野寺ユウスケという人間は、今まで出会ってきた中でもかなり話しやすい分類に入ると、シンジは感じていた。

だから、初対面ではあるが、思ったことはちゃんと言うことができた。

「うーん、まあ、それにはちょっと理由があるみたいんだけどね」  
対するユウスケの返答は、少しぼやかした言い方だった。

なんだろう、とシンジが考えていると、栄次郎がユウスケの代わり

に言葉を発する。

「でも、土君もなかなかいい写真を撮るんだよ」

「ええ？あれでいい写真が撮れるんですか？」

思わずケンスケが聞き返す。

無理もない、さっき見せてもらった土が撮った写真は、本当にぶれがひどく、何を写したのかわかりにくいような代物だったからだ。

当然の反応に、栄次郎は笑いながら答える。

「いくらぶれていない写真が撮れても、結局、『真実』を表すことはできないんだ。だから本当に素晴らしい写真というのは、どれだけその『真実』に近づいているかどうかなんだ。……土君は、それができる人間なんだよ」

「……よつわからんけど、そんな写真なら、いつか見てみたいもんやなあ」

話を聞いたトウジは、そんなことをつぶやいた。

「仮面……ライダー………?」

「そう、どうだ、これでわかったか」

士という言葉を繰り返すミサトに、面倒くさそうに返しながら、士は変身を解除する。

「そんな説明で理解できるわけないじゃない！真面目に答えなさい」  
そんな士の態度に、ミサトはいらだつ。

「……随分偉そうな物言いだな。ま、でかい組織に所属しているんだから、そのくらい言えないと駄目なのかもな」

そう言うのと、士も真剣な表情になり、少し間をおいて、こんなことを言った。

「なら、交換でどうだ」

「交換？」

「そうだ。お前の持っているネルフという組織の情報と、俺が持っている情報。こいつを交換だ」

「！それは……………」

自らの所属するネルフは、その情報のほとんどを秘匿している特務機関だ。

それに関する情報を話すのは、ためらわれる。

その様子を見て、土はさらに言葉を続ける。

「心配しなくても、おおつぴらに言いふらしたりはしない。たった数人の『仲間』に伝えるだけだ。そいつらも、他の奴に話したりはしない。……………それに、人類を守る組織が、今の化物や俺みたいな奴のことを、何も知らずに放っておいていいのか？」

その言葉に、ミサトの心は揺れ……………

「……………わかったわ。私の家に来て頂戴」

次回、仮面ライダーディケイド

エヴァンゲリオンの世界

「俺はこの世界の人間じゃない」

「使徒は、他の兵器では突破できない壁を持っているの」

「……それで？なんだってアンタは、教師なんてやってるわけ？」

「この情報は、大切に扱ったほうがいいものだ」

全てを破壊し、全てを繋げ！

## 第参話 其の貳 Decade (後書き)

どうも、ごぶさたしております。ようやく期末試験が終わって、春休み突入です。

戦闘シーンに関しては……ひどいですね、これは。本当にひどい。精進はしようと思いますが、どうなることやら……

相変わらず物語がほとんど進んでいませんが、今回はここまでというところまで。

感想・評価は作者の血と肉になりますので、気が向いた方はどしどし書いてください。

第参話 其の参 ライダーとチルドレン／Secret

時刻は午後五時半。

「邪魔するぞ」

そう言っつて士は葛城家に上がり込む。

ここに来るのは二回目。

一度目は昨夜、中学校の教師として。

そして今日は、仮面ライダーとして。

「碇と惣流は今いるのか？」

「アスカはいるけど、シンジ君はまだ帰ってないみたいね」

士の質問に、玄関の靴のほうを見やりつつ、ミサトは廊下を歩きながら答える。

「……そうか」

「何か問題があるの？」

「あの二人…特に碇には、同席してもらおうと思っっている」

「どっして」

ミサトがリビングのドアを開ける。

「お前が本当のことを言うかどうか分からないからな。惣流はともかく、碇のやつは嘘言ってるのを聞いたらすぐに顔に出そつだ」

「……………」

ミサトの表情がひきつる。口の悪い男だ、などどと思っているのだろつが。

「…お茶を出すから、少しそこにでも座ってて」

そう言ってミサトはソファを指さす。

と、その時。

「ただいま」

玄関から、声が聞こえてきた。

「ちょうどいいところで帰ってきたな」

士は不敵に笑う。

何しろ、偶然つかんだ千載一遇のチャンスだ、偽の情報をつかまされるのは避けたい。



リビングのドアが開く。

「あれ？門矢先生……………」

「よお」

「俺はこの世界の人間じゃない」

「……………はあ!？」

シンジとアスカ、そしてミサトが注目する中、土が放った第一声はそれだった。

今の反応はアスカのものだ。

「なに言ってるのよアンタ、頭おかしいんじゃない？そんな見え透いた嘘で騙されるわけ……………」

「そう言つと思つた」

アスカの言葉を、士は途中で遮る。

「論より証拠。これが一番手つとり早い」

『KAMENRIDE DECADE』

「え……………」

「……………」

上からシンジ、アスカ。

一瞬で姿が変わるといふ、摩訶不思議な現象を突然見せられ、二人は啞然とする。

「……………」  
「やっぱりわからない」

一度これを見ているミサトは何とかその仕組みを見抜こうとしたが、無理だったようだ。

ディケイドは台所をちらりと見るとそちらに向かい、冷蔵庫を軽く片手で少しだけ持ちあげる。

「どつだ？信用できるか？」

「は……………」  
「はい」

「……………ふん」

士の問いかけに、シンジは驚きながらも肯定の返事をする。

アスカはそっぽを向いたが、おそらく士がただのほら吹きだとはもう思っていないだろう。

「それじゃあ、話を続けるぞ」

その様子を見て満足したように、士は口を開いた。

世界は一つだけではなく、おそらく何百何千もの異世界があるということ。

自分がさまざまな世界を仲間とめぐる、『仮面ライダーディケイド』なるものであること。

多くの場合、自分達が訪れた世界には何らかの脅威があること。

そして二日前に到着したこの世界もそうであったということ。

「だいたいこんなところだ」

話すことは話した、といった風に、士がお茶をすすする。

「……………にわかには信じられない話ね」

ミサトが率直な感想を告げる。

異世界があるなんてことはもちろん知らないし、それを前提に話を  
されては当然だろう。

「だが、事実だ」

それに対する士の言葉は、これだけだった。

「……それで？」

突然アスカが士に向かって言う。

「なんだってアンタは、教師なんかやってるわけ？」

「……確かに。というより、そもそも二日で教師になれるわけがな  
いような」

アスカの当然の疑問に、シンジも同調する。

「それが俺の役割だからだ」

「はあ？」

「ある世界を訪れると、俺はある役割を与えられる。それが今回、  
お前らのクラスの担任代理だったようだな」

「……じゃあ、最初から、私たちと出会ったように仕組まれてたってこ  
と？」

士の答えに、ミサトが真剣な表情で問う。

「……多分、な」

「……」

「さて、俺の話はここまでだ。今度は、そっちの番だ」

「……ええ」

「！ミサト、あんた、まさか話すつもり!?!」

士の言葉にうなづくミサトを、アスカが睨みつける。

「仕方ないわ。そういう取引だから」

「……いいんですが、ミサトさん」

「……大丈夫よ」

シンジの問いかけに、ミサトは含みを持たせた言い方で答えた。

「私たちネルフが戦う相手……使徒は、他の兵器では突破できない壁を持っているの」

使徒とはどのようなものなのか。

それに対抗する、エヴァンゲリオンとは何か。

そのエヴァンゲリオンのパイロット『チルドレン』、およびネルフとはなんなのか。

ミサトは、大体このようなことを説明した。

もちろん、細部まで話したわけではない。

教えれば本当にまずいような情報や、最近加持リョウジがつかみかけている何かについても伏せておいた。

士は黙ってそれを聞いていたが、やがて口を開く。

「一つ聞くぞ」

「何かしら」

「ATフィールド、だったな。使徒というやつが持っている壁は。それは常に出ているものなのか？」

「常に、ではないわね。でも、向こうが危険を感じれば、いつでも出せると考えられるわ」

「……そして、同じくそのATフィールドを出すことができる唯一の兵器がエヴァンゲリオン。そのパイロットがチルドレン……なるほどな。だいたいわかった」

ミサトの答えを聞くと、士は『だいたいわかった』といういつもの

セリフを口にした。

時計を見ると、すでに六時半を回っていた。

「さて、じゃあ俺はこの辺でおいとまするぞ」

その言葉とともに、真剣な表情になっていた三人ははっとなり、続いて現在の時刻を確認する。

「…うわあ、夕ご飯おそくなっちゃうなあ」

気づけば一時間以上経っていたことに驚き、シンジは思わずため息をもらす。

「…碇。お前が飯を作ってるのか」

それに士が反応し、そんなことを聞いた。

「ええ、まあ。料理ができるの、僕しかいませんし」

そう言いながらシンジは、ミサトとアスカ、特にミサトのほうに視線を向ける。

「……お前、いい年して料理もできないのか」

士があきれ顔でミサトに言う。

「…！だ、誰がいい年よ！それに、料理なんてできなくても生きていけるわ！」

どじやら』いい年』というのは若干NGワードらしい。

「碇、惣流、二人とも宿題忘れるなよ」

そう言っつて土は立ち上がり、玄関までいくと、

「邪魔したな」

そのままドアを開けて出て行った。

「……………というわけなんだけど」

あれから四時間ほど。

ミサトは自分の部屋で、ある人物に今日の出来事を話していた。

「銃がきかない人間サイズの怪物が突然現れ、中学校の教師が姿を変えてそれを倒し、しかも自分は異世界の者だと言った……………こんな



ところか」

加持リョウジ。

ミサトとは深い関係にあり、一度は別れたが、最近になってよりを戻した。

そんな彼は、常に危ない橋を渡り続ける人間でもある。

「にわかには信じられないな。くだらない作り話だと思ってしまっ

「……やっぱり」

「だけど俺は、俺自身と君の言うことは信じている。だから今回の話も事実だと考えている」

「！……ありがとう」

加持の言葉に、ミサトは頬を少し赤らめる。

「それで、門矢土の話、本当だと思うっ？」

「今すぐには結論を出せないが、君の話を聞けば、彼は明らかにこの世界の技術では不可能なことをやっている。質量保存の法則なども破っているように思える」

「……」

ミサトは静かに加持の言葉に耳を傾ける。

「それを考えれば、確かに異世界から来たとしてしまえばそこらの辻褄は合う。少し安易な考え方にも思えるが、それが一番正しい可能性が高いと俺は感じる」

加持の答えはイエス。

ミサトもどちらかと言えば信じる方に立っていたので、これで結論は大体決まった。

「……そっか。ありがとう、こんな時間に話聞いてくれて」

「なに、俺は君に頼られたことが素直に嬉しいんだ。気にしなくていい。それより」

「？」

さっきの言葉、前半と後半で、加持の声のトーンが変わった。

「この情報は、大切に扱ったほうがいいものだ。他の人には黙っておくように、シンジ君とアスカにも伝えてくれないか」

「…ぶっいいいこと？」

加持の言葉は、理解しがたいものだった。

『仮面ライダー』や怪人などという得体のしれないもののおかげで、なぜ黙っておく必要があるのか？

「怪人のほうは、こちらでは対処がしがたいし、おそらく仮面ライダーのほうがなんとかしてくれるだろう。そして彼はもしかすると、

使徒とも戦い、上層部の計画を狂わせることができるかもしれない」

加持の言う、上層部。

ネルフは、使徒殲滅が第一の目的ではないのかもしれない。

だから、異世界のものを混入させることによって、それを崩す。

それが加持の考えだ。

「……………」

「どうだ？ やってくれるか」

「……………わかったわ」

しばしの沈黙の後、ミサトはそう答えた。

第参話 其の参 ライダーとチルドレン/Secret (後書き)

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

春休みになったことでのいろいろなことに手を出したのが原因です、すみません…

今回でようやく導入部が終わりました。土はシンジ達に正体をカミングアウト。

正体を隠す、という選択肢もありましたが、今回はこちらを選びました。

いつも読んでくださっている方、お気に入り登録してくださった方、評価をしてくださった方、感想を書いてくださった方。

みなさん、本当にありがとうございます。これからもがんばっていくので、よろしく願います。

#### 第四話 其の壱 踏み込む教師

次の日。

「よし、じゃあ連絡事項だ」

教壇のところでホームルームの連絡をしている土をポーッと見つめながら、シンジは彼のもう一つの姿について考える。

(違う世界から来た、か……………)

正直、興味が湧いていないと言えばうそになる。

こことは違う、別の世界。

どんなものなのだろうと思う。

……………しかしその一方で、どうでもいいような気がした。

(違う世界に行ったとして、そこで生きていけるわけないしなあ……………)

自分は人とのコミュニケーションが苦手だ。

だから今ここに居る世界ですら、「なんとか」その場所に留まっているようなものなのだ。

自分には関係ない。

それが、シンジの異世界に対する感情だった。

…トウジやケンスケに土の話をすれば、きっととても喜ぶだろう。

しかし、事を荒立てないためにと、ミサトから口止めを食らっているのに、彼らには話していなかった。

「最後に。すでに連絡があっただろうが、明日の家庭科は調理実習だから、ちゃんとエプロンを持ってくるように。暇なら俺も見に行く」

気がつくくと、土の話はもう終わってしまっていた。

「侵入者ですって!?!」

朝、出勤したミサトに入ってきた情報は、彼女を驚かせるのに十分なものだった。

「ええ。一昨日の深夜、何者かがネルフ本部に居たのを、綾波レイが目撃したらしいんです」

ミサトにこのことを話したのは、オペレーターの一人、日向マコトだった。

昨日の時点でネルフに出勤していた者は皆知っていたのだが、ミサトは休みだったため、聞いていなかったのだ。

「それで？そいつは捕まったの？」

「いえ、すぐに警備員が調べたのですが、結局見つからなくて」

「そう……」

このネルフ本部には、厳重な警備が敷かれているはずだ。

それを突破したとなると、相当な手慣れだということになる。

「侵入者の特徴は？」

ミサトが日向に尋ねる。

「黒髪の背の高い男で……あと、よくわからないことを言っていたみたいです」

「よくわからないこと？っていうか、レイはその男と会話したの？」

「特に何もされなかったようですけどね。…その男は自分のことを、『通りすがりの仮面ライダー』だと言ったようです」

「!?!」

いきなり出てきた単語に、ミサトは息を呑む。

『通りすがりの仮面ライダーだ』

門矢士の言葉が頭の中に浮かぶ。

(まさか……でも、彼は茶髪……)

「あの、どうかしましたか?」

「……何でもないわ」

もし今会話しているのが赤木リツコだったなら、今の微妙な間で何か感づかれてしまったかもしれませんが、今回は多分大丈夫だろう。

「ま、とりあえず今日も頑張りましょう」

本当にとりあえずだが、てきとうな言葉を取り繕っておいた。



一時間目授業、二時間目はフリーで三時間目、再び授業を終え、士は職員室に戻る。

次は自分の受け持つクラスの授業だ。

「……ちよつと時間を食ったな。少し急ぐか」

トイレに行きたい上に、教室を出るまで生徒の質問に答えていたので、少し時間が押している。

しかし、それは決して悪いことではない。

質問の内容も実のあるものであり、きちんと授業ができているという証拠だ。

(とりあえず、教師の役目は大丈夫そうだな)

そんなことを考えながら士は職員室に入って自分の席に向かい、次の授業の支度をして、再び職員室を出る。

そしてトイレに入ると、

「碇か」

碇シンジがトイレにいた。

「…………門矢先生」

こちらを見たシンジはそう言つと、再び視線を正面の壁に戻す。

士は隣の便器の前に立ち、用を足し始める。

少しの間、お互いに無言。

「そう言えば」

それを破ったのは士だった。

「お前の父親が、確かネルフのトップだったよな」

「…………はい」

心なしか、シンジの雰囲気先ほどより暗くなった気がする。

だが、とりあえず気にしない方針で士は話を続ける。

「小さな時から訓練とか受けてたのか？」

少し探りを入れる。

たった二日間しか見ていないが、それでも少し引つかかるものがある。

った。

「……いえ。訓練より先に、いきなりエヴァに乗せられましたから」

「……やはりな」

自分の勘が当たったと士は感じた。

碇シンジという人間から感じられる雰囲気というものは、幼いころから戦闘訓練を受けていたとは到底考えられないものだ。

「惣流や綾波は？」

「あの二人は、昔からちゃんと訓練を受けてたみたいです」

そう、普通ならそれが当たり前。

何年も前から使徒が襲ってくるのがわかっていたというのはミサトから聞いた。

なら、当然それに備えてパイロット候補を鍛えるはずだ。

それが自分の息子ともなれば、なおさら。

「なぜいきなり乗せられたお前がエヴァを動かすことができたんだ？」

「……わかりません」

「そうか、ま、それはさておき」

正直、今の質問にまともな答えは期待していなかった。

多分、シンジもそれについては詳しくはわかっていないだろうと感じていたからだ。

聞いておきたかったのは次のこと。

ここまでわかったことを統合すると。

「お前、父親とうまくいっていないのか」

このようなことが推測される。

「……………どうして、そんなこと聞くんですか」

「お前は俺の職業を知らないのか。教師だぞ」

どうやら当たりらしい。

シンジが便器の前を離れたので、土もそれに従う。

「…喧嘩してるのか」

そして、もう一歩だけ踏みこんでみる。

ちなみに、この質問はあえてポイントをずらしている。

うまくかかってくれればいいが。

「……そういうのじゃなくて、単に歩み寄ろうとしていないだけなんです」

すると狙い通り、シンジがぼつりぼつりと話し始める。

あえて見当違いの発言をすることで、相手の訂正を誘ったというわけだ。

トイレを出て、教室へ向かいながら、土はシンジの話聞く。

「昔からずっと……でもこの前、使徒を倒した時、父さんがほめてくれたんです。だから……」

キーンコーンカーンコーン。

「もうそんな時間か」

シンジの話の途中で、空気を読まずに授業開始を告げるチャイムが鳴る。

さすがに担当の教師が遅れるわけにもいかない。

「走るぞ、碇」

「あ、はい」

そうして、二人は教室へ駆け込んだのだった。

「つまり、ここに補助線を引けば……あとはわかるな？各自、ノートに解いてみる」

今日扱う問題は難しめだったので、ある程度ヒントを与えてから生徒に考えさせている。

その間に、先ほどのシンジの言葉を思い出す。

(……ま、だいたいわかってきたかもな)

引っ込み思案の少年が、なぜ兵器のパイロットなどやっているのか。その理由を、今掴みかけている。

そんな気がした。

(それにしても、妙に気になるな……)

自分にしては、一人の人間に深入りしすぎている。

一体、なぜなのだろう。

#### 第四話 其の巻 踏み込む教師（後書き）

はあ、やっと書けた……

そんなわけで第四話スタートです。ここからいよいよ土とシンジの会話が増える予定です。主役同士ですからね。

次回では、また違うキャラの組み合わせを出そうと思っています。というわけで、今日はこの辺で。

感想・評価の方も、気が向いたらよろしく願います。

## 第四話 其の貳

L o s i n g   p e r s o n

時刻は二時を少し回ったくらい。

小野寺ユウスケは、特にどこに行くということもなく街中をぶらぶら歩いていた。

まだこの世界に来てから日が浅いというのもあって、そうしているだけでもいろいろ発見があつてなかなかおもしろい。

「ここは……おっ！でかいゲームセンターか」

興味を抱いたので入ってみる。

「へえ〜。結構知ってるのがあるんだな」

この世界は、自分が元いた世界と似ているところもあるようだ。

「…よし、いっちょやってみるか！」

そう言つてユウスケはレースゲームの座席につく。

彼も若い青年なので、当然こういうことには関心があるのだ。



「…うん、なかなかよかったな。おみやげも手に入っだし、夏海ちゃんにあげよう」

とりあえず三十分ほど遊んで、楽しむことができた。

その中で行ったUFOキャッチャーで、かわいらしいクマのぬいぐるみを取ることもできた。

写真館とともに住んでいる光夏海は、こういうものは大好きだったはずだ。

そうしてゲームセンターを出て、帰ろうと思ったその時。

「ぐっ！」

十メートルほど先で、白昼堂々、老人がひったくりに遭っていた。

「どけどけどけ!!」

老人のバッグを奪ったそのひったくりのサングラスとマスクをつけた男が、そう叫びながら逃走する。

周りの人も突然の出来事に反応できない。

その光景を見た瞬間、ユウスケの体は無意識に動いていた。

「おい待て!!」

ぬいぐるみの入った袋を地面に落とし、全速力で男を追いかける。

男も焦った様子で逃げるが、二人の距離はどんどん縮まっていく。

それもそのはずだ。

変身しなくても、ユウスケの身体能力はかなりのものなのだ。

目標まで、あと二メートル。

「く、来るなあっ!!」

もうすこし、と思った瞬間、立ち止まりこちらを振り返った男がナイフを振り回してきた。

「っ、しまっ……!!」

男の行動に面喰ったユウスケは、なんとかナイフを避けようとする。  
しかし。

ビッ

「っ!!」

刃が頬を掠め、同時に痛みが襲ってくる。

だが、そんなことではユウスケは立ち止まらない。

一瞬のすきをついて男のナイフを持つ右手首を左手でつかみ、残った右手で顔面を殴りつける。

「があっ……………」

その一撃はクリーンヒットしたようで、男はそのまま伸びてしまった。

「ふっ」

ほっと一息をつき、後ろを向くと、バッグを盗られた老人がこちらに向かって来ていた。

「はい、どうぞ」

老人が目の前まで来ると、ユウスケは彼のバッグを差し出す。

「ありがとう。感謝してもしきれないな」

それを受け取ると、老人はそうお礼を言った。

(…なんだか、教養のありそうな人だな)

大学で教師でもしていそうな、そんなイメージをユウスケは抱いた。

「これは、ほんの礼だが……」

そう言つて老人が財布から金を取り出そうとするのを見て、ユウスケはあわてて止める。

「い、いえいえいりませんよ！当然のことはただけです。それに俺、誰かの笑顔を見るのが好きだから！」

「…そうか。立派な人だな、君は」

「ただいま〜」

午後三時ごろ、ユウスケが写真館の扉を開ける。

「あ、ユウスケ。おかえりなさい」

それを夏海が出迎える。

「……………あ」

「?どうしたんですか」

「…いや、まあいつか。…ううん、なんでもないよ」

夏海の顔を見て、ぬいぐるみを置きっぱなしにしていることを思い出した。

「そうですか。ところで、なにかいいことでもありましたか?」

「へ?」

「だって、嬉しそうな顔してますから」

「…ま、良いことした後は気持ちがいいってことだよ」

「…冬月」

碇ゲンドウが口を開く。

「何だ」

答えるのはネルフのNO.2、冬月コウゾウだ。

「……なにかいいことでもあったのか」

「……まあ、良いことをされた後は気持ちがいいところだ」

#### 第四話 其の貳

L o s i n g   p e r s o n

(後書き)

どうもお久しぶりです。新学期始まって宿題の量が激増………参った。

本編の方は相変わらずのグダグダ。しかし、後の展開に必要なんです、多分。

冬月とユウスケ。この二人にも共通点がありますよね。

以前、ディケイドのクロス物をやるかと言っていましたが、今回はほかの作品を執筆することにしたしました。期待してくださいました方、すみません。このディケ×エヴァを書いていて、クロスオーバーがどれだけ難しいかわかったので。

そんなわけで、今回はこの辺で。

感想・評価の方も、お暇があればよろしく願います。

#### 第四話 其の参 泥棒の帰還 / deep riddle

終礼のあいさつが終わった教室は、がやがやとにぎやかだ。

「土先生、これ見……」

「ちょっと待ってろ」

その中で数人の女生徒が土と話そうとしたが、それを遮り、土はあ  
る生徒のところに向かう。

「綾波、少しいいか」

「……何ですか」

土が声をかけたのは、美少女なのは間違いないが、その独特の雰囲気  
が邪魔して周りになかなか人がいることがない女子、綾波レイ。

「お前も、エヴァンゲリオンのパイロットらしいな」

そして同時に、ファーストチルドレンでもある。

アプローチを試みているのはそれが理由だ。

「……やっぱり大変なのか」

とりあえず会話のペースをつかむために、当たり障りのない言葉を  
選ぶ。



「…いえ、別に」

返ってきたのはそっけない返事。

「でも、いろいろ不自由もあるだろう」

「特にありません」

予想に反する答えに、士は少し戸惑う。

この年齢で巨大生物と戦うなんて、普通は負担にならないはずがない。

だが、綾波は強がっているようでもなく、ただ思っていることを言っているだけに見える。

( ……何かでかい目的でもあるのか )

「お前は、どうしてエヴァに乗るんだ？」

思いついたままに、綾波に問いかける。

しかし。

「仕事ですから」

返答は、変わらずシンプルなものだった。

「 ……それだけなのか 」

「はい」

綾波の言葉は、士を驚かせるのに十分なものだった。

「親がネルフに所属してるのか」

もう少し深いところまで聞こうと、士はさらに質問を続ける。

「親はいません」

「あ……………」

しまった、という声が口から洩れそうになる。

さすがの士も、これは自分が悪いと感じた。

「…………悪かった、余計な事を聞いて」

「いえ」

「時間取らせちまったな。もう帰っていいぞ」

士の言葉を聞くと、綾波はすたすたと教室を出て行った。

「変わったやつだな」

その後ろ姿を見ながら、士はそんなことを思っていた。

なんというか、無機質なものを感じる。

しかし、『感情がない』というわけではないと、そうも感じた。

「先生、土先生ってば！」

「ん？」

声のした方を振り向くと、女生徒のかたまりが土を見ている。

「もう、さつきから呼んでたのに。…それで土先生、綾波さんと何を話してたんですか？」

そのうちの一人が土に尋ねる。

「…土はまだ気づいていないが、昨日と今日で呼び方が変わっている。」

彼の人気が高い証拠である。

「…大したことじゃない」

「やあ士」

写真館に戻ってきた士の目に入ったのは、昨日までここにいなかった男の姿だった。

「…海東。帰ってきてたのか」

「ついさっきね。大体の話は聞かせてもらったよ。教師なんて、ずいぶん似合わない役割を与えられたもんだね？」

「ふん、何を。俺はどんな役割でも完璧にこなす人間だ」

「…あの、俺たちの存在に気づいてる？士」

いきなり始まった口喧嘩のような言葉の応酬に、ユウスケが割って入る。

「そうですねよ士君。さっきからおかえりなさいって言ってるのに部屋にいたもう一人である夏海も同調する。

それを聞いて、士は少し落ち着くと、

「……ただいま」

と小声で言いながらソファーに腰掛けた。

「そういえば士。さっきまでミサトさんがここに来てたんだぜ」

「前から知っている人間のようには話すな」

どう考えてもユウスケとミサトはさっき初対面を済ませたところだろう。

「まあまあ、いいじゃないか」

「…それで、色々私たちのことについて聞かれたので、おじいちゃんが出してくれたお菓子を食べながら話してたんですけど」

「それで、俺も仮面ライダーだって言ったら、ミサトさんびっくりして、急に怖い顔になって責め立ててきたんだよなあ」

「黒髪…仮面ライダー……あなたがネルフに忍び込んだ犯人!？」

「うえ、えええええ！？」

士が帰る二十分ほど前に、ミサトは光写真館を訪ねていた。

「ミサトさん、ユウスケはそんなことするような人じゃありません」

「じゃあ一体誰が『通りすがりの仮面ライダー』と名乗って侵入したって……………」

「通りすがりの、仮面ライダー…………？もしかして」

ミサトが独り言のようにつぶやいた言葉に、ユウスケが反応する。

「何か知ってるの!？」

「うーん、確証はないけど、それって多分……………」

「やあ、ただいま」

その時写真館の扉が開き、ある人物が入ってきた。

「…海東さん？帰ってきたんですか？」

夏海が海東に言う。

「とりあえずね。ところで、その人は誰だい？」

「この人は……………」

「ミサトさん、多分こいつがネルフに侵入した仮面ライダーです」

夏海の言葉を遮って、ユウスケがミサトにそう告げる。

「なんですって！？その人、本当なの」

ミサトは驚きながら、海東に確認する。

「……いきなりばれちゃったな。そうだよ、僕があそこに忍び込んだ。けどまあ別に、何も盗ったりしてないから安心したま……」

「なんてことしてくれたのよ！侵入なんて……もう二度としないわね！……」

海東の言葉を最後まで聞かずに、ミサトがどんどん捲し立てる。

「それは保証できないな。なんせ僕は泥棒……」

「泥棒だろうが味噌つかすだろうがどうでもいいのよ！要はもうしないかどうかよ！……」

「いや、だから保証は……」

「し・な・い・の！？」

「……しません」

いつもの人を食ったような態度が通用せず、海東はミサトの言葉にうなずくしかなかった。

「はははは！それは傑作だな。俺もぜひ、お前がはいはいうなずく姿を見たかったな」

海東が言いくるめられるのは非常に珍しいことなのだ。

「…ふん」

その海東はそっぽを向いている。

少しすねているのだろうか。

「それでミサトさんが帰って、その後海東に俺たちが知ってることを話したんだ」

ユウスケがそう言って言葉を結んだ。



「そうか。ならば、お前が俺たちに話す番だな、海東」

「……ネルフの人間に情報をもらっていたんだろ？それなら、僕が話すことはほとんどないんだけど」

「じゃあそのほとんどじゃない部分を話せ」

士の言葉を聞くと、海東はそっぽを向いていた顔をこちらに戻すと、懐から何枚かの写真を取り出す。

「手に入れた使徒と呼ばれる生物の写真だ。さすがにこれは見てないかな」

その写真には、奇怪な巨大生物の姿が写っていた。

他の世界では見たこともないような形状をしている。

「確かに、写真を見るのは初めてだな」

そう言いながら、士は写真をじっくり見ていく。

ユウスケや夏海も同様。

「ああ、そうか。まだ知らないと思われる情報が残っていたね」

士たちが写真を見始めてから数分後、海東が思い出したように言う。

「…それは何だ」

「ネルフという組織が怪しいってことさ」

海東の口から出た言葉の意味が理解できず、士は一瞬言葉に詰まる。

「……………どういうことだ」

「つまり、使徒から人類を守るためというのが本当の目的ではないかもしれないということだね」

士の問いに、海東はもう少し詳しく説明する。

「どうしてそんなことが言えるんだ？」

ユウスケも海東の言葉に驚き、そう聞く。

「怪しいといってもそれは上の方の人間だけだね。多分さっきの葛城ミサトも真実は知らないだろう。…………ゼーレという組織があるんだけど、これとネルフの上層部がつながっている、という噂を聞いてね。なんだかきな臭いだろう？」

「……………それ、本当にただの噂ってだけなんじゃないか」

士が海東に言う。

これだけだと、完全に推測の域を出ない。

「ま、そうなんだけどね。ところが、もうひとつ不思議な話がある」

しかし海東は相変わらず人を食ったような話し方を崩さない。

「エヴァンゲリオンのパイロット、つまりチルドレンについて、どんな人間なのか調べていたんだけど」

「……海東さん。人の個人情報まで調べるのはよくないと思います」

夏海が海東に突っ込みを入れる。

「まあいいじゃないか。それで、セカンドチルドレンである惣流・アスカ・ラングレーとサードチルドレンである碓シンジについては、ある程度の情報を手に入れることができた。……ところが」

そこまで聞いて、海東の言わんとすることを土は察する。

「綾波レイに関する情報がなかったのか」

「ご名答。なぜかファーストチルドレンの情報は、名前と通っている中学くらいしか手に入らなかった」

「綾波の情報だけ嚴重なブロックが設置されている、ということか」

「そういうこと。本当に、出身地も、親についても何も分からなかった。過去の経歴が一切闇の中さ」

『親』という単語を聞いて、土は綾波との会話を思い出す。

『親はいません』

あの時は、申し訳ないことをしたという気持ちが頭の大部分を占めていて、ただ不幸なことがあったというふうにしかな受け取らなかつたが。

(何か、裏があるのか)

「そして、綾波レイに関する情報を管理しているのはネルフだと考えられる。となると……どうだい？ 一つ目の話もあながち嘘とも言い切れないと思わないかい」

二つの話のまとめを、海東が言う。

つまり、ネルフには裏がある。

「うん、確かに一理あるよな。でも、やっぱりまだ推測の範囲だし……」

「……すつきりしませんね」

ユウスケと夏海が、それぞれ感想を言う。

二人とも、まだはつきりと本当かどうかは決められないようだ。

「土はどう思う？」

ユウスケがこちらに話を振ってくる。

「…さあな。まだどうとも言えん。だが…もしかすると、かなりややこしいことになってるのかもしれないな」

『だいたいわかった』と言える時は、まだ遠いだろう。

そう、土は感じていた。

#### 第四話 其の参 泥棒の帰還 / deep riddle (後書き)

突然ですが、ここでお知らせです。

みなさん気づいているでしょうが、この作品、めっちゃぐだぐだです。作者的にはまだ「ため」の段階なので、どうしても淡々とした話になってしまつたのです。しかし、いくらなんでもその期間が長い。

…というわけで、明日明後日明々後日、三日連続投稿をすることを決意しました。

少しでも早く物語を展開させるためです。てなわけで、頑張ります。

感想・評価の方も、気が向いたらで構いませんので書いてやってください。作者の気力が何倍にも膨れ上がるので。(あと、スランプ気味なので……)

エヴァの世界に広がる、深い深い謎。それに介入しようとする者に待ちつけているのは、勝利の美酒か、敗北の苦渋か。運命の歯車は、その回転をどう変えるのか。

海東は出番こそあまり多くありませんがかなり重要な役をやってもらつつもりです。

それでは、また次回。

## 第五話 其の壱 食事は一期一会

「え、ではみなさん。今日は、前回説明したように『オムライス』を一人一人に作ってもらいます。コンロの数が少ないので時間が押すかもしれませんが、スムーズに行えばなんとかなるでしょう。できた人から食べて構いません。それでは始めてください」

家庭科の教師の話を経く聞きながら、土は調理実習室全体を見渡す。

「…ま、生徒の料理のレベルを知っておくのも悪くはないな」

今日は調理実習、それも一人一品作らなければならない。

このクラスの担任になってから日が浅い土にとっては、教え子の特徴をつかむチャンスである。

というわけで、調理室をうろつろしながら、料理が作られていく様を見ているというわけだ。

「……………」

ある者は楽しそうに。

ある者は心底嫌そうに。

さまざまな生徒が、同じことをしながら、まったく別の表情をしている。

こういう風景も、なかなかおもしろい。

「うわ、あかん、ケチャップかけすぎたあ！」

鈴原トウジがライスに混ぜ込むケチャップの量を間違えたようだ。

彼の周りに調理器具が散らばっていることから、普段料理しない人間なのだろう。

「ずいぶん辛いオムライスになりそうだな」

「う、うるさい！まだこれからや」

少し冷やかすと、トウジはすぐに反応し、こちらをにらみつける。

「ま、その通りだけどな。まだ十分フォローできる。それをそーして……………」

「お、おう……………」

少しだけアドバイスをすると、トウジは少し驚いた顔をしながらもそれに従う。

「…よし。あとはせいぜい頑張れよ」

「おう…わかった……………（教えてくれるなんて、なんか意外やな）」

「聞こえてるぞ」

「えっ！なな、何がや!？」



どうやら目の敵にしている人物がアドバイスしてくれたことが不思議だったようだ。

こちららも教師をやっている以上、これくらいは当然なのだが。

しばらくたって、三つに分かれたうちの一番手の生徒たちが続々と調理を終えていく。

「そんじゃ、一口もらいに行くとするか」

とりあえず一番近くにいた奴　惣流・アスカ・ラングレーに声をかける。

「ちょっともらうが、構わないよな」

「っ！ま、まあいいわ。食べさせてあげる」

なぜか言葉に動揺が見られた理由は、彼女のオムライスをよく見るとわかった。

「……こりゃ、失敗してそうだな」

形はそれほど崩れてはいないが、勘で土はそう感じた。

アスカも、作っている段階でわかってはいるだろう。

スプーンで一口分を切り離し、口の中へ運ぶ。

「……む」

「な、何よ」

アスカは土のリアクション待ち。

「……まだまだだな。……まあ、この年で普段やってなければこなもんだろう。……と、言いたい」

「言いたいけど？」

「……砂糖と塩を間違えるな」

「~~~~~!?!?」

あまりに初歩的なミスを指摘されたアスカは、顔を真っ赤にする。

(成績優秀、スポーツ万能な奴でも、こういうのは苦手か)

「次からは気をつけろよ」

そう言って、土は他の生徒の方へ向かった。

鈴原トウジの場合。

「……見事なケチャップライス（バラバラ卵つき）だな」

「……返す言葉があらへん」

手伝わなかった卵の方が壊滅していた。

「…うん、このケチャップライス、まあまあだな」

「そのネタ引つ張るな！」

その後も料理を終えた生徒全員のを一口づつ試食した。

しばらく後、今度は第二班が料理を仕上げていく。

相田ケンスケの場合。

「……まあまあだな」

そう言っただけで立ち去ろうとする。

「……それだけですか！なんか他の人よりコメント少なくありません！？」

「……はっきり言わせてもらおうが、平凡すぎてまったく言葉が見つからない」

「ひどっ！っーかサバイバルとかで経験値を半端にあげてきたのが裏目に！？」

綾波レイの場合。

「……まあ、少し薄味ではあるがちゃんとできてはいるし、形も崩れていないんだが………なんか足りないような」

「……………」

綾波はこちらを視界の端には留めているが、すでにぱくぱくオムライスを口に運んでいる。

「……わからん」

またしばらくして、最後の班の生徒たちがオムライスを完成させる。

洞木ヒカリの場合。

「おっ、これはなかなか……うまく作ってるな。普段から料理してるのか？」

「はい。姉と妹と私の三人分の弁当を用意してるんです」

さすがは真面目な委員長といったところか。

中学生でここまで作ることができればもう十分だろうという出来だ。

「喜ぶ。俺の料理の半分のレベルに到達してるぞ」

「………それ、まったく褒められてる気がしないんですけど」

「何を言う。料理においても天才的な才能を發揮するこの俺の半分

だぞ？光栄に思っただな」

士のあまりの言いように、ヒカリはため息をつく。

「……先生って、いつでも、何に關しても自信満々ですね。この数日で痛いほどわかるくらいに」

「あたりまえだろう。……おばあちゃんが言っていた、『世界は自分を中心に回っている。そう思った方が楽しい』ってな」

「……それは、すごいおばあちゃんですね」

「ま、俺のおばあちゃんじゃないけどな」

「って違うんかい!？」

出身地でもないのに、なぜか関西弁のイントネーションでツッコンできた。

「さて、次は……碇にするか」

次のターゲットを、視界にとらえた碇シンジに決定する。

「碓。一口もらうぞ」

「ええ、どうぞ」

土の方を見ず、片付けをしながらシンジが答える。

「…見た目は問題ないようだな。味の方は……………」

もう何回目であろうか、オムライスを一口、口に運ぶ。

シンジが普段から家で料理をしているのは知っている。

さて、一体どのくらいの……………」

「……………！これは……………！」

「せ、先生？どうかしたんですか」

土の反応に、シンジも片付けの手を止めてそちらを見る。

「……………悪くない」

この発言をそのまま受け取れば、なんだその程度かと思うかもしれない。

が、土の『悪くない』は、きちんと日本語訳すれば『かなりいい』になるのだ。

「少なくとも、このクラスじゃお前の料理が一番うまい」

「…そうですね」

そっけない返事だが、こちらを見るシンジの口もとは、少し緩んでいる。

「料理、好きなのか」

「え？ええ、まあ……嫌いじゃ、ないですけど」

「そうか。なら、もっとうまくなるように頑張れよ」

「…は、はい」

少し戸惑いながらも、シンジは少し明るくなった声でそう言った。

「碓シンジは料理が得意、か」

内気な彼らしいといえばその通りであるような、そう士は感じた。

そんな感じで、家庭科調理実習は終了した。



## 第五話 其の巻 食事は一期一会（後書き）

ふう、なんとか投稿できた〜。

今回は軽いノリで書きました。…ほんとには僕自身、こういうもののした話を書きたいんですけどね。それをするためには、まずはシンジ達が壁を越える必要があるみたいです。え？料理？できませんけどなにか？…大学に行くまでにはできるようになりたいです。それにしても、話の進行に絶対必要なはずの話しか入れてないのに、なにゆえこんなにグダグダなんだ……？

みんなー！オラに文才わけてくれー！

ってことで感想・評価のほうも気が向いたらよろしくお願いします。

さて、明日も頑張って投稿すっぞ〜

第五話 其の貳 Second children

昼休みも半ば。

「まったく、じいさんはなんで弁当に人参を入れるんだ」

調理実習でたくさん試食をしたこともあり、迷わず人参を残した士は、廊下を歩きながらそう愚痴る。

コンビニの弁当で済ませてもいいのだが、嫌いなものでなければ栄次郎の料理は非常においしいので、変える気にもならない。

「……………それに、自分のためにわざわざ弁当を作ってくれる人がいるのが正直うれしいというのもある。」

「……………決して誰かに言うつもりはないが。」

「ん、あれは……………」

そんなことを考えていた時、廊下の窓を開けてじーっと外を見ている少女の姿が士の目に留まる。

「よう、惣流。なんか考え事か」

担当するクラスの生徒であり、セカンドチルドレンである、惣流・アスカ・ラングレーだった。

「……………別に」

「砂糖と塩を間違えたのがそんなにショックだったのか？」

「違うわよ」

はっきりと否定された。

まあ、先ほどの深刻そうな表情から見て、そんなことで悩んでいるのではないことはわかっていただのだが。

「そうか。ま、別に何で悩んでもいいんだけどな」

そう言いながら、土は窓の外を見る。

高層ビルが立ち並び、まさに『都会』と言える風景が、そこには広がっている。

パシヤツ。

なかなかいい眺めだったので、首にぶらさげているカメラを手に取り、一枚写真を撮る。

「……アンタ、なんで常にカメラ携帯してんのよ」

「写真を撮るのが好きだからに決まってるだろう。世界のすべてを写すのが俺の目標だからな」

「……変わってるわね」

「その通り。俺は常人が到達できない場所にいる人間だからな」

「……アンタと話していると疲れるわ」

アスカがあきれたような顔をしてそう言った。

「まあ、それはそうと」

「嫌味言っただから平然と流すのやめてくれない？」

アスカの追撃の言葉もスルーして、士が言う。

「お前と綾波つて、仲悪いのか」

アスカの表情が、呆れから少し怒りを含んだものに変わる。

「なんでそんなこと聞くのよ」

「さっきの調理実習の時もそうだったんだが、この数日見たところ、ギスギスした空気が感じられたからな」

もつとも、そういう空気を出していたのはアスカだけで、綾波の方は無関心だったようだ。

「……あいつのことは無視してたつもりなんだけど」

「たえそうだったとしても、俺の洞察力にかかればまるわかりだ」

「……………」

「それで？チルドレン同士仲よくしても損はないのに、なんだってその逆なんだ」

「……………」

アスカは表情を変えないまま、しばし無言になる。

「……………気に入らないのよ」

「何が」

ぼつりぼつりと、アスカが語り始める。

「あいつが、人形みたいな奴だから。感情がなくて、任務のためならなんのためらいもなく死にそうな奴だから」

「…それだけか？」

「それだけで十分よ！」

士の問いかけに、語気を荒くしてアスカが答える。

(人形……どうやら、何かわけありらしいな)

アスカの言葉とその表情に深いものを感じ取った士は、そのように考えた。

「それで今まであんな感じなのか」

「そうよ。なにか問題でも？」

元から攻撃的な彼女が、さらに噛みつきそうな言い方で話す。

「いや、別に問題はないが……そうだな。お前が変えてやればいいんじゃないのか？」

いいことを思いついたというように、士がそんなことを言う。

「はあ？」

「綾波は、他人と距離を置く……というより、自分から近づこうとしないタイプだ。それに、感情がないというより、むしろ……なんていうか、それ自体を知らないと言った方が正しいのかもしれない。それを変えるためには、何かしら接点を持った人間がこっちから積極的に動く必要がある」

「……………」

アスカは、とりあえず黙って士の話の話を聞いている。

「接点がある奴と言えば、このクラスの中じゃチルドレンであるお前と碇だけだろ？ 碇はあんなだし、お前が近づいてやらなきゃ、あいつはいつまで経ってもあのままかもしれないぞ。お前も、あんな雰囲気で居続けるのは大変だろう」

「つまり、アタシにファーストと仲よくしてやれってこと？」

ファーストとは綾波のことらしい。

「まあそういうことだな」

「ふん、冗談じゃないわ！」

そう言い捨てて、アスカはすたすた歩いて行ってしまった。

「…………結構面倒なことになってんな」

第五話 其の貳 Second children (後書き)

ふう……とりあえず最低限は書けたので今回はここまでです。アスカ心に残る深い傷。土が具体的に知るのはまだまだ先ですが、なにかあるということは勘づいたようです。ていうか自分で書いてて土の勘が良すぎる気がするんですが……本編でもこんなものだった気がするのでまあいいですよ。

それにしても、こんなにぐだぐだ書いてると、なんか爽快な話を書いてみたくなりますね。流行りのオリ主転生ものとか。転生先はやっぱ流行りのなのとか。

まあそんな妄想は置いて、いつも言っているような気がしますが、感想・評価の方も、気が向いたらよろしくお願いします。メシウマなので。

では、また明日。



第五話 其の参 シンジと海東 / Strategy

「パーン」

学校からの帰り道。

もう少しで自宅のマンションに着こうというところで、シンジはその銃声を真似た声を聞いた。

声のした方を向くと、そこは光写真館。

店の前に、一人の男が立っている。

右手を銃の形にして、フツと息を吹きかけているということとは、さっきの声の主は彼なのだろう。

「やあ。君がサードチルドレン・碓シンジ君かな」

「…どうして僕の名前を」

「君が士の教え子だから、でいいかな」

男の口から出た名前を聞いて、シンジは少し驚く。

「門矢先生と知り合いなんですか？」

「そつだよ。僕も彼らと一緒に旅をしているからね。昨日まではこの家にいなかったから、君が知らないのも無理はないかな」

どうやら彼も異世界から来た人間らしい。

……土達もそうだが、本当にこの世界の住人と区別がつかない。

目の前で土が変身する光景を見なければ、到底信じられなかっただろ。

「おっと、自己紹介がまだだったな。僕の名前は海東大樹。以後よろしく」

「は、はあ、よろしくお願いします」

「まあ、僕は土みたいに、君らを手伝って使徒を倒そうとするなんてしないけど。通りすがりの仮面ライダーらしく、やりたいことをやるだけさ」

「……………え？」

今の言葉の中に、二つほど疑問が。

「あの、門矢先生は……………使徒と戦うつもりなんですか？」

いくらなんでも、人間サイズであるの巨大な化け物と戦うのには無理があると、素人考えかもしれないがそう感じる。

「そのつもりのようだよ。今までもあいつは、いろんな世界の脅威と戦ってきたからね。少しくらいの大きさの違いは気にしないだろ

「う」

「いや、全然少しじゃないんですが……」

普通に三十倍くらいはあると思う。

……もつとも、彼らにこの世界の常識が通用するかわからないので、実際はなんとも言えない。

なので、もうひとつ引っかけたことについて尋ねる。

「それと、今、仮面ライダーって……」

「ん？ああ、僕も仮面ライダーだから」

あっさり衝撃発言。

「ええっ！この世界にいる仮面ライダーって、門矢先生だけじゃないんですか！？」

ミサトから聞いた話から考えて、土の変身する『ディケイド』というものは、かなり化け物じみた力を持っているようだ。

それが複数、こんな近くにいるとは。

「なんだ、その分だとユウスケが仮面ライダーってことも知らないようだね」

「……………」

衝撃発言、パート2。

「どうした？」

「……いえ、ちょっと絶句してただけです」

「『ちょっと』と『絶句』は普通一緒に使わないような気がするけど」

あまりに驚いたので、日本語がおかしくなってしまった。

(あの結構軽そうな人まで……)

さり気にひどいことを思っているが、シンジは気づかない。

「それにしても」

そんなシンジの様子を見ながら、海東が口を開く。

「よく君みたいなお普通の中学生が、エヴァンゲリオンなんておっかないものに乗れるね」

「……それは」

シンジの表情に影が差す。

痛いところを突かれたと感じる。

この前の使徒との戦いで、飲み込まれた悪夢がよみがえる。

「あのレイって子は何か浮世離れした感じがするから、まだ理解できるんだけどね」

海東はさらに言葉を続ける。

「…綾波に会ったんですか」

「まあね。いきなり手痛い歓迎だったけど」

「……一体何があったのだろう。」

「それにしても、あの時彼女、真夜中に何やってたんだろっね。君は何か知ってる?」

「……知りませんが、父さんとなにかやってたのかもしれない」

「…君の父さん、つまりネルフの碇指令は、レイ君と仲がいいのか」

「……まあ、そうですね」

普段無表情な綾波も、シンジの父・碇ゲンドウと話している時だけは表情が少し柔らかい。

それは、ゲンドウの方も同じだ。

「ふ〜ん……レイ君がうらやましいかい?」

「な、なんで」

突然の海東の問いかけに、シンジは少し戸惑う。

「だって君、父親とうまく行ってないんだろっ」

「…それとこれとは関係ありません」

「……そうかい。ま、それは別として」

海東はそこで少し間を開けて、

「自分に正直に生きていきたまえ」

そう言っつて、写真館の中に入って行った。

「…なんだか、門矢先生と似てるなあ……」

二人とも、本当によくわからない。

使われなくなった廃ビルの中に立つ男が一人。

「デイケイド……今度こそお前の旅はここで終わる」

鳴滝はそう言って、不敵に笑う。

おそらく、彼らはしばらくはこの世界を出て行かない。

その間に、デイケイドを葬り去る準備を進めているのだ。

「大ショツカーはもういないが、デイケイドを憎む怪人は今も数多く存在している」

先日、声をかけた一体のオルフェノクが先走って暴れたことがあったが、やはり倒されてしまった。

デイケイドを倒すなら、まずは数が必要だ。

……だからこそ、今は我慢の時。

「それに、この世界には、利用できそうなものもある……ふふ、ははははっ」

狂ったように笑いながら、鳴滝は灰色のオーロラを出し、その中に消えていった。

## 第五話 其の参 シンジと海東 / Strategy (後書き)

なんとか約束は果たせました、これで第五話が終わりです。次回から少し物語が動きます。参号機戦ももうすぐです。相変わらず戦闘はありませんが。……というか、ディケイドとエヴァンゲリオンの組み合わせでここまで戦闘一回ってどういことなんでしょう。

あ、ちなみに今更ですがアスカの名字が惣流なのは意図的です。本当に今更ですが。

それと、今アクセス解析を見てみたら、なんとPV60000、ユーク13000を超えている……だと……

これもすべて皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。ポイントも128と、当初の予想以上です。終わるまでに200行つたらいいなあ……多分無理だろうけど。

それでは、また次回。



**第六話 其の巻 動き出す歯車（前書き）**

今回からようやくアニメ版十七話に入ります。

## 第六話 其の壱 動き出す歯車

週が明け、月曜日の朝のホームルーム。

「今日の欠席は……綾波と相田か。いつものことみたいだが」

士が出席状況を確認しながらそんなことを言う。

鈴原トウジはその間、ぼーっとしながら、入院中の妹のことを考えていた。

医師によれば、かなり危険な状態が続いているとのこと。

それでも、また元気になった姿を見ることができると信じて、毎日見舞いに行っている。

「ケンスケ、どうしたの？」

「…新横須賀。今日も戦艦のおっかけや」

ふとシンジが聞いてきたので、本人から聞いたことを答えておいた。

「おい、聞いているのか鈴原」

「へ？」

急に士から声がかかり、トウジは驚く。

「欠席の綾波にプリントを届けておけ。わかったか？」

「……ほーい」

気のない返事を返す。

正直、門矢土という人間は好きではない。

赴任初日からあんなことがあった上、その後の仕返しとしてのいたずらもすべて見破られて倍返しにされてしまった。

……まあ、仕掛けを考えている時間はとても楽しいし、土という人間自身も、そんなに悪い奴でもないと思われるのだが。

「よし、一時間目は数学だから、このまま授業に入るぞ。まずこの前の小テストを返すから、出席番号順に並べ」

「え〜〜〜!?!」

昼休みの教室内に、アスカの声が響き渡る。

「お弁当持ってきてないの〜〜!?!」

「き、昨日は宿題で作る暇なかったんだ」

シンジはアスカの剣幕に押されながらも理由を説明する。

「だからって、このアタシにお昼なしで過ごさせてーのアンタは!」

しかし、そんな言い訳でアスカが納得するはずもない。

「…だって、門矢先生の宿題が難しい上に多いから……………」

「おいおい、俺のせいにされちゃ困るな」

「そんなこと言われたって…………って先生!?!いつの間に……………」

いきなり会話に異物が混入したので、シンジは驚く。

「さつきからいた。それより碇、俺は普通の生徒に本当に負担をかけるような宿題の出し方はしていない。お前が馬鹿だから解くのに時間がかかるだけだ」

「そうよこのバカシンジ！ちょっとレベルが上がったくらいで何言ってるのよ！」

「今朝返した小テストもひどかったしな。鈴原と並んで学年最低だったぞ」

「そんなあ……」

馬鹿馬鹿言われてシンジの心はどんどん傷ついていく。

「だって、勉強は苦手だし、それに……」

「エヴァのパイロットとしてやることもあるから、か？」

こちらの言い訳は完全に見透かされていた。

「…まあ、確かにそれは一理あるかもな。勉強ができないのに、その勉強する時間が少ない。つまり、それを改善するためには、勉強の質を上げるしかない」

と、そこで士はいったん言葉を止める。

その顔に浮かぶ意地悪そうな笑みを見て、シンジはそこはかとなく嫌な予感がした。

「というわけで、俺がお前の家庭教師になってやる」

が、門矢士は予想のさらに斜め上に行く人間だった。

「え〜、それはちょっと」

さすがにそんな言葉は予想していなかった。

「お前に拒否権はない」

「ひどい……………」

今度は言い訳すら言わせてもらえなかった。

「別に宿題以上のことをやれと言ってるわけじゃない。要は質を上げるんだからな。心配するな、俺に任せればすべてうまくいく」

「でも……………」

「なにウジウジ言ってるのよ。教えてやるって言われてんだからそうしてもらえばいいじゃない。もう二度とお弁当作れなかったかいうことがないようにね！」

「う……………」

ガンガン押してくる士とアスカに対し、内気なシンジ一人だけ。

「……………わかりました」

勝てるわけがなかった。

「最初からそう言え。早速だが、今日は大丈夫か」

「まあ、予定はないですけど」

「じゃあ六時くらいにお前の家に行く。先に言っておくが、飯の心配はしなくていいぞ。すでに手は打ってある」

「は、はあ……………?」

どういふことだろう?と思いつつ、とりあえずうなずくだけのシンジであった。

## 第六話 其の壱 動き出す歯車（後書き）

ついに『四人目の適格者』篇に突入しました。もうすぐトウジが…

……

後、土もようやく教師らしいことを始めました。さて、どうなるでしょう。

ちなみにこの日、第二支部が消滅したり、ダミープラグがうんぬんの話があるのですが、書いてると長くなるので書きませんでした。申し訳ありませんが、本編を見て補完してください。

それでは、また次回。



第六話 其の弐 土の宿題 / Lesson his way (前書き)

思い切って原作とまったく同じ展開のシーンはほとんどカットすることになりました。そうしないとあきっぱい作者の持続力が持たないのです。申し訳ありません。

第六話 其の貳 士の宿題 / Lesson his way

トウジとともに欠席の綾波にプリントを届けたシンジは、午後六時十分前くらいにようやく自宅の前に立っていた。

「はあ、間に合った…」

あの土のことだ。

約束の時間に遅れでもしたら、何をされるかわかったもんじゃない。

「ただいま」

とりあえず、玄関のドアを開けて、靴を脱ぐ。

「ようやく帰ってきたか。後八分で始めるから、さっさと着替えて準備しろ」

先に来ていた士が、ちょうどトイレから出てきたところだった。

「は、はい」

とりあえず自分の部屋に入って、着替えを終わらせる。

「えっと…宿題だけやるって言ってたよな」

記憶を掘り返しながら、勉強道具を用意する。

「……ようし」

準備ができたので、士を呼ぼうとリビングに入る。

「先生、準備できました」

「そうか。それじゃ、早速やるとするか」

士がシンジの部屋に行こうとして座っていたソファから腰を上げる。

「頑張んなさいよ、シンちゃん」

「ちゃんと勉強して、少しはバカを直しなさいよー」

ミサトとアスカからも応援(?)をもらい、自分の部屋へ行こうとした時、シンジはあることを思い出した。

「そう言えば先生。晩御飯のことなんですけど……」

食事担当はシンジなので、彼が今から勉強を始めると、晩御飯が作れなくなってしまう。

もう手は打ってあると士は言っていたが、一体どうするつもりなのだろう。

「ああ、もう来るぞ」

「え?」

シンジが間抜けな声を出した瞬間、玄関のチャイムが鳴る。

「光写真館の者ですが」

「うわあ、おいしそう。ほんとにありがとうございます」

「長年の経験ってやつかしら」

ミサトとアスカが賞賛しているものとは。

「いやいや。そんな大したものじゃないですよ」

光写真館の主、光栄次郎が作って持ってきた料理だった。

「サンキュー、じいさん」

どうやら土が考えていた策とはこれだったようだ。

「なあに、ちょっと人数が増えただけで、ウチと同じもの作ったから手間はそんなにかかってないよ」

確かに、まとめて同じものを料理するなら、労力はさほど変わらない。

しかし、こんなにおいしそうなものを作ってもらって、申し訳ない気が……

「そう思うんなら、しっかり勉強して、俺の個人指導が必要ないくらいになれ」

「…人の心を読まないでください」

本当に油断できない人だ。

「顔に出るんだよお前は。ほら、さっさとお前の部屋に行くぞ」

「いいか。ぱつと見てわからないからといってすぐに投げ出すな。たとえば数学なら、とりあえず表なり図なり書いてみるんだ。そうして穴が開くほどそれを見る」

士の指導を受けながら、とりあえず言われたとおりに数学の問題を解いていく。

わからない問題がほとんどだが、士からちょっとしたヒントをもらうと、なんとなく答えに近付けた。

「……よし、ここまで来たらあと公式ひとつだ。教科書出せ」

「あ、はい」

そんな感じで、非常にまじめな雰囲気で、マンツーマン指導は続いた。

「……七時半。とりあえず苦手の数学だけは終わったな。今日はここまでにするか」

士の言葉で初めて今の時刻を知ったシンジは、流れた時間の長さに驚く。

……有意義な時間だった。

認めたくないが、勉強をやっていてここまで達成感を感じたことはなかった。

「あの……先生は、ここに来るまで教師をやってたわけじゃないんですよね？」

「ああ、この世界が初めてだな。ま、俺は天才だから、なんでもそつなくこなしてしまうがな」

いつもはなに言ってるだと思つようなセリフも、この時ばかりはその通りだと感じた。

間違いなく、才能がある人間だ。

「じゃあ、俺は帰るから、ちゃんと飯食えよ」

そう言つて土はシンジの部屋を出て、玄関に向かう。

「あ、先生。……その、ありがとうございました」

それについて行きながら、シンジは礼を言う。

「あら、終わったの？ありがとう、わざわざ家まで来てくれて」

その声を聞いてこちらに来たミサトも、土にそう言う。

「別に礼なんていらねーけどな。……それより碇、一つだけいいか」

そう言つと、急に土は真剣な顔になった。

「仮面ライダーとして、そしてお前の担任として聞く」

「は、はい……………」

「お前は、何のために戦っている？」

「「!!」」

シンジは思わず息をのむ。

それは隣のミサトも同じだ。

核心をついた問いだった。

「………… 人類の平和を、守るためです」

「嘘を言うな。お前みたいなただの中学生が、そんな途方もないスケールのものを抱えられるわけないだろう」

それっぽいことを言ってみたが、すぐに看破される。

「正直に言え、碇」



士の目は鋭く、どんな嘘を言っても見透かされる気がした。

……自分が戦う、本当の理由。

『よくやったな、シンジ』

「……父さんに、褒めてもらいたいから」

父に、認めてもらいたい。

こっちを見てほしい。

それが、シンジの偽らざる本心だった。

「……なるほどな」

シンジの言葉を聞いた士はしかし、まだ鋭い目つきを緩めない。

「それで？お前、うまくいくと思ってるのか？」

「え……？」

「戦い続ければ、確かに親父はお前のことを見てくれるかもしれない。だが、それはチルドレンとしてのお前だ。碇シンジとしてじゃない」

「！ちよつとあんた……！」

「本当に」

ミサトの声も遮って、士はさらに言葉を続ける。

「本当に、親子の絆ってやつを手に入れたいなら……エヴァに乗ることでは、それはかなえられない」

士の言葉が、深く胸に刺さる。

今のままじゃ、だめ………？

そんなことは。

エヴァに乗ってれば、父はこちらを見てくれる。

そうだ、そんなわけ……

言いきれない。

そんなわけないと、言いきることができない。

でも。

「だからって、僕にどつしどつって言うんですか……他に、どつしたらいんですか……！」

さっきから言いたいことを勝手に言う土に、シンジは高ぶる感情をぶつける。

すると土は、少し表情をやわらげると、

「…もつといい方法、あるだろ？」

そう言いながら、靴をはき、玄関のドアを開ける。

「それって……」

「それを考えるのが俺からの宿題だ。……あ、そうそう。じいさんの料理もつまいけどな、お前の料理も、悪くないぞ。じゃあな」

そう言い残して、土は外に出て行った。

マンションを出た土は、自分の家に向かって歩き始める。

「…ねっ」

種はまいた。あとは、ちゃんと芽が出るかどうか。

## 第六話 其の弐 士の宿題 / Lesson his way (後書き)

えーと、第六話は実はこの其の弐で終わりです。きりがいいので。さあ、士がシンジに宿題出しました。シンジはこれにどんな答えを出すのでしょうか。……ていうか微妙に士がヒント言っちゃってますけどね。彼も不器用ながら、きちんと指導しようとしているんです。

そろそろ破壊者の本領発揮といったところでしょうか。これからも原作破壊をしていくと思いますが、やっぱりそれがディケイド、とていうかクロスオーバーの醍醐味なので。

お気に入り登録や感想や評価をしてくださった方、とても感謝しています。

これからもよろしくお願いします。

では、また次回。

## 第七話 其の壱 門矢士という人間

士のシンジへの第一回特別授業が行われた次の日。

ガラソ

午前七時にも関わらず、光写真館の扉が開かれた。

「……………なんだ、こんな朝っぱらから。非常識だぞ」

士が写真館に入ってきた人間 葛城ミサトに文句を言う。

「それについては謝るわ。でも、あんたに言わなくちゃいけないことがあるのよ。今、時間ある？」

ミサトはそう言って、士の顔をにらみつける。

あからさまに怒っている様子だ。

「……………十分だけだ。とりあえず入れ」

そう答えると、士は大きな絵がかかっている部屋の方を指差した。

「どっぴうつつもり！シンジ君にあんなこと言って！彼、あの後ずっ

と落ち込んでたわよ!!」

部屋に入り、士が椅子に座るなり、ミサトは昨晚のことを怒り始めた。

「落ち込んでるならいいじゃないか。あいつが俺の言葉をきちんと受け止めている証拠だろ」

「その言葉が問題なのよ! あんたここに来て一週間でしょ。それでどうしてあんなデリケートな問題についてはっきり答えが出せるのよ? 碇指令には会ったこともないじゃない!」

正しいかどうかもわからないのに、シンジを傷つけるようなことを言ったのが、ミサトとしては非常に腹立たしかった。

「…士君。昨日一体なにが……」

「お前は黙ってる。時間がないからな」

部屋にいて話を聞いていた夏海の問いかけを流しながら、士はふつとため息をつく。

「…じゃあお前は、あのまま碇がエヴァのパイロットとしてだけ頑張っていたとして、それで子供を捨てた父親と仲直りできると思っていたのか? その理由がなんであれ、仕事の関係だけで一度壊れたものを直せるってのか?」

士はやる気のなさそうに、しかしはつきりと、言葉を紡ぐ。

「そ、それは……」

それは、ミサトとて考えたことだった。

……だが、もうじき起動実験が行われる参号機のパイロットを知れば、シンジは確実にシヨックを受けるだろう。

そんな時期に、さらに追い討ちをかけるような真似をするのは、やはり問題がある、そうミサトは感じていた。

今は、このまま。

それが逃げの一手だとわかってはいたが、ミサトはそれを選択していたのだ。

「碇だって、そのうち気付いただろう。……いや、昨日のあいつの顔から考えたら、ひよっとすればもう薄々心の中じゃわかり始めていたのかもしれないな」

ミサトは、自分とは逆の選択をした男　　門矢土の言葉を黙って聞く。

「チルドレンが戦いでどのくらい傷つくのか、くわしくは知らない。だが、戦闘のたびに入院するほど過酷ってことは、出席状況を見ればだいたいわかる。そんないつ死ぬかもわからないような戦いの中でも言うのは精神力だ。…それなのに、叶うかどうかもわからないような頼りないもののために戦って大丈夫だと思うか？」

「……………」

「俺は思わない。もしかすると、取り返しのつかないことになるか



もしれない。……なら、その前に手を打たなければならぬだろう」「  
正論だ。

士の言うことは、間違っていない。

……けれど。

「……でも、あんなにはつきり言わなくても……」

昨晚のシンジの顔を思い出すと、どうしてもそんな言葉が口をついて出てきた。

「ああいうやつには、あのくらいストレートに言わないとわからないんだよ」

そう言うと、士は椅子から立ち上がる。

「さて、俺は学校に行かなきゃならないんでな」

気がつけば、ミサトが写真館に入ってきてからもう十分以上経っていた。

「……ごめんなさい。邪魔したわ」

それだけ言葉を残して、ミサトは足早に外に出て行った。

「……………はあ、どうしよう」

朝のホームルーム前の時間。

洞木ヒカリは廊下でひとりそんなことをつぶやいていた。

本来なら、そのつぶやきは朝の喧噪のなかに消えていくはずだったが。

「なにか悩みごとか？洞木」

どうやら、たまたま近くを通りかかった担任教師にだけは、聞かれてしまっていたらしい。

「…先生。別に、大したことじゃないですよ」

「ほおー、そうかそうか。それにしちや随分深刻な表情してたように見えたんだが」

意地悪そうに土が言う。

正直、この人の洞察力はかなりのものだと思うのだが、どうだろうか？

「当ててやるのか？………ずばり、鈴原のことだろ」

訂正、この人考えるまでもなく悪魔のように勘が鋭いです。

「え、え、えええ！？な、なななんで鈴原が出てくるんですか！？」

「………お前、まさか気づかれてないとも思ってたのか？ばればれだぞ、当の本人以外にはな」

「そ、そんなあ………」

衝撃の事実だ。

「で？鈴原について何を悩んでいたんだ？弁当でも作るのかとか思ってたのか？」

「………あの、ひょっとして超能力者なんですか先生は」

「ああ、今のはあてずっぽうだ」

「…なんだ、びっくりさせないでくださいよ」

さすがにそこまで読まれると勘がいいとかそういうレベルじゃないと思う。

「で、何をためらっているんだ？作ってやればいいじゃないか。あ

いつパン食だから喜ぶだろうよ」

「……そんなこと言ったって、余計なお世話かもしれないし」

「……要は、断られるのが怖いのか」

そんなにズバツと言われると少しへこむのだが、事実だから仕方がない。

一歩踏み出すのがためられるのだ。

もし失敗したら、どうなってしまうのか。

マイナスの方にはかり考えが行ってしまうのだ。

「……そんなお前に、ひとつ言葉をやろう」

すると、土がそんなことを言ってきた。

「おばあちゃんが言っていた……男がやってはいけないことがある。女の子を泣かせることと食べ物で粗末にすることだ、ってな」

「それ、また先生のおばあちゃんじゃない人が言ったんですか」

「ああ、そうどうぞ」

「誰のおばあちゃんなんですか一体……」

本当にわけのわからない人だ。

「誰だっついていいだろ。そんなことより、言葉の内容を気にしろ」

「内容…ですか」

「そうだ。鈴原は見ての通りバカだが、俺が今言ったことくらいはわかっているやつだ。つまり、お前の弁当を断ったりはしねえよ」

「……そうですか？」

「心配するな、この俺が保証する」

なぜだろう。

別に士は、トウジのことを詳しく知っているわけではないはずだ。

なにせここに来てまだ一週間しか経っていないのだ。

……でも、彼の自信満々な表情を見ると、本当に大丈夫に思えてくるのだから不思議だ。

「……そうですね。今日、鈴原に聞いてみます」

笑顔で士にそう宣言すると、

「……そうか」

士もまた、少し微笑んでくれた。

## 第七話 其の巻 門矢士という人間（後書き）

なぜだろう、士と委員長のからみが書いてて面白いです。多分委員長がツッコミ力を持っているからでしょう。シンジにもはやく身につけてもらいたいですね。

ま、この時期に委員長をピックアップするのは何の問題もないわけですが。

それはそれとして、前回の話を上げてから今まで、ポイントの伸びがいつもより良かったのがうれしかったです。みなさんありがとうございます。

感想・評価のほうも、気が向いたらで構いませんのでよろしく願います。作者にとって食事と同義なので。三大欲求の仲間入りしそうです。

では、また次回。

第七話 其の貳 P l a c e   w h e r e   t o   r e t u r n

放課後。

鈴原トウジは他の生徒たちが次々と帰って行くなか、一人席を動か  
ずにいた。

いや、動けなかったというのが正しいのか。

それほど、彼の頭は混乱していた。

昼休みに告げられた、ある事実。

『あなたをフォー スチルドレンとして、エヴァンゲリオン 参号機  
パイロットに任命します』

驚くしかなかった。

そして、さまざまな感情がこみあげてきた。

けれど、一番大きかったのは、恐怖。

エヴァのパイロットがどれだけ危険なものかは、碇シンジを友に持

つトウジにはそれなりにわかっている。

場合によっては、命すら失いかねない。

……それでも、入院中の妹を助けるために、もっといい治療を受けさせてもらうことを条件に、それを承諾したのだった。

(……どうなるんやろう)

突然、非日常の世界に引きずり込まれたトウジは、ずっとそれを考えていた。

「……原。鈴原！」

ふとそこで、誰かが自分に声をかけていることに気づく。

「……なんや、委員長やないか。またわしがなんかやったんか？」

声の主はヒカリだった。

またいつものように何か注意されるのではないかと考える。

「……違うわよ。……ちょっと、聞きたいことがあって」

「聞きたいこと？」

ところが、ヒカリの様子はいつもと違い、心なしか顔が赤いような気がした。



「あのさ、私、姉妹が二人いて、いつも三人分のお弁当作ってるの」  
ヒカリがぼつりぼつりと話し始める。

「それでさ、あんたいつもコンビニのパンとか食べてるみたいだから……よかつたら、その……お弁当、作ってあげてもいいよ」

「……ほんまか？」

「うん……あ、別に、ただパンばかり食べてるのが栄養に悪いからってだけで、深い意味はないんだから！」

ヒカリが右手をぶんぶん振るといふ謎の動きをしながらそう言った。

「はは、わかつとるって。折角のお誘いやから、お願いするわ」

ちよつとだけ元気が出てきたトウジは、笑いながら答える。

「ほんと！？よかつた〜」

「……そんなに喜ぶことか？」

「え！？い、いや、これは……その……なんでもないわよっ！」

「あれ？葛城さん？」

帰宅途中に声をかけられたミサトは、そちらを振り向く。

「あ、光さん、だったわね」

「夏海でいいですよ」

そこには、門矢士と一緒に旅をしているという女性、光夏海がいた。

「そ。私のこともミサトでいいわよ」

「そうですか」

帰り道が同じなので、二人は一緒に歩き出す。

「……すみません」

するといきなり、夏海が謝罪の言葉を口にした。

「え？なんのこと？」

もちろん、ミサトにはわけがわからない。

「土君のことです。事情は聞きましたけど、あれは土君が厳しく言いすぎでした。だから、ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げる夏海を見て、ミサトは少しあわてる。

「そ、そんなことないわよ。彼の言うことは何も間違ってたわ。………実を言つとね、私も、彼と同じことを考えたことがあったの」

「………そうなんですか」

「でも、シンジ君にそれを言うことができなかった。あの子が傷つくだろうってのも理由の一つだけど………戦う理由がなくなって、彼がエヴァに乗らなくなったら困るっていう、打算的な考えもあったのよ」

そう、自分は卑怯だったのだ。

だから、今朝士と話した時も、ほとんど何も言い返せなかった。

「………でも、ミサトさんがシンジ君を心配していたのも事実なんですよ？？」

ミサトの言葉を聞いた夏海からは、予想外の返事が返ってきた。

「え？………それは、そうだけど」

「それで、十分じゃないですか」

夏海はさらに言葉を続ける。

「私は、みんなの帰る場所になりたいって、そう思ってるんです」

「帰る……場所？」

「はい。私は戦えないから、土君やユウスケや大樹さんが傷ついて帰ってくるのを待つことしかできないんです。だから、できることをやるうって。写真館にいる時は、みんなが体も心も休めるように、そこが、帰ってくる場所になるように、そうしてあげたいって」

確かに、本来自らの居場所がない異世界に来れば、苦労もたくさんあるだろう。

だから夏海は、皆が疲れた心を癒すことができるようにしたいと感じている。

なんだか、彼女が少し大きく見えるような気がした。

「土君、遠回しにしか優しさを表せないから、シンジ君にも厳しくしちゃうんです」

そして同時に、夏海の言わんとすることも理解する。

「……だから、私がシンジ君を優しく支える。そういってね」

「ミサトさん……」

「そうね。…私も目指してみるわ。あの子たちの、帰る場所になれるように」

その言葉を聞いた夏海の表情が、パアツと明るくなる。

「よかったです。元気出たみたいで」

「あなたのおかげよ」

「いえいえ、私なんて」

そっだ、子供たちがつらい思いをしているのに、自分まで暗くなっ  
てどうする。

どこまでできるかわからないけど、やれるだけはやってみよう  
ミサトは決意するのだった。

第七話 其の弐 Place where to return (後書き)

今回のタイトルはまんま「帰る場所」です。これはトウジに関するお題でもあります。シンジの悩む姿は次回書きます。いい加減そろそろ戦闘を入れなければと焦っています。まああと少しです。うまく書ける自信はないですが、一応期待しておいてください……やっぱり期待しないでください。

感想や評価も気が向いたらどんどんください。大好物です。それでは、また次回。

## お詫びとお知らせと質問です

まず最初に、更新が滞ってしまっただけで申し訳ありません。ちょっと他の作品の方をメインに書いているうちに日数が経ってしまい、さらに現在試験が迫っていて5月の終わりまで執筆できない状態です。やっと自分では盛り上がった展開になると思われる使徒との戦闘が間近に来ているところで足踏み……すみません。

それで、話は変わりますが、少しアンケートを取りたいと思います。

ずばり、カップリングについてです。シンジと誰をくっつけるだとか、作品を越えた恋愛はありかどうかとか、みなさんのご意見を聞かせただけならばな〜と考えています。作者的には恋愛は物語にインパクトを与えるものだと思っているので、なんとか入れておきたいんですよね……

というわけで、よろしければ感想の方にご意見を書いてくださればとてもうれしいです。勝手言ってますませんが、どうかよろしくお願ひします。

最後になりましたが、いつもこの作品を読んでくださっているみなさん、本当にありがとうございます。お気に入り登録とか評価とか感想が入っていると、いつもにやけてしまっています。これからも頑張っただけ行こうと思うので、これからもよろしくお願ひします。

第七話 其の参 苦惱 / Reason for...

『お前は、何のために戦っている?』

『戦い続ければ、確かに親父はお前のことを見てくれるかもしれない。だが、それはチルドレンとしてのお前だ。碇シンジとしてじゃない』

「……………何だよ、どうしたらいいんだよ……………」

学校からの帰り道、碇シンジの足取りは重かった。

あまり友達とも話す気になれなかったので、ケンスケの一緒に帰ろうという誘いも断った。

『なんだよ、トウジに続いてお前も元気無くなっちゃったのかよ』

とか嘆いていたが、シンジが教室から出る際には、

『ま、困ったことがあれば相談しろよな』



と言ってくれた。

その気づかいはうれしかったが、ケンスケに相談してどうこうなるものでもないと感じる。

彼は、戦いに身を投じているわけでもない、普通の中学生だから。

「戦う理由……………」

答えは出ない。

それどころか、まともに考えることもできていない。

…………ただ、頭の中でいろんな思いがぐるぐるしているだけだ。

戦うのは怖い、けどどうしなければ父は自分のことを…………

…………しかし、士はそれを

ド  
ン  
ッ

「うわっ」

下を向いてとぼとぼ歩いていたので、歩いていた人とぶつかってしまっただ。

「す、すみませ……あれ」

「おお、シンジじゃないか」

謝ろうと思って顔を上げると、そこには最近知り合った男性、小野寺ユウスケがいた。

「……それで、なんで僕は写真館に連れてこられてるんですか」

十分ほど後、シンジは光写真館でソファーに座らされていた。

「いや、だって明らかに僕悩んでますって顔してたし。なんかあるんなら相談してほしいかなって」

「だからってなぜわざわざここに……」

「お人好しなんだよ、彼は。馬鹿みたいだね」

シンジの疑問に答えたのは、同じ部屋にいた海東大樹だった。

「馬鹿とはなんだよ」

「それで？何を悩んでいるんだい、君は」

ユウスケの言葉を流して、海東はシンジに尋ねる。

「……………」

そう言えば、彼らは仮面ライダーでいろんな世界を旅ってきて、そこで数多く戦ってきたらしい。

……………誰かに聞くなら、この人たちだ。

「考え事を誰かに吐いてみれば、意外とすっきりするもんだぞ」

ユウスケがもうひと押ししてくる。

「……………ちょっと、何のために戦うかがわからなくなっちゃって」

このままではらちが明かない。

だから、思い切って聞いてみることにした。

「何のため？それで今悩んでるの？」

「……………はい」

シンジがそう言うと、ユウスケはうつんとしばらくうつなる。

「戦う理由、か。難しい話だよな。それって、ひとりひとり違うもんだし」

「……………あの、小野寺さんはどうなんですか」

「俺？そっか、とりあえず他の人の意見を聞くのもいいかもね」

ユウスケがぼんと手をたたく。

……………感情表現豊かだよな、この人。

「俺はね、誰かの笑顔を守るために戦っている」

「笑顔、ですか？」

ユウスケの言葉を、一言一言頭に入れようとする。

「そう。昔、大切な人を失っちゃってね。その人が言ったんだ。俺

なら、みんなの笑顔のために戦えるって。……悪い奴のせいで、誰かが傷つくのは見たくない。だから、俺は戦うんだ」

どこの誰かもわからない人の笑顔を守るため、そのために、ユウスケは戦うらしい。

さっき海東が言っていたように、本当にお人好しで、そして優しいんだろう。

……でも、とても自分にはそんな理由で戦うなどできそうもない。

「……海東さんは？」

今度は、少し離れたところで何かをいじっている海東に聞いてみる。

「僕かい？そりゃあお宝のためだよ」

「へ？」

「言ってなかったっけ。僕はトレジャーハンターだからね。いろんな世界のお宝を手に入れるために、たまには盗みもする。その時とかに戦うのさ」

「は、はあ……………」

あまりに突拍子もない回答に驚く。

とつかそれって…………泥棒？

「海東、そんな欲丸出しのこと言ってどうするんだよ」

「聞いてきたのはシンジ君だろ。…………それに、笑顔を守りたいっていうのも欲じゃないか。僕に言わせれば、欲にいいも悪いもない。それに余計な格付けするから、ややこしいことになるんだ」

「いや、それは」

海東の言葉に反論するユウスケの言葉は、耳に入らなかった。

(…………二人とも、違いはあるけど、確かなもののために戦っているんだ)

再び、自分の世界に入るシンジ。

（戦う理由は、それぞれ違う。じゃあ、僕は……）

結局、その答えは出なかった。



第七話 其の参 苦惱 / Reason for... (後書き)

というわけでお待たせしました、久しぶりの本編更新です。ほんとの間隔をあけちゃいましたね、すみません。

さあ！この話の中に思いつきある漫画のセリフをばくっている箇所がありますが、みなさんわかりましたか？いやあ、あの漫画の作者女性だったんですね、びっくりだ〜。

そんなわけではちばち話を進めています、相変わらず展開が遅いですね。でも、こんな亀みみたいなペースなのに、なんと総合評価が200ポイント行っちゃいました。本当にありがとうございます。まだ使徒と一回も戦っていないのに……優しすぎです、みなさん。

そんなわけで、これから頑張っていこうと思うので、意見とか文句とかあればどんどん言ってください。では、また次回。

## 第八話 其の壱 最後の一日

誰もいないであろう十分の休み時間の屋上に、男子生徒の影がひとつ。

鈴原トウジは、浮かない表情で外の街並みをぼんやりと眺めていた。

「……………」

……………このまま授業をさぼってしまおうか。

パシヤッ

「よう。間抜けな顔してたから撮らせてもらったぞ」

とか思っていたら、行動と考えが全く読めない担任教師がいきなり写真を撮ってきた。一体なぜこんな場所にいるのだろう。

「…なんの用や」

「お前がここで授業をさぼるような気がしたから連れ戻しに来た」

「……超能力者か？」

「なんだ、凶星なのか。心配するな、あてずっぽうに言ったただけだ」

……本当に、わけがわからない人間だとトウジは感じる。今も土は意地悪そうな顔をしていて、まったく底が知れない。

「……まああれだ、最近元気がないようだからな。担任教師として相談に乗ってやる、話せ」

「……なんでそんなに上からなんや」

「俺の方が偉いからに決まってるだろう」

おかしい、こういうとき教師は優しく声をかけるものだと思っていたが、こうもはっきり言われるとまるで自分が間違っていたかのよう感じてしまう。

キーンコーンカーンコーン

「…授業、始まってしもたで」

「俺はこの時間授業がない。お前ももともと出る気なかったんだろ？なら少し遅れても構わん」

「変わつとるな」

「ああ、よく言われる」

本当に、普通じゃない。でも、だからだろうか。なんとなく、この教師になら話してみてもいいと思った。

「実はな……エヴァンゲリオン参号機のパイロットに選ばれたんや」

「……お前がか？」

それまで平静を保っていた土の表情が驚いたというものになる。

「そつちや。……今でも信じられんけどな。明日松代に行って明後日には起動実験らしい」

そう。もう明日には学校を休んで非日常の世界に足を踏み出さなければならぬ。

「……怖いのか、エヴァに乗るのが」

士は的確にこちらの気持ちを指摘してくる。

「怖い。情けないことにな」

トウジがそう言うと、士は屋上の柵に背中でもたれるように体勢を変えて、再び口を開いた。

「怖くて当然だ。そう思わない方がどうかしている。普通の中学生が、いきなり化け物と戦えと言われたんだからな。……このこと、碇には話したのか」

「……いや、話したらん。誰にもな」

「なら話してみればいい。近くにパイロットの先輩がいるんだから、相談したら胸のつかえが少しは取れるかもしれないぞ」

士のある意味当然の提案に、トウジは表情を曇らせる。

「…あいつに話したら、多分、いや絶対ショック受けるやる。だから、切り出しにくいというか……」

シンジは内気で、繊細というかなんとというか、そんな感じの人間だとトウジは考えている。その彼が周りの人間がエヴァのパイロットに選ばれたと伝えたら……あまりいい感じにはならないことはわかっていた。

「…なるほど」

トウジの考えを聞き、士は軽くうなずく。屋上に吹く風を気持ちよさそうに受けながら、彼はこう言った。

「だが、お前に一人前に人の心配をする余裕があるのか？あんまり一人で抱え込むと、ろくなことにならないと思うがな」

「……せやけど」

「それにな、お前が思っているほど、碇は弱い人間じゃない」

「……………」

「もつとあいつを信頼してやれ。なに、俺が保証するんだから間違いない」

相変わらず自信たっぷりと言う士を見て、トウジは少しおかしくなつた。

「ははは、そうかもしれんな。昼休みくらいに聞いてみるわ」

「……………よし、じゃあ教室まで走れ。もう十分も経ってるからな」

「はい」

屋上を出て、教室に向かいながら、トウジは考える。

やっぱりよくわからないけど、門矢士は、いいやつだ、と。

## 第八話 其の壱 最後の一日（後書き）

ということではよいよ松代での起動実験の二日前まで来ました。ちなみに土はトウジを見つげるために結構あちこち探し回ったということにしています。都合のいいときに現れていいとこ見せて去っていく……うん、主人公の鑑ですね、多分。

感想などのほうもお待ちしております。では、また次回。



第八話 其の貳 Feeling sad

「……じゃあ、今日は鈴原の分の弁当は作ってないのか」

このクラスの四時間目は土が教える数学だった。終業、および昼休みの開始をつげるチャイムが鳴った後、クラス全体がわいわいと喧騒に包まれる。

その中で、土はヒカリと先日のお弁当云々の話をしていた。

「……はい。色々勉強してから作るのかなって思って。鈴原には来週からお弁当渡すつもりです」

「……とか言っつて、実際はすぐには心の準備ができなかったんじゃないのか」

「あ、あはは……まあ、それも理由の半分くらいですね」

恥ずかしそうに少しはにかみながらヒカリが答える。

「……ま、いつ渡すのかはお前の勝手だけだな」

とはいえ、今日作っておけば、明日松代に行くトウジも元気が出ていいと思ったのは確かだが。

そう考えながらそのまま職員室に戻ろうとすると、ヒカリが声をかけてきた。

「あ、先生。……その、ありがとうございます。お弁当を作ってあげられるようになったのは、先生が背中押してくれたのおかげです」

「……別に、俺は何もしていない」

無愛想な返事しか返せなかったものの、その言葉を聞いて少しうれしい土であった。

昼休みも中ごろ、そんな時にシンジとトウジは屋上にいた。他にも  
昼食を取っている生徒が結構な数いる。

「それで、僕に大事な話って？」

急にトウジに呼び出されたシンジがそう尋ねると、トウジはふうっ  
と息を吐く。

「……今から言う話は、誰にも話さんでくれ」

「うん、うん……」

そして、シンジは聞いた。

鈴原トウジがフォー スチルドレン エヴァンゲリオン参号機のパイロット選ばれ、明日起動実験のために松代に行くことを。

「……………そんな」

驚きを隠せないシンジ。まさか、こんなに近くの人間が新たなパイロットになるなんて考えもなかったのだ。

「…すまん、結構前に決まっとったことなんやけど、言いだしづらくてな。……………それで、教えてほしいんや」

「…何を？」

「正直言つて、怖い。見てる分には世界を守るヒーローやけど、自分が乗るとなると……………だから、アドバイスしてほしいんや。エヴァに乗るのがどのくらい大変なのかとか、どんな心構えで乗ればいいのかとか」

トウジの言葉に、シンジの心は揺れる。もちろん、彼がチルドレンに選ばれたと聞いた時から動揺はしていたが、その類ではない。

(…………心構えなんて、僕だってわかんないよ)

士に出された宿題、どうしても解けないその問題。それを、トウジは教えてほしいと言ってきた。

「…………最初はいろいろ大変だと思っけど、だんだん慣れてくると思うよ。心構えていうのも、後からついてくるんじゃないかな」

だから、シンジは当たり障りのないことしか答えられなかった。

でも、それでもトウジは少し笑って、

「そっか、ありがとな。お前と話したらすーっとしたわ」

と言っていた。

それに対して、シンジは軽く作り笑いを返すことしかできなかった。

…………最近、シンクロ率も落ちてきている。もし今使徒が来たら……………

( やっぱり、戦うしかない )

それが正しいかどうかは別として、他の方法を思いつかない以上、  
そうしないと父は自分を見捨ててしまうから。

シンジの心の中は、混沌と黒いものがうずめいていた。

第八話 其の貳 Feeling sad (後書き)

ふう……

トウジとシンジの会話についてですが、作者はアニメしか見ておりません。なので、漫画版ではトウジはシンジに参号機に乗ることを伝えるシーンがあるそうですが、その会話は知りません。そういうわけで全然漫画版とセリフが違うと思いますけどどうかご容赦を。というか毎回タイトルに迷ってるような名前をつけることができないんですが、どうしたらいいんでしょうか？あ、それと気が付いたら第一話を投稿してからもうすぐ半年経ちます。今更ながら全然話が進んでいないことに危機感を抱きつつも、これからもぐだぐだ書いていくんだと思います。

というわけで、また次回。

## 第九話 其の壱 ハジマリを告げるもの

「欠席は鈴原だけ、と。それじゃ、朝の連絡をするぞ」

ホームルームの中、士が生徒達に連絡事項を伝える。

トウジが松代に行つて二日目。予定通りなら、今日がエヴァンゲリオン参号機の起動実験の日はずだ。

士としても非常に気にはなるのだが、自分の役割は果たさなければならぬ。

「以上で連絡は終わりだ。続けて授業に入る」

今日は一時間目の授業がこのクラスだ。

「さあ、教科書を開け」



「土先生」

授業が終わり、土が教室から出ようとした時、後ろから声がかかった。

「……洞木か、どうした」

「鈴原のこと、何か知ってますか？今まで二日連続で休んだことな

んでないくらい丈夫なやつなんですけど……」

ヒカリの質問はやはり予想通りのものだった。その表情はまさに想い人を心配するものであり、きちんと事情を説明しておきたいと感じさせる。

だが、トウジが他の者に話していない以上、やはり勝手に教えるわけにもいかない。

「ちょっと用事で出かけてるだけだ、心配すんな。そのうちいつものようなバカ面で帰ってくる」

「…そう、ですよね」

やはり、本人の口から聞くのがベストだろう。そう思い、土はあいまいな返事しか返さなかった。

ヒカリは土の態度に何か釈然としないといった様子であったが、最後の言葉に少しだけ笑っていた。

「すっ〜、はあ〜…」

参考機のエントリプラグの中で、トウジは深く深呼吸をする。間もなく起動実験の開始で、緊張感やその他もろもろの感情がピークに達している。

『エヴァンゲリオン参考機、起動実験開始します』

オペレーターがそう言うと、周りの装置が音を立て始める。

「やばい、ちびりそうや……」

思わず小声でそんなことをつぶやいてしまう。だが、自分の親友は、何度もこういうことを体験してきたのだ。

それが、トウジの励みになる。

「……せや、シンジにはつかええかつこさせたらあかな」

自分を鼓舞する意味合いも込めて、そんな軽口をつぶやいた瞬間。

何かが、入ってきた。

「っ！な、なんや」

そう驚いたのを最後に、トウジの意識は闇の中に落ちていった。

「先生、さようなら」

「あゝ」

放課後になり、生徒達が続々と教室から出ていく。土はこれから職員室で仕事が残っているのだが。

「…そういや、そろそろ給料日だったな。じいさんにツケの返しができるか」

とはいえ、これまで相当の量の写真を現像してもらっているので、それで足りるかどうかは微妙だが。

それでも大方の人間の例にもれずお金大好きな土は、少しテンションを上げてその足を動かす。

……だが。

『非常事態宣言、非常事態宣言。みなさん、すぐにお近くのシェルターに避難してください』

大音量のサイレンとともに、アナウンスが土の耳に入った。

「やばい、使徒が来たぞ！」

「はやく避難しないと！」

「碇達、頑張ってくれよ」

教室に残っていた生徒達は各々あわてた様子で走っていく。

「……なるほど。ようやくお出まじってわけか」

事態を理解した土は、不敵に笑った。

そして、その時は来た。

定められた運命。その鎖を、破壊者は引きちぎることができるのか。

## 第九話 其の壱 ハジマリを告げるもの（後書き）

ようやくバルディエル襲来まで来ました。ここから久しぶりの戦闘パートです。まあ、メインとなるのはやはり心の問題ですが。さて、世界の破壊者の本領発揮なるか？気がつけばWも終盤。なのにこの作品はいつ終わるのでしょうか……

とにかく、頑張っていこうと思うので、よろしければ見守っていてください。

評価や感想のほうも心待ちにしております。

では、また次回。



## 第九話 其の貳 Cruel real

「土！よかった、合流できて」

バイクに乗って学校から出た土に声をかけてきたのは、同じくバイクに乗っているユウスケだ。

「夏海たちは避難したか？」

「ああ、ちゃんとシエルターに向かったよ。それと、海東はやることがあるとか言っていてどっか行っちゃったんだ」

「あの野郎……まあ、最初から計算には入れていないが」

さすが泥棒か、と海東の相変わらずのマイペースにため息をつく土。

「あ、そうそう。その海東からこれを土に渡してくれて。何だかわかるか？」

そう言ってユウスケは土に預かり物らしきものを手渡す。

「……わからん。俺にはただの赤い石に見える」

「そっか。でもまあ一応渡したからな」

「ああ。それじゃ、そろそろ行くとするか」

いつまでも話しているわけにもいかない、土はバイクを走らせようとする。

「場所はわかってるのか？」

「さっきの避難勧告で大体の位置は言っていたからな。後はそこで馬鹿でかい物体が見えたらビンゴだろ」

「なるほど。よし、じゃあさっさと行こう！」

目的地は学校から結構離れているので、移動には少し時間がかかる。間に合ってくれよと思いつつ、二人は道路を疾走し始めた。

「松代で事故!?!」

オペレーターのマヤから知らされた事実には、初号機のエントリーブラグ内のシンジは啞然とする。現在、エヴァ三機は使徒の襲来に備えてそれぞれ違う位置に配置されている。

「じゃあ、トウジやミサトさん、リツコさんは……」

「どうなっているかはわからないわ」

「そんな……」

もし彼らに何かあったらと思うと背筋に寒気が走る。

「何落ち込んでんのよ！私達がここで心配したってどうしようもないでしょ」

式号機に乗っているアスカから叱られるが、そう言われても中々切り替えはできない。

とにかく落ち着け、と自分に言い聞かせていると。

使徒の姿が見えてきた。

「な、なんだよあれ……」

その姿は。

「あれは、エヴァじゃないか……………」

黒い機体の、エヴァンゲリオン参号機だった。

シンジだけではなく、アスカもちろん目の前の敵の姿に困惑していた。

「使徒はエヴァンゲリオン参号機に寄生している」

今回指揮を取っている碓ゲンドウ指令が淡々と状況を説明する。

「じゃあ、トウジは…パイロットは!?!」

「シンクロ率は0パーセント。まだエントリープラグの中だ」

「そ、そんな……!!」

シンジの焦った声にも、ゲンドウは動じず事実を述べる。

(くっ……とにかく、アタシが仕留める!)

おそらく今のシンジはまともに動けない。彼はそういう人間なのだ。だから、今一番使徒に近い自分が確実に決める。そう、負けるわけにはいかない。

……だが、アスカは一つ失念していた。

彼女がこうして思考の海に沈んでいる間にも、使徒は動いていると  
いうことを。

「え？」

それは、一瞬の出来事だった。ほんの一瞬、アスカが意識を使徒か  
ら外した瞬間に、

使徒 エヴァ参号機が目の前でその腕を振るおうとしていた。

いつの間に、と思った瞬間にはもう遅い。一撃を防ぐための防御が  
間に合わない。

……確かに、少しの焦りがあったかもしれない。だけど、だけど……

こんなところで、負けるわけには

「キヤアアアア……！」

アスカは、襲ってきた激痛に耐えられず、叫ぶしかできなかった。

「……どうすねばいいんだ」



シンジの乗る初号機の数十メートル先に、参号機がいる。

式号機は突然の攻撃でやられて、零号機は片腕を切り落とさざるを得ない状況になった。

もう、自分しかない。

だけど、あの参号機の中には、トウジがいる。関西弁で、たまに馬鹿なことをするけど、友達想いの優しい人間が。

参号機が、勢いよく初号機に襲いかかる。初号機はなんとかかわそうとするが、動きに全くキレがない。

一発、また一発と、向こうの殴りや蹴りが入る。だが、シンジにはどうすることもできなかった。

「……どういふことだ」

自分の視界の中で繰り広げられている光景に、士は目を疑った。

「えっと……あの紫のやつが写真で見たエヴァンゲリオン初号機だよな。じゃあ、あっちの黒いのが使徒ってことか？」

紫と黒の巨大な人型の物体が向きあっている。

「……だといいんだけどな。だが、ひよっとするとあの黒いやつもエヴァンゲリオンなのかもしれない。使徒に寄生されてるとか、な」  
おそらくそれが正しいのではないかと士は考える。いくらなんでも両者が似すぎている。海東が持っていた写真で見た使徒という生物の外見とは根本的に何かが違うと直感が告げている。

「そんな！じゃあ、エヴァ同士が戦ってるってことかよ！？ていうか、それだとどっちが寄生されてるかわかんないんじゃないか……」

「確かに……いや、黒い方だな。今の、見えたか」

一瞬迷った士だが、目に映ったものによって考えを決める。

「あ、ああ。なんか出てたな、白いのが」

黒いエヴァから禍々しい白い粘着質のものが見えた。おそらく、あれが使徒ではないのかと士とユウスケは感じる。

「とにかく、初号機を援護だ。行くぞ、ユウスケ」

「わかった」

互いにうなずくと、士は一枚のカードを取り出し、ユウスケは腰にアークルと呼ばれるベルトを出現させる。

「「変身」」

『K a m e n   r i d e   d e c a d e』

そして同時に声を上げ、その姿を仮面の騎士に変えた。

一人は世界の破壊者・ディケイド。

一人は超古代の戦士・クウガ。

「それじゃ、早速使わせてもらっぞぞ」

『a  
F i n a l   f o r m   r i d e   k u , k u , k u , k u g』

士が一枚のカードをベルトに差し込むと、ユウスケが焦ったように

言う。

「ってもうそれ！？人型じゃなくなるのって結構疲れるんだけど」

「知るか。空を飛べないと届かないだろう」

「……まあ、しょうがないか」

士の相変わらずの物言いに、ユウスケは仕方ないといったふう背中を向ける。

「ちょっとくすぐりたいぞ」

士がその背中を開くと、クウガの体が見る見るうちに変形し、大きなクワガタ『クウガゴウラム』に姿を変える。

「よし、行くぞ士！」

「ああ」

士がユウスケの背中に乗り、二人は空へと飛びあがった。

(……まずいことになるかもしれないな)

その間、士はある不安を抱いていた。

今日は松代でのエヴァ参号機の起動実験の日だったはずだ。そして目の前の黒いエヴァは、初号機でも弐号機でも零号機でもない。

ということとは、あれは参号機で、最悪中にトウジが乗っている可能性がある。

もしそうだとすれば、きっと。

碇シンジは、動けない。

## 第九話 其の貳 Cruel real (後書き)

うーん、変身している時の呼称はどうしたらいいでしょうか。人間の名前で呼ぶか、ライダーの名前で呼ぶか。よろしければご意見ください。

さて、物語の方は戦闘開始です。綾波なんかは描写なしで早々に退場していますが許してください。だって綾波視点とか難しいし……いや、必要な分は書きますけどね、もちろん。

感想や評価のほうもよろしければお願いします。そして、お気に入り登録などしてください。たの方はありがとうございます。

では、また次回。

第九話 其の参 ささやかな抵抗 / Hope in despair

「シンジ、何故戦わない」

現在、エヴァ初号機は使徒に寄生された参号機にマウントポジションを取られた拳句、首を絞めつけられていた。

そのような危機的状況に陥っても、シンジは何もできなかった。

それを見かねたゲンドウが通信を入れたのだ。

「戦わなければお前が死ぬぞ」

「……いいよ。トウジを殺すことになるんなら、僕が死んだ方がマシだ」

何を言われても動こうとしないシンジ。

やがて首の痛みが限界に達そうとしたその時。



「ウオオン!？」

参号機のうめき声とともに、首を絞められる感覚が消えていく。

わけがわからないままシンジがあたりを見回すと。

「先生……………?」

かつて一度だけ見た仮面の戦士が、参号機に弾丸を撃ち込んでいた。

「…所詮、牽制程度にしかならんか」

ライドブツカーをガンモードにして、参号機に数発撃ちこんだ土は、相手の反応からどれだけ効いたか推測する。

「さてユウスケ、出番だぞ」

「え？」

間抜けな声を出すユウスケに、土は軽い感じで言う。

「向こうのターゲットが狙い通りこちらに移った。しっかりかわせ  
よ」

「ってえええええ！？俺に丸投げかよ！」

ユウスケが突っ込んでいる間にも、参号機は標的を撃墜しようとする腕を伸ばしてくる。

すんでのところでそれを回避するユウスケ（とその上に乗っている士）。

「もっと余裕を持ってかわせ。攻撃は俺に任せろ。回避はお前にやらせてやる」

「普通逆だろ！？なんで遠慮してるみたいに言ってんだ！？」

そうはいつでも、土台がユウスケなのだからこうするより他にない。

「しっかり逃げろよ。ま、お前も飛び回ってる蚊を殺すのは手こずるだろう。何とかなる」

『Attack ride blust』

軽口を叩きながら、士はカードをベルトに差し込む。

するとライドブッカーから先ほどより強い弾丸が飛び出し、参号機

の右腕に命中する。

「グワオオ!?!」

しっかりダメージは入ったようで、参号機は弾が当たったところを押さえつける。

「ウオオオオン!?!」

しかしすぐに立ち直ると、左腕で土達をひっ捕らえようと攻撃してくる。

「ユウスケ!」

「わかってる!」

先ほどとは違った凛とした声で答えると、ユウスケは的確にその攻撃を避ける。

「ちゃんと避けるから、しっかり攻撃しろよ!」

「ああ、任せておけ」

ユウスケの言葉に土は満足そうに答える。

二人のコンビネーションは、ここからだ。

「何だあれは……碇、ゼーレから何か聞いているか」

「……いや、何も知らされていない」

突如現れた謎の人間サイズの生物に、ネルフ内は騒然となる。もちろん、指令と副指令も例外ではない。

「あの生物は、使徒ではないようです」

「あれが乗っている黒い物体から生命反応、こっちも生物です！」

青葉シゲルと日向マコトが解析結果を次々と告げる。

「現在、生物は使徒と戦闘中!………味方なのかしら」

伊吹マヤは報告の後に考えていたことを思わずつぶやく。

「初号機を助けたという形になってはいるが………」

「まだ、判断はできないな」

冬月とゲンドウは、あくまで冷静に状況を見つめようとしていた。

「ほらほらどっした？動きが大振りになってるぞ？いらついてんのか」

おちよくなるように言いながら、その隙をついて士はカードを使用する。

『 F o r m   r i d e   d o u b l e   h e a t   t r i g g e r 』

今ベルトに差し込んだカードは、他のライダーの力を使うためのもの。軽快なリズム音とともに、ディケイドの姿が変わって半分こ怪人    もとい仮面ライダーWになる。

左半分は青、右半分は赤。メモリの相性は悪いが火力が高いヒートトリガーだ。

「ここらで火力を上げてやる」

その宣言通り、Wの銃、トリガーマグナムから撃ちだされた弾丸の威力は明らかに先ほどまでより上がっている。

「ガアッ、グオオオ、ウオオオオン!!?」

参考機をつめき声とよるけ具合もより大きい。



このまま行けるか、と士は考える。

だが。

「っ!？」

士とユウスケが同時に息をのむ。

今まで普通に命中していた弾丸が、突如現れた光の壁によって遮られたのだ。

「士、あれって……」

「とっつとっ出してきたな、『ATフィールド』」

ATフィールド。ほぼすべてのものを寄せつけない絶対的な壁。破れるのは、同じくATフィールドを使えるエヴァンゲリオンと、N<sup>2</sup>兵器とかいうものだけらしい。

士は続けて数発弾丸を撃ち込むが、やはりすべて届かない。参号機はお返しとばかりにこちらに突進してくる。

「ちっ、ならこれはどうだ！」

『Final attack ride d,d,d,doubl  
e』

ヒートトリガーの必殺技『トリガーエクスプロージョン』が撃ち込まれ、参号機の左腕めがけて一直線に進む。そして

「……………つたく、せめてのけぞるくらいして欲しいな」

爆炎の上がった先には、無傷の参号機の姿があった。

「ぐっ……………！」

「おい士！大丈夫か！？」

一瞬よろめき、危うくクウガゴウラムから落ちかけた土をユウスケが心配する。

「……なに、ちょっと無理しただけだ」

先ほども述べたように、ヒートトリガーはメモリ同士の相性が良くない。そのフォームで必殺技のマキシマムドライブを放てば、体にかかる負荷もそれなりのものなのだ。

「くそ、どうすれば……というか、なんでシンジはさっきから動かないんだ？あんまり目立った傷は見えないんだけどな」

そう。土とユウスケが使徒を引きつけていた間に攻撃すればよいものを、シンジの乗っていると思われる初号機は立ちあがってからまったくその場から動かないのだ。

「今頃気づいたのか。……やはりあれは参号機で、中に鈴原がいるようだな」

「はあ！？トウジが？なんで？」

「そりゃああいつがフォースチルドレンで、今日が参号機の起動実験の日だったからな」

何食わぬ顔で言う士。ちなみに今の間もユウスケは参号機の猛攻を何とか避けている。

「…あの、それ俺聞いてない気がするんですけど」

「まあ、今初めて言ったからな」

「お前なあ！そういう大事なことは教えろっていつも……ってうわあ！？」

思わず会話の方に熱が入りすぎて、ユウスケは危うく敵のパンチに当たりかけてしまった。当然上の土もものすごい風圧を受ける。

「あつぶねえ！……とにかく、今は口喧嘩してる暇はない」

そう言いながら、土は必死に状況を打開する方法を考える。

このままではジリ貧だ。だから、何とかしてエヴァ初号機　シンジに動いてもらうしかない。

だが、そのシンジは……

(くそっ、あいつと会話もできないのに、どうすれば……)

「……姿を変えたのには驚いたが、ATフィールドは突破できんよ

うだな」

冬月の言葉通り、このままではあの生物はやられるだろうとゲンドウは予想する。そして、シンジも戦意喪失している。

「やむをえん。ダミープラ」

「おっと、これはこれは。大変なことになってるみたいだね」

その場にいた全員が、聞きなれない声に振り向く。そこにいたのは、みたことのない黒髪の青年。

ゲンドウはその侵入者らしき男をにらみながら言葉を発する。

「貴様、何者だ」

「通りすがりの仮面ライダーってどこかな」

男は、何食わぬ顔でそう答えた。

ふう……実は、本文の七割くらいが一度消えてしまって、非常にテンションが下がりながらも何とか第九話終わりです。

今回はWのカードを使ってみました。多分使えるはずだと思います……たぶん。そしてそれでも破れないATフィールド。これくらい固くていいと僕は思います。

そして絶妙のタイミングで海東登場。何をしてくれるんでしょうか。作者は海東好きなので、いいところ持っていくことは結構やらせるかもしれません。まあ今回はサポートですが。

感想や評価の方も心待ちにしております。にやにやしながら見させてもらいますので、よろしくお願いします。

では、また次回。

第拾話 其の壱 友を思う戦い（前書き）

大変長らくお待たせしてしまいました。期末試験に加え、成績悪のためPC謹慎を食らってました。それでは、どうぞ。



## 第拾話 其の壱 友を思う戦い

「仮面ライダー……数日前、ここに侵入してきたのはお前か」

海東の言葉に、ゲンドウが眉をひそめる。他の職員たちも同様に、こちらを警戒しているようだ。

「おっと、僕なんかにかまけている状況じゃないだろう？このままじゃ、ここネルフ本部は落とされてしまう。そうなると君達だって困るだろう。僕はそれを止めに来た」

にやりと小さく笑いながら、海東は臆することもなく言葉を発する。

「……何をするつもりだ」

「僕の要求はただ一つ。サイドチルドレンと会話をさせてくれたまえ」

「くそっ、いくら撃ってもびくともしないな」

平坦な声でつぶやく士だが、内心はかなり焦っている。それもそのはずだ。こちらの攻撃は一切通らず、かといって打開策も見当たらないのだから。

「ウオオオン!!」

「くっ!!」

容赦なく襲いかかってくるエヴァ参号機の連撃を、ユウスケが何とか避ける。数分間細かく動き続けている疲労が溜まってきているようだ。

「どつする土？俺もそろそろ限界だぞ！このままじゃ……」

「わかっている！だがどうすれば……」

頭をフル回転させながらそう答える土の目に、生気を失ったという風に立ち尽くす初号機の姿が映る。

「…せめて、あいつと……」

その時。

デイケイドの装甲から、何かが浮かび上がってきた。

「これは…ちっきの」

『やあ土。大ピンチだね』

浮かび上がってきたもの

海東から預かった赤い石から、見知っ

た声が聞こえてくる。

「海東！」

『その石は一種のトランシーバーってところさ。二つの石で通信ができる。なかなかおもしろいだろう？結構手に入れるのに苦労してね……』

「お前の盗品自慢はどうでもいい。それより、一体どこで油売って

」

急に語り始めた海東の言葉を切って、文句を言おうとした士だが。

『ネルフの本部さ。モニターから君達が苦戦しているのがよく見えるよ』

「っ！！」

海東の口から飛び出した言葉に、息を呑んだ。

『さて、僕の持っている石を通して、君の声を碇シンジに届けることが出来るんだけど、どうだい』

「……お前にしちゃ、ずいぶんと気が利くじゃないか」

『ま、僕も今サイドインパクトとやらを起こさせたくはないからね。お宝を手にいれないうちに世界が滅ぶのは困る』

いつも通りの調子の海東の言葉を聞いて、土も大きく呼吸をして、少し心を落ち着かせる。

「ユウスケ、もう少し粘ってもらっぞ」

ユウスケにそう告げ、土は海東に言う。

「よし、今すぐ碇と会話をさせる。言いたいことが山ほどある。」

仮面の戦士が、彼よりはるかに大きなエヴァ参号機に押されている光景を、シンジは黙って見ているしかできない。

……参号機の中には親友のトウジがいる。そう考えると、一步も動けないのだ。

「……駄目だ」

『何が駄目だって？』

「っ！門矢先生！？」

突然入ってきた土からの通信に、シンジは驚く。彼は今、目の前で戦っているはずなのに、どうやって……

『正直言つて、このままだと俺たちがやられるのも時間の問題だ。そうなれば、奴は好き放題暴れまわつて、やがてはネルフ本部へ乗り込むだろう』

こちらの戸惑いになど全く構わず、士はそのまま言葉を続ける。

『お前の力が、必要だ』

その言葉に、シンジの体が震える。もちろん、恐怖によって。

「…………無理ですよ。だって、あの中にはトウジが」

『知っている』

「だったら!」

『お前が戦わなくても、このままだとあいつは死ぬ』

「…………っ!」

また。

あの、家に勉強を教えに来た時と同じように、士は容赦なく冷たい言葉をぶつけてくる。

……そして、おそらく彼の言うことは正しい。

「……でも、怖いんです。理屈でわかっているとしても、体はずっと震えているんです」

わかっている。自分が、初号機が戦わなければ、トウジはおろか、もっとたくさんの方が死んでしまう。そんなことはわかりきったことだ。

……それでも、もし他に方法があったとしたら。それなのに、自分がトウジを殺してしまったら。

シンジの心に巣食う『恐れ』が、彼の体を縛り上げている。

『……お前の気持ちはよくわかった。』

こちらの意思が伝わったのか、士の声のトーンが下がる。



『だが、そこで立ち止まるな』

「え……………」

しかし、次に彼の口から飛び出した言葉は、とても力強いものだった。

『鈴原は、エントリープラグとかいうところにいるんだっただ。なら、それを取り出してから、あの使徒を叩けばいい』

「それは、そうかもしれないけど…………でも、そんな難しいこと」

『やりもしないうちから諦めるな。己を信じる。そうしないと、できるものもできなくなる』

まるで自分は必ず正しいと言わんばかりの、自信にあふれた口ぶり。門矢士という人間は、いつだってそんな感じで、そして実際ほとんどなんでもこなしてみせるのだ。

『お前は怖いと言ったな。だが、それは同時にお前の優しさを表している』

「優、しさ……？僕が……？」

『この前の宿題、ここでチェックするぞ』

何となく、今土は時折見せる意地悪い笑みを浮かべていると感じた。

『お前は、何のために戦っている？』

……それは、少し前に土に質問されたこと。その時は、彼の言葉に何も言い返せなかった。そして今も、確かな答えは出ていない。

『自分の胸の中をしてみる。逃げてしまいたいという恐怖のさらに奥、お前が真に望むことはなんだ』

ドクン、と胸が音を立てる気がした。自分が願うこと。今、エヴァに乗って何をしようというのか。

「……………そうだ」

少し考えた後、その答えが見つかった気がした。

簡単なことだ。自分が今もっとも望んでいることは

「……トウジを、助けたい」

『…そうか。なら、お前がやることはわかっているな』

本人は隠しているつもりなのかもしれないが、あからさまに嬉しそうな声をシンジは聞いた。

「……僕は」

『さつきも言ったが、怖れは優しさの証だ。強さと弱さは表裏一体。一歩踏み出せば、お前のその感情は友を守りたいという強さに変わる』

はつきりと、そして力強い土の言葉によって、シンジの迷いは消えていく。

『お前が望みさえすれば、俺は必ず力になる。なんせ、俺はお前の教師だからな』

そして、自分の世界でもないのに、全力で守ろうとしてくれる人がいる。

「……やります。トウジを、助けます」

もう、決意は揺らがない。

「……トウジ」

満足そうな土の表情を見て、ユウスケが尋ねる。

「土、どうなったんだ？」

「ああ、ようやく風向きがこっちに　ん？」

その問いに答えようとした時、土はライドブッカーが小さな光を放っていることに気づく。

開けて中を見てみると、先ほどまで何も書かれていなかった一枚のカードに、絵柄がついている。

「……………なるほどな」

そうつぶやくと、土はそれとは違うカードを取り出し、ベルトに差し込んだ。

『Form Ride Blade Jack』

デイケイドの姿がカブトムシを模した青き戦士に変わり、さらに黄金の翼がその身に纏われる。

仮面ライダーブレイド・ジャックフォームだ。

「さあ、第二ラウンドだ！」

第拾話 其の壱 友を思う戦い（後書き）

ふう……今回は途中からおなじみの「テレーン」のBGMを流してください。

というわけで、後は戦うだけですな。うまく書かなければ……

感想などありましたら、お気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第拾話 其の貳 Believe

「さて、始めるぞユウスケ」

ブレイドジャックフォームに変身した士は、適当に身体を慣らしながらユウスケに語りかける。

「ああ。……って何を？」

「ま、さっきまでとやることは変わらん。俺達はあの使徒の気を引くのが役目だ」

そう答えると、士は背中の翼を広げ、宙に浮かびあがる。それと同時に、参号機が雄たけびを上げ、彼に向かって右腕を伸ばしてくる。

「とは言え……」

士はそれを余裕を持ってかわし、そのまま剣を構えて参号機に突っ込んでいく。

「いつまでも防戦一方ってわけでもないけどな！」



『Attack Ride AT Field』

「おい土！弾き飛ばされるぞ！」

ユウスケの止める声も聞かず、その直後、土は参号機のATフィールドに接触した。

だがその瞬間、Dブレイドの体からも光の壁が発生し、相手の壁をこじ開けていく。

「久しぶりの攻撃だ」

『Final Attack Ride B / B / Blade』

機械音とともに、土が手に持つ剣　ブレイラウザーが電気を帯びる。

「っらあー！」

ブレイドの必殺技『ライティングスラッシュ』が、参号機の脇腹の

あたりに炸裂する。

「グワオオオオン!!!?」

ダメージによって咆哮する参号機だが、その動きを止めることまではしない。土もそれは予想通りだ。むしろ大ダメージなら中にいるトウジに危険が及ぶ可能性がある。

「ほらどうした?とっとと攻めてこいよ」

わざと目に付くように飛び回って挑発する土。参号機はそれを見て、狂ったように捕まえようと暴れまわる。その視線は土に集中している。

「さあ、今のうちだぞ、碇」

「……………今だ」

戦況を眺めながら、シンジはそう感じる。士が参号機を引きつけてくれている。エントリープラグを取りだすなら、今しかない。

気づかれないよう、ゆっくりと初号機を動かし、参号機の背後、すぐ近くまで進む。

そして、そのまま参号機に突っ込み、エントリープラグがある場所の装甲を外そうとする。

「ウオオオオン！！」

さすがに参号機も初号機の存在に気づき、引っぺがそうと体をやたらめったら動かし続ける。

「うおおおおおっ！！！！！！」

だが、ここで参号機から離れるわけにはいかない。こんな好機、二度も巡っては来ないだろう。

何とか左腕で参号機の反撃を防ぎながら右腕で装甲を外し、後はエントリープラグごとトウジを引っ張り出すだけになったそのとき。

「っ！？」

シンジは、左腕に強烈な違和感を覚えた。そう、まるで何かが侵入してくるような

「があっ……まさか、侵食されてるのか！？」

先ほど綾波は、使徒に腕から侵食され、結果零号機の腕は切り落とされた。今、初号機はそれと同じ状況に立たされているのではないか。

『シンジ。初号機の左腕から侵食が始まった。腕を切り落とすぞ』

ゲンドウからも通信が入る。だが、シンジはそれを良しとはしない。

「だめだ、まだこの左腕は必要なんだ！」

次第に左腕の感覚が消えていくのを感じながら、それでもシンジははつきりとそう言う。エントリープラグを取りだし、トウジを救うまでは、参号機の攻撃を防ぐ腕が必要なのだ。

『このままでは死ぬぞ』

「わかってる！だからもう少しだけ！」

『……十秒だ。それ以上経てば切り落とす』

相変わらず抑揚のない口調でゲンドウが言ったその言葉を聞いて、シンジは再び意識を参号機へ集中させる。暴れまわる参号機をなんとか押さえつけながら、右腕をエントリープラグへ伸ばしていく。

『あと五秒』

エントリープラグを掴み、取りだそうとする。

『三』

満身の力を込め、エントリープラグの固定器具を無理やり外す。

『――』

そして、プラグを参号機から抜き出す。

『――』

急いで参号機から離れ、プラグ内のトウジを安全な場所へ持っていく。

『左腕を切断』

直後、初号機の左腕が体から離れ、地に落ちた。

「うあっ……………!!」

想像を絶する痛みがシンジを襲う。だが、そこに向かって参号機は容赦なく突っ込んでくる。

エントリープラグを参照機と反対側に置き、それを迎えつつシンジ。

「ウオオオンー!!」

「くっ……………」

だが片腕を失った代償は大きく、じりじりと後ろへ押され始める。

「……………ここで負けちゃだめだ」

近くにエントリープラグがあり、その中にトウジがいる。下手をすれば踏みつぶされかねない。

守りたいという気持ちだが、シンジに、初号機に力を与える。

激しくもみ合いながら、何とか少しずつ参照機を向こうに押しやる。

「うわあああー!!」

そして、参照機を突き飛ばし、マウントポジションを取る。そして、

装備しているプログレッシブナイフを手に取り、その胸を何度も突く。少しずつ、そこに亀裂が生じてくる。

「ゲワアアオン!!!」

だが、相手の反撃がないわけではない。参号機は初号機の攻撃の際についてその体をはね飛ばし、激しい雄たけびを上げる。

「くそっ……………」

飛ばされて地面に叩きつけられた衝撃に耐えて立ちあがる初号機だが、その動きはおぼつかない。腕を切り落とされた痛みが、いまだシンジを苦しめている。

咆哮しながら、参号機が獰猛に獲物を仕留めんと走ってくる。そろそろ体は限界だと感じながらも、シンジが受け止めようとした時。

二つの影が、参号機の両腕を切った。参号機が悲痛な叫びを上げる中、シンジは影の正体に気づく。

門矢土と、彼が乗っていたクワガタの乗り物だ。



「うおおおおオオ！！」

その瞬間、シンジは真っすぐに走り、プログレッシブナイフを参号機の胸に突き刺す。

装甲が割れ、赤いコアがその姿を現す。それにナイフをぶつけ続ける。何度も、何度も。

そして。

コアが壊れ、参号機はその動きを止めた。

「……………やった」

守れた。大切な人を。安堵感がシンジを包み、張りつめた糸がぷつんと切れたように、彼の意識は闇に落ちていった。

## 第拾話 其の貳 Believe（後書き）

どうも、最近タイトルが決められなくてどっかから適当な単語を拾ってきているキラです。

ネルフの皆さんの反応とかも入れたかったですけど、それは次回に回します。あと、最後に士とユウスケがやったのはクウガのFARです。なんかうまく描写できなくてすみません。

まあ何にしても、ようやくバルディエル戦終了です。この時点で原作破壊が成されたわけですが、まだ士にはこの世界に居てもらいます。このままだとあの人とかが精神崩壊起こすので。

では、また次回。

## 第拾話 其の参 戦いの後 / Nexus

「ん……………」

鈴原トウジが意識を取り戻すと、まず真っ白な天井が目に入った。次に、体のあちこちに小さな痛みが走る。

「……」

「よかった、目が覚めて」

突然横から声をかけられたので振り向くと、自分と同じく白いベッドの上で寝ているシンジと、壁に寄り掛かってだるそうな顔をしている士の姿が見えた。

「シンジ、先生……………一体、何が起こったんや？」

参号機の起動実験の最中、突如意識が消えて以降のことが、何一つ頭の中に残っていない。あの後、自分や参号機はどうなったのか。

トウジの問いを聞くと、士は少し目を閉じて息をつくとき、シンジを指差しながら小さく笑って答えた。

「ま、今度こいつにアイスクリームでもおごってやることだな」

「……そうか、そんなことになってたんか……みんなには迷惑かけてしもたな」

士から説明を受けたトウジは、顔を俯けて声を小さくする。使徒のせいとはいえ、暴れまわった参号機の中に、自分はいたのだから。

「……トウジのせいじゃないよ。責任なんて感じなくていい」

そう語りかけるシンジの言葉は、何となく今までと違う雰囲気を持っていた。彼は、何か変わったのだろうか。

「シンジ」

いや、そんなことを考えるよりも、今やるべきことがある。

「ほんつつまにありがとう!」

ベッドから体を起こし、土下座の体勢になって腹いっぱい声を出す。しかし、先ほどまでダメージで眠っていた体を急に動かして大丈夫なはずはなく。

「あいたたた……つつ〜」

びりびりと電流が流れるような感覚を覚え、トウジはつめてしまふ。それを見て、シンジと土も自然と顔がほころぶ。

「ふふ……どういたしまして」

「やっぱりお前はうだうだ悩んで落ち込んでるよりも、そうやって馬鹿やってる方がお似合いだ」

「な、なんや二人とも、人が真面目にしとる時に」

トウジが文句を言おうとしたそのとき、ダンッ！と部屋の扉がものすごい勢いで開けられた。

「っ！鈴原……………」

急いで部屋に入って来た少女は、トウジの名を呼ぶ。

「おう、委員長。さっき目が覚めたところや」

洞木ヒカリは、能天気な感じに話すトウジの姿を、無言で見つめている。

「そっいや碓、お前さっきトイレ行きたいって言ってたよな」

「へ？」

突然脈絡もなく土が発した言葉にシンジは困惑する。

「俺もそろそろ帰ろうと思うから、ついでに怪我しているお前がト

イレまで行くのに付き添ってやる」

やや説明的になっている土の言葉を聞いて、ようやくシンジもその意図を察する。

「あ、ああ、そうでしたね。それじゃあ、行きましようか」

体をゆっくり動かしベッドから降りるシンジ。それを見て、土は部屋の扉を開ける。

「じゃあな。鈴原、洞木」

「おう、またな」

「また学校で」

挨拶をして、シンジとともに部屋を出た土は、扉を閉める前に一言付け加えておいた。

「いゆっくら」

「!!!」

わけがわからないといった表情のトウジと、顔が真っ赤にゆであがったヒカリとの対比を面白そうに見て、土はシンジを連れて歩き始めた。

「なあ委員長、顔赤いけどどうかしたか？」

シンジと土が去った後、トウジは何も考えずにヒカリにそう尋ねる。

「な、なんでもないわよ、この馬鹿!」

ヒカリはあわてた様子でそっぽを向き、大きな声でそう言った。

「いきなり馬鹿とはどういっつっちゃ!」

「馬鹿に馬鹿って言って何か問題でもあるの!?!」



そうして始まる口喧嘩。

「なんやと!? 確かに頭は悪いけどな、そこまで言われる筋合いはないで!」

「あるわよ十分!」

「どこが!」

「そういう鈍いところよ! ていうかずっと心配してたのに、あんたがそんなだから目が覚めて最初に喧嘩する羽目になっちゃったじゃない! もつと言いたいことは山ほどあるのに……あ」

喧嘩の勢いのまま、割と恥ずかしい本心を言ってしまうヒカリ。トウジも、いきなり相手の言葉の趣旨が変わったことに戸惑う。

「……委員長、心配してくれたんか?」

「あ、当たり前でしょ! クラスメイトがエヴァの事故に巻き込まれたなんて聞いたら、心配するに決まってるわ。そうよ、心配で、心配で……」

話しているうちに、最初は大きかったヒカリの声はだんだん小さくなり、その目には涙がたまってくる。

「本当に心配したから………目が覚めて、よかった」

言葉を言い終わると、ヒカリはそのままぐずぐずと泣き始めてしまった。それを見て、トウジは目の前にいる少女がどれだけ自分のことを真摯に考えてくれていたかを強く感じる。

(あれ……なんか、体が熱いな)

同時に、トウジはそんなヒカリに無意識に胸がどきどきしていたのだった。

「……うわあ、なんというか…いい雰囲気ですね」

「まさしく青春ってやつだな」

いちやいちゃし始めた二人の様子を、扉を少しだけ開けて覗く野次馬二名。トイレに行くというのは捏造した口実に過ぎないので、やる事がなく興味本位でこういうことをしているわけなのだが。

「……幸せそうですね、二人とも」

シンジがそうつぶやくと、土は優しい顔つきになって口を開く。

「あれが、お前の守ったものだ、『シンジ』」

シンジはその言葉にはっとするが、すぐに笑顔になった。

「…はい、『土先生』」

「……で、帰ろうと思ったたらどうしてこんなところに呼び出されて  
いるんだ」

しばらく後。土とシンジ、さらにユウスケはネルフのトップ・碓ゲ  
ンドウ指令とナンバー2の冬月コウゾウ副指令の前に立っていた。

「しかし、こんなところで君とまた会うとは、意外と世界は狭いも  
のかもしれない」

「俺もびっくりです。そっかー、道理でなんか雰囲気が普通の人と  
違ってたわけだ。まさかネルフの副指令だったなんて」

「何だ、お前ら知り合いなのか」

普通に会話しているユウスケと冬月を見て、士が尋ねる。

「うん、まあ色々あって」

「……さて、そろそろ本題に入らせてもらおうか」

このままだと話が進まないと思ったのだろうか、ユウスケの言葉を遮ってゲンドウが言葉を発する。

「シンジ」

「は、はい」

ゲンドウに名前を呼ばれ、シンジは少し心配になる。おそらくこれから言われることは、自分にとって都合の悪いものだ。

「前回の使徒との戦いは、危険なものだったと言わざるを得ない。最初は指示に逆らって戦わず、その後は無謀な戦い方で初号機を侵食されかけた」

やはり予想通りだ。後者の方は弁解しようとも思うが、前者については自分でも悪かったと感じる。敵を前に戦意喪失は、絶対にやっ  
てはいけないことだ。おそらく、何らかの罰が加わるだろう。

「……だが、今回のところは不問にしておく」

え？とシンジの脳内で？マークが浮かび上がる。説教されるだけで  
すむとは塵ほども予想していなかったのだ。

ゲンドウはそんなシンジの様子を気にも留めず、今度は土とユウス  
ケに目を向ける。

「次は君達に説明してもらおう。君達の正体や、目的について」

「ユウスケ、面倒だから任せた」

「つてええ！？俺かよ！」

自分勝手な土に呆れつつも、ユウスケはとりあえず大方の事情を説  
明した。

「……様々な異世界…そんなものが本当に存在するのか」

「だが、彼らの使う技術はこの世界のものでは説明できないのも確かだ」

にわかには信じがたいといった反応をする冬月に対し、ゲンドウはすんなり受け入れるという感じだ。

「口を割ってくれた礼に、君達とその仲間がネルフの施設に出入りすることを許可しよう。もちろん、立ち入り禁止のところは遠慮してもらおうが」

「……随分友好的じゃないか」

ゲンドウの言葉を意外だと思い、土は疑うように言う。

「我々の目的は使徒を殲滅すること。そして君達はそれを手伝ってくれる。わざわざ敵対する必要もない」

表情を変えずに静かに答えるゲンドウ。

「……なるほどな。じゃあ、俺はこれで帰らせてもらっぜ」

「あ、待てよ土！冬月さん、機会があったらまた話しましょう」

踵を返して出口に向かう土を追うユウスケとシンジ。と、その土が出口の前で足を止め、ゲンドウの方を見る。

「……あんだ、父親だよな」

「……そうだが、何か問題でも？」

「いや、別に」

ゲンドウの答えを聞いて、土は部屋から出ていった。ユウスケもそれに続く。最後に残ったシンジは、一言だけ残して部屋を出た。

「……ありがとう、父さん」

その言葉にこめられた意味を、果たしてゲンドウは理解することができたのだろうか。



## 第拾話 其の参 戦いの後/Nexus（後書き）

今回でようやくバルディエルの話は終了ということになります。本当にここまでえらい時間をかけてしまいました。半年以上経ってますからね。ここまでお付き合いただき、皆さんありがとうございました。でもまだ続きますよ。

さて、今回のタイトルの英語部分「ネクサス」ですが、まあウルトラマンネクサス見てた人なら「絆」という意味だつてことはすぐわかるでしょう。僕自身は平成三部作あたりが直撃した世代で、特にダイナが大好きでした。それゆえに最終回は子供心にショックでしたね。だから「ウルトラ銀河伝説」はほとんどダイナのためだけに見ました（笑）……おっと、仮面ライダーと関係ないので、このあたりで切っておきます。でもとりあえず「英雄」という曲を聞いたことがないならぜひ聞いてみてください。損はしません、多分。

話を戻して、今回トウジにヒカ리를少し意識させました。このカットブルはぜひくつつくべきだと思っています。また、シンジは一度むけましたが、あともう一つハードルを越えてもらつて予定です。次回からはトウジとヒカ리의出番が減り、代わりにすっかり出番なしのレイやアスカの描写を増やす予定です。さらにぼちぼち海東の狙うお宝についてもはっきりさせていこうと思います。っていうか、やることいっぱいあるなあ……

そんなわけで、また次回。

第拾巻話 其の巻 変わりゆくもの、変わらないもの

「行ってきます」

参号機を乗っ取った使徒・バルディエル殲滅から数日後。昨日トウジとともにめでたく退院したシンジは、今日が久しぶりの登校だ。ちなみに、アスカはなるべくミサトと顔を合わせないようにするため、早々と家を出て学校に行ってしまった。

「あんまりはしゃぎすぎないようにするのよ、まだ本調子じゃないんだから」

玄関で靴を履いているシンジを見ながら、ミサトが軽く注意する。彼女自身も参号機的一件で負傷していたが、もう大体は治っている。…とはいえ、多少は無理をしているようだ。

「わかってますよ。ミサトさんの方こそ、体は大事に扱ってくださいよ」

少し微笑んでそう返したシンジ。その様子を見て、ミサトははっとする。

「じゃあ……」

「あつ、ちょっと待ってシンちゃん。こっち来て」

玄関から外に出ようとするシンジを呼び止め、手招きをするミサト。シンジは不思議そうな顔をするが、遅刻しそうというわけでもないので言われたとおりにミサトの方へ近づく。

そんなシンジの頭にポン、と手を置いて、ミサトは口を開く。

「……やっぱり。背、伸びたわね」

「え？そ、そうですか？」

唐突な話題に少したじろぐシンジ。

「ええ。初めて会った時と比べたら、ずっと大人になってるわ」

そのまま頭をなでられ、シンジは少し照れる。

「…はは、まあ、今が成長期ですから」

「……………頑張ったわね」

「へ？」

ミサトのつぶやいた言葉を聞いて間の抜けた声を出すシンジ。その顔を見てミサトは優しく笑うと、彼の頭を今度は軽く叩く。

「ほら、学校行ってらっしゃい！」

「あ、は、はい」

多少わけがわからないという表情のまま、シンジはドアを開けて出ていった。

一人（とペンギン一匹）になった家で、ミサトはうれしそうに小さくつぶやく。

「……………成長したのは、体だけじゃないみたいね」

「おはよう。トウジ、ケンスケ」

教室に着いたシンジは、さっそく親友二人にあいさつする。

「お、おはようさん。お互い久しぶりの学校やな」

「ったく、お前とトウジがいないとつまんなかったよ」

二人とも元気そうに言葉を返すのを見て、シンジはようやく日常に戻ってきたと感じる。

(……今回は特に疲れたから、よけいによかったって感じるな)

「よう、朝っぱらから幸せそうな間抜け面だな、シンジ」

「「「うわっ！」「」」

いきなり声をかけられ、驚く三人組。そこに立っていたのはもちろん……

「土先生……この前もそうでしたけど、いつの間にそこにいたんですか」

「俺には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わっているからな」

臨時担任教師の門矢士だった。

「あれ？二人はいつの間に名前呼び合う関係に？」

「ああ、入院中になんか気がついたらこうなっとなんや。理由はワシにもわからない」

ケンスケの疑問にトウジが答える。



「そんなに騒ぐな、ちゃんと毎日勉強してればできる問題だ。たとえ退院明けのやつでもな」

そう言った時の士の顔は非常にいやらしいものであった。

「……あ、悪魔だ（や）」

シンジとトウジは、茫然とつぶやくだけだった。

一時間目終了後。死んだ〜！などという声が多数聞こえる中、惣流・アスカ・ラングレーは無性に腹が立っていた。

別に、テストができなかったわけではない。並の大学生よりも優れた頭脳を持った彼女なら、いくら応用を利かせた土作の問題でも苦



ではないのだ。

「……くそっ、なんなのよ」

シャーペンをひたすらカチカチ言わせながら、イライラした声でアスカはつぶやく。

「……負けたっ……このアタシが、何もできずに……！」

頭の中は、先日の戦闘のことではいっぱいだった。

敗北は許されないのだ、絶対に。自分は勝ち続けなければならない。そのため、小さなころからずっと努力してきた。そうしなければ

……

アスカの心の中で、焦りがどんどん大きくなっていく。そして、彼女の視線は、友達と笑いながら話している少年に向けられる。

「……なんで、あいつはあんなに楽しそうなのよ」

あの戦いの後、シンジは変わった。見舞いにこそ行かなかったが、昨日帰って来てからの彼の様子を見て、アスカはその変化を敏感に

感じ取ったのだ。

「あんな……………幸せそうに……………！」

そんなシンジの様子を見て、アスカの負の感情は増すばかりだった。

「起立、礼！」

時は飛んで放課後。ヒカリの号令で生徒達は土に挨拶し、次々と教室を出ていく。

「シンジ」

「あ、士先生。何ですか？」

荷物をまとめている最中に、シンジは士に話しかけられる。

「今日はエヴァの訓練か？」

「はい、そうですけど……」

「なら俺も一緒に行く。ネルフの施設には興味あるしな」

「ああ、それならいいですよ。行きましょう」

というわけで、士のネルフ見学が決定したのだった。

第拾巻話 其の巻 変わりゆくもの、変わらないもの（後書き）

士「門矢士のパーフェクトライダー教室、始まるぞ」

ユウスケ「つていきなり何なのその企画!？」

夏海「ここは作者さんが後書きをだらだら書くところじゃなかったんですか!？」

シンジ「あの、僕達はなんでここに」

アスカ「『生徒』つてワツペンがアタシ達に貼られているのはなぜかしら」

レイ「……………」

士「なに、このシリーズも長いから、新しい刺激を求めて平成ライダーの解説でもしてやるのかなと思ってな」

夏「確かに、この作品を読んでくれている人たちが、平成ライダーを全部見ているとは限りませんからね」

ユ「なるほど、それでライダーを知らないシンジ達を生徒として呼んだのか……ん?じゃあ記念すべき第一回はクウガの紹介」

士「というわけで、記念すべき第一回は仮面ライダー龍騎について解説するぞ」

ユ「ええ!?なんでさ!普通は放送順じゃないの?」

士「平成ライダーの方向性を決定づけたのが龍騎だからだ。じゃあ早速説明始めるぞ」

シ「はい」

ア「仕方ないわね」

レ「…ちよつと興味がある」

士「仮面ライダー龍騎とは、2002年から2003年まで放送された、平成ライダーの三作目だ。キャッチコピーは『戦わなければ生き残れない!』だ」

ア「何か物騒なキャッチコピーね」

士「主人公の名前は城戸真司。馬鹿ではあるが真つすぐな人間だ」

シ「あ、僕と同じ名前だ」

士「ある日もろもろの事情で城戸真司は仮面ライダーになる。だが、その世界にはライダーが十三人もいた」

レ「……十三人も？」

シ「それなら戦うのは楽そうですね」

士「ところがどっこい、そういうわけにもいかないんだなこれが。

確かにモンスターもいたが、ライダーの本当の敵は他のライダーだったんだからな」

ア「はあ！？何それ、なんでそうなるのよ」

士「最後の一人のライダーになったとき、どんな願いでも叶えることができる。そう言われた時、どうしても叶えたい望みがあったらどうすると思うっ？」

ア「あっ……それは」

士「城戸真司は最初戦いを止めようとしたが、やがてライダーの中に命に代えても叶えたい願いがある者がいることを知る。そうして悩みながらも、そいつは人を守るためにモンスターと戦う」

シ「……その人は、最後までなるんですか？」

士「それは教えられないな。結末は自分の目で確かめる」

ア「ふーん、でもそんなシンジなら、家のバカシンジと交換してくれないかしら」

シ「そ、そんなあ……」

士「確かにメリットはあるかもしれんが、料理が全部餃子になったりするぞ」

ア「……う、それは嫌ね。やっぱりこっちのバカシンジでいいわ！」  
シ「なんか複雑なんですけど……」

士「ちなみにこの小説を書いている作者は龍騎と魔法少女リリカルなのはのクロスオーバーも書いてるから、よかつたら読んでやっつくれ」

ユ「って宣伝かよ！さては龍騎を最初に紹介した本当の理由はそれだろ！」

士「ハテ、ナンノコトヤラ」

夏「土君！その懐に隠し持っている金一封は何ですか！さてはお金に釣られましたね！？」

士「さうて、今日はこれで帰るか」

ユ「って逃げるな！」

シ「あ、みんな行っちゃった。えくと、と、とりあえず、よかったら読んであげてくださいね」

ア「こんなんでもいいのかしらこの企画」

レ「……多分、問題ありだと思っ」

注）このコーナーは本編とは一切関係ありません。

第拾巻話 其の弐 Training and Strolling(前書き)

試験前だから書く気はなかったのですがWの興奮に負けました。

「……上昇してるわね、シンジ君のシンクロ率」

「ええ、それもかなりね。ハーモニクスも相当安定しているわ」

現在行われているエヴァのシンクロ率とハーモニクスのテストの結果を見た葛城ミサトと赤木リツコは、サードチルドレン・碇シンジの成績に目を見張っていた。元々トップだった彼のシンクロ率は、前回よりさらに5%も上がっていたのだ。

「……彼、やっぱり何かあったの？この前の一件で」

リツコがミサトに尋ねる。もちろん、一件とは前回の使徒との戦闘のことだ。

ミサトは前髪をいじりながら、満足そうに答える。

「まあ、一皮むけたってのは確かでしょうね」

「……随分うれしそうね」



「そりゃあ、一応保護者なんだから」

ミサトの言葉にはあ、とため息をつくりしむ。

「よく言うわよ、家事のほとんど押し付けてるくせに。保護されてるのはあなたの方じゃないかしら？」

「……はは、まあそれはそれとして」

そつごまかしたと思うと、急にミサトの表情が真面目なものに変わる。

「……問題は、もう一人の同居人の方よね」

「こちらはややダウン気味ね。この前の敗戦が響いてるのかしら」

二人が見ているのは、式号機パイロット、惣流・アスカ・ラングレーのテストの数値だ。シンジとは対照的に、彼女はシンクロ率もハモニクスもやや悪化している。

「……なんとかしないかね。早く仲直りできるきっかけをつかみた

いんだけど……今度買い物にでも誘ってみようかな」

そうつぶやくミサトの顔を見て、ふとリッコは違和感を感じた。何か、以前の彼女と比べて……

「……えらく積極的ね。もしかしてあなたも何かあった？」

「別に、ちょっと考え方を変えてみただけよ。ある人の提案でね」

リッコの問いに、ミサトは笑って答えた。

その頃。

「へえ、さすが巨大ロボットなんて造るところだな。なんか近未

来って感じ」

小野寺ユウスケは出入りを許されたネルフの建物内をぶらぶら見学していた。子供心を忘れない彼は、いかにも技術を結集した基地らしい場所をつきつきしながら歩いている。

「……負けました」

「ん?」

ふと若い男性の声が聞こえた方を見ると、休憩所らしきところで二人の男が座っているのが目に入った。やがて互いに礼をすると、若い方は休憩所から出ていった。もう片方の年配の人物を知っていたため、ユウスケはそちらに歩いていく。

「冬月さん、こんにちは」

「ああ、君か。今日は見学にでも来たのかな」

「はは、まあそんなところです」

ネルフの副指令・冬月コウゾウと気軽に会話するユウスケ。ひった

くりの一件のおかげで彼に対する冬月の印象はよく、さらにユウスケ自身の人のよさもあって、出会うのはまだ三回目だがこうして結構親しい雰囲気が出ている。

「さっきのひと、囲碁を打ってたんですか？」

机の上の碁盤を見ながらユウスケが尋ねると、冬月はうなずいて答える。

「そうだ。彼が一人で詰め碁をしている時に通りがかつたら、よかつたら打ちませんかと誘われてね。自信はあつたようだが、私の三目半勝ちだつたよ」

「へえ、冬月さん強いんですね。それじゃ、今度は俺と打ちませんか？ 自慢じゃないけど碁は結構得意なんですよ」

「ふむ……予定もないしかまわんよ」

OKの返事をもらつて、ユウスケは意気込む。ちなみに何故囲碁ができるかというと、想い人の趣味について行こうと頑張つたからであるのだが。

そうして、二人の対局が始まつた。しばらくはお互い無言で、パチ、

パチ、と心地よい碁石を打つ音だけが響く。

パチッ

「……冬月さんは、どうしてネルフに入ったんですか？」

その静寂を破ったのはユウスケだ。守りを固めながら、冬月にそう尋ねる。

パチッ

「……何故、か。君が旅をする理由を後で聞かせてくれるのなら話そう」

パチッ

「話します。あんまり壮大な理由があるわけでもないですけど……」

パチッ

ユウスケの言葉を聞いて、冬月はふっと笑う。

「私の教え子の女性が、ある研究をしていたのだが……若くして、ね。だから、私は彼女の研究の成果を、彼女が目指していたものを見てみたいと思っっているのだよ」

「……そうなんですか」

暮石を持ったユウスケの手が止まる。暗い話になってしまったこともあるが、それ以上に何となく、自分と似ているような気がしたからだ。

「俺の方はこんな感じですよ。惚れてた女の人が、もう少しで死んじやうって時に言ったんです。俺なら、世界中の皆を笑顔にできるって。だから、俺はいろんな世界をめぐる旅を始めました。……でも、今はその人の言葉とか関係なく、俺自身が皆の笑顔を守りたいって願っているんですけどね」

パチッ

そう言っつて、ユウスケは冬月の方を見る。その眼の真っすぐさに、冬月は彼の強さを感じた。目の前の青年は、途方もなく大きな理想を掲げて、それを自分の意志で、本気で目指しているのだ。

「……だが、語りに夢中で悪手を打ってしまったな」

パチッ

「ってああっ!?!し、しまった〜!」

冬月の指摘で痛恨のミスに気付いたユウスケは、先ほどの真面目な表情はどこへやら、すっかりあわててしまっている。

「あの、さっきのナシってことには」

「待ったは無しだ」

「そんなあ〜」

勝負の結果は「察してください」。

「やあ、綾波レイ君」

綾波レイは、いつかと同じ状況に出くわしていた。一人で通路を歩いていたところ、向こうから黒髪の青年が歩いてきたのだ。

「僕の言った通り、また会ったね。今度は僕もここで自由に動けるけどね」

「……………」

レイは黙ってその青年　海東大樹を見つめる。先日、ネルフのトップである碓ゲンドウから彼を含む数人の名前と写真を見せられ、彼らはここに入ることを許可されていると説明を受けた。

その写真は誰が撮ったのか、どれもひどいばやけ具合だったが、それぞれの特徴くらいはつかむことができたので、彼女は目の前の彼が海東大樹だと判断したのだった。



「前聞けなかったことを聞くよ。君、お宝を知らないかい？」

「お宝……？」

海東がいきなり言ったことの意味がつかめず、そのまま繰り返すレ  
イ。

「そ、お宝。この世界でとても価値があるとされるもの。君は訳有  
りな人間のようなだから、何か知ってるんじゃないかと思ってね」

レイに説明をする海東。しかし、それを聞いた彼女は無表情のまま  
答える。

「わからない」

「……本当に？」

海東が聞き返してくる。だが、答えは変わらない。なぜなら、彼女  
は知らないのだから。価値があるとは何なのか、それ自体をはつき  
りつかめていないのだ。

無言でコク、とうなずくと海東はやれやれというような顔つきになる。

「……なるほどね、どうやら本当に何も知らないようだ」

そこで一旦言葉を切った海東は、レイを真つすぐ見つめてこう言った。

「君、楽しいかい？」

……楽しい？楽しいって何だろう。プラスのイメージを持つことはわかるけど、具体的にはわからない。

碇指令と話している時は、楽しい？

碇君がたまにおかしなことを言う時は、楽しい？

「……………」

「じゃあ、僕は失礼するよ。早くお宝を見つけないとね」

無言のまま固まっているレイを尻目に、海東はすたすたと歩いて行った。

「……………で？何でこの俺がスイカの世話をしているんだ」

「まあ、折角来たんだからいいじゃないか、門矢君」

「……………もう汗だけです」

スイカ畑に水をまきながら文句を言う門矢土と、それをなだめる加

持リヨウジ。その隣で、碇シンジが額の汗をぬぐっている。

30分ほど前、エヴァの訓練を終えたシンジとそれを見ていた士が話していると、加持が声をかけてきたのだ。士と加持が自己紹介を終えた後、加持はちょっと付き合ってくれないかと頼んできたので、暇だったのもありホイホイについて行った。

……その結果、加持のスイカ畑を世話することになったのだった。

「きつといいスイカができるだろうから、そうなたら君達も食べ  
てくれよ」

「言われなくても、こんなことやらされたんだから当然食うっての」

「はは……じゃあ、そのときはいただきます」

加持の言葉にそれぞれ答える士とシンジ。士の相変わらずの物言いに、シンジは苦笑いをしている。

と、いつの間にか加持は作業の手を止め、その視線をまぶしい夕陽に向けていた。その顔には、どことなく物悲しいものがあると士には感じられて

「なあ、シンジ君、門矢君」

加持が口を開き、二人は黙ってそれを聞く。

「もし俺に何かあったら、そのときはこの畑、そして葛城をよろしく頼む」

「え……………」

いきなりの真面目な言葉にシンジは戸惑う。

だが、士ははっきり加持の方を見て言った。

「断る。よその世界の畑や女のことなんて知ったことか。…………お前の畑、お前の女なんだろう？お前が生きて、お前が守れ」

自己紹介の時、ミサトのことを友達だと加持は言っていたが、そのときの彼の表情と今の雰囲気から二人が特別な関係であると士は予想していた。

「……はは、これは一本取られたな」

土の言葉に一瞬目を見開いた加持だが、すぐに笑ってそう返した。

いや、まずはWのスタッフのみなさん、ありがとうございます！いい最終回だった……まつまり具合なら平成一じゃないでしょうか。まだ冬の劇場版が残ってはいませんが、とりあえず今の時点で個人的には平成ライダーの内でディケイドと並んで三位に入りました。ちなみに一位は剣、二位は龍騎です。

そして僕の作品の話に移りますが、今回は人物同士の絡み合いを複数描きました。ユウスケと冬の囲碁の話は、この後ちよっぴり続きがあります。それはまた今度。姐さんが囲碁好きとか完全に独自設定ですがご了承ください。

そして海東とレイ。価値あるものがわからないのは海東も同じなんですよね。だからお宝を集める。この二人の共通点はこの辺じゃないかなあと思っています。

士が加持さんに言ったセリフは好きな漫画から取ってきました。ヒントはタウンページ（鈍器）です。

後、後書きのライダー紹介は今後も不定期に続けていこうとは思いますが。

感想とか評価とかあれば、気軽に寄せください。作者が舞い踊ります。

では、また次回。

第拾壹話 其の参 僕がここにいること / Identity

〃  
〃  
〃

昼休みの屋上にふらふらとやってきたシンジは、そこで横になりS  
- DATから流れる音楽に耳を澄ましていた。

「……………」

目を閉じると、当然視界は真っ暗になる。外の世界のものは、何も見えない、何も聞こえない。今、彼は他と切り離された、誰も入って来ない自分だけの世界に

「何をしけた面しているんだ」

だが、シンジの耳からイヤホンを取り上げ、その世界を破壊する者がひとり。

「……………先生」



いつの間にか、土がシンジの隣に座っていた。首にはいつも通りカメラがぶら下がっている。……というか、本当に彼がそれを持っていない時を見たことがない。ひよっとして、寝る時も一緒なのだろうか。ぬいぐるみのように大事に抱いてたりして……

「……おい、お前何か失礼なこと考えてないか」

「い、いえ。別に」

心を読まれたのか、と焦りつつ、上半身を起こしながらジト目の土を笑って適当にごまかすシンジ。

「……まあ、そんなことはどうでもいいんだが」

そう言った途端、土の顔つきが真面目なものへと変わる。

「最近元気かと思ったら、まだ何か悩みごとでもあるのか」

こちらを射るような、真つすぐな視線でシンジを見る土。どうやら彼に隠しことはできそうにもない。

……それに、今の気持ちを誰かに聞いてほしいという願望もあるに

はあった。だから、シンジはぽつりぽつりと語り始める。

「……この前、トウジが大変な目に遭ったときに、先生のおかげで僕は自分の気持ちに気づけました。とにかく、皆を守りたいって」

士は黙ってシンジの語りを聞いている。

「でも、時々思っんです。……僕は、なんなんだろうって」

今までずっと心に溜めこんでいた感情を、シンジは吐露していく。

「僕が存在する意味って、存在する価値って、一体何なのか。……  
答えが、出ないんです」

幼いころ、父親に捨てられたあの日から感じていた。いつか、自分は誰からも必要とされなくなるのではないだろうか。

皆を守る。そのために生きることができると、シンジは強い人間ではないのだ。

「……って、こんなよくわかんないこと話しちゃって、先生も困りますよね」

話し終わったシンジは、場の雰囲気をつらそうに、はは、と小さく笑う。

だが、士の反応はシンジの予想とは違った。困った様子もなく、むしろ口元は少し緩んでいた。

「……そうか、お前『も』それで悩んでるのか」

「……………も？」

「俺も昔、お前と同じように悩んだ。色々あってな、この俺でさえもメランコリーになるような事態に陥ったんだ。……あの時は我ながら女々しかったな」

苦しみも、一度乗り越えれば思い出話となるというように、士はその時を懐かしむような表情をしている。

「……………先生も、そうだったんですか」

意外だ、とシンジは思った。彼の知る門矢士という人間は、いつでも自信満々で、ほとんど何でもできて、弱気になることなどないと、

そう感じさせる人物だったからだ。

「まああれだ。気づいてしまえば、本当に何てことはないんだよな、この問題は」

「え……………?」

驚くシンジに向かって、土は言葉を告げた。

「お前がそうやって悩んでて、俺がアドバイスしてやっている。つまりはそういうことだ」

「え?あの、それってどういう意味……………」

「それは自分で考える。こういうことは、自分で気づいてなんぼのものだ。他人に言われて理解できるものじゃない」

「は、はあ……………」

考えると言われても、シンジには今の言葉の意味がこれっぽっちも掴めなかったのだ。何日ぶんぶんうなっても、答えは出ない気がする

る。

「それはそうと、お前今日はエヴァの訓練あるのか？」

もう今の話は終わりだというように、士は急にそんなことを聞いてきた。

「…今日はすぐ終わる予定ですね」

「そうか。なら今日は俺の家庭教師の日に決定だ。昨日の小テスト、出来がひどかったしな」

「うえ！？あれまだ続いてたんですか！？」

一回目の授業で一悶着あり、その後使徒が来たりでてっきりうやむやになったとばかり思っていたシンジには、まさに寝耳に水だ。

「当たり前だろ。続けられない理由がないしな。じゃあ、放課後までに予定決めとけ」

そう言って士は持っていたS・D・A・Tを床に置いて立ちあがり、屋上から出ていこうとするが、去り際にシンジの方を振り向くと、

「せいぜい悩んでおけよ、シンジ」

と残して下に降りていった。

しばし士のいた方向を見つめていたシンジだが、再びさきほどのように寝転がり、S・D・A・Tの電源を入れようとす。

「……………」

が、なぜか途中でその気がなくなってしまい、そのまま目を閉じることもなく空を眺める。

青空の中を動く白い雲、そこらにいる鳥のさえざり。

そんな世界の中で、シンジはぼんやりと、昼休みが終わるまで横になっっていた。

「……………何者だ、貴様」

ゼーレの中心人物であり、人類補完委員会の議長・キール・ローレンツは、突如銀色のオーラから現れた男に驚きを隠せなかった。今彼がいる場所は、厳重な警備が敷かれており、部外者はまず入って来れないのだがら。

「私は鳴滝。お前達の人類補完計画に協力する代わりに、そちらもディケイドを倒すのに力を貸してもらいたい」

「何……………!?!?」

なぜこの男は人類補完計画を知っているのか。そう考えながらも、なんとか平静を保とうとしながらキールは答える。

「何故どこの馬の骨とも知れん貴様と協力しなければならぬ。それに、デイケイドとは何だ」

「……私に招き入れるだけの価値がないということか」

ある程度返答を予想していたのか、鳴滝は特に驚きもしない。

「明日、第三新東京市に人間サイズの化け物が現れる。そして、同時にデイケイドも現れる。それを見てから、もう一度私と協力するかどうかが決めてもらおう」

そう言い残して、鳴滝は再び出現したオーロラの向こうへ消えていった。

残されたキールは、しばらくの間唖然としたままだった。



次回、仮面ライダーディケイド エヴァンゲリオンの世界 第拾弐話

「くそ、何で使徒が出てるときにこいつらが出てくるんだ！」

「ウオオオオオオオオオン！！！！」

「し、シンジ君……！！」

「……バカシンジのことなんて、私には関係ないでしょ」

「お前に昔話をしてやるよ。一度すべてを失い、ボロボロになった男の話をな」

すべてを破壊し、すべてを繋げ！

第拾巻話 其の参 僕がここにいること / Identity (後書き)

オーズさんのこれからに期待です。個人的には掴みはオーケーだと思います。脚本の小林靖子さんの過去作である龍騎と電王も好きなので、とりあえずは安心して見ることにします。

さて、久しぶりに次回予告なんて書いてみたのですが、これはあくまで二個か三個に分割する第拾巻話全体の予告です。なのであしからず。

シンジがS・DATを聞かなかつた理由は、もちろんゲンドウが嫌いになったとか、そういうわけではありません。さあ、このシンジの心境を土との会話を踏まえて80字以内でまとめなさい……すいません冗談です。最近学校の試験とか模試とかが増えてきて参っているからついやっちゃいました。

感想とか評価とかあれば、気が向いたらでいいので送ってくれとうれしいです。

では、また次回。

第拾弐話 其の壱 緊急事態（前書き）

半月ほど更新できないでどうもすみませんでした。他の小説が終わりかけてたから終わらせて、その後は龍騎の方を書いてて……ようやくこっちに手がつきました。

第拾弐話 其の壱 緊急事態

土の意味深な言葉の意味をずっと考えていたシンジだが、結局答えは見つからず、そろそろ土が家庭教師に来る時間だ。

ピンポン

「はい」

約束の時刻の5分前に、チャイムが鳴る。勉強しなければならぬことに小さくため息をつきながら、シンジは玄関のドアを開け、そこに立っていた土を招き入れる。

「よう。じいさんはもうすぐ来るから、俺達は先に勉強しておくぞ」

「わかりました。今日は、何を作って来てくれるんですか？」

「シチューだ。まったく、いつもニンジン入れんなどってんのにあのじいさんは」

子供みたいな文句を口にする土。こんな感じだと、きつと栄次郎さんも大変だろう。

シンジがそんなことを考えながら自分の部屋に入ろうとした時、トイレからアスカが出てくる。

しかし、彼女はシンジと士を一睨みすると、そのまま彼女の自室へ入ってしまった。

「…何だ、あいつ。あいさつもなしか？」

士はアスカの態度が気に食わないようだ。

「……このところ、ずっとあんな感じなんです。ちょうど、前の使徒を倒した時から」

シンジは、彼女の部屋の方に目をやりながら、士に事情を説明する。

「ずっと、僕もミサトさんも避けてるみたいで」

「……避けている？」

「はい。……一体どうしたんだろう」

正直心配だとシンジは思う。少しだけ心の余裕ができたので、一層  
そう感じるのかもしれない。

「……………」

土も何か考えているのか、しばらくシンジの部屋の前で立ち止まっ  
たまだった。

翌日。

士は愛機・マシンディケイダーを人々の波とは逆方向に走らせていた。

先刻、非常事態宣言を告げるサイレンが鳴り響き、使徒がやってくる予定の位置を説明した。よって、ディケイドである士は当然その場所に向かっているわけだ。

「ユウスケは急いで来るだろうが……海東はあまり当てにならないな」

学校自体は休みだったが、教師に仕事がないわけではなく、士は面倒に思いながらも学校にいたため、ユウスケや海東とはまだ合流できていない。とはいえ、連絡を取らずとも、あのユウスケが戦いに行かないはずはない。

問題は海東だ。前は協力していたが、あれはお宝探しにたまたまネルフに忍び込んでいただけだろう。どこまでも我を貫く男だ。今回も数に数えていいとは限らない。

まあとにかく、今は使徒を倒すために戦地に向かうだけ

「 と言いたいところだが、どうやらそうもいかないらしいな」

マシンディケイダーがこれから走ろうとする道を、たくさんの緑の怪人　ワームが塞いでいた。サナギ体だけではなく、ところどころに成体も混じっている。

そして、そのワームの群れの先頭に立っている人間を、土はよく知っている。

「 鳴滝。また俺の邪魔をするつもりか」

「 その通りだ。お前は世界の破壊者、今度こそ旅を終わらせてやる！ 行け、ワーム達！」

憎々しげに土を睨みながら、鳴滝はワームに命令を下し、銀色のオーロラを出現させ、その中へ消えていく。

「 やれやれ。どっちが破壊者なんだか」



その執念深さに一種の感嘆をしながらも、士はベルトを装着し、デ  
イケイドのカードをバツクルに差し込む。

『KAMENRIDE』

同じ頃。

「こいつらはカブトの世界の……ワームか！」

ユウスケも、同じくワームの群れに足止めを食らっていた。

「とにかく、道を開けてもらっぞ！」

こんなところでのんびりしている暇はないと、腰にアークルを出現させるユウスケ。

そして、彼特有のポーズを取り

「……おや、僕の邪魔をするつもりかい？ワームさん達」

やはり別の場所で、海東もワームと対峙していた。非常事態宣言が出た時に街を出歩いていたため、ユウスケとは別行動となっている。

「言うておくが、僕の進む道は僕だけが決める」

ディエンドドライバーを構え、海東はそれにディエンドのカードを挿

入する。

『 KAMENRIDE 』

「 「 「 変身! ! 「 「 「 「

『 DECADE 』

『 DIEND 』

マゼンタ色の鎧を身につけし、世界の破壊者『仮面ライダーディケイド』  
イナ。

超古代のリントの赤の戦士『仮面ライダークウガ』。

シアン色を身に纏い、世界をめぐる者『仮面ライダーディエンド』。

三人のライダーの、それぞれの戦いが始まった。

「アスカ！駄目だ、そんなに突っ込んだら！」

第拾四使徒・ゼルエル。それは、今までのどんな使徒よりも硬く、強かった。まさに、想像を絶するレベルに。

ATフィールドを中和しているはずなのに、エヴァア三体で攻撃しても傷一つつかない。さらに追い討ちをかけるように、弐号機の両腕が一瞬ではね飛ばされた。

我を失ったアスカは、シンジの制止も聞かずに、一直線にゼルエルへと向かっていく。

『負けられない！もう二度と、負けるわけにはいかないのよ！！』

だが、そんな彼女の必死の叫びも虚しく、ゼルエルの鋭い触手が弐号機の首元に突き刺さり、それを遠くに吹き飛ばした。

「アスカ！！」

『神経回路の切断がぎりぎり間に合ったわ。今のダメージは感じていないはずよ！』

ミサトから通信が入り、シンジはこの状況の中一瞬だけほっとした。もし首を切られた感覚がフィードバックしたら、命を失いかねないはずだったからだ。

しかし、現状は悪化の一方。弐号機は脱落し、初号機と零号機の装甲にも着々とダメージが蓄積されていつている。

士達は一向に現れる気配がない。もしかすると、怪人とやらが出てきてそれと戦っているのかもしれない。

いずれにせよ、ここは自分と綾波で何とかするしかないとしんじは考える。

「綾波、僕があいつを引きつけるから、君が」

と、今の短い思考の内に、零号機の姿が視界から消えていることに気づく。一体どこへ

「っ!？」

辺りを見回すと、零号機の姿は発見できた。だが、それが抱えてい

るものにシンジは息をのむ。

……あれは、どうかんがえても爆発物じゃないのか。

零号機は、一直線にゼルエルのもとへ走る。

「やめるんだ綾波！そんなことしたら君が！！」

綾波が自爆するつもりだと気づき、必死に呼びとめるシンジ。だが綾波は返事をしてくれない。

「やめる」

この位置では、直接零号機の動きを止めることもできない。

「やめるおおおお！！」

シンジが叫んだ瞬間、零号機の抱えた爆弾がゼルエルを巻き込み大爆発を起こした。

もちろん、零号機も爆炎の中へと消える。

「綾波!!」

通信は、返ってこない。さらに、煙が晴れた光景を見て、シンジはさらに追い詰められる。

「そんな……………」

ボロボロの零号機に対して、ゼルエルは全くの無傷。あの爆発で、ダメージがまったくない…………？

再び、ネルフへと移動を開始するゼルエル。道をふさぐは 初号機ただ一機。

「くそっ……………」

目の前で仲間がやられていくのを、止めることができなかった。ただ、見るだけしかできなかった。

そんな自分のふがいなさに、シンジは拳を血がにじむかのように握りしめる。



「ちくしょおおおおー!!」

刹那、初号機は一気に間合いを詰め、ゼルエルに殴りかかる。あまりに唐突な動きに対応しきれなかったのか、そのままゼルエルは地面に倒れ込む。

言葉にならない叫びを上げながら、シンジは一気にたたみかける。

『初号機のシンクロ率、170、180…200を越えました!』

『何ですって!?!シンジ君、ちょっと……!!』

つながっぱなしの通信からマヤやミサトの声が聞こえてくるが、シンジの耳には入って来ない。

ただ、目の前の敵を倒すだけ

グシャッ

「……………!!」

その瞬間、ゼルエルの触手によって、初号機の右腕が吹き飛んだ。

「（負けるのか）」

このまま、負けてしまうのか？ そうなったら、この街は、みんなはどうなる？

「うわああああ！…！」

そんなことはさせないと、無意識に叫んだその時。

ドクン

シンジは、何かの鼓動を感じた。

「ちっ、やはりクロックアップは厄介だな……」

サナギ体をすべて倒したデイケイドだが、クロックアップを使う三体の成体に苦戦している。

「ならこいつだ」

『FORMRIDE FAIZ AXEL』

カードを一枚挿入すると、デイケイドは仮面ライダーファイズ・アクセルフォームへと姿を変える。

「十秒で決めてやる！」

『START UP』

その瞬間、土はワームと同じ超高速の世界に入る。こうなれば、もうこっちのものだ。

「らあっ！はあっ！」

次々とワームに蹴りやパンチを加える土。ダメージが蓄積し、ワームは三体ともクロックアップが解除される。

「終わりだ！」

『FINAL ATTACK RIDE F / F / FAIZ』

一瞬でいくつものフォトンブラッドのエネルギーがワーム達に突き刺さる。もう、逃げ道はない。

「はああああっ！！」

連続クリムゾンスマッシュが決まり、ワームは爆発し、粉々になった。

「超変身！」

こちらもクロックアップに苦戦していたユウスケだが、ペガサスフオームに変身してから状況が一気に変わる。

「……………そこだ！」

その極限まで研ぎ澄まされた感覚で狙い撃ち、一発で成体ワームを消滅させる。

「……………はあっ！！」

最後の一体も仕留め、ユウスケも何とか敵を倒しきった。

「地獄に墮ちる……………」

「汚してやる……………」

一方こちらは海東。ワームと同じくクロックアップできる仮面ライダーキックホッパーとパンチホッパーを召喚し、戦況を有利に進めている。

「ただ、こいつら暗いんだよね………残りは僕が決めるか」

『FINAL ATTACK RIDE D、D、D、DIEND』

地獄兄弟をカードに戻し、疲弊しきったワームの群れに必殺技のデイメンションシユートを放つ海東。ワームは避けきれず、すべて爆散した。

途中で邪魔が入ったものの、ユウスケや海東よりも先に戦闘が行われている場所に到着した士は、己の目を疑った。

「ウオオオオオオオン！！！」

「な、なんだあれは……」

そこには、見るも無残な姿になった使徒と、装甲を破壊し、その真の姿を露わにした初号機がいた。

「シンジ……」



第拾弐話 其の壱 緊急事態（後書き）

ゼルエル戦はエヴァ屈指の名シーンなのですが、この作品では色々状況が違っているのであまり盛り上げることができませんでした。むしろここからが大事だと思っています。

感想や評価などあれば、いつでもお寄せください。というわけで、また次回。

第拾弐話 其の弐 S e v e r e S i t u a t i o n

その真の姿を露わにし、咆哮する初号機を見ながら、冬月とゲンドウはつぶやく。

「始まったな」

「ああ……すべてはこれからだ」

「初号機に取り込まれた…!?!?」

その後、初号機は動きを止め、これをネルフが回収した。ネルフに向かった士とユウスケ、海東は、赤木リツコから今のシンジの状態を聞かされる。

「ええ。シンクロ率400%以上……この過剰適合によって、シンジ君は初号機と融合してしまった。エントリープラグに残っていたのは、空っぽのプラグスーツだけだったわ」

「それで、シンジは助かるんですか!?!?」

予想もしなかった事態に焦るユウスケは、リツコに強い口調で問いただす。

「……方法がないわけではないわ。初号機から、彼の魂だけをサルベージするの。そうすれば、肉体は魂に定着して、シンジ君を切り離すことができる」

「…何だか、途方もない話だな。だが、簡単じゃないんだろう?」

いくつもの世界をめぐってきた自分たちでさえ、人間の魂を取り扱うような場面には出くわしたことがない。さらにリツコの表情が険しいことから、海東はこの作戦が必ず成功するわけではないということを読み取る。

「……その通りよ。もしかすると、彼は二度と戻ってこないかもしれない」

「……で、そのサルベージの準備にはどれくらいかかるんだ」

士もそのこととはある程度予想していたのか、表情を変えずに別のことを尋ねる。

「一ヶ月、といったところかしら」

「……まさか、こんなことになるなんて」

リツコと別れ、通路を歩くなか、ユウスケが言う。言葉の端々に心配と、ワームの相手に時間を取られ、助けることができなかった自分への後悔が表れている。

「俺達がもっと早く来ていれば……!!」

「それはどうかな。聞いたところじゃ、今回の使徒はどんな攻撃も効かないとんでもないやつだったらしい。ライダーの力があつたところで、役に立ったかどうかは怪しいね」

ユウスケの言葉にそう返す海東。こちらは真剣な顔をしてはいるが、相変わらず何を考えているのかわからない。

「とにかく、後はネルフの連中に任せるしかない。問題が専門的すぎるからな」

士はあくまで冷静に現状を述べるが、いつもの彼よりも声のトーンが大分落ちている。平静を装っているように見えても、やはりシヨツクなのだ。

「…俺達は、何もできないのか？」

「……せいぜい、いるかどうか分からない神に祈るくらいだな」

ユウスケの嘆きに、士はそう答えた。

シンジが初号機と融合してから5日が経った。土はいつもと変わらず、生徒達に教鞭を振るっている。

「土先生、シンジの奴はどうしたんや？」

「いつもの病院に見舞いに行ってもいないし……何かあったんですか？」

放課後、土はトウジとケンスケに取り囲まれてしまった。五日間も音沙汰なしの上、どこにいるのかもわからないとなれば、心配になるのは当然だろう。

今まで適当にはぐらかしてきたが、これ以上しらを切れば、よけいに彼らの不安をかき立てることになる。最悪、シンジは死んでしまったのではないかと考え始めるはずだ。

「（……仕方がない）シンジはちゃんと生きている。だが……今、エヴァに取り込まれてしまっている」

「そ、そんな……！」

ケンスケはその事実には絶句し、

「おい！それじゃシンジは、シンジはどうなるんや！」

トウジに至っては、胸ぐらをつかもうとする勢いで土に迫ってくる。予想通り、相当な衝撃だったようだ。

「落ち着け、助かる方法がないわけじゃない。ネルフがあいつを救出しようとする準備をしている。それまで約一ヶ月かかるがな」

「……………」

土の言葉を聞き、二人は沈黙する。一ヶ月も準備がかかるということとは、間違いなく大変な作業なのだろうと、彼らにも何となく理解できたのだ。

「おいおい、そんな暗い顔してどうすんだ。お前ら、あいつが戻っ



てこないって思ってるのか？」

「なっ、別にそういうわけや」

「だったら」

トウジの言葉を遮って、土は静かに言う。

「信じる。碇シンジは必ず帰ってくる。友達のお前らが信じてやらないんじゃ、あいつも戻ってくる気なくしちまうぞ？」

いつもの意地悪い表情の土を見て、トウジ達も少し元気になったようだ。

「…そうやな、あいつは必ず帰ってくる」

「今度、一緒に横須賀行くなって無理やり約束したしな！戻って来てもらわないと困るよな」

その様子を見て、土はふっと笑うのだった。

その後、30分ほどで雑務を片づけた土がバイクに乗って写真館への道を走っていた時、道のわきを元気なく歩く少女の姿を見つける。

「よう、惣流。まだ家に帰ってなかったのか」

バッグを持っているところから見て、家に帰る途中なのは間違いない。アスカの方はこちらを一目見ると、そのまま向こうに歩いていくようにする。

「おい、無視はないだろう。この俺が声をかけてやっているというのに」

「……………ない」

「はっ」

アスカに近づいた士は、彼女が何かをつぶやいているのに気づく。

「負けられない、もう本当に後がない。これ以上負けたら、アタシは……」

「っ、おい！」

その普通でない様子を見て、士は思わず大声を出す。それに驚いたのか、彼女はつぶやきを止める。

「……なによ」

士を睨みつけるアスカ。だが、そこにいつもの覇気は全くない。

「お前、この前からずっと自分の戦闘のこと考えてんのか」

「……そうよ、悪い？」

彼女の答えを聞いて、士はふーっとため息をつく。

「いいか、エヴァのパイロットはお前ひとりじゃないんだ。自分のことで悩む暇があるんなら、今は初号機の様子でも見に行っちゃればいいんじゃないのか」

「……うるさいわね。バカシングジのことなんて、私には関係ないですよ……」

「っ！お前……」

その物言いに思わずアスカの肩をつかむ士。

だが、そこで彼はあることに気づく。

「おい、お前熱あるんじゃないのか。熱いぞ」

彼女の肌から伝わってくる温度が、明らかに高いのだ。よく見ると、アスカの目は虚ろになっていて、頬も少し赤くなっている。

「な、何言ってるのよ、熱なんて……それより、気安く触らな  
」

ふらっ

その時、アスカの体から力が抜け、その場に崩れ落ちる。それを受け止めて、土は彼女が気を失っているのを確認する。

「まったく、普通こんなになる前に何かするだろう……」

そうつぶやきながら、土はシンジの言っていた言葉を思い出す。

『ずっと、僕もミサトさんも避けてるみたいで』

そして、いつも自信満々なアスカの態度と、今しがたの彼女の言葉。

「…なるほどな、大体わかった」

気を失っている人間をバイクに乗せるのは危ないので、とりあえず彼女を背負いながら、土はつぶやく。

「まったく、手間のかかるやつだ」

ミサトがいるかどうかかわらないので、とりあえずは写真館に連れていこうと、土は足を動かし始めた。

「昔の自分を見ているようで、腹が立つ」

第拾弐話 其の弐 Severe Situation (後書き)

士「門矢士のパーフェクトライダー教室、第二回は『仮面ライダーW』だ」

ユ「またクウガじゃない……」

夏「Wと言えば、この前放送が終了したばかりですね」

シ「それで、どんな話なんですか？」

ア「Wだけに2人で変身するとかじゃないわよね」

士「よくわかったな。その通りだ。この俺、ディケイドの後を引き継いで新たな10年の始まりを飾ったWは、2人でひとりの探偵が2人でひとりの仮面ライダーとして戦う物語だ」

ア「ってほんとに2人でやるの!？」

レ「…なんだか、不安」

ユ「確かに、最初見た時はなにこの半分こ怪人?とか思ったな」

士「そのコンセプト、名前、そしてデザインから、放送開始前、また開始直後は『仮面ライダーW』<sup>ワックス</sup>とも呼ばれるなど、色々ネタにされていた」

シ「いきなり前途多難だったんですね……」

士「しかし、いざ物語が進んで行くと、その巧妙なストーリー、平成ライダーではなかなか見られない『街を守るヒーロー』として仮面ライダーの描かれ方などが評価され、どんどんファンが増えていった。途中参加の二号ライダー・アクセルも、前評判は決してよいとは言えなかったが、最終的には大人気となったわけだ」

レ「つまり、うまくいったということ？」

士「そういうことだな。玩具の売り上げも好調、夏の劇場版もCMに出すほどヤフーのユーザーレビューが高く、最終回もきれいにまとめで、好評の内に放送を終了した」

夏「冬には劇場版も控えているんですね」

シ「へへ、見事平成ライダーの新たなスタートを切ったってわけで

すね」

ユ「そう、まさに最高に振り切った作品だったんだ」

ア「確かにね。普通冬に映画あるんだったら客集めに真の最終回は映画で！なんてしそうなのにね」

士「ギクッ！」

ユ「そ、それは……」

夏「あ、あはは……」

シ「あれ？先生どうかしたんですか？」

士「……俺に質問をするな」

次回もよろしくお願いします。



第拾弐話 其の参 独白 / Tears

……あれ？

アタシ、今どうなってるの？

……誰かの、背中に乗ってる？

なんだか、雨が降ってて冷たいけど……

この背中だけは、温かいかも。

「ん……………」

「やっと起きたか。一時間は眠ってたぞ」

アスカが意識を取り戻すと、まず目に入ったのは知らない天井だった。どうやらベッドの上で寝ているらしい。続いて声が聞こえた方を見ると、椅子に座ってこちらを見ている士の顔が視界に入る。

「アタシ……………」

「まったく、お前のせいでとんだ目に遭った。いきなり倒れたお前を背負って写真館まで運ぶ羽目になるわ、しかもその途中で雨まで降り出して。拳銃の果てにバイクを取りに戻らなきゃならなかったからな。さあ、俺の時間と労力を返せ」

……………これがいきなり気を失った人間にかける言葉だろうか。倒れた

側が言うのもなんだが、もう少し気遣いというものがあってもいいと思うのだが。

「……別に、運んでくれなんて頼んでないでしょ」

「お前、本当に性格悪いな」

「アンタにだけは言われたくないわ」

お互いなぜか喧嘩腰になり、あわや口論になるつかといつといつかで、アスカは頭がとろんとしてくるのを感じる。

「あ、あれ……」

「熱が39 ある。安静にするんだな」

アスカが寝ている間に使ったと思われる体温計をちらつかせながら、士はぶっきらぼうにそう言う。

……意見に従うのは気に食わないが、こんな状態ではまともに歩けそうもないので、今は素直に寝ることにする。

「……………」

「おい、まだ眠れないのか」

「……………うるさいわね」

十分後、いまだに眠りに落ちないアスカを見て、士ははあ、とため息をつく。

眠れないのには、理由がある。ずっと頭の中があることではいっばいなのだ。それはもちろん、以前からアスカをずっと苦しめるづけていることで。

「…仕方がない。ガキは何か話をするとうまく眠れるらしいな」

「誰がガキだって」

言い返そうとしたアスカだが、土の表情を見て言葉が途中で止まる。なぜだか、彼はとても真剣な顔つきになっている。

「お前に昔話をしてやるよ。一度すべてを失い、ボロボロになった男の話にな」

あれはいつのことだったか。気がつくと、男は地面に寝そべっていた。頭の中を探っても、自分の名前以外は何も思い出せない。そんな状態ではあったが、そいつは飢え死にしないよう、ある家に住みつくことにした。

それから時間が経ったある日、男は突然世界の崩壊の危機を知らされた。その知らせによると、男は様々な世界を巡ってその世界を救っていかねばならないらしい。だから、男は旅に出た。そこに自分が何者なのかの答えがある。そんな淡い期待を抱きながら。

そいつは旅の中で、いろんなやつと出会った。時にはぶつかり、い

がみあつたりもしたが…まあ、何だかんだで旅はうまく行っていた。そいつ自身も、徐々に『絆』なんてものが生まれていると感じていた。

……だが。

突然、男は教えられた。自分こそが、世界の崩壊の原因だと。だから、その存在を消す、と。

男はすべてを失った。まさに、何もかもを。本当に、残っているものなど何もなかった。

そして　　そいつの物語は終わりを告げた。

でも、そうじゃなかった。

男とともに、以前戦った者たちは、そいつのことを想い続けていた。『仲間』の強い思いで、男の物語は再び動き始めた。

そして男は感じた。自分だけでは、決して何もできなかっただろう。支えてくれる仲間がいたからこそ、強くなれたんだって、な。

一通り話し終えた土は、アスカの反応を待っているのか、静かに黙っていた。アスカの方も、まず話の内容を理解するのに時間を取られ、理解したらしたで今度はその内容に驚くばかりで、二人の間にはしばらく静寂が訪れた。

やがて、アスカが口を開く。

「今の話って、もしかして……」

「多分、お前の思っている通りだろうよ」

ということとは、今の話は実際に門矢士が経験したことなのだ。目の前の青年がたどってきた壮絶な道のりに、アスカは呆然とすると、同時に、何か自分と近いものを感じていた。

「俺も、今のお前と同じだった。仲間などいらないと強がっていても、それはまさに本心の裏返しだった。俺は何者なんだ？いつか、

すべてに裏切られ、すべてを失ってしまうんじゃないか？不安定な俺という存在に、いつも不安を感じていた」

……似ている。事情こそ違えど、士も自分と同じだったのだと、アスカは素直にそう感じた。

「そんな俺を救ってくれたのが、仲間だった」

そこで士は一旦言葉を切ると、立ちあがってアスカの寝ているベッドに近づいて行き、彼女の顔を見つめる。

その目は不思議な雰囲気を持っていて、それでいて真っすぐで、何より強そうだった。

「どうしてそんな考え方をするようになったのか、俺は知らない。

……だがきつと、もっと誰かに頼っても、甘えても、いいと思うぞ」

無愛想ながらも、その言葉はとても優しいもので、熱を出したせいで薄くなっている

アスカの心の壁を溶かすには十分で

「……泣いてるのか？」



「え？」

士に言われて、手を顔に当てる。

すると、目のあたりからすーっと、液体が流れてることに気づく。  
あわてて止めようとするが、

「あ、あれ……………と、とまらない……………」

「止めなくていいんだ。泣きたいときには素直に泣けばいい」

その言葉で、何かが壊れた気がした。

「……………ひぐっ……………ひぐっ……………ああ、もう……………どっして、……………  
……………」

泣きじゃくるアスカ。士はただそれを見守り、時々ハンカチで涙をぬぐってくれていた。

「……落ち着いたか？」

「……………」

十分ほど経って、ようやくアスカは泣きやんだ。時計の短針はもう七のところを差し掛かるうとしている。

「じいさんになんか作ってもらったか？」

そう言って、土は腰をあげ部屋を出て行くつもりをする。

「あつ、ちよっと……………」

それを引きとめるアスカ。その頬には少し朱が差している。

「…あ、アタシ、土が作った料理が食べたい」

初めて名前を呼び、突拍子もないお願いをするアスカ。土も少し驚いた表情をしている。

「……だ、ダメ……？」

「…別に構わん。ちょっと待ってる。とびきりうまいのを食わせてやる」

その答えを聞いて、アスカの顔は安堵とうれしさで満たされる。

「あ、ありがとう……」

「ああ、感謝しろよ」

土はフツ、と小さく笑うと、そのまま部屋を出て行った。

次回、仮面ライダーディケイド エヴァンゲリオンの世界

「…アスカ、一日休んでる間に何があったんだろう」

「まるで別人やな」

「君は……？」

「僕は、碓シンジ」

「やっと見つけたよ、この世界のお宝を」

すべてを破壊し、すべてを繋げ！

第拾弐話 其の参 独白 / Tears (後書き)

まず一言。

L A S 派の方、申し訳ありません！書いていたらいつの間にかこんな展開になっちゃいました。でも、別にラブラブにするとかそんなことは決していないので、どうかお許しを。

では、また次回。

第拾参話 其の巻 大きな変化

昼休みの学校というのはやはりにぎやかなもので、それは洞木ヒカリが委員長を務めるクラスでも同じことだ。学食組が抜けた分、他のクラスから何人かが弁当を持ってきて、友人と一緒に昼食をとっている。

勉強という枷から一時解放され、己の中の三大欲求のひとつを満たすことができ、かつ友達と楽しく話せる時間。そういうわけで、ごく少数を人間を除けば、誰もが元気な表情をしているものなのだが。

「あれ？ヒカリ、お弁当食べないの？」

ともに昼食をとっているアスカが、なかなか箸が進まないヒカリに声をかける。

「あつ、いや、ちょっと考え事してただけ」

「考え事？おやおや、ひよっとして三バカトリオの頭領さんのこと？」

「なっ！？ち、違うわよ！」

ヒカリはぶんぶんと首を横に振るが、アスカはにやにや笑ったままだ。

「はいはい。んじゃ、アタシちょっとトイレ行ってくる」

そう言って、アスカは椅子から腰をあげて教室から出ていく。その後ろ姿を見送った後、ヒカリははあ、と大きなため息をつく。

「…誰のことを考えてたと思ってるのよ」

そう。ヒカリが悩んでいるのは、別に鈴原トウジのことではない。

……いや、確かに彼についても色々考えることはあるが。

だが、今一番の関心事は、他ならぬアスカ自身のことなのだ。

「……アスカ、一日休んでる間に何があったんだろう」

このところずっと、アスカはイライラしっぱなしで、彼女の周りは常にピリピリした空気が張り詰めていた。ところが、昨日休んでの今日は、そんな様子などまったくなく、いつものように快活そのものだ。

友達としては、もちろん彼女が元気になったことはとてもうれしい。  
うれしいのだが

「…明らかに、変わりすぎよね」

『ある点』におけるアスカの大きな変化に、彼女は混乱しているの  
である。

時は少し遡り、その日の朝。

教室に到着したヒカリが、いつものようにバッグから筆記具などを  
取りだしていたとき。

「おはよ、ヒカリ！」



明るい声で挨拶してきたアスカに、ヒカリは一瞬驚く。無理もない、ここのところ彼女は様子が変で、口数も明らかに減っていたからだ。

「あ、アスカ……？」

「ん？何よその数年ぶりに親友に出会ってびっくりしているような顔は。挨拶くらいは返しなさいよね」

久しく聞いていなかった、からかうような彼女の声。その声によって、ヒカリの心は安堵に包まれる。

「おはよう、アスカ」

一体何が理由でイライラしていたのか、どういっわけで元気になったのかはさっぱりわからないが、それでもアスカが元に戻ってくれたということがなによりうれしかった。

それから、久しぶりに友達同士の他愛もない会話が続いた。

と、ここまではヒカリの気をもむようなこともなかったのだが。

「よう、惣流、洞木。ちゃんと宿題やってきたか？」

強烈な個性を持つ担任教師の介入によって、彼女は信じられない光景を目にすることになる。

「先生、おはようございます」

「おっはよー士！昨日は愛ある看病ありがとう！」

ヒカリの挨拶を遮って、アスカが大きな声でそんなことをのたまった。

「おい、この俺がいつ愛ある看病なんてしたんだ、今すぐ訂正しろ」

「え？だって一日中寝ているアタシのそばにいてくれたじゃん」

「あれはやることなかったから仕方なくああしてただけだ、変な勘違いをするな」

「またまた〜」

「(……え？な、ナニコレ？現実なの？夢じゃないの?)」

目の前で繰り広げられる会話に、ヒカリは口をあんぐり開けざるを得ない。

第一に、アスカは土のことを名前で呼んでいただろうか。第二に、一日中看病とはどういうことか。

第三に、なぜアスカはあんなにフレンドリーに接しているのか。

次々と噴き出してくる疑問の数々。もちろん、それに対する答えなども出てくるはずがない。

「今度はアタシが何か料理作ってあげるわ」

「砂糖と塩を間違えるような人間の作ったモノなんて食えるかよ」

「なっ……アレはたまたまよ！アタシが本気になれば、ずっとおいしいものが作れるんだから……」

土の指摘に顔を赤らめながら、上目遣いで反論するアスカ。常に強

気な彼女がこんな表情を見せた時など、ヒカリは今までお目にかかったことがない。

「（な、なにがどうなって……………）」

と、ここでアスカと士の視線が、すっかり置いてけぼりになっているヒカリに向けられる。

「……………どうした洞木。朝から口開けて間抜けな顔してるが」

「何かあったの？」

「（それはこっちのセリフよ！…！）」

ヒカリの魂のツッコミはしかし、口から飛び出すことはなかった。

ひとりで考えていてもらちが明かない。朝の出来事を一通り思い返したヒカリは席を立ち、近くでがつつ弁当を食べている少年の元へ向かう。

「ねえ、鈴原」

「おお、委員長。今日の弁当もうまいで。ありがとさん」

「ど…どういたしまして」

笑顔でお礼を言ってきたトウジに、ヒカリは少し頬を朱に染める。

ヒカリは鈴原トウジに対して、いわゆる恋心なるものを抱いていて、彼の弁当を作っているのもアプローチの一環なのである……当の本人はまったく気づく気配がないのが少し悲しいが。

気を取り直して、本題に入る。

「ねえ…どう思っ？」

「ん？何がや」

「惣流のことだろ」

ヒカリの指した事柄がわからないトウジに、彼と一緒に昼食をとっていたケンスケが説明を加える。こういうところで、彼は妙に勘がいい。

ケンスケの言葉を聞いたトウジはポン、と手を叩いて口を開く。

「ああ、惣流か……確かに、まるで別人やな」

「昨日何があったんだろうな」

トウジもケンスケも、やはりアスカの変化を異常だと感じているようだ。色々と鈍いトウジがはつきり気づいているのだから、クラスものは全員それを認識していると見て間違いない。

「委員長も理由知らんのか？」

「うん……まあね」

「そうか。ワシも理由知っとつたら、委員長に恩返しできるんやけどな」

首をかしげるヒカリに、トウジも残念そうな表情になる。

が、ここでヒカリの頭の中で電球が光った。

「鈴原。今、恩返しするって言ったよね」

「お、おう……」

いきなり表情を変えたヒカリに、トウジは少し動揺する。

「じゃ、じゃあさ……これからは『委員長』じゃなくてさ……その……」

「?何や、声が小さくてよう聞こえんぞ」

「だから!その、下の名前で呼んでくれない?」

自分の顔が馬鹿みたいに熱くなるのを感じながらも、何とかヒカリはその言葉を言いきった。なかなか言い出せず、胸に秘めていたその言葉を。

「へ？下の名前？い、いや……別に構わんけど。なんでそれが恩返しになるんや？」

「ひゃうっ！？あ、そ、それは………」

予想されていた返答。だが、この機を逃すまいと勢いで言ってしまったヒカリは、ただあたふたすることしかできない。

「バーカ。恩返しする側に理由を聞く権利なんてないんだよ」

そんな彼女の窮地を救ったのは、横で黙っていたケンスケだった。

「…まあ、それもそうか。じゃあ……『ヒカリ』でええか？」

ドキン、とヒカリの胸が高鳴る。当然、心の中では歓喜の踊りが始まっている。

「…うん。じゃあ私も『トウジ』って呼ぶね」



「お、おう……って、何か照れくさいな」

「……やっぱり俺ってこういう立ち位置なのかなあ。いいなあ……青  
春してるヤツって」

脇で小さくつぶやくケンスケの声が聞こえた気がしたが、ヒカリは  
心の中で彼にお礼を言うだけだった。

第拾参話 其の壱 大きな変化（後書き）

話が進んでいない……だけども分仕方ないんです。アスカの描写は必要だし、バルディエル戦前後であんなにプツシュしたトウジとヒカリをほっとくわけにもいかないでしょう。次回はシンジのサルベージまで行きます。

感想や評価などあれば、気軽に寄せてください。

では、また次回。

もうすぐ一周年なんだけど、いつ終わるんだろう…

第拾参話 其の弐 A b o y i n t h e w o r l d (前書き)

オーズが… 駅伝になっていただと………？

関係ないけど今年の日本シリーズ結構すごくないですか？ロツテの  
粘りすごくないイカ？

第拾参話 其の弐 A b o y i n t h e w o r l d

「……ようやくか」

月日は流れ、碇シンジがエヴァンゲリオン初号機に取り込まれてから約1ヶ月。

赤木リツコの言葉通り、彼の魂をサルベージする計画を実行するのにここまで時間がかかった。

今まさに行われているその作業を、門矢士は静かに見つめている。

長かった、素直にそう感じる。ひとつの世界にここまで長居したことなく、『最初の世界』以外ではかつてなかった。

さらに、エヴァの知識がない彼にとっては、何もできなかったこの1ヶ月は、余計にもどかしく思われたのかもしれない。

「……………」

士の隣では、2人の少女がサルベージの様子に目を向けている。

心配そうな表情を浮かべるアスカと、相変わらずほほ表情を変えない綾波レイ。

この組み合わせが普通に隣合わせで立っていることなど、以前ならばまずあり得ないことだ。できる限りアスカが距離を置こうとしたはずだ。

それが可能になったのは、やはりアスカという少女が変化したということなのだろう。

「……………」

ただ、まだ仲よく話す、ということまではできないようだが。

「（こっちも問題は山積みか）」

レイの顔をちらちら見ながら黙っているアスカから視線を戻し、士は再び初号機を眺める。

幸い、あの戦い以降使徒はやって来ていないが、いつまた襲撃が起きるかはわからない。

「……早く戻ってこい、シンジ」

碓シンジは、電車の座席に座っていた。夕陽が差し込む中、ガタンゴトンと車両が小刻みに揺れている。

そして、向かい側の座席には、ひとりの少年が座っていた。

その姿かたちを、シンジは誰よりも知っている気がした。

「君は……………」

「僕は、碇シンジ。心の中で君を見ている。』もっぴひとりのシンジだ  
」

なぜならば、今名乗ったその少年は、自分とまったく同じ姿なのだから。

「…僕は一体……………」

「君には  
」

シンジの言葉を遮るように、』もっぴひとりのシンジ』は話を続ける。

「君には、2つの道がある。意識を覚醒させ、元の世界に戻るか。それとも  
」

』もっぴひとりのシンジ』の音が、一層低くなる。

「このまま、戻らないのか」

「……………っ!？」

その言葉に、シンジは思わず息をのむ。目の前の少年は、紛れもなく自分自身だ。つまり、

「……………生きる意味を、自分の存在価値を見いだせない世界に、もう一度戻るの?」

彼が言っていることは、己の心の声そのものだ。間違いなく、碇シンジという人間が抱えている数え切れない感情の内のひとつなのだ。

そんな自分の声を聞いたシンジは、

「……………戻るよ」



それでも、はつきりとそう言いきった。

「……ど、どうして？」

『もうひとりのシンジ』が声を荒げる。シンジの答えが信じられな  
いといった表情だ。

「何となく、わかった気がするんだ」

不思議なことに、今のシンジの頭の中は、おかしなほどにすっきり  
していた。まるで長い間眠っていて、その間に色々な出来事・考え  
が整理されたかのように。

「人間は、決してひとりじゃ生きていけない。……でも、逆に言え  
ば、生きている限り絶対に誰かと関わりを持っているってことなん  
だ」

先日、門矢士が言っていたことの意味が、ようやくつかめてきた。

「だから、人は誰かを支えて、そして誰かに支えられて生きていく。  
僕だって多分そうだ」

例えば、鈴原トウジや相田ケンスケが碇シンジの友達になってくれたように。

例えば、碇シンジが鈴原トウジを使徒から救ったように。

「能力も考え方も、何もかもが違う人同士が、持ちつ持たれつ進んで行くってというのは……きっと、すごく価値あるものなんじゃないかと思う」

少し間を置いて、シンジは目の前の自分に対してはつきりと言う。

「だから、僕はここにいていいんだ」

しばしの間、沈黙が2人の間を支配する。

「……ここにいて、いい……？」

その沈黙を破ったのは、『もうひとりのシンジ』だった。

「そんな……それだけの理由でそんなことが言えるのか！？人と人が支えあう？そんなもの、いつ壊れるかわからない！いつ大切な人との関係がなくなってもおかしくないんだ！ある日突然、予想もし

なつた時に！」

悲痛な叫びが、シンジの記憶を呼び覚ます。

幼いころ、突然親戚の家に預けられたこと。父親に捨てられたと思  
い、いつまでも泣きじゃくったこと。

いつ大切なものが壊れるかわからない。それは、よくわかっている  
ことではないか。

「言えるのか。…元の世界にいてもいいって、言いきれるのか！」

「……………」

シンジの頭の中で、様々な出来事が思い返される。

その中には、大きすぎる負の記憶があつて。

「……………間違つてた」

「っ、だつたら……………」

「間違ってたよ。』ここにいていい』じゃない。僕は』ここにいたい』んだ」

『もうひとりのシンジ』の顔が、おおきく歪む。対するシンジは、静かに言葉を紡いでいく。

「士先生に出会って、僕の世界は変わったんだ」

参号機が使徒に乗っ取られたあの戦いの後から、シンジの見えるものは変わった。

ほんの10日ほどの間だったけれど、それでも確かに、シンジはそれを感じることができたのだ。

「今まで見えなかったものが、見えるようになった。僕の世界は、少しだけかもしれないけど、よくなったんだ」

だからこそ、思う。

「そんな世界を、もっと見てみたい」

前を見据えて。

「いろんな人と、触れ合いたい」

はつきりと、言える。

「この世界を、もっと好きになりたい」

『もうひとりのシンジ』が消えていく。同時に、周りの景色も崩れ始めた。

シンジの精神は、自らの内から抜け出し。

傷だらけの、だげどどこまでも広がる、大きな世界へ向かっていく。

「…………ん」

意識を取り戻したシンジは、自分が裸で、そして強く抱きしめられているのに気づく。

「あ……………」

目を開けると、葛城ミサトが彼の胸のあたりで泣きじゃくっていた。

それを見て、シンジは状況を理解する。

帰って来たんだ、と。

視線を動かすと、門矢士がいつもの意地の悪そうな笑みを浮かべている。

綾波レイが、じーっとこちらを見つめている。

惣流・アスカ・ラングレーが、シンジの裸を見ないようにしながらも、何とかこっちを見ようとしている。

そんな光景を見て、シンジの口からは自然に言葉がこぼれていた。

「  
ただいま」

第拾参話 其の弐 A b o y i n t h e w o r l d (後書き)

ようやくシンジ復活です。つか心理描写疲れた……ポキヤ貧で想像力のない作者にとっては相当辛いものでした。内面世界での2人のシンジの会話について思うことがあれば、ぜひ感想で伝えてください。これでいいのかどうか、参考にしたいので。

次回は久々に彼が登場。これからも原作破壊は続きます。

では、また次回。



第拾参話 其の参 大切なもの / Treasure (前書き)

クライマックスヒーローズ買ってみようかな…… BGMカス  
タムできるらしいし。これでカブト並のクオリティがあれば神ゲー  
確定なんだけどなあ……

## 第拾参話 其の参 大切なもの / Treasure

「拉致されたつて……副司令が!？」

諜報部の男から伝えられた突然の知らせに、葛城ミサトは驚愕する。今より2時間前、自分達の署内を最後に、冬月コウゾウ副司令が消息を絶つたというのだ。

「あなた達諜報部は何をやっていたの？」

彼はそこいらにいる老人とはわけが違う。使徒という脅威に対抗しうる唯一の機関・ネルフのナンバー2なのだ。当然護衛も付いていないはず。

だからこそ、そんな状況で、拉致が起こったということは

「身内に内報、および扇動した者がいます。その人物に裏をかがれました」

諜報部の男が答える。…そう、スパイがいたとしか考えられないのだ。それも、ある程度の腕を持った。

「諜報二課を煙にまける奴……まさか」

そして、ミサトはそれができる人物を知っている。常に危ない橋を渡り続ける、ひとりの男を。

「 加持リョウジ。この事件の首謀者と目される人物です」

……当たってほしくない予想ほど、よく当たってしまうものだ。特に、こんな世界にいればなおさらのこと。

これで、諜報部の連中がなぜここに来たのかもわかった。

ミサトと加持は、大学以来の親しい仲だ。彼女が加持を手助けする可能性を考慮して、事件が解決するまで身柄を拘束するつもりなのだろう。

おとなしく護身用の拳銃を差し出しながら、ミサトは思ってしまう。

何がどうなっているのか、加持が何を考えているのか、すべてはわからない。だけど

今日が、彼の命日になるのではないかと。

音楽。そこには、言葉では決して言い表せないものがたくさん詰まっている。

例えば、音楽を演奏する人の心。美しい心の持ち主が奏でる音色には、自然と惹かれるものだ。

そういったものは、やはり生で聴いてみると一番よくわかる。

碇シンジによるチェロの演奏を聴きながら、門矢士はそう感じていた。

「……悪くない。なかなかだな」

チェロの音色が止んだ後、土はシンジに感想を告げる。このレベルなら、練習すればどこかの町の演奏会くらいには出てもいいくらいだ。

「あ、ありがとうございます……人前で演奏したことなかったから、なんか変な感じですよ」

「この前はアタシが聴いてたことに気づいてなかったしね」

うつむいて照れるシンジに、土と同じく演奏を聞いていたアスカが声をかける。どうやら、彼女がシンジのチェロを聴くのは二回目らしい。

どうしてこのようなプチ演奏会が開かれていたかということ、期末試験が近いということ、休日特訓のため葛城宅を訪れた土が置いてあったチェロに目を止め、シンジのものだと知るやいなや『じやあ弾いてみる』などと言ったことが原因である。一応バイオリンリストをやったこともある土としては、シンジの奏でる音楽を聴いてみたくなったというわけだ。

そして、その価値はあったと思う。

「戦いが終わったら、音楽の部活動でも始めたらどうだ」

「えっ？で、でも、最近ほとんど弾いてないから、部活に入っても他の人と差が……………」

「心配すんな。部活なんて、全員が全員本気で取り組んでるわけじゃない。未経験者だって入って来る。…………それに、お前の顔が『ちよっとやってみたいかも…』と言っている」

「…………まあ、そうですね……………」

士の指摘にこくんとうなずくシンジ。やはりもっと上手になりたいという気持ちがあるのだろう。

「戦いが終わったら、か……………」

と、そこで士はアスカが難しそうな表情を浮かべているのに気づく。

「…………アタシは、どうするんだろう」

消え入るような声でつぶやくアスカの瞳は、虚空に向けられている。

彼女はずっと、戦うことで、必要とされることで自分の存在を証明

しようとしてきたのだ。今はその気持ちも薄らいでいるだろうが、それでも人間は簡単に変わるものではない。すべてが終わった後、何をしたらよいか悩むのは当然かもしれない。

「惣流、それは」

「はいストップ」

何か言っただろうと考え口を開いた士だったが、言い切る前にアスカに言葉を遮られる。

彼女は途端に起こったような顔つきになり、両手を腰に当てて士を見る。

「ずっと言いたかったんだけど、なんでバカシンジは名前呼びでアタシは名字なわけ？名前呼びなさいよ、名前で！」

予想外の話題に少し面食らう士だが、すぐに自分のペースを取り戻して首を横に振る。

「別に、どいつをどう呼ぼうと俺の勝手だろ」

「んじゃこづしてやるわっ！」

ゴキッ

そう言うやいなや、アスカは自分の親指を土の首元に押し込んだ。

何だか嫌な音が響いた瞬間、土はその場に崩れ落ち、大笑いし始める。

「ハッ、ハハハハハ！お、お前、なんでそれを、ハハハハ！」

「あ、アスカ、一体何をしたの……？」

状況がまったく掴めないシンジがアスカに尋ねると、彼女は得意満面といった表情で親指を見せる。

「夏海に教えてもらったのよ、光家秘伝『笑いのツボ』。さあ土、アタシのこと名前で呼んでくれるんなら、解除してあげるわよ！」

「な、夏みかんめ……ハハッ、皮剥いてやる…ハハハハッ！」



苦しそうに笑い転げながらも、強情な士はアスカを名前で呼ぼうとはしない。

「ほらほら、苦しいでしょ。名前呼ぶだけでいいのよ？」

「…アスカ、僕が初号機の中にいた間に、一体何があったの？」

1ヶ月もない間にアスカの士に対する態度があまりに変わっていることに、今更ながらシンジがツッコむ。

「べっつに〜？ちょっとあれこれあっただけよ」

「大体、加持さんはどうしたんだよ」

「っ！？な、それは…か、加持さんは加持さんで、士は士よ！」

ジト目のシンジに対し、顔をゆでダコのように真っ赤にして首をぶんぶん横に振るアスカ。

世間一般にはありふれた光景かもしれないが、この2人にとっては、こんな会話も久しぶりの出来事なのだ。

「…ハハハッ…くそ、早く止まれ…ハハハハ！」

もつとも、そのことについて感傷に浸る余裕は今の士にはないが。

笑いの苦しみという現実から気を逸らすため、とりあえず今しがた話に出てきた加持リョウジのことを思い出す。

最初に会ったとき、士はなぜかスイカ畑の世話を手伝わされた。その後も数回ネルフ本部で出くわし、軽く言葉を交わす程度のことではしていた。

一見するとだらしない感じに思えるが、勘のいい士は一目見た時から彼が一癖も二癖もある人間だと直感していた。

『もし俺に何かあったら、そのときはこの畑、そして葛城をよろしく頼む』

スイカ畑で彼が言ったその言葉が、今はなぜか妙に胸にひっかかった。

「この行動は君の命取りになるぞ」

手錠を外されながら、冬月は視界に映る加持リョウジに言葉を告げる。

今この瞬間、加持リョウジが行っていること。それは、具体的に言えば、ゼーレに拉致された冬月コウゾウを逃がそうとしているということ。

端的に言えば、ゼーレに対する裏切り。

特務機関ネルフの、さらに上に存在する組織・ゼーレ。それを裏切ることが何を意味するのかわからない加持ではない。

だが、それでも彼がこのような行動に出たのは。

「真実に近づきたいだけなんです。…僕の中のね」

……既に彼は、後戻りのできないところに来てしまった。ゼーレから逃げ切ることなど、一個人の力では絶対に不可能。せいぜいできるのは、一般人に余計な恐怖を与えないように、人気のない場所で殺される、ということくらいか。

ミサトに最期のメッセージも送ったし、もう十分

「……………」

誰もいない屋外で下を向いていた加持は、自分の前に誰かが立っているのを感じる。

刺客が来たのだろう。顔を上げて軽い挨拶でも

だが直後、彼は予想外のものを視界にとらえる。

「君は……………」

『事件は解決しました』

『……………あの人は？』

『存じません』

拘束を解かれ、自宅へ戻りながら、ミサトは先ほどの諜報部の男との会話を思い出す。

死んでほしくない。……だけど、胸騒ぎは一向に消える心配がない。

「っ、閉まってる……」

マンションに到着したミサトは、玄関の鍵が閉まっていることに気づく。シンジもアスカもないようだ。

鍵を開けて家に入り、一直線にリビングに向かう。

電話を調べると、留守電メッセージが一件。

震える手で、再生ボタンを押す。

聞こえてきたのは、加持リョウジが、自らの最期を告げる言葉。

メッセージの再生が終わった瞬間、ミサトの中で何かが崩れ落ちた。

「あ、ああ……っ！」

押さえきれない感情が、涙と嗚咽になってあふれ出す。誰もいない部屋の中、葛城ミサトはいつまでも泣き続け

P r r r r r

突然、無機質に鳴り響く電話。

こんな状態なら、普通は受話器を取らないところなのだろうが、なぜだかミサトは、電話に出なければならぬ気がした。

「……………はい、葛城です」

おぼつかない動きで受話器を取り、声を震わせながらも応対する。

「ああ……………その明らかに泣いていそうな声。やっぱり、もう留守電を聞いてしまったみたいだな」

返ってきた声を聞いた瞬間、ミサトは一瞬呼吸が止まる。

聞き間違えるはずがない。今、受話器越しに会話をしている相手は。

「ほんつとつにすまない！さっきの遺言は取り消し。…どうやら、俺はまだ生きていられるらしい」

間違いなく、加持リョウジだった。

「えっ？ちょ…ちょっと待ってよ。一体何がどうなって」

あまりに突然の展開に、喜びよりも先に困惑が募るミサトに対し、加持は静かに口を開く。

「予期せぬ助っ人が現れたんだ」

時刻は少し遡る。



「君は……………」

加持の目の前に立っていたのは、明らかにゼーレの刺客とは思えない風貌と雰囲気を持つ、黒髪の青年だった。

「海東大樹…いや、仮面ライダーディエンド、と言ったらわかるかな」

「っ！」

海東と名乗る青年の言葉に、加持は驚く。仮面ライダーディエンド

ミサトから聞いた、三人の仮面ライダーの内のひとりだ。

「君を狙ってた連中には、あっちで少し眠ってもらってるよ」

プロの暗殺者を手玉に取ったというのに、海東はそれをなんでもないことのように告げる。だが、無理もないと加持は感じる。彼に直接会うのは初めてだが、仮面ライダーの実力ならよく知っているのだから。

それよりも、大いに気になることがある。

「…なぜ俺を助けた？」

一度も会ったことのない人間を助けるような義理など、おそらく目の前の青年にはないはずだ。だとしたら、加持を生かすそれなりの理由があるのだろう。

加持の問いを聞くと、海東はふう、と息をつき、それから語り始める。

「僕はいろんな世界のお宝を集めるのが趣味でね。この世界でもずっと探していたんだ。……そして今日、ようやくそれを見つけた」

「……そのお宝、というのは？」

「 真実、ってところかな」

海東の答えに加持はハツとする。……自分と同じだ。

「この世界を裏で牛耳るお偉いさん方が秘密裏に進めていること…  
…それにはきつと、何らかの大きな価値があるに違いない。だから、  
僕はそのお宝を手に入れることにした」

「……………」

加持は、黙って海東の話に耳を傾けている。

「だけど、僕もこの世界についてはあまり詳しくないからね。いくらディエンドの力があっても、道案内する人間がいなくちゃならない」

「それを、俺にやってほしいと？」

「悪い話じゃないだろう？僕はお宝により近づくことができるし、君は頼もしい護衛を持つことができる。お互いにメリットがあるじゃないか」

……確かに、海東の言っていることは間違っていない。互いが互いを利用する。協力関係を作る基本だ。

「だが、ひとつ問題がある。……君は、信用できる人間なのか」

「ちあ？」

加持の疑いの眼差しにも、海東は自然体を崩さない。

「…だけど、このまま僕と一緒に行動しなければ、君はどの道始末されるだけだ。生き残りたいのなら、たとえ信用できなくても選択肢はひとつしかないはずだよ」

生き残る

『よその世界の畑や女のことなんて知ったことか。……お前の畑、お前の女なんだろう？お前が生きて、お前が守れ』

かつて、スイカ畑で門矢士に言われたセリフが脳裏をよぎる。

「（お前が生きて、お前が守れ、か。……そう言われると、まだまだ生きたくなくなってしまっな）」

なにせ、こんな自分を大切に思ってくれる者が、この世界にはいるのだから。

加持はひとりうなずくと、海東に向かって右手を差し出す。

「わかった、君と協力しよう。これからよろしく頼む」

「オツケー、契約完了」

海東の方も手を出し、二人は軽く、しかしはっきりと握手を交わした。

「　　というわけだ。だから、まだしばらく帰れないけど、俺は生きてるから安心してくれ」

加持の話の聞き終えたミサトは、再び涙を流し始める　　今度は、安堵と喜びの涙を。

「よかった、本当に……まったく、あんたはいつでも危ない橋を渡りすぎなのよ」

「…すまない」

「いいのよ。今更あなたの生き方をどうこう言っつもりはないし。でも、代わりに約束しなさい。『必ず帰ってきて、私の前に元気な顔を見せること』」

ミサトの言葉に、加持は小さく笑う。

「ああ、約束する。だから、その時はとびきり熱い夜を過ごそう」

「なっ!?!?こ、この変態!とっとくたばりなさい!」

「おいおい、さっきと言ってることがまるで逆じゃないか」

いつものようにひょうひょうとした態度を取る加持。ミサトは青筋を立てながら、彼に語りかける。

「うっさい。じゃあ切るわよ」

「って、挨拶もなしに切るのか?」

「そんなもん必要ないでしょ。あんたが帰って来たらその時するんだから」

「……なるほど、そういついとか。なら、俺もそうすることにしよう」

加持がそう言うのを聞くと、ミサトは受話器を置き、通話を切った。

それとほぼ同時に、玄関の開く音がする。

「それにしても、アスカが夕飯の買い出しに付いてくるなんてやっぱり変だよ」

「うっさいわね！アンタそれ何回言っつもり？『下見』だって言うてんでしようが」

「だから何の下見なんだよ……？」

ギヤーギヤー騒ぎながら、二人分の足音がこちらに向かってくる。『通りすがりの仮面ライダー』のおかげで、変わることができた二人が。

「…さて、私も保護者としての責務を全うしますか」

そつつぶやき、ミサトはリビングのドアを開き、大切な者たちを迎えた。



第拾参話 其の参 大切なもの / Treasure (後書き)

というわけで加持さんは海東と組むことで死亡フラグ回避です。やったね！

これは構想初期からあったネタです。加持さんを生かしたい。とすれば誰を使うべきか……海東かな？てな感じで決まりました。

そしてシンジもアスカも大方立ち直ったおかげでようやくコメディーというかコントが楽にできるようになりました。

レイがすっかり空気ですが、メイン回はもうすぐです。次回はアスカ中心だけど……一応、出番はちゃんとありますから。嫌いなわけじゃないんだよ。ただ無口キャラって動かしづらいから自然と……

感想・評価などあればぜひお気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第拾四話 其の巻 昼食（前書き）

色々構想を練った結果……これを含めて後更新12回ほどでエピソードまで行けるということがわかりました。連載一周年までに終わらせるためには、2日に1話のペースが必要ということになります。大丈夫かな……

それよりクライマックスヒーローズでギャレン参戦とか聞いたんですけど、もし本当ならマジで欢喜です。辛味噌！まあガセでも買いますけどね。剣ジャックフォームは確定らしいですし。

第拾四話 其の壱 昼食

「……ふ、ふふ」

怪しげな機械や容器、培養液などに囲まれて、人類補完委員会のトップ、キール・ローレンツは思わず笑みをこぼす。

その表情は半ば狂気ともとれる喜びで歪んでおり、近くで作業をしていた研究員たちは、思わず一歩後ずさる。

「あの鳴滝という男からもらったモノ、そして量産機………うまく利用できるそうだな」

この世界を包み込む闇が、静かに動き始めた。

## キーンコーンカーンコーン

四時間目の授業が終わり、昼休みが始まる。学食に行くものは友人と一緒に教室を出ていき、そうでないものも仲の良い人と弁当やパンを食べようと、空いた席に移動する。

そんな光景をまったく気にすることもなく、綾波レイは自分の席に座ったまま、ひとりで昼食をとろうとする。

## 「綾波」

ふと声のした方を振り向くと、碇シンジがこちらをのぞきこんでいる。

「あの……その」

幾分顔に緊張の色を浮かべながら、シンジは意を決したように言葉を紡ぐ。

「……もしよかったら、もらってくれないかな。綾波のぶん、作って来たんだ」

そう言っただけで彼が差し出したのは、青色を基調とした弁当箱。事態がいまいち呑み込めないレイは、その行為に疑問を抱く。

「……どうして？」

惣流・アスカ・ラングレーのように同じ家に住んでいるわけでもない自分に、なぜこのような手間がかかることをするのか。レイにはそれがわからない。

それに対してシンジは、恥ずかしそうに少しうつむきながら小さくつぶやく。

「ほら、いつもあんまり食べてないように見えたし。それと、こっちが本当の理由なんだけど……」

そこで一旦言葉を切ると、シンジは顔をあげ、真っすぐレイの顔を見つめる。

「綾波に、食べてもらいたかったから……じゃ、駄目かな」

その言葉に、トクン、と心臓の鼓動が脈打つのを感じた。それが全身に広がっていくかのように、体の中を熱が支配していく。

(…:…どうして、こんな風になるんだろう)

自分でも理由のわからない状態に、レイは戸惑いの表情を浮かべる。

「あ、いやその、迷惑なら別にいいんだ。僕が勝手に持って来ただけなんだから」

無言の拒否と受け取ったのだろうか、シンジはがっかりしたような顔になり、レイの手にある弁当箱を受け取るうとする。

が。

「あ、綾波……………」

弁当ごと手をひっこめたレイを見て、シンジは驚きの声を上げる。

だが、もっと驚いているのが当の本人だ。無意識の内に行った行動だったのだ。

(……………どうして?)

答えのわからないまま、とりあえずレイは弁当箱のふたを開ける。中にはおにぎりと、色とりどりのおかずが入っていた。さらに、彼女が嫌いな肉はない。

食べてみたい。

用意された箸を手に取り、きれいに焼けている卵焼きをおもむろに口に入れる。

「え、えつと……………どう、かな?」

恐る恐る尋ね、レイの反応を待つシンジ。

「……………」

レイは黙ったまま、何かを言おうとしては口を閉じる。今の気持ち  
をどう表現すればいいか迷っているのだ。

だが、たっぷり間を置いた後、彼女は弁当箱を見つめたまま、一言  
だけ言葉を発した。

「……………あたたかい」

「碓君、綾波さんにもお弁当作ってきたの？」



「あれだけじゃないわ、今日は他にもいるんな人のぶんを作ったから。しかもそれぞれ微妙におかずが違うっていう気合いの入れっぷりよ」

「へえ、すごいね碓君」

向こうの席でレイに弁当を渡しているシンジを見ながら話すアスカとヒカリ。同じ弁当を作っている者として、ヒカリはその辺りのことが気になるらしい。

「で？そっちの愛妻弁当は好評なの？」

「ぶっ！？あ、愛妻弁当って何よそれ！？」

「だってそうじゃない。いつの間にか名前で呼び合うようになったやっつてさ、ゴールはすぐそこってワケですか」

「~~~~~」

……言い返してこないあたり、まんざらでもないらしい。さすが半分学校公認だけはある。

「そ、そういえば、碓君が元気になってきたのって、土先生が来てからだっけ」

「（逃げたわね……………）そうね。バカシンジも土のおかげで少しはマシになったってこと」

シンジだけではない。突然現れた担任代理のおかげで、アスカ自身がどれだけ救われたことか。あの時の彼の言葉のおかげで、立ち直ることができたのだ。

だから、アスカにとって門矢士とは、本当に大きな存在で

「……………でも、担任の大村先生が戻って来たら、土先生はどうなるのかな。授業はやってくれるといいな、わかりやすいし」

「えっ

」

ヒカリにとっては、それは何気ない一言だったにちがいない。

だが。

『俺はこの世界の人間じゃない』

『ある世界を訪れると、俺はある役割を与えられる。それが今回、お前らのクラスの担任代理だったようだな』

使徒との戦いが終わって、土がこの世界でやることを終えたと感じたなら、そこでお別れ。彼らは、違う世界に旅立ってしまう。アスカがいるこの世界は、ひとつの通過点にしか過ぎないのだ。

目を逸らしたかった事実に向き合わされたようなものだった。土と出会って1ヶ月半。彼がここにいることが当たり前で、いなくなることもなんて考えもししていなかった。

その時、自分はどうなるのだろう。

アスカの心の中を、一抹の不安がよぎった。

その頃、ネルフの司令室。

「……………」

「固まったまま何を考えているんだ、碇」

机の上のある一点から視線を動かさない碇ゲンドウの姿に、先ほど部屋に入ってきた冬月コウゾウが声をかける。

「……………冬月。腹は減っていないか」

「私に押し付けるつもりか？息子の作った弁当を」

そう。ゲンドウが難しげな顔で眺めているのは、1時間ほど前に赤木リッコ経由で渡された、シンジ作の弁当だ。

そんなネルフのトップに立つ男の提案に、冬月は小さく笑って返事を  
する。

「残念ながら、私も赤木博士からもらったよ、彼からの弁当を。単純に多くの者に食べてもらいたいのか、お前の逃げ道をふさぐつもりなのかはわからないがな」

「……………そうか」

「折角息子がくれたものなんだ。変な意地を張らずに食べればどうだ。……………何か、わかるかもしれないぞ」

意味深な言葉と持ってきた書類を残して、冬月は司令室を出て行った。

再びひとりとなったゲンドウは、おもむろに弁当箱を開けて箸を取り、卵焼きを口にする。

「……………少し甘すぎる」

独り文句をつぶやきながらも、その時のゲンドウの顔はかすかにほころんでいたとかいないとか。

「それじゃあ、司令にも副司令にもちゃんと渡せたのね」

「ええ。……それにしても、私にまで作って来るなんて、相当気合  
い入ってるわね、シンジ君」

同じ頃、一緒に昼食をとっていたミサトとリツコ。2人ともシンジ  
の弁当を食べており、微妙に中身が違ふことに驚いていたところだ。

そんな折、リツコの頭には弁当をゲンドウと冬月に届けてほしいと  
頼んだ時のシンジの言葉が思い出される。

『このままお互いだんまりじゃ、何も変わらないと思って。……歩  
み寄りたいんです、父さんに』

「……変わったわね、あの子」

「あら、元はあーいう子だったのかもしれないわよ？」

リシロのつぶやきに、ミサトはにやっと笑ってそう返すのだった。

第拾四話 其の壱 昼食（後書き）

というわけで最初から最後まで弁当回でした。シンジはレイやゲンドウに接近しようと試みてます。自分から積極的に触れ合おうとしてるのがミソです。

一方アスカは少し動揺。これが次回につながります。ディケイド勢が一切出ないというクロスにあるまじき回でしたが、どうかお許しください。

感想や評価などあれば、気軽にお寄せいただけるとうれしいです。目標はクリスマスまでに完結。それを目指して頑張ります！



## 第拾四話 其の弐 アタシの思い / Link

『……スカ、アスカ!』

「えっ?…ああ、ごめんミサト。ちょっとぼーっとしてたわ」

ミサトの通信に気づいて返事を返しながら、こんな状況で意識を集中させていなかった自分を、アスカは我ながら不覚と感じる。

『大丈夫なの?どこか具合が悪いのなら、レイとポジション交代する?』

「へーきよ、へーき。アタシはいつも通り準備万端だから」

使徒が現れたと連絡が入ったのが15分前。学校が終わってちょうどネルフに向かっているところだったアスカ達は、到着してすぐ戦闘準備に入ることとなった。

プラグスーツに着替え、弐号機のエントリープラグの中に入る。その間もアスカは、今日の昼休みの時間に抱いた『不安』のことを考えていた。今しがたぼーっとしていたのも、それが原因だ。

『ごめんアスカ。僕、出られないみたいだから……』

今度は初号機に乗っているシンジから通信が入る。前回の使徒との戦いでとんでもない暴走を起こしたため、今回はとりあえず待機命令が下ったらしい。

「そんな辛気臭い声出さないでよバカシンジ。ちゃんと使徒の首取って帰って来るから、安心して待ってなさい！」

心が揺れる自分自身を鼓舞する気持ちも込めて、アスカはシンジにそう言った。

『うん……じゃあ、頑張ってね』

「……………当然よ」

体全体に力が入る。負けるわけにはいかないという適度な緊張感に包まれる気がした。

……だが、アスカ自身も気づいていなかった。

自らの体から、異常なまでに冷たい汗が流れ始めていたことを。

巨大な銃砲を構え、エヴァンゲリオン式号機は標的に照準を合わせる作業に入る。

今回の使徒は、どういつわけか地球から少し離れたところで静止している。そのため、作戦としては式号機が銃撃でターゲットを狙い、零号機はバックアップをするというものになっている。

「……こんなに離れてるんじゃないよ。照準が合わせられないわよ。せめてもうちょっと近くに寄ってきなさいよね」

精神を目に集中させて精密に使徒を狙おうとするアスカだが、あまりに標的が遠すぎることから、思わずそんなことをひとりごちる。

「（とにかく、今は他に何も考えるな。相手を打ち落とすことだけに集中する！）」

しばらくして、ようやく照準が正確になっていき

その瞬間。

「え……………?」

地球外にいる使徒から、明るい光が差し込んできたと、アスカが感じたその時。

「何よ…これ……………」

アスカの目に映るのは、先ほどまで見えていた外の光景ではない。

病院のベッドで寝ている母。その胸に抱きかかえられている人形。

そして次の瞬間、冷たくなっている母の姿が

「いやああああああ!」

時を同じくして、門矢士　　仮面ライダーディケイドと小野寺ユウスケ　　仮面ライダークウガは、目の前に映る光景に啞然とするしかなかった。

前回とは違い、今回は鳴滝の妨害もなかったためすぐにエヴァのいるところまで駆けつけることができたのだが、肝心の使徒がこの高い空のさらに向こうにいるのでは対処のしようもない。なので、とりあえずは弐号機の様子を見守るといふ方向で待機していた。

だがその時、空から光が降ってきたかと思うと、突然弐号機が苦しみ始めたのだ。

「お、おい士……一体アスカちゃんに何が起こってるんだよ」

状況をまったく理解できないユウスケは、すぐるように土にそう尋ねる。

だが、その土もライドブッカーを手に持ったまま、呆然とただ立ち尽くすのみ。

「俺にもわからない……………どうすればいいのか、これっぽっちも……………」

その頃、アスカは

「……………なんで、なんでこんな嫌なことを思い出させるの？…こんな……………」

母の死。その母に最後まで娘だと認識してもらえなかった自分。ひとりだけで生きていくと誓った自分

「嫌、ひとりはイヤよ……………」

過去の痛ましい記憶が、アスカの心を弱らせていく。

『門矢士も、いつかはあなたを見捨てていなくなっちゃうのよ。…  
…ううん、士だけじゃない。シンジもヒカリもミサトも加持さんも、  
みんなみんな、いなくなる』

人の温もりを知ってしまったその心が、二度と修復できないようなところまで蝕まれていく。

「あ……………ああ……………」

アスカの瞳から、徐々に消えていく光。それに合わせて、式号機の目の光　　生気が、今まさに尽きようとして

『父さん、僕を出して！早くしないとアスカが！』

使徒の突然の精神攻撃に騒然とする一同。そんな中、シンジの必死の叫びが通信越しで聞こえてくる。

だが、ゲンドウはいつもの姿勢を崩さないで、感情の起伏のない声で告げる。

「その必要はない」

『でも　　』！

「初号機を出す必要はない。…ロンギヌスの槍を使用すればな」

ゲンドウのその一言で作戦が切り替わる。レイが搭乗している零号機がターミナルドグマに向かい、第二使徒リリースに突き刺さっている『ロンギヌスの槍』を抜き取る。



そして屋外に出た零号機は、宇宙で待ち構える使徒を見つめ、その手に持つ最強の武器を構える。

「……………もう、イヤ」

あの雨の日、アスカは本当に久しぶりにおんぶをしてもらった。そして、温もりを感じた。

……………立ちあがれると思った。士やみんながいれば、ひとりぼっちじゃないければ。

だけど、みんながいなくなってしまうたら

『違うな。離れていても、会えなくても、同じひとつの思い出で、俺達はつながっているんだ』

その瞬間、アスカの頭に、いつか土が言った言葉が小さく、しかし確かに響いた。

そう、あれはシンジがまだ初号機の中に取り込まれていた時のこと。ネルフ本部内の休憩室で、とても大切そうにカードを見ていた土に、アスカはこう尋ねたのだった。

「やけに大事に扱ってるわね、そのたくさんあるカード」

「ああ、これは証だからな」

「……証？何の？」

土の答えに、アスカは首をかしげて聞き返す。

「……このカードは、俺が今まで旅してきた中で出会った奴らとの、絆を表したものでってところだ」

そう語る土の表情は、心なしが柔らかいように見える。

「へえ、そうなの。……でも、みんな違う世界にいるんでしょ？何かそれって、つながりがどんどん薄くなっていくような気がするんだけど」

「違うな。離れていても、会えなくても、同じひとつの思い出で、俺達はつながっているんだ」

「……そっか」

やがてアスカは、うつむいていた顔を徐々に前に向けていく。

「そっいつことなのね、土」

……あの時はよくわからなかった土の言葉の意味が、今ようやくつかめた気がする。

確かに、みんないつかはいなくなるかもしれない。辛い別れだつて、この先きつとあるだろう。

だけどそれで、今まで過ごしてきた時間が消えるわけではない。思い出が、記憶が、きれいさっぱりなくなるわけではないのだ。

「士は、こんなアタシに向き合ってくれた。バカみたいに面倒な性格してるアタシに、真正面から……」

それは、あんなに憧れていた加持リョウジでさえやってくれなかったことだった。だけど、門矢士という人間は違った。甘い言葉などはほとんど口にせず、ただ純粹に、傷つきやすいアスカの心に触れてくれた。

「…士がいる。そして、アタシの周りには、たくさんの方がいてくれる。たとえ離れることになったとしても、きっと大丈夫」

死んでいたはずのアスカの瞳が、光を取り戻していく。そして、今までよりもずっと、輝きを増していく。

「だからアタシは 前に進んで行ける」

「……………」

「よう。目、覚めたか」

寝起きどまにこの声を聞くのは二回目だと感じながら、アスカは辺りを見回す。

自分が寝ていた白いベッドに、これまた白い天井。ここは病院の個室らしい。

「士……………あの後、アタシどうなって」

「お前はどうかやら、使徒から精神的な攻撃を食らっていたらしい。

かなり危ないところまで行ったが、心配はするな。脳に異常はない、だよ。それと、あの使徒は綾波がロングノスの槍とかいうとんでもない奥の手を使って倒した。……結局、今回も俺達仮面ライダーは何もできずじまいだった」

後半に行くにつれて、難しそうな表情を浮かべて語る士。自分の力が通用しないことを齒がゆく思っているらしい。

「失礼しまーす……あつ、アスカ。おはよう」

その時病室のドアを開けて入ってきたのは、目が覚めたアスカを見て笑顔になっている碓シンジと、相変わらず無表情の綾波レイだった。

「そっか、今朝なのか。おはようシンジ。それと……」

なぜかアスカの言葉は途中で止まり、彼女の口は魚のそのようにぱくぱくとおかしな動きを見せる。

が、やがて意を決したように、続く言葉を紡ぎ出した。

「……ね、レイ」

「「「…っ!」「」」

その一言に、土もシンジも、そしてレイまでもが一瞬驚きの表情を浮かべる。当然だ。今までアスカは、一度だってレイの名前を呼んだことなどなかったのだから。

その3人の反応に、当のアスカはだんだん恥ずかしくなり

「あーもう!出ていけ〜!」

「えっ!?だ、だって今来たところ」

「い・い・か・ら!」

「は、はいっ!綾波、行こう」

アスカの剣幕に押され、レイを連れて病室を出ていくシンジ。

「はははは。自分で言っというて恥ずかしくなったのか?」

「……う。だって……」

士の的を射た指摘に、顔を真っ赤にしてうつむくアスカ。

しかし恥ずかしさを感じながらも、彼女の顔には明るい表情が浮かんでいた。

「士」

「何だ」

「……ありがとう」

突然のアスカの言葉に一瞬驚いたそぶりを見せた士はしかし、すぐにいつものぶっきらぼうな顔つきに戻って言う。

「お前が俺の何に対して感謝しているのかは知らんが……まあ、言葉だけは受け取っておいてやる」

相変わらずの物言いだ、アスカはちゃんと気づいていた。



何とも思っていないなさそうに見える土の顔が、少しだけほころんでいることに。

この先、今までのように、とてもつらいことが待ち受けているかもしれない。

だけど、心配しなくてもいい。アタシには、みんながいるから。たとえ離れていても、絆は確かにあるんだから。

だから今は、うれしい思い出をたくさん作っていきな

第拾四話 其の弐 アタシの思い / Link (後書き)

ちよつと駆け足気味でしたが、これにてアスカのストーリーはほぼ終了です。本編とは少し違い、使徒に付け入るすきを与えたのは「仲間がくれる温もり」を知っていたことでした。…というか、土がカードについて語るシーンはこれ以前のどこかに入れるつもりだったのにすっかり忘れてましたw

次回はレイのターンです。

では、また次回。

第拾伍話 其の巻 男女二人で帰る「デート」？

「一緒に帰らない？」

終礼が終わり、荷物を片づけていた綾波レイにかかってきた声は、最近よく話しかけてくる彼のものだった。

「……………一緒に？」

「そう。今日は訓練休みだし、綾波さえよければゲームセンターとかに寄り道するっていうのは……………」

碓シンジ。近頃になって、レイは彼の笑顔をよく見るようになった気がする。今も彼女に向けられているその表情を見ると、なぜだか心が落ち着く気がする。

なので。

「…かまわないわ」

「よし、じゃあ行こうか」

うれしそうに教室の出口へ向かっていくシンジに従い、レイも鞆を持って歩き始める。

と。

「…ほーっ？今日は綾波と一緒にデートか。やるのうセンセ」

「僕達の誘いを断ったのはそういうわけか」

「なっ、べ、別にそんな、デートなわけ……？」

その出口で待ち構えていた鈴原トウジと相田ケンスケに何かを言われ、シンジはしどろもどろになっている。

「……デート？」

「な、何でもないんだよ綾波。さ、行こう」

レイが聞きなれない単語を復唱すると、シンジはあわてて彼女を手を引き、猛スピードで教室から脱出するのだった。

そんな二人の背中を眺めていたトウジとケンスケは、しばらく経ってそこから目を離す。

「よし、じゃあワシらも帰るか！」

「ああ、そうし」

と、そこでケンスケはハツとしたように言葉を切り、一瞬後ろを振り向いたかと思うと、両手を合わせて頭を小さく下げた。

「ごめんごめん、ちょっと用事があるの思い出した。結構時間かかるから、先に帰ってくれよ」

「お、おう。そうか……そんならしゃあないの」

「悪いな。じゃ、また明日」

「じゃあな」

駆け足で廊下に飛び出したケンスケを見送るトウジ。

「さて、じゃあ今日はひとりで」

「……トウジ」

「ん？」

今度こそ帰ろうといるところで声をかけられたので振り返ると、そこにはいつも弁当を作ってくれる少女の姿があった。

「ヒカリか。どうかしたか？」

「……あの、大したことじゃないんだけどさ。……よかったら、一緒に帰らない？」

「一緒にか？別にええけど」

トウジの答えを聞くと、ヒカリは途端に笑顔になって廊下に出る。

「んじゃ、帰ろっか」

」  
「おっ」

それに従ってトウジも教室を出て、二人は廊下を歩いていく。

「……………はあ。今日も地球は平和だなあ」

その様子を離れたところで眺めていたのは、用事を片づけに行ったはずのケンスケだった。

「綾波はゲームセンター……………来たことないみたいだね」

近場のゲームセンターの入口に到着したシンジは、物珍しそうにその中を見やっっているレイの様子を見て、そうひとりで納得する。

「まあ、とりあえず中に入ろうよ。やり方は教えてあげるから」

15分後。

「……涼しい顔してやるなあ。ハイスコアじゃないか」

格闘ゲームで早くも店内記録を更新してしまったレイを、驚愕と感嘆の眼で見つめるシンジ。先ほどのコンボはどこをどう操作しているのかさっぱりわからなかった。

一方、当の本人は状況がつかめず、突然ファンファーレを鳴らし始めたゲーム台を無言で眺めている。

「……よくわからない」

「すごい成績なんだから、喜んで笑えばいいと思うよ」



そう言うってから、今度はシンジがレースゲームをプレイし始める。

「……………あつ、この、くそ、うまくいかないな」

悪戦苦闘するシンジはその間、ゲーム画面ではなく自分の横顔をじーっと見つめているレイの視線を常を感じ続けていた。

ゲームセンターを出たシンジ達は、現在光写真館の中でクッキーを食べている。なぜここにいるのかというと、『そういえば綾波って写真館に来たことないんじゃないかな』と思ったシンジがレイをこの場所に連れていこうと考えたからなのだが。

「……でも、まさか冬月さんがいるとは思わなかったな」

そう。現在写真館にいるのは、シンジとレイの他にはユウスケと夏海、栄次郎、そして栄次郎と一緒に囲碁を打っている冬月なのである。

「いや、それにしてもいい勝負だな」

「囲碁はよくわかりませんが、何となくレベルが高いのはわかります」

冬月をここに連れてきたらしいユウスケと夏海が、今も続いている試合の感想を口にする。

「（土先生はまだ学校から帰ってないみたいだし、海東さんは…加持さんと一緒だった）」

しばらくの間、シンジとレイは黙って息詰まる碁の勝負を見守っていた。

「ふう、危ない危ない。囲碁に夢中ですっかり忘れるところだった」

弾かれたように写真真館から飛び出したシンジとともにしばらく走り続けたレイは、一体何があるのだろうかと疑問を抱く。

やがてシンジは足を止め、安堵のため息をつく。

「…間に合った。綾波、見てごらん」

シンジの指差した方向に見えたものは。

第三新東京市の街並みと、地平線に沈んでいく夕陽の姿だった。

「僕は、ミサトさんにここを教えてもらったんだけど……きれいだと思わない?」

「……………」

レイには、今日に映っている光景が美しいものかどうかはわからなかった。

ただ、シンジが自分のことを思っただけでここまで連れて来てくれたのだと考えると、自分でも説明できない不思議な気持ちになるのを感じた。

「綾波、前に言ってたよね。自分には何もなくて。あれ、やっぱり違うと思うよ」

レイの方を真っすぐ見て、シンジは口を開く。

「綾波には……どう言えばいいのかわかんないけど、その……み、魅力があると思うし。少なくとも、君が今この瞬間エヴァのパイロットじゃなくなったとしても、僕の綾波に対する態度は変わらない」

途中から不自然にそっぽを向いて話すシンジ。夕陽のせいだろうか、彼の頬が少し赤くなっているように見える。

しばしの間、互いの中に沈黙が流れる。

「綾波」

「…なに？」

「僕と、友達になってくれないかな」

シンジの口から出た言葉 『友達』。その言葉が持つ温かさを何となく感じながらも、レイは返事に戸惑う。

「……でも、私には『友達』という言葉の意味がわからない」

レイの言葉を聞くと、シンジは少しの間うーんと唸った後、笑ってこう答えた。

「僕にもはっきりとした答えは出せないけど……きっと、友達っていうのは、肩書きとか役割とか関係なく、お互いつながってるってことなんじゃないかな」

「私と碇君が、直接つながっている………?」

シンジの言葉を繰り返し、その意味をかみしめるレイ。

「……私は、碇君の友達」

「うん。ありがとう、綾波」

『友達になる』。それはとても温かくて、胸に響いて。

そして、とてもうれしいことだった。

第拾伍話 其の巻 男女二人で帰る「デート」？（後書き）

ついに文字数が10万文字を突破しました！飽きっぽい僕にとつては奇跡のようなことで、これもひとえに読者の皆様のおかげです。本当にありがとうございます！

というわけで今回のあらすじを3つにまとめると。

- ・シンジ、レイに積極アプローチ
- ・ケンスケ、ナイスフォローも哀愁漂う
- ・シンジとレイ、友達になる

確かにシンジとレイは既に結構話したりする仲なのですが、やはりはつきりと友達と認識するイベントが欲しいなと思いついて。このままLRSになるかもしれません。

次回は囲碁の結果と、十六使徒戦です。今度はちゃんとライダーも戦いますので、その点は心配しないでください。

では、また次回。

## 第拾伍話 其の弐 守り人 / Destroyer

「今日の宿はここか。相変わらず粗末なところを選ぶね」

「毎日並以上のホテルに泊まれるほど俺の懐は温かくないんでね。これでもなけなしの貯金を崩している最中さ」

海東の嫌味な言葉に、加持は軽く応対する。付き合いは短いが、なんせ一日中共に行動しているため、彼がどういう人間かは大体わかってきた。

現在、『真実を知る』という共通の目的を持つ2人は、裏の世界の様々な場所を回り、情報収集に精を出している。加持リョウジという人間ひとりでは届かなかったところにも、海東大樹の仮面ライダーとしての力を利用すれば、多少強引に事を進められるのだ。

「エヴァンゲリオンという兵器、セカンドインパクトの全貌、ネルフとゼーレ、そして人類補完計画

ばらばらだった要素が、線を結んでひとつになってきた」

「…もう一息、といったところかな」

手に入れた情報を頭の中でまとめている加持に対して、海東がそう



つぶやく。

そう、おそらく時間はあまりない。早く目的を達成しなければ

「ところで、君は何をそんなに大事そうに手入れしているんだ？」

先ほどから熱心に『お宝』の数々を布で磨いたりなどしている海東だが、今彼が手に取っているものは。

「ああ、これかい？大航海時代、かのバスコ・ダ・ガマが命を賭けて捜し求め、金と同じ値段で取引きされたという伝説のスパイス」  
何の変哲もない胡椒にしか見えない。だが、珍しく土が気前よくくれたとか何とかうれしそうな顔で語る海東を見てみると、さすがに突っ込むこともできない加持であった。

「（…まあ、何を宝と思うかはその人次第だからな）」

加持が海東の意外に純粋な面を発見した翌日。

『今回は零号機が先頭、弐号機がバックアップ。レイ、アスカ、それでOK?』

「…了解」

『ま、病み上がりだし、今回はサポートに回るわ』

使徒襲来の知らせを受けた綾波レイと惣流・アスカ・ラングレーは、現在エヴァへの搭乗を終え、葛城ミサトの指示を受けているところだ。

『…よし。エヴァ、発進!』

地上に出たレイの目に入ってきたのは、白く光るリング状の使徒の姿。

今までも様々な使徒が現れてきたが、今回はその中でも一際異様な雰囲気を持っている。そう、直感で感じる。

何をしてくるかわからない以上、迂闊に手を出せない。とりあえず、相手の出方をうかがって

『レイ、しばらく様子を見るわよ』

「いえ、来る！」

ミサトからの通信が入った瞬間、使徒がその姿を変える。

リング状の形が崩れ、柔軟に動きそうな線となった使徒は

「っ!?!?」

レイが気づいた時には、もう遅かった。ATフィールドも間に合わず、使徒の体の先端が零号機の腹に突き刺さったのだ。

「ん……が……」

直後、激しい痛みとともに嫌な感触が彼女の体に襲いかかる。……  
間違いなく、使徒が体内に侵食している。

『ちよつとレイ！つ、こんちくしょう！』

零号機から使徒を引きはがそうと攻撃態勢に入る弐号機だが、予測不能の使徒の動きに翻弄されて満足に戦えていない。レイ自身も渾身の力を込めて体を蝕む異物を引き抜こうとするが、何の抵抗にもならないようだ。

その間にも、使徒はどんどんレイの体に入り込んで行き

その圧倒的に不利な戦況を目の当たりにして、拳を握りしめる人物が2人。

「くそつ、またこんなとんでもない状況になって……土、このままじゃ俺達また何もできないぞ！」

「わかっている！だが、アレが零号機にくっついていてるせいで、下手に攻めれば綾波にもダメージが入ってしまう。アスカも多分同じことを考えているだろうよ」

門矢土と小野寺ユウスケ。それぞれすでに変身を完了させているものの、前回と同様の予想だにしない事態にどう動くべきかわからない状態だ。

「……でも、このままじゃレイちゃんが使徒に」

「ああ、その通りだ。だからその前に手を打たなければならない」

だが、具体的にどうする？

その答えを引き出そうと、土はライドブッカーの中のカードを見つめながら頭をフル回転させる。

前回と違い、相手は普通に地上にいる。だから、何もできないわけではない。

「（何か、何かあるはずだ。俺が今まで手に入れてきたものの中に、必ず答えが存在する！）」

「私とひとつにならない？」

自らの内から聞こえた声に、レイはハッとす。  
い誰か 使徒が、話しかけてきている。

自分ではな

「嫌。私は私、あなたじゃないわ」

「そう。でももう遅いわ」

レイの拒絶に、使徒は不気味に笑って答える。

「この気持ち、あなたにもわけてあげる」

直後、何物かもわからない感情がレイの胸に押し寄せる。

「痛いでしょう？心が痛いでしょう？」

「この気持ち…わからないけど、知ってる。何度も感じたことがある」

それは、碇シンジにお弁当をもらったとき。

彼がゲームセンターでレースゲームに熱中しているのを見ていたとき。

丘の上で、彼と友達になったとき。

「……………欲しい」

レイが発した言葉に、使徒は小さく笑う。

「そう。あなたはつながりを欲している。周りが変わっていくのを見て、自分も変わることを求めている」

「つながり……………？」

「知ってしまったから。あなたは人と触れ合い、人として大事なものを知ってしまった。だから欲しいのよ、いろんなものが」

思い出されるのは、丘の上でシンジと話したこと。

「これはあなたの感情。紛れもない、あなた自身の感情なのよ」

その瞬間、レイは自分の目から何か落ちるのを感じる。それは透明な液体で続けて何滴も膝に落ちてきて。



「……これが、涙？私、泣いているの？」

「初号機の凍結を、現時刻をもって解除する」

よつやくゲンドウの口からもたらされた言葉を聞いて、ミサトは初号機の中で待機しているシンジに通信をつなぐ。

「……シンジ君、準備できてる？」

『とっくの昔にできてます』

返ってきた言葉は、いつもの彼からは考えられないような、力強い

ものを持っていた。

地上へ向かいながら、シンジは思う……長かった、と。前回の戦闘でアスカが、そして今はレイが苦しんでいるのに、何もできない自分をどれほどかしく思ったか。

「……絶対に、助けてみせる」

エヴァンゲリオン初号機は、再び大地を踏みしめる。

『ようやくお出まし？今の状況がどれだけきついか、わかってるわよね』

「わかってるよ。使徒はどんどん綾波の体を侵食してる。早く何とかしなくちゃいけない」

『…オツケー。じゃあ行くわよ！』

アスカの合図で、初号機と弐号機は同時に動き出す。2体になれば、バラバラの動きをすることで相手を攪乱できるはずだ。

だが。

「っ!?!な……………」

『ちよっ…………どっいついっことなのよ!?!』

使徒の動きが、格段に速くなったのだ。エヴァ2体をして、やっとのことで回避するしかできないほどに。

使徒の動きがよくなったのを見たレイは、既にかなり侵食されてしまっている自分の体を見つめる。

「これが私の心……碓君と、誰かと、一緒になりたい……」

綾波レイは、人の持つ『温もり』を知った。他でもない、碓シンジのおかげで。

その温もりは、気持ちのいいものだった。ずっと浸っていたいものだった。

だから、もっと欲しい。その強い感情が、使徒の動きと連動している。自分のせいで、シンジ達が苦しんでいる。

「……………ダメ」

これ以上、使徒にそんな真似をさせるわけにはいかない。

A.T.フィールドを反転させ、レイは使徒を抑え込む。当然、それによって一気に侵食が進んでいくが、もうそんなことは関係ない。

後は、自分ごと使徒を爆発に巻き込むだけ

『ふざけるなアッ!!』

その時、レイは耳にした。今まで聞いたことのないような、怒気のこもったシンジの叫びを。

「くそっ、どつすねば」

「イチかバチか、賭けてみるしかないか」

「えっ……」

ずっと黙っていた土が発した言葉に、ユウスケは驚く。

「何か策があるのか？」

「うまくいくかどうかは知らん。だが……俺の持っている手札で唯一有効かもしれない手段だ」

正直自信はない。だが、それでもやらなければならない時がある。

そう考えながら土が取り出したのは、デイケイドの力を最大限に引き出すアイテム・ケータツチ。

『k u u g a , a g i t o , r y u k i , f a i z , b l a d e ,  
h i b i k i , k a b u t o , d e n - o , k i v a  
『a

それぞれのライダーの紋章をタッチするたびに、電子音が鳴り響く。

『f i n a l k a m e n r i d e d e c a d e  
『a

ディケイドの姿が変わる。マゼンタと銀を基調とした鎧に、胸には共に闘ってきたライダー達のカード。そして頭には、己のカードが装着されている。

仮面ライダーディケイド・コンプリートフォーム。その力は、全てを壊すためのものか。それとも

『 h i b i k i k a m e n r i d e a r m e d 』

全てを守るためのものか。

「響鬼……………」

士の隣に現れた装甲響鬼を見て、ユウスケがつぶやく。「ここから一体どうするつもりなのか、とでも言いたげな表情だ。」

そんなユウスケに、士は一言だけ告げた。

「さあ、お掃除の時間だ」

『ふざけるな』

もう一度、今度は静かなシンジの声が、レイの耳に入ってきて来る。

『どうして勝手に諦めるんだよ。綾波は、本当に死んでもいいと思ってるのか!』

『やっぱアンタはいけすかないわ。自爆して満足なのかもしれないけどね、残される側の気持ちなんて考えちゃいない。……そのひん曲がった性根を直してやらなきゃなんないんだから、戻ってこないなんて許さないわよ、レイ』

シンジとアスカの言葉が、胸に突き刺さる。『変わった』2人の一言一言が、レイの中のある思いを表に呼び出す。



「私は……………」

『僕は嫌だ。綾波が死んじゃうなんて考えたくもない。…だから、必ず君を守ってみせる』

とめどなくあふれてくる、今までの記憶。思えば、最近は特に色々なことがあって。それがなんだか新鮮で、何となく『いい』と感じられて。

「……………死にたく、ない。私は、死にたくない」

ATフィールドを再び反転させ、レイは再び、なんとか使徒の侵食を遅らせようと始めた。

だが、やはりじりじりと体に異物が入り込んできて

「っ！？」

直後、使徒の侵食がぴたりと止まり、同時にレイは大きな鼓動を感じた。

時間は少しだけ前にさかのぼる。

「いいかユウスケ。絶対にバランスを崩すなよ」

「了解。その代わりに、うまくやってくれよ」

ファイナルフォームライドによってクウガゴウラムに変形したユウスケの背中に乗っているのは、土と装甲響鬼。

ユウスケは2人を落とさないようバランスを保って飛び、侵食が続く零号機の背中のあたりに到達する。

「よし。行くぜ」

士が腰のあたりに手を伸ばし、それから零号機に向かってその手を振るう。その動きを真似た響鬼は、バツクルに装着している音撃鼓を零号機に投げつける形となる。その直後、音撃鼓は零号機に張り付き、同時に巨大になる。

『final attack ride hi hi hi hi  
biki』

士と響鬼は音撃棒を取り出し、

「ハツ、ハツ、ハアツ！」

『清めの音』を奏で始める。これは響鬼の世界の魔化魍という怪物を倒すために使用する技なのだが、その名の通りの働きをしてくれるのなら、零号機 綾波レイの体に入り込んだ異物を清めてくれるかもしれない。そう希望を込めて、士は一心不乱に音撃棒を叩く。

するど。

「……効いてるみたいだな」

零号機の不気味な血管の膨らみのようなものが徐々に消えていき、使徒がどんどん外に押し出されていく。

「……俺がこいつを外に出したら、きちんと決めるよ。シンジ、アスカ」

「す、す……」

『侵食が、止まるどころか元に戻っていった……』

目の前で繰り広げられる光景に、シンジとアスカは驚きを隠せない。これが、『仮面ライダーディケイド』の実力なのだろうか。

だが、今一番大事なことはそれではないと、2人ともわかっている。

『あの使徒の全体が零号機から離れた瞬間、アタシが銃弾を撃ち込む。その攻撃が止まったら、アンタがとどめ差しなさい。わかったわね』

「……うん。必ず仕留める」

その後は、互いに一言も言葉を交わさない。神経を限界まで研ぎ澄まし、時を待っているのだ。

そして、それはやってきた。

士が思い切り腕を振りあげてそれを叩きつけた瞬間、零号機に突き刺さっていた使徒の先端が地面に落ちたのだ。

瞬間、狙い澄ましたアスカの銃撃が、使徒のもとにあられるように降り注ぐ。悶絶するように線上の体を振り回しているところから見て、相当効いているようだ。

「っ！今だ！」

そして、使徒のコアが露わになった瞬間を、シンジもアスカも見逃さなかった。直後、銃撃がびたりとやみ、初号機がプログレッシブナイフを持って突っ込む。

「いつけええええ!!」

勢いよく、使徒のコアにナイフを突き刺す。

その瞬間、あっけなくコアは壊れ、使徒は完全に活動を停止した。

## 第拾伍話 其の式 守り人/Destructor（後書き）

とりあえず戦闘終了まで書いたら力つきました……レイの描写は次回に回します。さて、今回、レイが抱いている感情が本編と異なっています。本編では『寂しい』でしたが、こっちは『欲しい』です。何かを知ってしまったからこそ、それが欲しいという気持ちはほとんど強くなる。そういうわけで、それに呼応したということ使徒は多少パワーアップさせました。

ここからは別件なのですが、実は少しばかりアンケートがあります。実は、この作品が終わった後、オリジナル小説を始めるかもしれない。あくまで可能性があるだけです。それで、仮に始めるとすると、候補が2つあるのです。

1つ目：何かよくわからないうちに全然知らない赤の他人の体に魂が入りこんでしまった主人公が繰り広げる、学園コメディ+能力バトルもの。ヒロインは「クール系のバトル少女」「活発な同級生」「ませたロリキャラ」を予定しています。

2つ目：特にこれといった特徴もない男子高校生である主人公の日常を描く完全学園コメディもの。ヒロインは「小難しいことを言うちょっと一般女子からずれた女の子」「主人公にやたら厳しい体育会系委員長」「優しくて気が利く眼鏡っ子」の予定です。

こんな感じなのですが、よろしければ、どっちを読んでみたいか感想で伝えてくださるとともうれいいます。

その他、感想や評価などあれば気軽に寄ってください。

では、  
また次回。



第拾六話 其の壱 笑顔と出会い（前書き）

今気づきましたが、この前書くと言っていた冬月とおじいちゃんの  
囲碁の結果入れるの忘れてました、すみません。後で編集しておき  
ます。

## 第拾六話 其の壱 笑顔と出会い

「レイ、お見舞いに来てあげたわよ」

使徒との戦闘があつた翌日。結果的に侵食を完全に防ぐことはできなかったものの、レイの体にかかった負担はかなりのものだった。

そういうわけで、現在病室のベッドの上で安静にしている彼女のもとにやってきたのは、今しがた元気な声を出してドアを開けたアスカと、それに従って部屋に入ってきたシンジだった。

「綾波、調子はどう？あ、これ今日の授業のノート」

「ありがとう…」

ノートを手渡すシンジを見て、レイの口から自然とその言葉がこぼれる。

「聞いてよレイ。アタシも手伝ってあげるって言ったのに、シンジときたら『いいよ。僕が全部やるから』とか言って全授業でアタタのぶんのノートとったのよ？これはアレね、きつとアンタにゾッ

」

「ああ〜！何わけわかんないこと言ってるのさaska！綾波は純粹だからすぐ信じちゃうだろ！？」

askaがやけにうまいシンジの物真似をしながら言おうとした言葉を遮るように大声で怒鳴るシンジ。なぜか少し顔が赤くなっている。

だが、レイとしてはaskaの言葉の続きが聞きたいわけで。

「ゾッ……その後はなに？」

「ちよつ、綾波！？」

うるたえるシンジと対照的に、口元をにやりと歪めるaska。

「ゾッコンよゾッコン！シンジはアンタに夢中なのよ！この前、『ああ、一秒でも長く綾波のそばにいたい』って恋に悩む少年そのものな顔して」

「言っていないよ！！てかaska、元気になったのはいいけど最近前にも増して悪ノリしすぎだよ！」

「はん！その通りよ、アタシはこのまま全てを振り切るぜ！」

「わけわかんないしっ！？」

ワイワイガヤガヤ。病院で騒ぐのはよくないという常識など知ったことかと言わんばかりに大声でわめきまくるチルドレン2名。その様子を見ていたレイは、口を開いて

「私も、碓君のそばにいたい」

「は？」

瞬間、あれだけ騒がしかった部屋の中が一気に静まり返る。

「碓君と一緒にいると……ほかほかするの」

少しうつむいて、手はベッドのシーツを握っていて。そんな『男を落とすのに最適なポーズ』を無意識の内に取った綾波の強烈な一撃が、シンジに襲いかかる。

「……あ、綾波………？」

「…だ、ダメ。これはいじっちゃいけないタイプだ。下手な言葉は控えないと……………」

顔を真っ赤にするシンジと、自身とレイの間の決定的な何かの違いに身構えるアスカ。

しばし、綾波レイの病室に沈黙が流れる。

みんな黙ったまま、時は刻々と流れていき

「だ〜！もう、じれったい！！」

その空気を破ったのは、しびれを切らした様子のアスカだった。彼女はシンジの顔を睨みつけ、叱るように声を発する。

「アンタ馬鹿あ？女の子にあんなこと言われて黙ってるなんてどういっつもりよ！レイのこと好きならもう告白しちゃいなさい！！」

「いや、だから僕は別に綾波のことをそう言う風に見ているわけじゃ…………綾波だってそうだろうし」

「

「まだ言うつもりかこのへたれ！アンタ今日からバカシンジじゃなくて超<sup>スパー</sup>へたれシンジに改名よ！」

「な、何だよそれ!？」

わーわーぎゃーぎゃー。

「……………」

と、にぎやかな病室の様子をドアをちょっとだけ開いて覗いている人間がひとり。

「そつよ、行きなさいシンちゃん。告白しちやいなさい」

「……………何をやっているんだお前は」

「うひゃあ！ちよつ、驚かさないでよ」

陰からシンジにイケイケサインを出していた葛城ミサトは、いつの間にか背後に立っていた青年・門矢士の声に心臓が跳び上がりそうになる。

「それで？何だってシンジ達の覗きなんてやってんだ」

「の、覗きじゃないわよ。ちよつちこつそりみんなの様子を観察してるだけよ」

「それを覗きと言っただ……」

ミサトのおかしな言い訳に呆れた士は下を向く。

が、再び顔を上げた時、ミサトの表情は真面目なものになっていた。ちらつと病室のドアを見てから、彼女は何かを慈しむような顔をして、士に語りかける。

「……あの子達、変わったわね。シンジ君も、アスカも、レイも」

「そうだな」

「あなたのおかげね。……本当に、ありがとう」

頭を下げるミサト。それに対して一瞬驚く士だが、すぐに平静を取り繕う。

「俺は世界の破壊者だ。頭を下げられるようなことをした覚えはない」

「優しい破壊者さんなら大歓迎よ」

その言葉を返しながら、ミサトは病室のドアを開ける。

「やつほー、喜べ諸君！この私がさっき福引きで当てた夕張カットメロンを御馳走しちゃうぞー！」

「……………」

「……………メロンかあ……………」



「……ありがとうございます」

上から順に、レイ、アスカ、シンジの反応。

「ってちょっとお！何よその淡白な反応は。夕張メロンよ、夕張！」

「…いや、だって」

「いちいち食べ物ではしゃぐような歳じゃないでしょうが」

ミサトのツッコミにも、シンジとアスカは冷めた反応。レイに至っては夕張メロンの価値を知らないのか黙ったままである。

「ええい、私はあんた達をそんなつまらない人間に育てた覚えはない！こっぴどくしてやる！」

「うわっ！ちょっとミサトさん、そんないっぺんに口に入れたら僕窒息しちゃう」

参加者が一人増え、ますます騒がしくなる綾波レイの個室。

「……病院では静かにしろって習わなかったのか、この馬鹿どもは。綾波、こういうところは影響されないように」

呆れた様子の子が静かにしているレイの方を振り向いたその時。

「……………クスツ。ふふふ……………」

笑っていた。

あの綾波レイが、『声を出して』笑っていた。

シンジ達もそれに気づいたようで、一瞬で黙りこむ。その様子を誤解したのか、レイは恥ずかしそうに頬を染めてうつむく。

「ごめんなさい。…みんなを見ると、思わず笑い声が出てしまつて……………」

「謝ることじゃない。それは、お前が人としてまた一歩成長したってことなんだからな」

子の言葉に、他の3人もうなずく。するとレイはしばらく黙った後、

「ごうごうぶやいた。

「……あの人も、こんな風に楽しく笑えたらいいと思う」

『あの人』      碓ゲンドウのことだろう。

「……僕も、そう思ってるよ」

彼女の言葉に、シンジはこくりと首を縦に振った。

それから数日が過ぎた。

「…というわけで、めでたくワシの妹が退院することになったから、よかつたら会いに来てくれんか、二人とも？」

学校の帰り道、シンジ、ケンスケとともに歩いていたトウジがうれしそくに尋ねる。

「よかつた、元気になったんだ。是非行かせてもらおうよ」

「ああ、そうだな。知ってるか碇、こいつの妹、兄と同じ血をわけあつてるとは思えないほど可愛いんだぞ」

「どづいっつっちゃそれは！」

ケンスケの言葉に怒鳴るトウジ。そんな光景を見て、シンジの顔には自然と笑みがこぼれる。

トウジの妹は、シンジが初めてエヴァに乗った時の戦闘に巻き込まれ、その後も体調がすぐれず入院したままだった。トウジが参号機に乗ることを決意したのも、妹にいい治療をさせてやるためだったのだ。

そのことに少なからず罪悪感を感じていたシンジにとっては、これほどうれしいことはない。一刻も早くトウジの妹の顔を見たい

と感じる。

「じゃあ、ここに下さいなませ」

「また明日な」

「うん」

いつの間にか家への分岐点に来ていた3人は、挨拶をしてそれぞれの方向へ進む。

「綾波、アスカに振り回されてないかな……」

今日の終礼が終わるやいなや、遊びに行こうともものすごい勢いでレイを連れ出して行ったアスカの姿を思い出し、シンジは一抹の不安を覚える。……まあ、2人が仲よくなっっていくことには何の不满もないわけだが。

「……ちょっと寄り道してみようかな」

何となくストレートに帰宅する気にならないため、シンジは進行方向を変え、近くにある湖へと向かった。

「……きれいだな」

夕陽がそろそろ沈みそうだというタイミングで、湖の水は美しい彩りを放っている。

と、その時。

「ふんふんふんふん」

どこからか、鼻歌が聞こえてきた。

「歌はいいねえ」

声のした方を振り向くと、そこには夕陽を見つめるひとりの少年の姿が。

「歌は心を潤してくれる。リリンの生み出した文化の極みだよ」

白い肌に銀色の髪その少年は、やがてシンジの方に視線を移す。

「そう感じないか？碇シンジ君」

その赤い瞳に、シンジは引き込まれるような感覚を覚えた。

第拾六話 其の壱 笑顔と出会い（後書き）

というわけでカヲル君登場。いよいよクライマックスが近づいてきました。リツコがトチ狂って綾波軍団を殺さなかった理由は次回に回します。

レイはゲンドウに対して笑顔を見せることはあっても、声を出して笑うなんてことはなかったのではないのでしょうか。いつかシンジも含め、3人がそんな関係になればいいなと思います……声出して笑うゲンドウが想像できないけど。

では、また次回。



第拾六話 其の弐 最後のシ者 / To the last battle

碓シンジが謎の少年と出会う、1週間ほど前。

「……………何をやっているんだか」

第十六使徒との戦闘で入院している綾波レイの様子をうかがいに行つた帰りの赤木リツコは、そつつぶやきながら小さくため息をつく。

彼女が病室に入って目にしたもの。それは

女の子が着るような白いワンピースを身に纏い、頭には小さなリボンをつけて。

顔を真っ赤にしている碓シンジの姿だった。

一方、彼にその格好をさせたと思われる惣流・アスカ・ラングレーと葛城ミサト、およびこの部屋の主の綾波レイは、シンジの女装のあまりの似合いっぷりに度肝を抜かれていた。

「…これ、ネットにUPすればその筋の人たちに大人気になるんじ

やないかしら」

「そうね、とりあえず携帯で写真を」

「一生のお願いだからやめてください！！」

アスカとミサトへ向かって必死に叫ぶシンジの姿はあまりに可愛く……もとい、かわいそうだった。

「……さて、後はこれを司令のところに持っていく」と

失礼します、と言ってから、リッコは碇ゲンドウがいる司令室に入る。

「……………」

「あら、お食事中でしたか。これは失礼しました」

「……………構わん」

いつも通りの威圧感の漂う物言いなのだが、彼の目の前にあるいかにも庶民的な手作り弁当がそれを台無しにしていた。

「シンジ君のお弁当、手が込んでいておいしいですね。私も先ほどいただきました」

頼まれていたレポートを机の上に置きながら、リツコはゲンドウに話しかける。

「…いつも全体的に味付けが濃い」

「あら、そうですね。それなら直接彼に言えばいいのに」

どうやらゲンドウは薄味が好きなようだ。事実、リツコやミサトなどは彼の料理を絶賛しているのだから。

「…あつ、このおにぎり、海苔で顔を作っていますね。司令にそっくり」

碇ゲンドウを知っているものなら確実に判別できるくらいうまく作られたそのおにぎりに感心するリツコ。

「……………くだらん」

本気でそう思っているのか照れているだけなのか、ゲンドウは小さくつぶやくだけだ。

「…でも、これを作っている時のシンジ君の楽しそうな姿、簡単に想像できますわ」

さっきの出来事のせいで『家庭的な少女』のイメージで頭に浮かんでしまっていたが。

「失礼しました」

司令室を出たリツコは、ふーっと大きく息をつく。

「……仕事と関係ない話をあれだけ長くしたことなんて、今までなかったわね」

話題を作ってくれたシンジには感謝したい。…想いを寄せている相手と話す機会を与えてくれたのだから。

「……シンジ君が変わって、アスカが変わって。果てはあのレイまでも、大きく変わろうとしている」

自分も、もっと変わるべきなのかもしれない。己の望みを叶えたいなら。

「……タイミングをつかんで、できるだけたくさん話すように努力しようかしら」

『女は度胸』そう考えながらひそかに決意を固めるリッコだった。

時は戻って、2人の少年が湖で出会ったその後。

「それにしても驚いたよ。カヲル君がフィフスチルドレンだなんて」

「あくまで弐号機の予備パイロットだけどね。できることなら、僕の出番はない方がいい」

先ほどシンジが出会った少年の名は、渚カヲル。シンジと同じく、チルドレンだそうで、非常時に備えて配属されることになったらしい。

出会ってすぐに打ち解けた2人は、すでに互いを名前で呼び合っている。現在はシンクロテストを終え、一緒にシャワーを浴びているところだ。

「でもすごいねカヲル君。弐号機との初めてのシンクロテストであんな結果を出すなんて。アスカより少し低いくらいじゃないか」

「…君の方がもっと上だろう？惣流さんより5%も高い」

「今日はたまたま調子が良かっただけだよ。いつもは大体同じくらいなんだ」

「そうなのかい。……気持ちよかったね。そろそろ出ようか」

会話を弾ませながら、2人は浴場から出て服を着る。先ほどのシンクロテストの結果は、シンジが101%、アスカが96%、レイが95%、カヲルが93%だった。最近全員のシンクロ率がかなり伸びてきているので、それに引けを取らないカヲルの実力は確かだとシンジは感じる。

そうして、ジュースでも飲もうかと彼らが休憩室に向かうと。

「フーかさっ？カップケーキ焼いたんだけど、よかつたら食べてくれない？」

「……おい、形がいびつな上に色がなんか禍々しいぞ」

「大丈夫！このアタシが一生懸命作ったんだからおいしいはずよ。はい、あーん」

「ちよ、おまつ、無理やり入れん……もごもご」

なぜかところどころ緑色になっているカップケーキらしきものを片手に持ち、アスカが門矢士の口にそれを突っ込む。

「…ど、どう、かな……」

もじもじしながら上目遣いで感想を待つアスカ。

「まずい。話にならん」

「ばっさり！？そんな無慈悲な！」

「当たり前だ。色々ミスしすぎだろこのカップケーキ（仮）。ちやんと練習してから人に振る舞え」

「う。だって早く土に食べてほしかったんだからしょうがないじゃない」

気遣いも何もなく批評する土。…だが、顔が結構本気で青くなってしまうことから考えれば、本来はもっと怒っているところな



のを我慢しているのかもしれない。

「……………カップケーキ、失敗……………」

「……………レイ。アンタはなんでアタシ達の様子を見て熱心にメモを取っているのかしら」

「……………興味があるから」

「……………やりたいことをやるっていつのを否定するわけじゃないんだけどさ。不愉快だからやめなさい」

「?よくわからないわ」

アスカが注意する理由が理解できず、首をかしげるレイ。

さらにそこから少し離れた所には。

「……………む〜」

「あれ、夏海ちゃんなんでそんな怖い顔してるの?……………あっ、ひ

よっとしてやきもち焼いてる?」

「っ!?!?な、なな……何を言っんですかユウスケ!」

「そっだよなあ、最近のアスカちゃんのアタックはすごいからなあ。士のが気になってる夏海ちゃんにしたらそりゃ焦る」

「笑いのツボ!」

ユウスケの言葉を遮るように光家秘伝の笑いのツボを繰り返す夏海。直後、ユウスケは笑い地獄に突き落とされる。

「あっはははははは!?!い、いきなり何するんだはははははは!?!っ、士は毎度毎度こんな苦痛を味わってたのかあはは……」

「……………」

あまりのカオスっぷりを見たからか、カヲルの口は開いたままふさがらない。

当たり前だ、とシンジは思う。これが使徒の手から人類を守る人間達です、なんて絶対言えない。

「か、カヲル君。あの、誤解なんだ。いつもはここまでカオスには………いつもこんな感じかもしれない」

先日女装させられたことを思い出してしまい、シンジは黙り込んでしまう。

が、そんな彼の様子を見て、カヲルは小さく笑った。

「恥ずかしがるようなことじゃないよ。とても………とても楽しそうだ」

そんなこんなで。

「いいのかい？やはり僕が下で寝た方が……」

「お邪魔させてもらってるんだから、僕が布団で寝るよ」

親睦を深めようということ、シンジは今晚カヲルの部屋に泊まることとなった。何だかんだで男のチルドレン仲間が初めてなので、シンジとしては色々話したいこともある次第なのだ。

「君はこんなことを考えたことがあるかい？」

ふと、ベッドの上からカヲルの声が聞こえてくる。

「他人を知らなければ裏切られる事も、互いに傷つく事も無い、と」

その声に、静かに耳を澄ますシンジ。

「……でも、寂しさを忘れる事も無いよ。人間は寂しさを永久になくす事は出来ない……人は一人だからね。ただ忘れる事は出来る。だから人は生きていく事が出来るのさ」

そして、カヲルはこう言葉を結んだ。

「君は怖いかい？人と触れ合うのが」

カヲルから突きつけられた質問は、シンジの心に染み込んでいく。

「……そうだね。本当のこと言うと、やっぱり怖いかな」

だが、そう答えながらも、シンジの表情は柔らかいものだった。その顔つきに、カヲルは興味深そうに尋ねる。

「……よかったら、君がうれしそうな顔をしている理由を話してくれないか」

「うん。不思議だな、カヲル君になら何でも話せそうな気がする。……ここに来る前は、先生のところにて。その後急に父さんに呼び出されて、エヴァに乗って使徒と戦うことになった」

ぽつりぽつりと、今までの出来事を思い返すようにシンジは語る。

「いろんなことがあったんだ。だけど、僕は何も変わらなかった。ただ流されるままに生きて、使徒と戦って。そんな日々を過ごしてきた。……でも、士先生が来てから、僕の世界は変わったんだ」

「士先生……今日挨拶させてもらった門矢士という人のことかい？ 彼からは不思議な雰囲気を感じたよ」

「うん、あの人は不思議な人だよ。いつも偉そうで、自信にあふれていて、僕とはまるで逆なんだ。……だけど、僕は先生から大切なことを教えてもらった。だから、僕はこうして今ここにいるんだ。……確かに、人と触れ合えば、傷つくことだってあるかもしれない。でも、それを乗り越えた先に、傷ついた分もつと素晴らしい世界が待っているって、そう思えるようになったんだ」

自分に言い聞かせるように口にしたその言葉を聞いたカヲルは、フツと微笑んでシンジを見つめる。

「やはり君は好意に値するね。……僕は、君に会うために生まれてきたのかもしれない」

その後、2人は眠りについた。

翌日。

「それにしても、気になるわよね」

訓練に向かう途中の通路で、ふとアスカがつぶやく。

「えっ、何が？」

「アイツのことに決まってるでしょ。渚カヲルよ。いきなりあれだけのシンクロナ率を出したのはまあ置いとくとして、それをアタシの式号機でやったのよ？コアの交換なしで」

シンジもそのことは不思議に思っていた。リンカーコアというものはちゃんと個人別に用意されていて、そのコアでなければエヴァとシンクロナできないとミサトから教えてもらったことがあるからだ。

「確かにそこはおかしいけど……でも、カヲル君はいい人だよ」

「アンタ馬鹿あ？最初っから本性表す敵がどこにいるってーのよ！」

「て、敵って……」

アスカの勢いに押されるシンジ。式号機を大切にしている彼女にしてみれば、敏感になる事柄なのだろう。

「あの人…私と同じ感じがする」

と、ここで今まで黙っていたレイが口を開く。

「同じ感じ？確かに肌とか目の色は似てるけど……親戚とか？」

「……………」

シンジの質問には答えず、下を向くレイ。……まるで、何かを言うのをためらっているかのようだ。



「言いたいことがあるならばつきり」

言いなさいよ、というアスカの言葉が口から出る前に。

緊急事態を告げるサイレンが、ネルフ本部に響き渡った。

「さあ、行くよ。おいで、アダムの分身。そしてリリンのしもべ」

カヲルの声に呼応するように、彼の目の前にそびえ立つエヴァンゲリオン式号機が起動する。当然、中には誰も乗っていない。

そしてその瞬間、作戦司令室ではパターン青が検出される。

渚カヲル 第十七使徒は、悠然と空中に浮かび、地下  
ントラルドグマのさらに奥へ向かっていく。 セ

その背後に、弐号機を従えて。

「……………そんな。嘘だろ……」

初号機に搭乗したシンジは、ミサトから現在の状況を聞かされ愕然とする。

渚カヲルを第十七使徒と認定。使徒は、弐号機をあやつりセントラルドグマを降下中。

『シンジ！何が何でもあの野郎の顔面ぶん殴って弐号機を取り戻しときなさい…！』

怒ったようなアスカの声が通信越しに入ってくるが、シンジに彼女の声は聞こえていない。

「……………裏切られた？」

昨日自分に見せた笑顔は、すべて油断させるための偽りのものだったのか。

あの表情すべてが、嘘だったのだろうか。

「……………いや、まだそうと決まったわけじゃない」

判断するのは、カヲルと話して、彼の真意を確かめてからだ。

決意を固め、初号機はカヲルの後を追って地下深くに潜っていく。

下へ、下へ。

「……………っ！カヲル君！！」

見つけた。宙に浮き、弐号機に守られるようにして降下していく渚カヲルの姿を。

手を伸ばそうとするが、眼前に立ちはだかる弐号機に阻まれ、組み合いになる。

「くっ…アスカ、ごめんよ」

彼女の愛機を傷つけてしまうことを心の内で詫びながら、初号機はプログレッッシブナイフを構える。

力と力のぶつかり合い。実力はほぼ五分と言って間違いないほど拮抗している。

「カヲル君やめてよ！どうしてだよ！」

「エヴァは僕と同じ体でできている。僕もアダムより生まれし者だからね。魂さえなければ同化できるさ。この弐号機の魂は、今自ら閉じこもっているから」

カヲルの言葉にシンジは混乱する。エヴァとは、使徒とは、一体何なのか。

だが。

「そんな細かい事情なんてどうでもいい。僕はただ………」

シンジが言いきる前に、弐号機のナイフが初号機の横腹に突き刺さる。

「あがつ………」

痛みを耐え、初号機もナイフを相手に突き刺す。

絶対に止めてみせる。そう、強い思いを込めて。

ドオオオオン……!

エヴァ2機が同時に着地したことによる地響きが、ターミナルドグマを包み込む。

「ぐっ……っ！カヲル君、待って　！」

どこかへ向かおうとするカヲルを追いかけようとするシンジだが、その瞬間、足を掴まれる感覚を覚える。エヴァ弐号機が、いまだ抵抗を続けているのだ。

「くそっ……っ……っ！！！」

遠くなっていくカヲルの背中を見ながら、初号機は目の前の敵を止めるために戦う。

十字架に張り付けられた巨大な物体の前にたどり着いたカヲルは、

それに向かって話しかける。

「アダム、我らの母たる存在。アダムに生まれし者は、アダムに帰らねばならないのか。人を滅ぼしてまで……」

だがカヲルは、そこで何かに気づいたかのようにハッとする。

「違う。これは……リリス？そうか、そういうことかリリン……」

すべてを理解したかのようにカヲルがつぶやいた瞬間、彼の背後で轟音が響く。

倒れ込む弐号機。ゆっくりと近づいてくる初号機。

そちらに振り向いたカヲルは、柔らかな表情を作る。

「ありがとうシンジ君。弐号機は君に止めておいてもらいたかったんだ。そうしなければ、彼女と生き続けていたかもしれないからね」

「カヲル君、どうして……」

「僕が生き続けることが、僕の運命だからだよ。結果、人が滅びてもね。……だがここで死ぬこともできる。生と死は等価値なんだ、僕にとってはね。自らの死、それが唯一の絶対的自由なんだ」

「何を……何を言っているの、カヲル君」

シンジが消え入るような声で言う。

「滅びの時を免れ、未来を与えられる生命体はひとつしか選ばれないんだ。そして君は、死すべき存在ではない」

それに対して、カヲルはある種超然とした態度で、

「さあ、僕を殺してくれ」

当然のこのように、そう言った。

「そんなこと、できるわけじゃないか……だって、僕は君と

「

「まったく、馬鹿な話だな」



突然割って入ってきた第三者の声に、カヲルとシンジは反射的に振り向く。

「生き残る生命体はひとつ？もしそんな風に決まってるんだとしたら、この俺がそのルールを破壊してやる」

サイズは人間と同じ。だが、その身に纏ったマゼンタの鎧は、とても強固なものに見える。

「……門矢士。仮面ライダーディケイドか」

「わざわざ自己紹介する手間が省けて助かる」

士はそう言うてから、カヲルに言葉を投げかける。

「生きる死ぬを決めるのは勝手だが……心からお前を必要とし、ともにいたいと思ってる奴がいることを忘れるな。お前が死ぬという事は、そいつの思いに応えないということだ」

「カヲル君！僕は……運命だとかなんだとか全然わからない。だから絶対信じない。君が何を言おうと、僕は君と一緒にいたいんだ！

！」

それに続いて、シンジの叫びが聞こえてくる。心の底から、渚カヲルという『ヒト』を必要としてくれる少年の声が。

「そうだね……僕も、君と一緒にいたいとは思う。だけどね、僕は永遠を生きる存在なんだ。たとえその先にたくさんの出会いがあるとしても、何人も人間の死を受け止め続けるのはきつととても辛い。それに耐えられる自信は、僕にはないんだ」

「カヲル君……」

カヲルの言葉に、シンジは黙り込んでしまう。返す言葉が見つからないのか。

「……なるほどな」

だが、言葉を止めない男がひとり。門矢士だ。

「悲しみを味わいたくないから、その前に死ぬ、か。だがそれでいいのか？おそらく、お前はまだ人の温もりというものを知らない。それを味わう前に自分を消してしまって、それで満足なのか？」

カヲルは目を少し細める。思い出されるのは、昨日ネルフで見た人々の光景。

「カヲル君。わがままだつてことはわかっている。でも、思ったんだ。君と過ごした時間は本当に少ししかないけど、きっと君とはとてもいい友達になれるって。……だから、お願い」

ゼーレにいた時は感じることもなかった心のどよめきを、カヲルはあの時感じていた。

しばらくの間、沈黙が流れる。カヲルは己の選択を考え、シンジと士はそれをじっと待つ。

「…あの時」

やがて、カヲルが口を開く。

「君とシャワーを浴びた後、休憩室で見た光景。……あれを見たとき、僕はとても不思議な気持ちになった。彼らのことはほとんど知らないのに、なぜか僕は何か温かいものを感じていたんだ。おそらく、あれは心と心のつながりによって生まれるものだったんだろう」

それは、きつと素晴らしいものだ。

「僕はずっと考えてきた。なぜ、僕は心を持って生まれてきたのか、とね。……………その答えを、もう少し探してみてもいいかもしれない」

「っーじゃあ……………」

驚きと喜びが混じったシンジの声に、カヲルは首を縦に振った。

「ありがとう！カヲル君、ありがとう……………！」

「礼を言うのは僕の方だよ、シンジ君」

戻ってきた初号機とデイケイド、そして渚カヲルを見て、冬月コウゾウは碇ゲンドウに耳打ちする。

「いいのか碇。使徒をすべて倒さなければ、生命の樹は出現しないのではないのか」

「すでに初号機はS2機関を取りこんでいる。こちらのシナリオには支障は生じない」

そう答えてから、ゲンドウは冬月を見て告げる。

「今この瞬間をもって、ゼーレとは完全に敵対した。ここから勝負の時だ」

最後のシ者・渚カヲルは、人と共存する道を選んだ。

だが、まだ戦いは終わらない。

やっと書きあげられた……本当に苦しみました。大幅なタイムロス  
のせいで、こっから相当頑張らないと目標の日までに終わらせるこ  
とは無理ですね。でも頑張ります。

いつ気持ちがあ途切れるかわからないので、気が向いた方は感想とか  
送ってくださいるとうれいす。大きな原動力となります。

では、また次回。

## 第拾七話 其の巻 ハッピーエンドへ

渚カヲルはその身柄を拘束され、ネルフ本部の監視部屋に入れられた。だが、しばらくすれば出してもらえると言われ、ミサトから知らされ、シンジは安堵の笑みを浮かべた。

その戦闘の翌日、シンジは新幹線の駅に出向いていた。

その理由は。

「……やっぱり、碇達を置いて行っちゃうのは気が引けるけど……」

「しゃーないやろ。ワシらみたいな一般人が残ったたら、シンジ達だって戦いにくいからのう」

使徒とエヴァの戦闘の激化を受けて、クラスメイトたちの疎開が続々と決まってく中で、ついにシンジの友人・鈴原トウジと相田ケンスケがドイツへ向かうことになったのだ。今日が出発の日ということ、見送りに来た次第である。

「2人とも、ドイツに行っても元気だね。環境の違いとかで体壊さないようにしないと」

「わかってるよ。……というか、むしろ心配されるのはお前のほうだろ」

都会に出ていく息子を見送る母親のような態度のシンジにツッコむケンスケ。危険な場所に残るのは、他でもなくシンジの方なのだ。

「シンジ」

「?なに、トウジ」

トウジは大きく深呼吸をしたかと思うと、真剣な表情になる。

「…信じとるからな。お前や惣流、綾波が使徒を倒して、この街を平和にしてくれるってな」

「そうならたらずぐにでも帰って来るからさ、また3人で仲良く馬鹿やろっぜ」

「トウジ、ケンスケ………ありがとう」

その言葉は、シンジの心を強く後押ししてくれる気がした。



トウジはよし、と大きく頷くと、少し離れたところに立っている男の方を向く。

「……土先生」

「……珍しく礼儀正しいな。無神経なお前でも、さすがにナイーブになってるみたいだな」

カチン。

担任代理の教師の物言いは、こんな日でも相変わらずだった。

「なんや！人が折角丁寧なあいさつしようと思っと思ったのに……やっぱりむかつく奴や」

「聖人君子である俺のことが気に入らない？それはお前に問題があるんだ」

普段通りの高慢極まりない土の発言。

「……………」

だが、いつもなら『なんやとお！』と怒ってくるトウジからの返事がない。どうしたのかと土が彼の顔を眺めていると。

「……………あ、ありがとうな。あんたの授業はわかりやすかったし、相談に乗ってくれたこともあった。今までで一番の先生やった」

「……………お、おう」

さすがに素直に感謝されるのは予想外だったのか、土は気の抜けたような返事しか返せなかった。

が、少し経って気を取り直すと、彼は教師としての言葉を放つ。

「ま、ドイツに行っても達者でな。鈴原、相田」

「はい…」

気持ちの良い返事が、駅のホームに響いた。

一方、少し離れたところでは、同じくドイツに疎開することとなった洞木ヒカリとアスカが別れの言葉を交わしていた。アスカの後ろにはレイも立っている。

「ま、ドイツのことならアタシに何でも聞きなさい。国際電話は高いけどさ」

「もちろん。声が聞きたくなったらいつでも電話するからね」

日本に来るまではドイツに住んでいたアスカ。当然、その国の環境などについてはお手の物だ。

「綾波さんも、元気でね」

「……ええ」

ヒカリがレイに声をかけると、彼女はこくんとうなずく。一見無機質な表情に見えるものの、若干頬が緩んでいる。

すると、アスカはレイの首に腕をかけ、肩を組むような形にする。

「レイについては心配いらないわ。このアタシがちゃんど面倒見てやるんだから！」

「……アスカ、ちょっと苦しい」

「ふふ。何だか、そうしてると姉妹みたいね、あなた達」

ヒカリが2人のじゃれあいを微笑ましく見つめているさなか、ホームに列車の到着を知らせる音楽が鳴り響く。

「じゃあ、そろそろ」

「おーい、そのの3人！」

ヒカリが最後のあいさつをしようとしたその時、向こうからトウジの声が聞こえてくる。見ると、トウジ、シンジ、ケンスケ、そして士がこちらに向かってきている。

「というわけでみんなで手を合わせようやー！」

「……ハア？」

いきなりのトウジの言葉にアスカがそう返す。

「せやから、景気づけにみんなで『エイエイオー！』でもしよつってこつや」

「おいおい………」

士もアスカと同様、何言っただこいつ、というような顔になっている。他のメンバーも戸惑っているようだ。

予想に反して賛同が得られないことにしびれを切らしたトウジは、ムキになって無理やり全員の手を重ね合わせる。

「ちよつと、トウジ………」

「ええんや！こういうのはノリでやりきった方が勝ちや！」

ヒカリの声も聞かないトウジは、そのまま音頭を取り始める。



「そりゃそうですよ。……でも、今は気が引き締まっています。もう、後戻りはできないんだって」

「ふっ。言うようになったな、お前も」

シンジの返事に満足したかのように、士は小さく笑う。

「とにかく、アタシ達のやることは変わらないわ。これからも使徒を倒して行って」

「その必要はないよ」

アスカの声を遮るように、士達の背後から何者かが話しかけてきた。

だが、知らない声ではない。これは……

「やあ士。久しぶりだね」

後ろを振り向くと、予想通り海東大樹の姿があり、そして。

「……俺の方も、久しぶりかな」

加持リョウジが立っていた。

「それで？使徒と戦う必要がないって、どういうことなの」

ところ変わって光写真館。駅から帰ってきたメンバーにミサト、ユウスケ、夏海を加えて話が始まる。今の言葉はミサトが放ったものだ。

「言葉の通りさ。使徒はもう現れない」



「っ！じゃあ、もう終わりってことですか」

あっさりという言う海東に対して、シンジが驚いて尋ねる。

それに答えたのは加持だった。

「いや、戦いが終わったわけではない。……ここから少し、長い上に難しい話になる。途中で言葉を挟まず、しっかり聞いて欲しい。……まずは、セカンドインパクトについてだ」

セカンドインパクトという単語にミサトが反応するが、それには構わず、加持は話を始めた。

セカンドインパクト。それは第一使徒・アダムより生まれし使徒の覚醒を防ぐために、アダムを卵の状態にまで戻すことを目的としたものである。

だが、生物を卵に戻すとすると、強力な『アンチATフィールド』というものが必要となる。そのためには、ヒトの持つ知恵の実と、使徒の持つ生命の実が融合することが不可欠だ。

そこで、科学者たちはロンギヌスの槍を使用した。槍をアダムのコアに突き刺すことによりATフィールドを消滅させ、ヒトの遺伝子を融合させようとした。

そして計画通り、アダムはアンチATフィールドを発し始めた。だが、ここからが誤算だった。生命の実と知恵の実を手にしたアダムは、神に等しい力を手にしており、それゆえアンチATフィールドの威力も絶大だった。

このままではアダムどころか、地球上の生命体すべてがその姿を保てなくなってしまう。それを危惧した科学者たちは、アダムを爆破した。しかし、一定距離内にいた生物は、還元されてしまった。

「これが、人類の半分を一瞬で消してしまった、セカンドインパクトの真相だ」

続いて加持は、ゼーレがやろうとしていることを説明し始める。

太古の昔、ヒトは知恵の実を取って食べてしまった。それによって彼らは知恵を、心を得たが、同時に大きな罪を追い、神の楽園を追い出された。

この先、ヒトが進化を続ければその度に使徒が現れ、贖罪という名の破壊を行うだろう。今、人類の未来は閉塞している。

だから、自らの手で贖罪を行い、楽園に帰らねばならない。そう、全てのヒトがひとつに戻り、第二使徒・リリスの卵へ帰るのだ。そうすれば、永遠の心の安らぎを得ることができる。

つまり、ヒトの全てをアンチATフィールドによって還元することが必要。セカンドインパクトのアダムと同様、今度はエヴァンゲリオン初号機を使って。

これからゼーレが行ってくることは、まず第十七使徒・渚カヲルを殲滅すること。これにより、計画に必要な生命の樹が出現する。その後、人柱である初号機をそこに張り付け、コアを貫き処刑することによって、贖罪がなされる。こうして人類はみな卵に帰って、めでたしめでたし。

「以上が、『人類補完計画』だ」

加持がその言葉を結ぶ。だが、しばらくは皆呆けていて、何も口にすることができなかった。

だが、やがて最初にアスカが口を開く。

「……わけわかんないわよ。そんな、人類を卵に帰すだとか、哲学的すぎるわよ……」

明らかな戸惑いを表した発言に、海東が言う。

「でも、君達が使っているエヴァンゲリオンだって、とんでもない代物だよ。……なにせ、人間の魂を乗っけてるんだからね」

「は？ちょっと、それどういう……」

「エヴァ初号機には、碇シンジの母・碇ユイの魂が。エヴァ弐号機には、惣流・アスカ・ラングレーの母・惣流・キヨウコ・ツェツペリンの魂が、それぞれ宿っている」

海東の言葉に、写真館の中の空気が凍りついた。

第拾七話 其の弐 決戦前夜 / Photograph

「詳しい事情までは調べられなかったが、エヴァの中には君達の母親の魂が入っている。それだけは確かだ」

海東が淡々と告げたその事実は、あまりに苛酷なものだった。

「そ、そんな……………」

「嘘でしょ……………弐号機の中に、ママが…？」

なぜそんなことになってしまったのかと、シンジとアスカは理由を探す。誰かから強制されたのか、それとも

「……………自分の意志でやったとしたら、一体どういふつもりだったんだろっ」

ユウスケが言うように、自らエヴァに取り込まれたのか。

重苦しい沈黙が部屋を包み込む。非現実的な現実の壁が、彼らに立ちはだかっているかのように。

「…海東。零号機はどうなんだ」

しばらくして土が言葉を口にする。海東が零号機のことだけ触れなかったのが気にかかったようだ。

「ああ、零号機？それを説明するには、まず綾波レイの」

「待って」

だが、海東の話をレイ本人が遮る。

うつむいたまま何かを言い淀んでいるような様子を見せていた彼女は、やがて意を決したかのように顔を上にあげた。

「それは、私が話すわ」

ずっと、言おうと思っていたこと。自分の秘密を、友達には打ち明けておきたい。

だけど、同時にそれを止めようとする心が働いた。もし自分が普通

の人間ではないと言ったとしたら、シンジ達は離れていってしまうのではないか。『恐れ』という感情が、彼女を鈍らせていた。

でも、それももうおしまい。怖くても何でもいい。全て打ち明かしたうえで、改めて受け入れてほしい。

レイは話した。自分は碇ユイ、およびアダムの遺伝子を半分ずつ受け継いだ肉体と、リリスの魂を持つ存在であるということを。そして、自分以外にも同じ体のクローンがたくさんいて、自分が死ねば魂がそれらのうちのどれかに移しかえられるということ。

「綾波……だからあの時、自分が死んでも代わりがいるって……」

レイの告白に驚愕しながらも、シンジは冷静に第五使徒との戦いのことを思い出す。レイは彼の言葉にうなずいて、言葉を続ける。

「あの時は、本当にそう思っていたの。…でも今は違う。私は私、代わりなんていない。みんながそれを教えてくれた」

そう言ったのを最後に、レイは話すのをやめた。言いたいことは言いきって、後は皆の判断を待つつもりらしい。

こんな自分を拒絶するのか、それとも

「…そつか。大変だったんだね、綾波。話してくれてうれしいよ」

「心配しなくても、多少生まれが特殊だとしても、アタシ達はアンタを気味悪がったりしないわよ」

シンジとアスカの言葉は、綾波レイという人間を優しく包み込んでくれるものだった。

「……ありがとう」

レイの口から、心からの感謝がこぼれ出た。

そんな様子を見ていた大人たちも、なんとも言えない温かみを感じていた。

「よし、じゃあこの話が最後になる。よく聞いておいてくれ」

加持が前置きをしてから、真剣な顔つきで用件を伝える。



「ゼーレは戦略自衛隊を使ってネルフ本部を攻めてくるつもりだ。日時はちょうど一週間後。おそらくエヴァシリーズも投入してくる」

「一週間か……迎撃準備を整えるには十分時間があるわね。士君達もいるし、戦自の方は問題ないか」

「…どうかな」

ミサトのつぶやきに、海東が反論する。

「どういじょうと？」

「何、多分だけど、そろそろ土の追っかけが動いてくるんじゃないかと思ってるね」

「珍しく意見が合ったな、海東。俺もそんな気がする」

土も海東に同調する。

「あの……何の話をしているんですか？」

シンジの質問に、士は忌々しげな顔をして答えた。

「俺達と同じく、世界を渡っている男がいるんだが…そいつは俺のことがよっぽど嫌いらしくてな。いつも俺を倒そうと狙ってくるんだ」

「ほら、シンジが初号機に取り込まれちゃったとき、俺達使徒との戦闘に間に合わなかっただろ？あの時も、そいつ　　鳴滝っていうんだけどね。あいつが怪人を送り込んで、俺達の足止めをしていたんだ」

士の説明にユウスケが補足をする。それを聞いて、シンジ達も大体の事情を理解する。

「…でも、とりあえず今はゼーレの攻撃に備えることが最重要ね。私はこれから司令にこのことを伝えてくるわ」

「俺も行くぞ。ゼーレのスケジュールを裏付けする証拠も用意してある」

ミサトと加持が席を立つ。

その瞬間が、最後の戦いの始まりだった。

ネルフでは陸上戦の訓練が行われ、シンジ達チルドレンは多数のエヴァとの戦闘に備えた動きを叩きこまれていた。

敵のエヴァはおそらく初号機と同じS2機関を搭載している。そのため、コアを潰すまでは動き続けるのだ。かなり厳しい戦いになる

ことは予想に難くなかったが、それでも皆がむしやらに頑張った。

そして、6日後の夜。

「どうしたんだ、いきなり散歩に付き合えなんて」

「まあまあ、いいじゃない」

やれることはすべてやり終え、後は明日の決戦に向けて体を休めるのみ。

そんな折、土は半ば強引なアスカの誘いにより、現在彼女とともに夜道を歩いている。

「…しかし、住民の大半がいなくなったせいで灯りがほとんどないな」

「こつこついうのもいいじゃない。月のおしとやかな光りを好むのが日本の風流だって聞いたことあるわよ。……アタシも、意外とこつこつ風景好きかも」

「これはあれだな、ゴーストタウンってやつだな」

「ってムードを壊すなあ！」

いつもと同じ雰囲気、いつもと変わらない会話を続けながら、  
2  
人の足は進んでいく。

「あっ」

ふとアスカの足が止まる。

「ねえ、あそこでちょっと休まない？アイスの自販機もあるし」

彼女が指さした先には、公園のベンチがあった。

「ほらよ。特別におしつけてやる」

「あんがと。……はむっ。……っ、っ、さっぴりっのひんやり感が最  
高よね〜」

バニラバーを2つ買った土は、片方をベンチで待っているアスカに渡し、自らも隣に腰を下ろす。

「……………まあまあだな」

土の評価は相変わらず。

「……………」

「……………」

無言でアイスを食べる2人。先ほどまでとは打って変わって、いつもと違う静寂が訪れる。

「……………ねえ」

「なんだ」

おもむろにアスカが口を開く。

「明日で、終わるのよね」

「……ああ。明日の戦いに勝てば、この世界に平和が訪れる。そうしたら、お前も晴れて普通の中学生に」

「……そして、土もいなくなるの?」

アスカのその言葉は、『行ってほしくない』という彼女の思いが強く感じられるような悲しいものを含んでいた。

「……ああ。俺の役目が終われば、また次の世界へ旅立つさ」

だが、その気持ちをくみ取った上で、土ははっきりとそう言った。

「……そっか。行っちゃうのか」

そこまで言って、アスカは下を向いて黙り込んでしまう。

士としても、自分がアスカという少女の大きな支えになっていることとはわかっていた。彼女を置いて別の世界へ行ってしまうことに、少しも抵抗を覚えていないかと言えば嘘になるだろう。

だから、何か気の利いたことでも言おうと言葉を探しているのだが、コミュニケーションが下手な彼にとってはなかなか難しいことだ。

「じゃあそ」

そうこうしているうちに、アスカの方から話しかけてきた。その声  
が意外と明るいことに士は若干驚く。

「写真、撮ってくれない？そのカメラで」

「ん？……まあ、別にいいが」

予想外の頼みごとに首をかしげる士だが、とりあえずはアスカの言  
うとおり、立ちあがってカメラを構える。

「いい？ちゃんと撮ってよね！」

「ちゃんとして……知ってるだろ。俺の撮った写真はみんな」

ぶれるんだぞ、とため息交じりの士。が、対してアスカは笑って、



「いいよ、ぶれてたって。土に撮ってもらえれば、アタシは満足だから」

と、妙に女らしい表情で言った。その顔つきに一瞬戸惑う土だが、すぐに気を取り直す。

「……撮るぞ」

「オッケー」

カシャッ、という音とともにシャッターが切られる。その後、ふう、と息をついてカメラを下ろす土。

「きちんと現像して大切にしときなさいよ。なんたってこのアタシの写真なんだから!」

「ああ……」

アスカの偉そうな物言いにぶっきらぼうに返す土。やはり人に高慢にされるのは気持ちが悪くないらしい。

「そろそろ帰るぞ。ちゃんと眠つとかないとな」

そう言つて土は公園を出ようと足を動かす。

「土！」

「なんだ、まだ何かある」

後ろからかかった声に面倒くさそうに振り返ると。

「ありがとう　んっ」

目一杯背伸びしたアスカの唇が、土の唇に重なっていた。

その間、およそ3秒ほど。

唇を離れたアスカは、してやったりといった表情で笑う。

「アイスの味しかなかったわ」

「……ふん、大人ぶりやがって。……明日は大活躍してやるから、しっかり目に焼きつけとけよ」

悪態をつきながらも、士は自信に満ちた顔でそう高らかに宣言した。

「あれ？大樹さん、何か悩みごとですか」

場所は変わって光写真館。椅子に座ったままぼーっとしている海東を不思議に思ったのか、夏海が声をかける。

「……うん？いや、何でもないよ、夏メロン」

「何度言ったらわかるんですか。私は夏メロンじゃなくて夏ミカン……でもなくて、夏海なんです！」

「そうかい。……さて、僕もそろそろジオフロントに出向こうかな」

夏海の説明を軽く流し、海東は椅子から腰を上げる。

明日に決戦を控え、土やユウスケ、海東のライダー勢はネルフ本部で夜を明かすことにしているのだ。

「まったく……」

ぶんぶん怒っている夏海を尻目に、海東は写真館を出る。

道中、彼は再び思考の海へ意識を潜り込ませる。

「……碇ゲンドウ。確証は持てないが、彼は何か事を起こそうと考えている」

加持も気づいていたことだが、ゲンドウも人類補完計画を実行に移そうとしており、しかもそれはゼーレのやろうとしているものとはまた違うものだ、という推測が海東の頭の中に生じている。

士達に言わなかったのは、下手にネルフ側に疑念を抱いていることを感づかれるといる厄介だと判断したためである。

「もし何か起きたら、その時は」

「あ、冬月さん」

「……君か」

一方ネルフ内の休憩室では、ユウスケと冬月が出くわしていた。どちらも戦いを前にリラククスしに来たらしい。

「ここで冬月さんと暮を打ったんですね。あの時はぼろ負けだったなあ」

「そんなこともあったな。……だが、光さんには負けてしまったな」

「あれだってどっちが勝ってもおかしくないくらいレベルの高い勝負でしたよ。見てるこっちも手に汗握りましたから」

先日光写真館で行われた囲碁対決は、ほんの少しの差で栄次郎が勝利を収めていた。

「……あの時、レイが来ていただろう」

その日のことを思い出しているのだろうか、遠い目をして冬月が言葉を発する。

「ああ、途中からいましたね。シンジと一緒に」

「……初めてだったよ。あんな顔をしているレイを見たのは」

無感情だったはずの彼女の顔はいつの間にか、うれしいとか楽しいとか、そういった感情をはっきり示すようになっていた。

「……あの子も、変わったということか」

「まあ、そんなところですかね。シンジが元気になって、いろいろ話しかけたりしてましたから」

冬月はユウスケの顔を見る。過去に大切な女性を失くしたという青年の、屈託のない笑顔を。

「……私も、変わるのだろうか」

ほとんど独り言のようにつぶやいた言葉だったが、しっかりユウスケの耳に届いていたらしい。真面目顔になって、彼は話し始める。

「……俺、冬月さんがどんな過去を経験してきたかはわからないですけど……でも、人は誰でも、きつと変わることができると思います。俺も、士達と一緒にいて強くなれたから」

「……そうか」

ユウスケの言葉を聞いた冬月の反応は、どっちつかずなものだった。



同時刻。ネルフ内の研究室では、レイが培養液に浸かっているのをゲンドウがじっと見つめていた。

「…体に異常は見受けられない。これで明日の計画に支障が生じることもない」

満足そうにそう言うと、ゲンドウはレイにもういいと指示を送る。

やがて培養液から出てきて服を着たレイが、ゲンドウの前に立つ。

「碇司令。あの……………」

「……………何だ」

「…司令は…何を考えて……」

綾波レイは知りたかった。自分を生み出した碇ゲンドウという人間が、一体その眼に何を見ているのか。

いろんなことを知った今だからこそ、彼のこともっと知りたいと思う。彼とわかりあいたいと感じる。

だが、ゲンドウの有無を言わさないような気迫に満ちた表情を見ると、どうしても言葉が途中で止まってしまふ。

「用がないなら寝なさい。明日は早い」

結局、レイにはゲンドウの心の中を垣間見ることができなかった。

それからしばらく経って、現在午後11時。

碇シンジは、夜風に当たろうと外に出ていた。

「……………」

「まだ寝てなかったのか」

その時、背後から聞こえる声。誰のものはすぐにわかった。

「先生……………」

「どうした？決戦前にびびってるのか」

「……そりゃ確かに怖いですけど、別にびびるとまでは言ってませんよ。ただ……」

そこで一度、シンジは言葉を止める。

「ただ、なんだ？」

「思い出してたんです。先生が来てからのこと」

本当に、色々あった。新しくやってきた教師はとんでもなく偉そうで、それでもって説教まがいのことをされて怒ったりもした。

でも、彼のおかげで親友を助けることができた。生きる意味を見つめることができた。守りたいと思った少女を守ることができた。

「先生……僕、変わったと思いますか」

何気なく土に尋ねるシンジ。だが、内心はかなりドキドキしている。

士はそんなシンジの心を見通しているのかいないのか、ふっと小さく笑う。

「……さあ？あんまり変わってないかもしれないな。ただ」

「……ただ？」

「少しだけ、背中が頼もしくなったかもしれない」

その答えに、シンジはパアッと顔を輝かせる。

「ありがとうございます。先生のおかげで、大切なことに気づけました」

「……そういう言葉は、明日の戦いに勝ってから言っただな」

「……はいっ」

……あと少しだ。あと少しで、戦いは終わる。

その時士はいなくなってしまうのは寂しいが、彼には彼の人生があるのだから、邪魔するわけにもいかない。

絶対勝とうと気合いを入れ、シンジは寢床に向かった。

第拾七話 其の弐 決戦前夜 / Photograph (後書き)

とりあえず後は最終決戦を残すのみとなりました。本当はもっとい  
るんなキャラを出したかったのですが、気力が…… よって最低限  
必要な人数になりました。

感想や評価などあれば、気軽に寄せください。

今日中に後一話上げられるか……？

では、また次回。

第拾八話 其の壱 褒賞は、未来（12月22日大きな修正。必ず読み直して）

「等しき死と祈りをもって、人々を真の姿に」

「それは魂のやすらぎでもある。」

「悠久の時を示す赤き土の楔ぎをもって、まずはジオフロントを真の姿に」

「始まりと終わりは同じところにある。よい。全てはこれでよい」

～～ゼーレの思想より～～



第拾八話 其の壱 褒賞は、未来（12月22日大きな修正。必ず読み直して）

時刻は、もうすぐ午後0時に差し掛かるうところ。

第三新東京市は、異様なまでの静寂と緊張感に包まれていた。

残り少なくなった住民は皆シェルターに避難し、これから何が起きるのかと戦々恐々だ。

そして、それから間もなく。

戦いが、始まった。

「戦略自衛隊の兵士がジオフロントを包囲!…予想していたよりも数が多い!」

作戦司令室にいる日向マコトが険しい表情になる。確かにネルフにも警備員はいるし、一般職員も銃の扱いくらいは心得ている。

だが、戦い方を『知っている』だけの人間と、『体に染みつかせている』軍隊との差は歴然だ。いくら仮面ライダーという頼もしい戦力があるとはいえ、その数はたったの3。防ぎきることができない人数にも限りがあるのだ。

「……………うまくやってくれていれば」

「え……………?」

葛城ミサトがつぶやいた意味深な言葉にマコトが反応したその瞬間。

「っ!?!?な……………これは!」

モニターの映像にマコトは驚愕し、ミサトは口元をにやりと歪ませる。

戦自の兵士たちの銃口が、一斉に反対　　ジオフロントと逆の方向を向いたのだ。

「ナイスコソ泥コンビ、よくやってくれたわ！」

この一週間、行ったのは戦闘訓練だけではない。たとえば、ハツキングされないよう、MAGIの防壁は限界を超えた限界といつても差し支えないほど頑丈にした。

そしてもうひとつ、敵を内から崩すこと。

加持リョウジと海東大樹が裏で動き、戦自の親ネルフ派にクーデターを起こさせたのだ。結果戦自のトップはネルフの味方となり、こちらにとって脅威ではなくなった、というわけだ。

うれしい誤算に、作戦司令室内の職員の顔がほころぶ。

……だが、それもつかの間の出来事。

「こ、これはっ……！正体不明の生命体多数が戦自の兵士を突破して侵攻してきますー！」

オペレーターのひとり、青葉シゲルが焦ったように報告する。当然だ。その人間サイズの生物を、彼は見たことがないのだから。

「生物は正面ゲートと裏ゲートに集中していきます！」

伊吹マヤの言葉に、その生物を見たことがあるミサトは表情を引き締める。

「怪人、か……あくまで目標は仮面ライダーのようね。ネルフ侵攻はついでといったところかしら」

そう、怪人が目指すゲートには、それぞれ門矢士と小野寺ユウスケが配置されているのだ。

戦自の兵士が歯が立たないのなら、やはり普通の人間では勝ち目がないだろう。

「……頼んだわよ。仮面ライダー。……でも、心配事はそれだけじゃないのよね」

「……で、予想通り怪人軍団のお出ましってわけか」

グロンギ、アンノウンからヤミーまで、今まで戦ってきた種類の怪人たちの群れを前にして、門矢士は好戦的な目つきを崩さない。

「さっき俺達のところにはしか集まってないって連絡もあつたし、存分に目の前の敵に集中できるぜ」

『k a m e n r i d e d e c c a d e 』

手慣れた動作でディケイドへの変身を完了させた士は、ライドブッカーをソードモードに変形させ、怪人の群れに向けて切先を向ける。

「さあ、早くかかってこいよ。格の違いってやつを見せてやる」

「…つわ、この数はさすがにちょっと、なあ」

一方こちらは裏ゲート。怪人の多さに少し弱気なセリフを口走っているユウスケだが、それに反して体は真っすぐ敵に向かっていく。

「……変身!!」

ポーズを取ってクウガへ変身するユウスケ。その姿は、バランスに長けた器用な形態・マイティフォームだ。

「……っし!来い!!」

時を同じくして、ネルフのセンサーが9機の輸送機の接近を知らせる。ステルス機能があるらしく、もうすぐその空を飛んでいるようだ。

『シンジ君、アスカ。……準備はいい？』

「…大丈夫です」

「もちろんオーケーよ」

ミサトの確認に、それぞれのエヴァに搭乗したチルドレン2人が答える。

「……この大一番に、レイのヤツは一体どこをほつつき歩いているのよ」

今日になって、綾波レイの姿がどこにも見当たらないのだ。

『今人数使って探してるところだけど……まだ居場所はわからない』



わ  
『

「大丈夫だよ、アスカ。綾波はきつと　　っ！」

シンジが途中で言葉を切り、空を見上げる。

ついに来たのだ。ゼーレの最後にして、最大の刺客・量産型  
エヴァンゲリオンが。

地上で待ち構えているエヴァ2機のもとに、輸送機から白いガラス  
のような物体が落下し、着地する。

しかし。

「な、なんだこれ……………」

現れた敵の姿に、シンジは驚きを隠せない。

なぜなら、9体の量産機にはそれぞれ禍々しい2本の角が生えてい  
るほか、ところどころが明らかに他とは違うパーツで構成されてい  
たからだ。

直感的に敵の異様さを感じ取ったのはシンジだけではない。

「気持ち悪い……こいつら一体……まさか、エヴァと何かを混ぜ込んで」

アスカが予測を口にしようとした瞬間。

「その通りだ」

どこからか、声が聞こえた。通信ではない。だが、そうでなければ普通の声が届くはずが

「……まさか」

何かに気づいたアスカが声を震わせる。彼女の視線の先には

「このエヴァシリーズには、とある男からもらった怪人の遺伝子が入っている。そしてその中のひとつには、この私      キール・ロレンツの魂を乗せたのだ」

量産機の中の、とりわけ気味悪い気配を放つ一体。

男の声は、そこから聞こえてきた。

「どういつこと……まさか、補完計画のために、自分の体まで捨てたっていうの……」

「そうだ。この力で最後の使徒を殲滅した後、人類をあるべき姿に帰す！……私の願いは、ただそれだけだ」

信じられないというアスカの言葉に、キールは平然と答える。

「そんな、馬鹿な……」

シンジの口から、意図せず言葉がこぼれる。それほどショックが大きいのだ。

目の前の男は、目的のために人間であることを捨てたというのだ。そこまでして、人類補完計画というものは叶えたいものなのか。

その戸惑いが冷めないうちに、量産機が動きだす。

怪人の遺伝子を手にし、新たな進化を遂げた、エヴァンゲリオンの群れが、襲ってくる。

その戦いの様子を、遠くから眺める男がひとり。

「ふふふ……はははは！終わりだ、今度こそ終わりだディケイド！」

ゼーレに取り入り、怪人の遺伝子を提供した人間　　鳴滝だ。

「ディケイド……貴様の性格はよく知っている。必ずあのチルドレンとやらを助けようとするだろう。だが貴様はその前に怪人の大群と戦わなければならない。仮にそれをすべて倒したとしても、傷ついた体であるエヴァンゲリオン9体を倒すことは不可能だ！」

そう、すべてはディケイドを倒すため。

勝利を確信した鳴滝は、高らかに笑い続けた。

第拾八話 其の弐 Fight in heart (前書き)

前回のストーリーに大きなミスがありました。今後の展開に関わる重大な修正を行ったので、こつちを見る前に必ず前回を読み直しておいてください。ご迷惑かけて申し訳ありません。

第拾八話 其の式 Fight in heart

「……………始まったか」

ネルフの独房の中で、渚カヲルはひとり呟く。戦いの開始を、雰囲気を感じ取ったのだ。

「個々の心を大切にする者と、リリンをひとつの存在にしようとする者……………果たして、どちらが勝つのか」

独房の冷たい床に仰向けになる。

少し前までは、人類の未来がどちらへ進むのか、ただ興味を持って考えていただけだった。

だが、今は違う。

「信じているよ、シンジ君。君達が、素晴らしい世界を勝ち取ってくれることを」

目を閉じて、彼は『友達』の勝利を祈る。

「うおおっ!!」

その頃、渚カヲルに生きる道を選択させた少年・碇シンジは、迫りくるエヴァシリーズと戦闘を繰り広げていた。

何とか敵の一体に深い傷を与えコアをむき出しにさせたものの、致命傷には至っていない。



2対9という圧倒的な戦力の差は、確実にエヴァ初号機の機体を蝕んでいつている。

「くそつ、あいつら動きのキレはないけど、パワーが半端じゃないわよ!」

通信機越しにアスカの焦る声が聞こえてくる。初号機と同様、式号機も少なからずダメージを受けている。

加えて式号機は、今この戦場に存在するエヴァの中で唯一S2機関を搭載していないのだ。常にエネルギーの供給に気を配らねばならない分、アスカの方が苦しいはずだ。

「全てが終わり、全てが始まる時がやってくる。邪魔をする必要はないのだ」

キール・ローレンツの嘲るような声が耳に入ってくる。もはや勝利を確信しているのか、自信満々のようだ。

……敵の力は予想以上。まさに、絶対的不利。

だが、たとえ量産機がATフィールドをこじ開ける擬似ロンギヌスの槍を持っているとしても、想像もしていなかった怪人の遺伝子を組み込んでいるとしても、本来ならばここまで一方的な展開にはならなかったはず。

「…………綾波」

この場にはいない零号機パイロットの名を、シンジは口にする。

戦闘訓練は、こちらのエヴァが3機いることを前提に行われていた。それゆえ、零号機が参戦しない限り、相手に有効な戦い方はできない。

「どこにいるんだ、綾波」

「……時は来た」

その時、ターミナルドグマでは、碇ゲンドウが不敵に笑っていた。

そして彼の隣には、綾波レイの姿がある。

「……もう、戦闘が」

「構わん」

外で戦っているであろうシンジやアスカ達を心配するレイの言葉を、ゲンドウはにべもなく切り捨てる。

「……………」

零号機に乗って、早く出撃したいという気持ちだが、レイの中でうずく。

だが、同時にこつも感じていた。

「（…この人は、一体何を考えているの）」

碇ゲンドウ。レイを生み出し、育てた存在。だから、彼女は彼に特別な感情を抱いている。

…このままここにいれば、彼の心の中がわかるかもしれない。…いや、間違いなく彼が望んでいることを知ることができる。

シンジ達のことも大切。だけど、ゲンドウもレイにとっては大切な存在なのだ。

だから、その場から動くことができない。本当に大事なものを天秤にかけるのを、経験したことがないから。

レイが悩んでいる間にも、状況はどんどん進んでいく。ゲンドウが右手にはめていた手袋を外すと、そこには白い異物が顔をのぞかせ

ている。

「っ！……アダム……」

「すぐに終わる。何も心配することはない」

恐らくゲンドウは、自ら取り込んだアダムとレイの中のリリースの魂を反応させ、何かを起こすつもりだ。

どうすれば

ゲンドウの手が、少しずつレイの体に近づいてくる。

一体、どうすれば……

「（誰か……教えて）」

「ストップ！傍から見るとわいせつな行為に見えるからやめたまえ、碇ゲンドウ」

その瞬間、ターミナルドグマに引きしまった男の声が響く。驚いたレイとゲンドウは、同時に声のした方を振り向いた。

その先には

「ああ、綾波レイ君。ずいぶん辛そうな顔をしているね?」

海東大樹が、まるで散歩にでも来たのかというような気楽な表情で立っていた。

「貴様は…仮面ライダーか」

「憶えてくれるとは光栄だね。ま、さすがに僕がここに来るとまでは予想してなかったみたいだけど」

両者の距離は、およそ15メートル。

「…どうやってここに入ったか」

「ああ、気になるかい?当然だろうね、多分ここにつながる通路の

警備には一番凝ってたんだろっ？さすがの僕でもひとりではもう少し時間がかかっていた」

そう言って、海東はちらつとターミナルグマの入口あたりに視線を移す。

「……君の仕業か。赤木博士」

ゲンドウの声が聞こえているのかいないのか、そこに立っているリッコは口を開いてこちらに届かないくらいの小さな声で何かを言った。

「と、いうわけだ。おわかりいただけたかな」

「……ああ、よくわかった」

そう言った瞬間。

ゲンドウが懐に忍び込ませていた銃を取り出し、それを海東に向け

バンッ！

「……………」

レイは思わず息をのむ。

銃声は、ゲンドウのものから発せられたのではない。

「なめてもらっちゃあ困るな。人の殺気くらいは読めるよ、僕は」

刹那に銃を構えた海東が、ゲンドウの銃を正確に狙い、弾き飛ばしたのだ。もちろん、ゲンドウ本人にダメージはない。

「……………」

ゲンドウは黙ったまま。少しの間、ターミナルドグマを不気味な静寂が包む。

「……………」正直

口を開いたのは、海東。



「僕としては、このまま君の思うとおりのサードインパクトを起こしてもらっても構わない。そうなたら、巻き込まれる前にこの世界を出てしまえばいいだけだし」

そこで言葉を切った海東は、視線を動かす。

ずっと戸惑いの表情を浮かべている、綾波レイの方に。

「だが、君はどうなんだ？」

「…っ！」

射抜くような視線で、直球に尋ねてくる海東。対するレイは、その答えを口にすることができない。

そんな彼女の様子を見て、海東はその顔つきを今まで見たことのないような真剣なものに変える。

「他の誰でもない、君が決めるんだ。君が何を大切に思い、何のため動くのか」

……その言葉には、彼のありったけの思いがこめられているように感じられた。

「……………私が、決める……………？」

思い出される、今までの出来事。

ゲンドウとは、長い間一緒にいた。……………だけど、彼との間の関係には、決定的な何か欠けていると感じられた。

シンジとは、出会って1年経つか経たないくらいだ。……………それでも、彼からはいろんなことを教えてもらった。お弁当の温かさ、生きていたいという気持ち。そして　人と人が触れ合うことの温もりを。

どちらのために、動くのか。

「レイ、耳を傾けるな」

そう言いながら、同時にゲンドウがアダムを取りこんだ右手でレイの体に触れようとする。

そして、その手は彼女に届いた。

「……………なぜだ」

だが、何も起こらない。アダムとリリスは、反応しない。

それは、ゲンドウの前に立つ少女が、それを拒否しているから。

「…行かないや。碓君達が待ってる」

決意に満ちた言葉に、海東はフツと笑い。

ゲンドウは、絶望に打ちひしがれて床に膝をつく。

「司令！」

それを見たりツコがゲンドウのもとに駆け寄る。

「さあ、きっと今頃彼らは大ピンチだ。早くエヴァのところに向かうんだ」

海東の指示に、レイはしっかりうなずく。先ほどまでとは違う、迷いを振り切った表情で。

そして、海東はふう、と息をついてから視線を動かす。

「……で？その男はもう生きる気がないみたいだけど、どうするんだい？」

彼の言うとおり、ゲンドウの目からは生気が感じられない。

それでも、リツコは力の抜けたゲンドウを立たせようと必死に力を入れる。

「聞こえているかい、碇ゲンドウ。君が初号機に取り込まれた妻を深く愛していたということは知っている。君の計画が成功すれば、愛する妻にもう一度会うことができたんだろうね。その可能性が潰えたから、絶望している。……だが、君のことを大切に思っている人間がいるんだ。まだ、生きる意味はあるんじゃないのかな」

その言葉を残して、海東はレイを連れてターミナルドグマを出ていく。



それから少し経ったころ。裏ゲートでは、依然として激しい戦闘が行われていた。

現在のクウガの姿は、重量型のタイタンフォーム。用意していた鉄パイプをタイタンソードに変化させ、大量の怪人たちをなぎ倒していたのだが。

「はあ、はあ……やばいな、そろそろ限界かも……」

もう何体倒しただろう。ユウスケのスタミナは底を尽きかけていた。だが、見たところ残る敵はわずかのようだ。このまま押し切って

「ウオオオオ！」

一瞬の隙を突かれ、牛型のオルフェノク                      オックスオルフェノクが間合いに入ってくる。

「がはっ……」

オックスオルフェノクの突進が命中し、はね飛ばされるユウスケ。さらに、その拍子にタイタンソードが手から離れてしまう。

「しまっ……………」

ここぞとばかりに大きな拳を振り上げてくるオックスオルフェノク。ユウスケはダメージを覚悟してガードの体勢に入り

パンパンパン！

「え……………」

突如響く銃声。同時によるけるオックスオルフェノク。

「今です！」

振り向けば、そこには数人のネルフの職員達が拳銃を構えて立っている。

「超変身！うおおおー！！」

即座に体勢を立て直してマイティフォームに姿を変えたユウスケは、そのまま左足を軸に蹴りを放つ。

直後、オックスオルフェノクにクウガの紋章が浮かび、爆発した。

「やった！」

「これからは私達がサポートします！」

背中に感じる職員達の力。気力を取り戻したユウスケはこくりとうなずき、再び怪人達に突っ込んでいく。

「そつだ、俺はひとりで戦ってるんじゃない……支えてくれる仲間がいるんだ」

一発、また一発。敵に拳を入れることに、体がきしむを感じる。さきほど受けた攻撃が尾を引いているらしい。

それでも、動きは止めない。後ろで戦ってくれている人がいる限り、自分だけがギブアップすることなど許されない。

「負けない……俺は」

その時、クウガのベルトのアーケルがその色を変え始める。



「俺は、みんなを守るんだ！」

ユウスケの強い意思に呼応し、アークルはさらなる力を引き出す。

「っ、これは……………」

ユウスケ自身も驚く。この力は、『あの時』以来使うことができなかった

「……………究極の、闇？」

黒き瞳に、黒き装甲。

聖なる泉枯れ果てし時、  
　　凄まじき戦士雷の如く出で、  
陽は闇に葬られん。  
　　太

仮面ライダークウガ・アルティメットフォーム。その力は、究極の闇を意味する。

しかし、だからといって。

その力が、究極の光をもたらすことも、十分にあり得るのだ。

「よっしゃ！一気に倒す！」

圧倒的な力の前に、怪人たちは成す術もなかった。

あっという間に、裏ゲートの敵は全滅。

同時に、疲労が限界に達したユウスケは、変身を解除してその場に倒れ込む。

「だ、大丈夫ですか！」

「すぐに運ぶんだ！」

職員の人たちの声を聞きながら、ユウスケは小さく呟いた。

「……ありがとうございました」

時を同じくして、地上。

「……がはっ……はあ、はあ」

「……んちくしょう……」

エヴァ初号機、および弐号機に蓄積されたダメージはかなりのもの

になっていた。当然、痛みがフィードバックされるシンジとアスカも、体中が悲鳴を上げている。

「（……そろそろ限界だ。くそつ、こんなに強いなんて……ここまですて叶えたいものなのか、人類補完計画っていうのは！）」

セカンドインパクト以前、おそらくは何十年も前から、ゼーレはその計画のために己のすべてをかけていたのだらう。それほどの強烈な意志が、目の前のキール・ローレンツからは伝わってくる。

「（っ！ダメだ、弱気になるな！この初号機には母さんが乗ってるんだぞ！……でも、どうして母さんはエヴァに……？）」

「（ママは、一体どういう理由で弐号機に　　？）」

シンジとアスカの思考は、偶然にも一致していた。

自分の母は、なぜエヴァの中にいるのか。誰かからの命令なのか、それとも自分の意思でなのか。そしていずれにせよ、どうして自分の母でなければならなかったのか。

そのせいで、辛い思いをすることになったのに、どうして。

絶体絶命の状況において、暗い思考が2人を支配する。

万事休すか。量産機の一体が、ロンギヌスの槍を構え

瞬間、轟音が戦場に響き渡った。

何かが槍を構えた量産機を横から飛び蹴りで吹き飛ばしたのだ。同時に、砂煙が舞い上がる。同

「……………あれは」

「…ひよつとして……………」

視界の晴れた先に、シンジとアスカの目に映ったものは。

「「零号機……………!!」」

「ごめんなさい。遅くなったわ」

待ちに待った、エヴァンゲリオン零号機の姿。そして、通信から入ってくる聞きなれた少女の声。

「綾波！待ってたよ！」

「まったく、遅すぎるわよこの馬鹿！」

ファーストチルドレン・綾波レイだ。

「……私、もう迷わない。生まれや育ちも関係ない。私は今、みんなと一緒に生きたいから戦うの」

いつもとは違う、強い調子のレイの言葉に、シンジとアスカは胸を打たれる。

「……そうだ」

「何のためにママがエヴァに取り込まれたのか？簡単じゃない……」

2体の量産機が、動きの止まった初号機と弐号機に真っすぐ突っ込んでくる。

なぜ、母はこんなことになったのか。なぜ、自分は厳しい戦いに身を投じてきたのか。

「……このためだ!!」

相手の勢いを利用したカウンター。敵2機のコアに、深々とプログレッシブナイフが突き刺さる。

そう。自分の力で、自分の決めた道を進むために。

「よっしゃ、2体撃破!!」

「まだいける……みんな、頑張ろう!!」

「……ええ」

終わっていない。

まだ、世界の行方は決まっていない。

一方、正面ゲートの怪人も、着々とその数を減らしており、ついに残りわずかとなった。

「ふう……さすがに息が上がってきたな。一気に決めるか」

『k u u g a , a g g i t o , r y u k i , f a i z , b l a d e ,  
h i b i k i , k a b u t o , d e n - o , k i v a  
『a



ケータツチを取りだした士は、手慣れた動作で次々と画面をタッチしていき。

『final kamen ride decade』

ディケイドはコンプリートフォームへと姿を変える。

「はあっ！たあっ！」

ライドブッカー・ソードモードで次々と怪人たちを切り刻み、残るは後一体。

『kabuto kamen ride hyper』

「終わりにしてやる」

『final attack ride kaka, kaka, kaka  
butto』

「……来い」

言葉を話すその紫色の怪人は、土の攻撃を真正面から受け止めるつもりだ。

「……はあああつー!!」

ハイパーカブトの必殺技・マキシマムハイパータイフーンが、2つの剣から同時に放たれ、怪人に命中する。

「グオオオオオウ……!!」

怪人が悶える。

だが。

「……なんだと!？」

怪人は、倒れない。

「ウオオオオオ!」

それだけではない。まったく同じ一撃を、土に返してきたのだ。

「ぐわあああ!?!」

あまりの威力に土は弾き飛ばされ、コンプリートフォームから通常  
の姿へ戻ってしまう。

「ふ、フハハハ……」

高笑いをする怪人　カッシスワーム・ディミディウスは、その  
隙を逃さず追撃を加えてくる。

「くそっ、相手の技をコピーするの……?」

一度倒れたことにより今までの疲労があふれ出てきた土は、ただ  
その攻撃を耐え凌ぐことしかできない。

「(…ひよつとすると、違う種類の必殺技を同時に当てれば混乱し  
てオーバーヒートするかもしれない。だが……)」

この場には、自分しかない。コンプリートフォームはライダーを

召喚できても、違う必殺技を使うことは不可能だ。

そうこうしているうちに、どんどん士の体力は奪われていき。

「ハアッ!」

ついには再び吹き飛ばされ、壁に叩きつけられてしまう。

「じが、あ……!」

あまりのダメージに、士の頭がうな垂れる。

「…ふふふ。そろそろ終わりのようだな」

勝ち誇ったように言うカッシスワーム。状況の優劣は、誰の目にも明らかだ。

「…そうだな」

だが、士は仮面の下で不敵に笑う。

「終わるのは、お前の方だけだな」

『final attack ride de de de de  
cade』

デイクイドライバーから電子音が鳴り、同時に10枚のカードの壁がカッシスワームに向かって伸びていく。

それをただの悪あがきだと思い、もう一度受け止めてやろうとゆっくりと構える。

しかし。

『final attack ride di di di di  
denn』

「っ！？なに……」

突如、背後から聞こえた電子音に戸惑うカッシスワーム。

「遅えよ」

士のその言葉は、焦るカッシスワームへ向けてのもとか。

それとも、向こうで銃口を構えている仮面ライダーディエンドへ向けてのものか。

直後、ディケイドの必殺技・ディメンションキックと、ディエンドの必殺技・ディメンションシュートが同時に炸裂する。

「が、があああああ！！」

士の予想通り、カッシスワームは攻撃を受け止めきれず、痛みを苦しんでいる。

「はあああつ！！」

渾身の力をこめて、士は剣を振り切る。

最後の怪人は、跡形もなく爆散した。

「……ぐっ」

疲れが押し寄せ、思わず膝をつく士。そんな彼の前に、海東が立つ。

「貸しひとつだね、士」

「はっ。貸しならお前にいくらでも作ってるはずだぞ」

「…そんな減らず口が叩けるくらいなら、心配なさそうだね」

いつも通りの調子で交わされた会話の後、士は海東の手を借りて何とか立ちあがる。

最後の戦場に向かうために。

「……………おいおい。随分と押されているじゃないか」

エヴァ同士の激戦が繰り広げられている場所に移動した士は、視界に入ってきた光景に悪態をつく。

こちらのエヴァは3機。対して向こうは現在動いているのが6機。

だが、数で負けているのは最初からわかっていたことだ。むしろ、1機も犠牲にせずに3機を倒しているのだから、そこは問題ではない。

「3機とも動きが悪くなっているね……………特に初号機。あれは結構大事な部分をやられているんじゃないか」



海東の推測に土もうなずく。こちらのエヴァはすべて疲弊しきっているのだ。状況としては間違いなく不利。

「……海東」

「あれを使う気かい？」

士が言い切る前に、海東がその意思をくみとる。

「ああ。今の状況で逆転できる唯一のカードだ」

「オーケー。ま、変形するのは僕じゃないしね」

海東はそう言うと、ディエンドライバーに1枚のカードをセットする。

『final form ride de de de de ca de』

「痛みは一瞬だ」

銃口を土の背中に当て、海東は引き金を引く。

直後、デイケイドの体は大きく形を変え、大型のベルト『ジャンボ  
デイケイドライバー』になった。

「……………うっ！まずいな…これ以上まともに攻撃もらったら、動けな  
いかも…」

初号機の状態は、パイロットである碓シンジが最もよく理解してい  
た。何とか協力プレイで3分の1は倒したものの、すでにこちらは  
3機とも傷つき、特に初号機は満身創痍だ。

「何とかしないと……………」

シンジが、必死に動き方を考えていた矢先。

『随分苦戦しているようだな』

「えっ……………士先生？」

突然聞こえてきたその声に驚くシンジ。

もともと、声の主が巨大な空飛ぶベルトだと気づいた時の驚きの方が大きかったが。

『さあ、いくぜ』

「へ？ちよ、いくって……………」

シンジの言葉を無視して、ジャンボディケイドライバーはエヴァ初号機の腹に装着される。

そしてその瞬間、初号機は新たな装甲を身に纏う。

「これって……まさか」

『そつだ』

シンジの声に、土が答える。

『お前に、世界の破壊者の力を使わせてやるよ』

初号機の姿は、巨大なディケイドとなっていた。

第拾八話 其の式 Fight in heart (後書き)

なっげー！ー！疲れた、疲れたよパトラッシュ………

というわけで今回は海東さん大活躍の巻でした。レイに対してのセリフは、何が価値あるものかわからない海東が言うから余計に重みがあるのでした。

次回は士のスーパードクタートイムと、最終決戦です。長かったこの作品もついに完結が近づいてまいりました。感想や評価など送ってくださるとテンションあがりまくるので、どんどん気軽に書きちゃってください！

では、また次回。

第拾八話 其の参 決着 / Our future (前書き)

今日はクリスマススイブか……いつかはこの日に予定ができるような人間になりたいな……ま、今年はこの作品仕上げなきゃならないんですけど。これを仕上げるのが読者の皆さんへの僕からのクリスマスプレゼントです！( 何言ってるんだコイツ

## 第拾八話 其の参 決着 / Our future

ジャンボディケイドへと姿を変えたエヴァ初号機は、失われていた勢いを取り戻したかのように、威圧感をもってエヴァシリーズに對峙する。

「…初号機と、合体した……？」

「もうここまで来たら何があったって驚かないわよ。士、一緒に戦ってくれるのよね？」

「ああ。絶好のタイミングでの登場だろう。やっぱり主役はこうでなくちゃな」

レイとアスカの声に、士は冗談交じりで答える。

「……お前がディケイドか。何故、この世界のことを首を突っ込みあまつさえ人類の進むべき道を破壊しようとする」

キール・ローレンツのいら立ったような声が、地上に響く。

「進化……勝手に世界中の人間をひとつにしてしまうことが、か？」

「そつだ。限りある命に怯え、愚かな心を持ち争い続けるのが今の人間だ。我々はそんな閉塞した人類を憂いていた。……故に、ひとつになるのだ。始まりの姿へ、本来あるべき姿へ、我々が人類を導く。永遠の安らぎを得て、完全な存在になる。どこが間違っているというのだ」

ゼーレの目的は、人類を救うこと。彼らは心から未来を憂い、そのうえで判断し行動しているのだ。

だが。

「間違っている、と俺は思うぜ」

門矢士はそれを否定する。

「個人の心が消えた世界。それは本当に素晴らしいものと言えるのか」

最初からひとつということとは、互いに触れ合うこともないということだ。



「不完全でいいじゃないか。愚かでも、矛盾だらけでも構わない！」

……今まで、いろんな世界を旅してきて、いろんな人と出会ってきた。

その中で、時にはぶつかり合うこともあった。だけど、後にわかりあい、ともに戦うことができた。絆を作ることができたのだ。

だからこそ、士ははっきりと言うことができる。

「……人の数だけ、思いがある。俺はそんな世界の方が好きだ」

「先生……」

シンジをはじめとして、チルドレンの3人もその言葉につなずく。

「こいつらは……シンジ達は、それぞれ厳しい過去を抱えている。そのせいで、色々苦労してきたこともある。……だが、それを乗り越えることができた。強くなることができた。だからこそ言える。人の心ってというのは、素晴らしいものなんだってな」

心がなければ、他者が存在しなければ、彼らはそもそも苦しむこと

もなかっただろう。

だがそれを乗り越え、新しい何かを見ることができたとき、彼らは感じたに違いない。『この世界が好きだ』と。

「人の未来に、お前達の道案内は必要ない」

「……愚かな。ならば、どちらの主張が正しいか、今ここで決めようではないか」

キールを始め、エヴァシリーズが再び戦闘態勢に入る。それに合わせて、零号機と弐号機も構える。

「……シンジ」

「なんですか、先生」

士はシンジに話しかける……あることを確認するために。

「目の前にいる敵を倒すということは、もとは人間だったのものを殺すということになる。……お前はその覚悟ができているか」

キール・ローレンツ。彼はすでに人間としての体を捨てているものの、それでも心は人のままだ。シンジに、それを壊すことはできるのか。

「……確かに怖いです。正直、ちょっと体が震えてるかもしれませ  
ん」

そう言ったシンジは、しかし強い光を瞳に灯す。

「でも、決めたんです。僕は僕の意志で、前に進もうって。だから大丈夫です、一緒に戦いましょう、先生」

「……そうか。なら、最初からクライマックスで決めるとするか」

シンジの答えに満足した士は、真っすぐに敵を睨みつける。

そして、止まっていた戦闘が、再び始まった。

惣流・アスカ・ラングレーは思う。

……今まで、いろんな辛いことがあったけど。そのせいで、他人に大きな心の壁を作ってしまったこともあったけれど。

それでも、それらの出来事は無駄じゃなかったと思う。

もちろん、今でも母があんなことになってしまったことを快くは思えない。一生かかったってそれに関する傷は癒えないだろう。

でも、エヴァンゲリオンに出会って、そして日本に来たから、みんなに出会うことができた。

今の自分を作りあげているのは、うれしいことも悲しいことも全部

まとめて、今までのすべての出来事があったから。だから、自分は自分でいられる。

「……後悔はしない。アタシは、これからもずっと前を向いて生きていく」

彼女の思いに応えるかのごとく、弐号機は素早い、そして強烈な一撃を量産機に与えていく。

「…そうだよ、ママ」

綾波レイは、生まれた時から従順な『人形』として生きてきた。生みの親である碇ゲンドウの命令に忠実に従い、自身もそれをうれしいことだと感じる節もあった。

だけど、彼女は知った　人間の心というものを。それは、時には苦しみを与えたが、同時に温かいものを彼女にくれた。

いろんな人と触れ合って、彼女はひとりの『人間』として、変わっていったのだ。

「……私は、みんなの心がある世界が好き。だから、それを守るために戦う」

零号機のプログレッシブナイフが、敵の一体のコアを貫く。

こちらの機体もすでにかなりのダメージを負っているが、まだ戦える。

「……みんなで、一緒に」

「馬鹿な……………」

キール・ローレンツは、目の前で繰り広げられる事態に己の目を疑う。

先ほどまで、相手のエヴァは3機ともほぼ限界に近かったはずだ。それが今、生き返ったかのような激しい動きを見せ、次々とこちらの量産機を倒していき

「……残るはお前だけか。そろそろ、年貢の納めどきだ」

ついには、自分だけとなってしまった。

「何故だ……何故」

悲願はすぐそこだったはずなのに。理想の未来をつくることができ  
たはずなのに。

目の前にいる破壊者のせいで、すべてが終わってしまう。

「…貴様は、貴様は一体何だというのだ！」

ありつたけの怒りをこめて、キールは叫ぶ。

それに対して、士は答える。

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」



『final attack ride de de de de  
cade』

デイケイドが跳び上がると同時に、10枚の光のカードが照準を口  
ツクする。

そして。

「」「」「」「」「」

士とシンジの叫びが重なる中、ディメンションキックが最後の一体  
に命中し。

爆音とともに、長い戦いの終わりがやってきた。

第拾八話 其の参 決着 / Our future (後書き)

何だか説教書いたら力尽きて戦闘がやつつけになってしまった……すみません。もともと戦闘描写は苦手なんです、今回はマジで全然筆が進みませんでした。

さてその説教ですが、わかる人には士のセリフがある作品から来ていることがわかると思います。僕はその作品が大好きで、中でもこのセリフは作中トップ3に入る名セリフだと思っているのですが……わかった人は感想で知らせてくれるとうれしいです。正解者には豪華プレゼント！……はないけど。その作品について熱く語るくらいならできます(笑)

次回でとりあえずエピローグを除けば最終回です。ぐだぐだ続いてきたこの作品にもついに終わりが！今日中に絶対上げるつもりですので、また会いましょう！

## 最終話 新たな世界へ

「エヴァシリーズ全機、完全に沈黙……………」

青葉シゲルの震えた声が、作戦司令室に響く。

葛城ミサトは、喜びをかみしめるように、高らかに宣言した。

「……………これにて作戦を終了します。速やかにエヴァ3機とパイロットの回収を」

終わった。長きにわたる戦いが、今ついに終止符を打たれたのだ。

「……………よく頑張ったわね、みんな」

後で全員抱きしめてやる。そう思いつつ、ミサトは今まで自分が戦わせてきた子供への感謝の言葉を呟いた。

こうして、ディケイドのこの世界での役割は終わったのだ  
た。

翌日。

「じゅめーん！ちよつち遅れちゃった！」

「どこがちよつとだ。30分も過ぎてるぞ」

部屋に入るやいなや軽い謝罪をしてきたミサトに、士が反応する。

「だってしょうがないじゃない。昨日の戦闘の後処理とかでこっちはバカみたいに忙しいのに、急に次の世界に行くとか言い出すんだから……」

そう。戦いが終わった次の日に、もう士達はここを出ていくというのだ。

それを聞いたミサトは、仕事の合間を縫って、こうして皆が集まっている碇シンジの病室に大急ぎでやってきたという次第だ。

ちなみに現在この部屋にいるメンバーは、ミサトと士以外にはチルドレン3人、ユウスケ、夏海、海東、そして加持だ。

「まったく、ミサトが待たせたせいでアタシとレイは体が悲鳴を上げてるわよ」

「……（じくじく）」

アスカが恨めしそうに、レイは無言でミサトを非難する。

「それは悪つございました……」

昨日の戦闘はやはり相当体にこたえたようで、エヴァから回収してすぐに3人とも眠り込み、そのまま入院ということになっていた。

「あいたた……僕はベッドに寝てても体中きしんでるよ……」

「……ま、アイツよりはましか」

ひとり痛みにくめくシンジを見て、アスカは同情の眼差しを向ける。

特にダメージがひどかったのがシンジだ。恐らく初号機がボロボロの状態でデイケイドと一体化して、その力を存分に発揮したのが祟ったのだろう。

閑話休題。

「……本当に行ってしまうのかい？もう少しゆっくりしていてもいいんじゃないのか」

加持がそう尋ねるが、士達一同は首を横に振る。

「やることやって満足したら、とっとと他の世界に向かう。そうやって今までもやってきた」

「……そうか。なら、無理に引き止めたりはしないよ」

士の答えを聞いて、加持は深く頷いた。

「……じゃあ、そろそろお別れの挨拶、始めましょうか」

ミサトは椅子から立ち上がり、旅立つ者達に顔を向ける。

「正直、最初はあなた達のこと、信用していなかったわ。こういう仕事をやってると、つい色々疑っちゃってね……。でも違った。あなた達がいなかったら、多分私達は今こうして勝利の喜びに浸っていることができたかどうか……。本当に、ありがとう」

頭を下げたミサトは、最後に士に向かって告げた。

「これからは、あなたの分まで私がこの子達の面倒見るわ。だから安心してね」

「ふん、何を安心しろって言うんだ……」

そっぽを向く士。それが彼の言葉と本心が正反対になっている時だとわかっていたミサトは、笑って後ろに下がった。

「んじゃ、次は俺かな……と言っても、そもそも君達とはほとんど話していないんだけどね。海東君は除いて」

加持はそう言いながら、暇そうにお宝の手入れをしている海東の前に立つ。

「あんまり長く話す必要もないから手短かに言おう。…ありがとう。君のおかげで真実を知ることができ、かつ今生きていることができる」

「……別に君のために動いたわけじゃないんだから、感謝されても困るんだけどな」

「ははは、君らしい返事だな。だが、素直に受け取っておいてくれ」

「まあ、そつちらせてもらひよ」



短い会話の中にも、何となく当の2人にしかわからないようなつな  
がりのようなものを一同は感じるのだった。

「おっと、お客さんが待つてるみたいだから、俺は下がらせてもら  
うよ」

「……………」

レイが後ろに立っていることに気づき、海東の前から離れる加持。

「……………あの時。あなたの言葉が胸に響いて、私は進む道を決めるこ  
とができた。だから」

「おっと！礼ならいらないよ。僕もあの時は気がどうかしてみたい  
でね。自分でもおかしいほどお人好しだった。あの言葉は言うなれ  
ば事故みたいなものなんだ。気にしないでくれたまえ」

「……………?？」

海東の言葉の意味がよくわからず、首をかしげるレイ。そんな彼女  
に、ユウスケが助け船を出す。

「海東が何て言ったのかは知らないけどさ、慣れないことしたもんだから照れてるんだよ、あいつ」

「……………照れてる？」

「な、何を言っているんだそんなことあるはずがないだろう用事を思い出したから僕は先に帰らせてもらっつよじゃあね」

ボタン

「……………帰っちゃいましたね」

あっという間に病室を出ていった海東を見て、夏海が呟く。

同じく土もそれを見て、

「……………ふん、素直じゃない奴め」

「お前が言っつなよ」

ユウスケにツッコまれていた。

「……土」

そんな折、アスカが土に声をかける。その顔に悲しそうな表情はない。

「お礼はこの前言ったから、今日は一言だけ言うね」

「昨日の夜のことを思い出しているのか、少し顔を赤らめて、彼女は口を開く。

「またね。来たくなったらいつでも来なさいよ」

「……ああ」

頷く土を見て、アスカは満足そうに笑う。

「ほら、最後はアンタよ。シンジ」

「……じ、じ……」

最後に、ベッドの上のシンジが言葉を紡ぐ。

「あ、あのですね……先生に会えて、僕は……その……」

「何かテンパってるようだが大丈夫か？」

「え？だ、大丈夫です、問題ないです」

士の指摘にたじろぐシンジ。いざ別れるとなつて、言葉を選ぶのに苦勞しているらしい。

ややあつて、ようやくまともに話し始める。

「僕が今、こんな風に元気でいられるのは、先生のおかげです。本当に、本当に……ありがとうございます！」

目にたつぷり涙を浮かべて、シンジは言葉を言いきった。

「……ま、せいせい頑張つて生きるよ」

士は口元にうつすら笑みを浮かべて、病室のドアへ向かう。それに従い、ユウスケと夏海も出口へ歩いて行く。

「じゃあな」

「また来るからね」

「お世話になりました」

そして、彼らは通路へ出て、扉を閉めた。

「……………ひっく」

「こらバカシンジ、何泣いてんのよ。みっともない」

「……aska、どうして壁に向かって話してるの」

「っ……べ、別に、泣いてなんか……ないんだ、から……ね」

「おお、これはなかなかいい写真じゃないか」

いつものように土が撮った写真を現像した光栄次郎は、その出来栄えにうんうんと頷く。

写真は2枚。

1枚は、一昨日の夜に撮られた、アスカの写真。相変わらずピンボケしているが、彼女の隣にはなぜか写真を撮っていたはずの土の姿が映り込んでいた。

もう1枚は、今日土がひそかに撮っていた、シンジ、アスカ、レイ、ミサト、加持の写真。こちらもボケているが、それによってひとりの男性と、2人の女性の姿が浮かび上がっていた。

栄次郎は知らないが、その人物は、『碓ゲンドウ』『碓ユイ』『惣流・キョウウコ・ツェッペリン』という名前であった。

その頃、例の大きなタペストリーがある部屋では、土達がこの世界での出来事を振り返っていた。

「いや〜、思えば今までで一番長居した世界だったよな。いろんなことがあったけど、何はともあれめでたしめでたしってことでいいのかな」

「さあな。これから先、どうなるかはあいつら次第。あいつらの物語だ」

ユウスケの言葉に、土は淡々と答える。すでに次の世界への期待が高まっているようだ。

そんな土に対して、イヤににやにやした顔つきになってユウスケが尋ねる。

「そっぴや土。アスカちゃんといい感じだったけど、結局のところどうなんだ？一昨日の夜、何かあったのか？」

「っ！……別に」

「おや、顔つきが怪しいね土。ひょっとして君は年下好き……いわ



ゆるロリコンだったのか？」

若干焦りの表情を見せた土の変化を見逃さず、海東が追撃の一手を加える。

「なっ……何を馬鹿なことを」

「それって本当ですか土君!？」

「身を乗り出してくんな夏ミカン!だから俺は……」

夏海が割と真剣な形相で土に真偽のほどを確かめようとし、土が弁解をしようとしたその時。

「土君、写真の現像終わったよ」

写真を掲げて、栄次郎が部屋に入ってきた。

が、そこで彼の足がもつれ、この部屋の特徴である大きなタペストリーによりかかる形になり。

その拍子に、タペストリーの絵が切り替わった。

こうして、門矢士の、仮面ライダーディケイドの旅は続いて行く。

この先の物語も波瀾万丈なものではあるのだが、それを語るのはこの場ではやめておこう。

何はともあれ、彼らの旅に、そして彼らが旅する世界に、幸あれ。

仮面ライダーディケイド 第X話 『エヴァンゲリオンの世界』  
（f i n）

## 最終話 新たな世界へ（後書き）

終わった……残るはエピソードだけですが、結構長くなる予定なので今日中には無理です。エヴァ世界の後日談みたいなもので、また今度ということ。作品自体の反省も、その時行うこととします。

とにかく、ここまで読んでくださった読者の皆様にはただただ感謝です。何とか完結にまで持ってこれたのも皆様の応援があったことです。本当にありがとうございました。

では、また今度。

エピソード Re:START (前書き)

いよいよエピソードです！

## エピソード Re:START

『人類補完計画』      その壮大な計画をゼーレという組織が仕組んでいた。ネルフは全世界へ向けてこのことを主張し、ゼーレの権力を完全に潰し、汚れ役を押し付けた。

様々な禍根を残した使徒との戦いは、こうして終結。ネルフの主導により、平和な日常が取り戻されていったのだった。

そして、西暦2018年。

2年の月日を経て、今や完全に元の姿を取り戻した第三新東京市の、とあるマンションの一室。

「今日は朝から吹奏楽部の活動があるから、早めに出るよ」

食卓の椅子に座っている碓シンジは、向かいで朝食をとっている人物に語りかける。

「……特別なことでもあるのか」

「新入生をうまく引き入れるための作戦会議つてところかな。だから、ちゃんと鍵閉めていつてね、父さん」

会話の相手

碇ゲンドウに事情を説明するシンジ。

あの戦いが終わって一週間ほどの間、ゲンドウはずっと病室で塞ぎこんでいた。彼が死別した妻・ユイと再会することを目的としていたと聞かされたシンジは、毎日ゲンドウの病室に足を運んだ。

きつと、ゲンドウはどうしようもないほど妻を愛していたのだろう。だから、その夢が破れた今、こんな状態になってしまっている。

自分には何ができるか　考え抜いてシンジが出した結論は、彼のそばにいてあげるということだった。家族を失い悲しみにくれる者を、同じ家族が支えてやらなくてどうする。そう思い、シンジは父親とわかり合おうとした。

そして、その思いは届いたのか。半月ほど経って、ゲンドウはシンジと一緒に住まないかと持ちかけてきた。当然大喜びで受けたシンジは、今もこうして親子の絆を深めあっている。

「……そういえば父さん。最近リッコさんといい感じだったってミサトさんから聞いたんだけど……」

「……………」

ポトッ

「父さん、ウイナー落としてるよ……………その反応、やっぱり本当なんだ」

「……………そんなことは……………」

同居し始めてわかってきたことがある。口数は少ないが、ゲンドウは話し方に感情が出るタイプの人間だということだ。今回もあからさまに焦っているのが手に取るようにわかる。

「早くいいお嫁さん見つけた方が、母さんも安心すると思うよ。…あ、もうこんな時間だ。それじゃ父さん、ちゃんとハンカチとティッシュ忘れないで家出てね」

約束の時間に遅れちゃうと言いながら、シンジはそう言葉を残して玄関から出ていく。

残されたゲンドウは、出窓のところに立てられている写真立てを見つめながら呟く。

「…最近、シンジは君によく似てきたよ……ユイ」

窓の外には、広い広い青空がその姿を覗かせていた。

人間は不完全な存在だ。その事実には間違いはない。

だが、不完全であるからこそ、たえず『変わる』ことができる。今ゲンドウは、その変化を大事なものだと思うようになっていた。

「……罪を背負ったまま、未来を切り開く。それが、今の俺にできることか」



碓シンジは現在高校2年生。先ほど述べたとおり、吹奏楽部に在籍しており毎日チェロと触れ合っている。

「しかし、いよいよ後輩が部に入ってくるのか……少しは威厳とか見せといた方がいいのかな？それとも……」

「朝っぱらからなに独り言言ってるの？不審者と間違えられ  
るわよ」

と、道を歩いていたシンジに失礼な一言をぶつけてきたのは。

「おはようアスカ。そっちも早いね」

「アタシは毎日朝連してるからいつもと変わりないわよ。アンタの方こそ、今日は随分と早いじゃない」

2年経つてもその男勝りな性格は変わらず、今となつてはテニス部のエースになつた惣流・アスカ・ラングレー。文武両道の天才として、学年を問わず人気の人物だ。

「新生がうちの部にたくさん入ってくれるように、いろいろ準備しないとイケないからね」

「あ、そういうこと。ウチもアピールのために、これから部の人間同士の試合を多くするってキャプテンが言ってたわね」

それから話題は部活内の人間関係などに移っていく。

「なんかよくわかんないけど、僕ってよくいじられるんだよね。こゝとあるごとに女装させられそうになるし……」

「あ、その気持ちよくわかるわ」

「わかられたら困るんだよ！同情とか一切ナシなの!?!」

「ないわよ。女装させられるのはアンタのその顔と体つきに問題があるのよ。いつそボクシングジムでも通ってみたら？日本フェザー級チャンピオンになれるかもしれないわよ」

「またそういうテキストなことを……」

いつもと同じような会話をしながら、2人は高校へ向かっていく。

「ところでアンタ……」

ふと思い出したように、アスカが口を開く。

「なに？」

「レイにはいつ告白するの？」

「ぶはっ！……ほっ、ほっ」

唐突すぎる質問の内容にせきこむシンジ。

「な、なにをいきなり……」

「なにをいきなり……じゃないわよ。なんで3年経ってもまったく関係が進展してないのよ、どう考えてもおかしいでしょうが！」

たじろぐシンジに追撃をかけるアスカ。この際強引にでも話を進めようといった感じだ。

「今更聞く必要もないんだけど、アンタレイのこと好きなのよね？ 惚れてるのよね？」

「うえ！？い、いや、それは……僕は、綾波のこと……す、」

「私がどうかしたの？」

「……うわあああ……！」

このタイミングで本人登場である。

「おはようレイ。ちょうどいいわ、今からシンジが言うことをよく  
」

「走ろう綾波！あの夕陽に向かって！！」

「え  
」

瞬間、レイの手をつかんだシンジはものすごい勢いで地面を蹴って走り出す。

「あつ、逃げるなバカシンジ！このアタシを振り切れると思ったら大間違いよ！」

逃すものかと、アスカも全力ダッシュで後を追う。さすがの運動神経といったところか、徐々にシンジ達との差は縮まっていく。

「碓君、まだ夕陽は見えない時間なんだけど……」

「そこは軽く流しといてよ！理由を説明する暇はないから、今はとにかくアスカから逃げるんだ！」

さっぱり状況が呑み込めないレイに対し、シンジはただ迫りくる敵

から逃げることをのみをうながす。

「シンジ！いい加減観念して全部吐いたら楽になるわよ！」

「いやだ！僕は……僕は絶対に言わない！」

「な、ここに来てスピードアップ！？このヘタレ、間違っただころで根性出すなあ！」

運動会でも出したことないような己の限界を超えたパワーを出すシンジ。……が、それでもアス力を振り切ることができない。もっとも、レイを無理やり引っ張っているような形になっているのだから当然と言えば当然ではあるが。

「くっく、どっすれば……」

「碓君……その」

「考える、考えるんだ。この状況を切り抜ける方法を……」

何か言おうとするレイの様子にも気づかず、シンジはどっにかいっつかしようにと思いを巡らせる。

と、そのとき。

曲がり角から歩いてくる、よく見知った少年の姿が目に入った。

向こうもこちらに気づいたようで、右手を軽く上げて挨拶をしようと

「おはよう、シンジく」

「カヲル君おはよう！でも今は時間がないんだ！」

少年　渚カヲルが言葉を言い終える前に、挨拶の相手はすでに目の前を通過していた。

「……なんだ？」

不思議に思いながらも曲がり角から出るカヲルだが。

「あーっ！？ちょ、邪魔」

今度は声を出す暇もなかった。いきなり少女の叫びが聞こえたかと思っただ瞬間、ドンという音とともにカヲルの体は宙に浮いていた。

仰向けに地面に倒れ込み、体中に痛みが伝わってくる。

「っ……！！あ、アンタ石頭すぎるわよ！」

倒れ込んだのは向こうも同じようで、しかも頭を抱えてうめいている。

「…朝から元気だねえ、アスカさん」

「…アタシだってねえ、好きで朝から無駄に体力消費してたんじゃないわよ」

カヲルの微笑に対し、アスカは不機嫌そうに返す。

「じゃあ何をしていたんだい？シンジ君とレイさんもすごい勢いで走って行ったけど」

「そいつらのせいなんだけどね……まあいいか。あの様子じゃ、無



理強いしたって意味なさそうだし」

服についた汚れを落としながら、アスカは立ちあがる。

「いまいちわからないが……折角だし、一緒に登校しようか」

「ふう……いいわよ。そういや、アンタと2人きりって初めてね」

2年前。問題となった最後の使徒・渚カヲルの処遇だったが、碇ゲンドウの取り計らいによって彼の正体は伏せられ、人間として生活することが可能となった。

そういうわけで、彼も今は高校2年生としてシンジ達と同じ学び舎へ通うことができるようになったのだ。

「ふう……何とか振り切ったみたいだね」

一方こちらはシンジとレイ。後方にアスカの姿が見えなくなったところで立ち止まり、せえせえと息を切らす。

「ごめん綾波。突然走らせちゃって……」

「それはいいんだけど……碓君」

「え、なに？」

ようやく発言のチャンスが訪れたので、レイは顔を赤らめて、さっきから言いたかった言葉を口にする。

「……………手」

「え……………?」

レイの言葉に一瞬呆けたシンジは、ここでようやく自分の右手が彼女の左手を固く握りしめていることに気づく。

「!?!?!?ご、ごめん綾波!」

直後、真っ赤になったシンジはものすごい勢いで自分の手を引っ込める。

「……………」

「あ、綾波?」

が、なぜかレイの表情がすぐれない。

「…やっぱり、もう少しだけ……………」

「えっ、ごめん、よく聞こえなかったんだけど」

「……………何でもないわ」

妙に名残惜しそうに己の手を見つめているレイを不思議に思いながらも、シンジはアスカに追いつかれないうちに学校に到着してしまおうと乱れた呼吸を整えていた。

時は進んで、2時間目の後の15分休憩。アスカは周りの席の女子たちと話していた。学年が上がリ、クラス替えがあつて間もないため、まだ互いのことはよく知らない。

「そういえば、惣流さんってB組の碓君と仲いいよね」

「でも碓君はC組の綾波さんともいい感じだし……ひょっとして三角関係？」

恋愛事情に興味津々な女子たちがアスカに目を輝かせて尋ねてくる。

それに対してアスカはハア、とため息をつくつと、首を横に振つて答える。

「違うわよ。シンジはレイにべた惚れだし、レイだってそうだわ。アタシは仲のいい友達ポジションよ」

「ええ？そうなの？」

「そうよ。なのにあの2人ときたらいつまでたってもくつつかないし……ホント、見てることがちが齒がゆいわよ。何とかうまく告白させる方法ってないのかしらねえ……」

疲れたように言うアスカを見て、友人たちはくすつと笑う。

「なんだか2人のお姉さんみたいだね、惣流さん」

「ところで、そのお姉さんには気になる人とかいるの？」

絶妙な話題の切り替え方である。同級生にとっては、学園のアイドル的存在が誰に好意を持っているか、というのは非常に興味がわく事柄なのだ。

その質問に対し、アスカはさして躊躇いもせずに答える。

「いるわよ。好きな人」

「おおっ！それで、どこのクラスの誰？」

「学生じゃないわ。今はすごく遠いところを旅してるけど……いつかふらっと現れてくれると思う」

窓の外に視線を移し、どこを見るところともなくぼんやりと外の景色を眺めるアスカ。

「これは……気になるわ、惣流さんの想い人！」

「というか、もしかして意外とロマンチストなのかな？」

後ろから聞こえてくる女子たちのささやきは、この際無視しておくことにした。

その頃、ネルフ本部では。

「よっ、りっちゃん。相変わらず熱心に仕事してるね」

「あら加持君。何か用かしら？ミサトなら」

「いや、彼女には秘密で相談があるんだ」

妙に小さな声で話しかけてきた加持リョウジに、赤木リツコは違和感を覚えながらも会話に応じる。

「それで、その相談って？」

「ああ。ここ2ヶ月ほど悩んで答えが出なかったから聞きたいんだが……」

わりと真剣な表情で加持は次の言葉を口にする。

「……相手を傷つけずにバレンタインのチョコを断る方法を知らないかい？」

「……ああ、なるほど」

予想外の内容に一瞬戸惑ったリツコだが、すぐに事情を理解する。

別に、彼は彼女である葛城ミサト以外からのチョコレートを断りたいと思っっているわけではない。

「要は、虎をも殺すと言われるミサトの手作り料理を食べたくないのね」

「そういうこと。この前はひどい目にあっただからね……」

ミサトの料理スキルはゼロを通り越してマイナスの域に達している。彼女の手にかかれば、レトルトカレーでも食べない代物に変貌してしまうのだ。

2ヶ月前のバレンタイン。愛する者からのチョコを断ることができなかった加持は、それを食べて以降1週間の間、腹の調子が最悪だ



っ  
たらしい。

「嫌ならはっきり言えばいいのよ。君の料理はまずいから手作りはやめてくれって」

「いや、そうは言ってもね」

それができないから困っているんだ、と加持が言おうとしたその時。

「なーにをこっそり話しているのかしらあ？」

「うわっ」

いつの間にか加持の背後に立っていたミサトが不機嫌そうな声を上げる。

「あんだ、まさかりツコにナンパしてたんじゃないでしょうね」

「そ、そんなわけないだろう」

「そうよミサト。私たちはあなたのことを話してただけよ」

「私のこと？何よそれ」

リッコの言葉に反応し、ミサトは加持に詰め寄る。

「いや、それはだな……………あつ！急用を思いついたから俺帰るよ  
！」

一瞬の間隙について逃走する加持。

「ちょっと待ちなさいよ！急用は思いつくもんじゃないわよ！」

ミサトも急いで後を追いつ、リッコはひとり取り残された。

「相変わらずね。あの2人は」

シンジとその友人たちの昼食は、シンジや彼の友人である鈴原トウジ・相田ケンスケがいるB組でとることになっている。

アスカはテニス部の集まりがあると言って弁当だけ取って行ったので、今日は彼女抜きメンバーが集まっている。

「はいトウジ、あーん」

「あーん……おお、やっぱりヒカリの作った弁当は最高やな！」

「ふふ、ありがとう？」

「……あーあ、相変わらずバカップルしてるなあ……もう慣れたけど」

目の前で繰り広げられる幸せそうな光景にため息をつくケンスケに、シンジも同調して苦笑いする。

「はは……やっぱり羨ましいもんだね」

だが、そんなシンジの反応にケンスケは厳しい目つきになる。

「羨ましいだあ？よく言うよ、散々綾波といい感じになっといてさ。それに加えて…聞いたぜ？最近D組の山岸さんと仲よくやっってるそ  
うじゃないか」

ピタ……

ケンスケの発言を聞いた瞬間、黙々とシンジの手作り弁当を食べていたレイの箸がぴたりと止まる。

「碓君……誰、その人」

「ちょ、綾波！？何か声が低いんだけど!？」

背後に謎の黒いオーラを発生させ、レイはシンジに詰め寄る。

「……誰？」

ここまでの反応を見せられれば明らかに意識されているとわかってしかるべきなのだが、まったく気づかないで告白できないでいるシンジは一体どれだけ鈍いのだろうか。

「ほら、山岸さんはカヲル君と同じ合唱部だろ？そういうところで知り合って、たまたま好みの音楽とかが同じだったからよく話すだけであって、別に異性として好きだとかそういうことは一切なくてですね……」

「シンジ君、気迫に押されて敬語になってしまっているよ」

脅えた表情で必死の弁解をするシンジに、カヲルの冷静なツッコミが入る。レイが怖いのか、さすがの彼も助け船は出せないようだった。

やがて時は進み、昼休みも終わりが近づく。

「5時間目は……うげっ、数学かいな」

時間割を確認したトウジは、あからさまに嫌そうな表情になる。

「ああ、あの先生厳しいだけで授業の内容がわかりにくいんだよね」

ヒカリが不満そうに言い、皆もそれにならず。

「あゝ、やっぱり門矢先生の授業が一番わかりやすかったよな……」

ケンスケが昔を思い返すように呟く。

「この街に帰って来た時にはもうおらんかったからな……」

「どこ行っちゃったんだろうね……」

トウジとヒカリも2年前の出来事を頭に浮かべているようだ。

彼らは門矢士が異世界を旅する者だとは知らないし、彼が旅立つ日にも立ち会うことができなかったのだ。彼のことが気になるのは当

然だろう。

「（…まあ、会いたいと思ってるのは僕も同じなんだけどね）」

今、彼らがどこで何をしているのか。それはシンジにもさっぱりわからない。

こことは全然違う世界にいるような気もする一方、実はもうこの世界にいて、ひょっこり現れるんじゃないだろうか。そんな気もしていた。

「今日はそこそこ1年が来てたな」

「そうだな。だがもう一声ほしい」

「そこでだ碇。頼みがあるんだが、ちょっとこの露出多めの服をだな」

「失礼します！」

部活が終わった後、惨劇になる前に音楽室を飛び出し外に出るシンジ。どう考えてもこの部には変態が多すぎる気がするのは、きっと間違いではないだろう。

「……………碇君？」

「うわっ！……………なんだ、綾波か。文芸部も今終わったところ？」

「ええ」

突然声かけられどきっとするシンジだが、声の主がレイだと気づきほっとする。

「じゃあ、一緒に帰ろうか」



「あれ？アンタ達も今帰り？」

グラウンドからアスカもやって来たため、3人で下校することとなる。

「今日の昼休み、土先生の話題になったんだよ」

「…アスカも会いたいと思う？」

「そりゃそうよ！……それにしても、あれからもう2年かあ。エヴァに乗って使徒と戦ってたなんて、今となっっちゃ夢みたいね」

アスカの言葉に、シンジとレイはうなづく。

「本当にそうだよな。平和な日が続いてるから、たまにそのことを忘れそうになるよ」

「……でも、今私は幸せよ」

「お、いいこと言っわねレイ。格言ひとつ頂きましたー」

……呆れるほど平凡な日々。だけど同時に、それらはかけがえのない愛おしい日々でもある。

「非日常を戦って手に入れた、大切な日常、か……」

士が見たら、一体なんと言っただろうか。……きっと、とりあえず無言でたくさん写真を撮るんじゃないかとシンジは想像する。

「……なんかセンチメンタルな感じになっちゃったわね」

しばし足を止めて空を見上げていたシンジ達の沈黙を破ったのはアスカだった。

同時に、なんとはなしに笑いがこみあげてくる。

「ふふ…なんか久しぶりだったな。あんな気持ちになるの」

「そうね。みんな……前だけ向いて生きてきたから」

レイの言つとおりだとシンジは思う。そして同時に、これからもそうしていいこうと強く感じる。

この先、何がどうなるかわからないけど。

とりあえずは、今与えられた日常を、精一杯生きていこう。

## エピローグ Re:START (後書き)

というわけで、エピローグは学園エヴァ的なノリになりました。これにてすべてのストーリーが終了。語りたいたいはたくさんあるのですが、後でまとめて投稿します。

## 後書き

ふう……

ひとつの作品を完結させたときの安心感、充実感というものはやっぱり大きいですね。これで完結させた作品は3つ目（ただしひとつは第二章開始）ですが、この作品ほど文章量は多くありませんでした。

ここまでこれたのも、ひとえに読者の皆様のおかげです。心からお礼を申し上げさせていただきます。

…さて、以下は作者のだから続く独白なので読みたいという方だけどうぞ。

このクロスオーバーを始めようと思ったきっかけ。それは紛れもなくMOVIE大戦2010でした。後で考えると確かにツツコミどころの多いストーリーではありませんでしたが、それでも劇場でディケイド完結篇を見ている間、僕のテンションはMAXでした。興奮冷めやらぬうちに、何かディケイドの物語を作りたいと思ったわけです。やはりディケイド二次創作といえばクロスオーバーだと考え、目星をつけたのが「新世紀エヴァンゲリオン」でした。新劇場版・破の熱い展開に心奪われた僕は、じゃあテレビ版の方もこんな感じにしてみてもどうだろうと思い、早速ディケイドを介入させることとしました。

ただ、思い付きだけで発車したクロスだったので、当然いろいろ詰

まるところが出てきました。最初に決まっていたことは「大団円にする」「土は先生の役割」「海東と加持を組ませる」だけでしたからね。なので、実は2話上げた段階でいったん投げてしまっていたんです。だけど、たった2話しか書いていないのに感想をくださった方が複数いたことに元気づけられて、気合い入れて再開しました。

そしてその後も思いつきで「じゃあアスカは土に惚れるってことで」「LRSっぽくするかな」など、様々な案を文章にしていき、今年かかってようやく終わったというわけです。いつしかWも終わり、オースも序盤が終了した時のことでした。

んで、最終的な結果。

文字数：154,146文字

お気に入り登録：148件

評価点：293pt / 33人（平均すると約8.9pt）

総合評価：589pt

……ま、ぶっちゃけできすぎですね。まず驚いたのが15万文字書けたことです。飽きっぽい性格の人間としては奇跡のような数字です。

そして多くの方にお気に入り登録していただいたり、高い評価をしていたりできたことでしょう。感想はなんと90件ももらえて、うれしい限りです。

とまあ、感想はここまでとして。

今後の予定ですが、しばらくディケイドの作品は書けそうにありません。連載が4つもあるので、これ以上は難しいと判断したためです。少し前にオリジナル作品についてアンケートを取りましたが、折角意見をいただけたのに今回は無理そうです。本当に申し訳ありません。

ただ、気が向いた時にこの作品に話を加えるということはするかもしれませんが。急いで終わらせたものの、消化不良な点はたくさんあります。たとえば、オペレーター3人組の描写がほぼ皆無だったこととか。

エピローグも1話にまとめようとしてかなり縮めた結果があれです。当初は最後に土を出す予定だったんですが、やっぱりやめておいたほうがいいと思い出しました。山岸さん（知ってる人いますかね？実は彼女はゲームに登場した山岸マユミという設定です）も出たかったし、地球防衛バンド（これもゲーム参照です）もやりたかったんです。ですがそこまでやるとエピローグじゃなくてただの学園エヴァじゃね？という考えが出てきて取りやめということになりました。

なのでこの作品の設定を使いたいって方がいたら全然使って構いませんよ！いるわけないけど。

長くなりましたが、この辺で後書きは終了ということになり、この小説も「完結済」へと変更されることとなります。最後にもう一度、皆さん、本当にありがとうございました！

僕の他の作品もよろしく！（最後に宣伝……）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1243j/>

---

仮面ライダーディケイド エヴァンゲリオンの世界

2011年10月28日09時17分発行